

絶対に百合に挟まらない司令の懐刀系性癖山盛りTSヤニカス不死リ
コリス

千年 眠

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

リコリス・リコイルに脳を焼かれて三日で生成したブツだったんですが、なんか続きました。イケメンJKの苦しむ姿が好きな人向けです。

※この作品はフィクションです。

喫煙の際はルールを守り、望まない受動喫煙を防止しましょう。

目次

7 2 / 2	7 1 / 2	6 3 / 3	6 2 / 3	6 1 / 3	5 + +	5 +	5 3 / 3	5 2 / 3	5 1 / 3	4 + +	4 + +	4 + +	4 +	4	3 3 / 3	3 2 / 3	3 1 / 3	2 + 3 / 3	2 + 2 / 3	2 + 1 / 3	2 2 / 2	2 1 / 2	1
367	351	336	321	304	286	275	254	235	219	209	195	183	170	146	124	112	92	78	64	56	35	20	1

8	8	8	8	8	8
+					
	5	4	3	2	1
	/	/	/	/	/
	5	5	5	5	5

433 420 409 397 387 377

背中から尻までぐっしより濡れて気持ち悪かった。

ぼやけた視界のまま呼吸を試したけどできない。喉の奥からうがいをした時みたいな音——耳が聞こえてないから多分感覚といったほうが正確——がしているから、たぶん肺がそもそも穴だらけなんだろうな。

遠くで誰かが叫んでる。気づかれたかな。目がよく見えないからわからない。

まあいいや。

あたし……やっぱり一人称は俺のままにしておこう。あんまり好きじゃないから。

俺が今一番心配してるのは、人質に取られてたあの子。黒髪の子が機関銃をすげえ景気良くぶっ放してたから流れ弾がちよつと心配だ。

といつても、彼女の射撃はびっくりするくらい正確だったから平気だろうとは思う。

人質にされてたエリカは銃を押し当てられて跪いてた。姿勢が結構低かったから、ゴロツキどもの腹から胸にかけてを狙った掃射には角度的に巻き込まれようがない。

まあ俺、たつた今その掃射を身を持って味わったから。間違いないよ。

いやあね。

裏取りするときひと声かけとけばよかったね。

こればかりは報連相をサボった俺が悪い。

だからさ。

「そんな……やだ、やだやだやだ……！」

そんなに自分を責めないでほしいな。君は誰が見ても全く悪くないから。顔面蒼白にならないでいいんだよ。むしろ俺を叱る側だよ君は。

それに、俺はなんともないし。

ちよつと頑張って寝返りを打つ。腹筋がズタズタみたいで力がう

まく入らない。横を向いて咳き込み、気管から血を追い出したら、内臓が出てこないように腹を抑えていた右手が温かいものでびしょ濡れになった。血が出るぶんにはいい。腸とかより面倒くさくない。

血が吐き出されて使えるようになった喉で、彼女に喋りかける。息を吸うたび、喉の奥から穴を押さえるのに失敗したりコーダーみたいなダサい音がしてちよつと面白い。

「た、きな」

なんて言ったらいいかな。話すと長いんだ。

「気に、すんな」

音を聞く限り、たぶん、たきなが息を呑んだ。本当にごめん。今度手土産持ってお詫びしにいくから。

「あたしは」固まりかけの柔らかい血塊が絡んでひどくむせた。「なんともねえから」

「喋らないで！　今、今応急処置を……」

「ほんとうに、平気なんだ」

説明のしようがないから、見せたほうがいいか。上半身と下半身が泣き別れしかけてるのをそのままにしておくのはたきなが可哀想だ。今の俺はグロテスクすぎる。

体を再生しよう。意識すると、より細胞の増殖速度が高まるのがわかる。胸元あたりで途切れていた体の感覚が少しずつ戻ってくる。神経がつながり始めてるんだ。

目もだんだん見えるようになってきた。血溜まりの淵で、たきなが学生靴から大判のガーゼを取り出そうとしている。止血剤がたっぷり染み込んだ、すごくしみるやつを。

これ以上の痛みは勘弁してほしいので、俺は彼女の手を、比較的血がついていない左手でつかんだ。

そして、にいと笑った。安心しろのスマイルだ。いつも元気な千束ちぎとの真似をしてみた。失血で顔色は悪いし、目の焦点は合っていないしでひどいクオリティだったと思う。

「見た目より、痛くないんだぜ……？」

たきなは今にも泣きそうな顔をした。ごめん。さすがにこのフォ

ローは違った。頭に血が回っていないっていうのは言い訳かな。

言い訳だな。

倒れたまま足首を動かして感覚を確かめた。もう立てそうだ。たきなに手を貸してくれと頼んだら、肩を抱かれて身を起こされた。彼女まで血で汚れてしまった。謝ったあと、クリーニング代、払ったほうがいいな。

というかこの姿勢、映画でよくあるヒロインが主人公の腕の中で死ぬシーンそのまんまじゃないか。ハリウッド級のバカにはうってつけの最期だ。

まあ、俺は死なないけど。

というか死ねないんだけど。

そんなわけで、井ノ上^{いのうえ}たきなさん。

「ねえ」

「……っ何!?!」

「足、見てみ」

丈の長い白のスカートから出た足首をぐりぐりと回した。そして、両膝を曲げて足裏を地面につける。

察したかな。俺の異常性。

うん。その顔は、わかった顔だ。

「……立っても、いい?」

口をかたく結んだ彼女は、俺を立たせたあと何も言わずに肩を貸してくれた。まだ血が足りなくてふらつくから、ありがたい。

見回してみると、その場にいた全員が口を開けて固まっていた。生真面目な隊長まで。俺、不死身だってちゃんと言ったんだけど、信じなかつたみたいだ。

まあ、それが当たり前前だよな。俺すら未だに信じられないものを、俺以外が信じられるものかよ。

「あ、あの……」

「サイトー」

「サイトウさんは、平気なんですか? その……私に、撃たれたのに」「ああ、もうだいたい治ったよ」

片手でボタンを外して制服をはだけてみせた。ガワと同じく中のYシャツは真っ赤に染まっているけど、銃創がどこにあるかは生地に空いた穴でわかるだろう。

骨盤からみぞおちくらい幅にかけて、ジグザグに八発。ウエストを横断する出来の悪いミシン目だ。

「もう塞がってる。弾は排出されて、落ちて……あ、ここに溜まってるか」

そう言っただけでウエストのベルトのあたりを触ると、さつきまで俺の体内で暴れてた7.62x54mm弾が小銭みたいに鳴った。

「……す」

「いやあ、ごめんー！」

たきなが何か言いそうだったので、底抜けに大きな声でちよつと強引に遮った。それを言うのは彼女じゃないと思った。

「先に言っとくんだったよ、上階から挟むってさ。それに、PKMのほうがスマートで早かった」

「ですが！」

「じゃあ、わざとだった？ あたしに当てたのは。窓から飛び込んでくるサイトローのヤローをぶっ殺す！ ってさ」

「……いえ」

「なら、なんで？ あ、このなんでは怒ってるほうのなんでじゃないから」

「蛇ノ目じやのめさんを、助けたかったから、です。指示を待つよりそのほうが合理的だと考えました」

「ならいい。全っ然いい。気にしてない。治ったし。あたし撃たれても痛くねえし！」

「痛くないのは嘘だけど、こんなのよりたきなの心のほうが痛いだろう。」

「だから、ごめんな。びっくりさせちゃってさ」

痛い思いをしたのは俺だけ。悪いことをしたのも俺だけ。だからこの話は、それで終わりにしたかった。

したかったんだけどなあ。

「待て！」

まあ、我らが春川^{はるかわ}フキ隊長の腹は収まらないよな。

肩貸してもらったままなのをいいことにたきなを外に連れて行くとしたんだけど、部屋を出ようとしたらバレた。

「あー、隊長？ 自分まだちよつとフラつくんで……えーつと……」

うまい言い訳が出てこなかった。外の空気吸ってくる、とか？ 血溜まりに仰向けに倒れて、一面真っ赤になってる背中をそのまんまにして？ スプラッタな人間紅白オセロが出来上がってんだぞ。なんなら白側も七割方赤いわ。

無茶だね。

「すみませんでした」

「お前じゃない！ たきなだ！」

「今当事者間で解決したじゃないっすか」

「お前じゃなかったら死んでるんだぞ！」

「はい、それはもう、全くおっしやるとおりです……ですが、あたしが連絡を欠き、独断専行した。それも落ち度でしょう？ あたしじゃなかったらそもそもこうはならなかったかも——」

そこまで言っただけは気づいた。このままたきなをかばい続けたら、エリカと、エリカの友達の気持ち置き去りになる。きつと一番怖い思いをした、彼女達の。

それは駄目だ。

ミスは、認めなきやだよな。

「いえ、出過ぎたことを言いました、取り消します。申し訳ありませんでした」

俺は一度言葉を切って、恐怖にうずくまる一人の仲間に向き直った。隣で介抱していた長身の少女は、たぶん俺に怯えていた。

「エリカ、本当にごめん。危ない目に合わせた。ヒバナも、悪かった。お前の友達を死なせるところだった」

俺は肩を借りずに一人で立って、心から頭を下げた。

たきなは隊長に殴られた。

失敗した。

ああ。
煙草が吸いたい。

#1: The unforgivable Sinner

煙草^{シヤ}葉^グはハーフ・スワレ。

ペーパーは甘草^{リコリス}、スローバーニング。

何日か前にシガレットケースに入れていた一本だったから、乾燥して少し辛い。でも今の俺にはそれくらいがちようど良かった。

口の中に溜めていた煙を、すぼめた唇から舌でゆるゆると押し出した。

「井ノ上たきな、春川フキ、蛇ノ目エリカ、^{かがり}篝ヒバナ」

どれだけ経っても自分のものとは思えない声で、そうつぶやく。

彼女たちにはすまないことをした。近いうち、本部に行つてしっかりした詫びを入れようと思う。確か定期検診があったから、その時がいい。

フィルターに唇を付けた。

舌で煙を口内に導く。

焦茶色の巻紙が燃える。

煙草を遠ざける。

吐く。鼻からもわずかに。

シルクのように甘く酸い。

心が眠る。

おだやかに死んでいく。

まろやかな香気に溶けて。

唯一の救い。

唯一の安寧。

『サイトウ』

スピーカーが鳴った。

「なんです?」

『上がってこい。新人が来たぞ』

「俺、ここの従業員じゃないですけど……」

『常連だろう?』

携帯灰皿に火を押し当てた。半分以上残っていたけど、頭を切り替えて、壁のスイツチで換気装置を切った。ここのシューティングレンジは制服姿のまま煙草が吸えるから好きだ。

隠し階段を上がると、騒がしい声が聞こえてくる。

バックヤードの戸を開けると一等大きくなった。案の定、表では千束とミズキさんが賑やかにやっていた。

そして、

「あ」

「あ」

知ってる顔だ。井ノ上たきな。

頬のガーゼ。俺がどつちつかずだったせいだ。

考えすぎる前に我に返った。携帯灰皿とマッチ箱と、それからシガレットケースをポケットに……ああくそ、このブレザーにはないんだ。手に提げていた学生鞆をわざわざ開けて仕舞った。

まあ、いいか。犯罪者を殺してメシを食っている身だ。今更未成年喫煙くらいでとやかく言う輩はいないだろう。

「……久しぶり。今日はどうしたの?」

俺はうまく笑えているだろうか。

「本日ここへ転属になりました。よろしくお願いします、サイトウさん」

息が止まりかけた。転属? 優秀な彼女が?

命令違反、それとも誤射のせい? 誤射の件には報告を上げた。俺の過失でたきなに責任はないと、でも。

この人事の何割かは、俺のせいなんじゃないのか?

「……そうなんだ、よろしく。つってもあたしは所属違いだけど」

「そうなんですか」

「そ、ただのお得意さん。喫茶リコリコと一緒に活動することたまにはあるけどね」

「サ、イ、トー!」

賑やかなのがたきなの背後から顔を出した。

白金の髪の彼女は錦木千束にしきぎちさと。俺たちリコリスの中でも最強と目されてるらしいが、詳しいことは知らない。休日一緒に出かけるような関係とかじゃないから。

知人というには近く、友人というには遠い。

もつとも遠ざけてるのは俺のほうなだけどき。

千束は嫌いではない。むしろ好ましいと思う。だけど、俺と彼女は色々……本当に、色々違うところが多すぎる。踏み入った先で仲違いするような、あるいは壮絶に殺し合うことになるような予感がある。だから彼女には自分をあまり見せていない。

「今からたきなど仕事なんだけど、一緒にどう？ 外回りついでにご飯食べに行かない？」

でも、千束はそうは思っていないらしい。怖がつてるのは俺だけだ。彼女を前にすると、怖いことなど、本当はどこにもないのかもしれないと思ってしまう。

それが少しだけ、嫌なんだ。

「ごめん、別件入っててさ。そろそろ出ないとんだ」

俺は鞆を持ち上げてみせた。中にはグロックが入ってる。通常弾に加えて、訳あってミカさんの非殺傷弾も少し。

別件があるのは本当だけど、今じゃない。これを使うのは日が暮れてからだ。とっさに嘘をついた。

「そっかあ、残念！ じゃあまた今度だね」

「うん。……あ、千束」

気づけば、たつたいま嘘をついた口で彼女を呼び止めていた。喋ることは思いつかなかった。

俺は何をしてるんだ。

「……いつてらっしやい。たきなも、ね」

千束は今まで見たことのない笑い方をした。不思議の国のアリスに出てきたチェシャ猫みたいな、人を翻弄する笑みだった。

「うひひひひ、いつてきまあーす！」

ニマニマしたまま行ってしまった。

喫茶リコリコは随分静かになった。

「よかったのか?」

声のした左を向くと、カウンター越しにミカさんと目があつた。日本人より和装の似合う男だった。

彼はミズキさんの隣の席を手で指した。こくりと頷いてそこへ座ると、洒落たマグカップでコーヒーを出してくれた。

液面を覗き込む。嫌いな顔が映っている。ミュージカルの男役を少し幼くしたみたいなの顔。長いまつ毛を伏せると憂いを帯びて見えるのがむかつく。下の名前と同じくらい気に食わない。何年経っても自分のものにならない。

コーヒーを一口飲んだ。好きな香り、好きな味だ。

「いいんです、俺は」

好きなのは、この場所と煙草だけ。ここは、自分が自分でいられる。息が苦しくならない。

「俺はここがいいから」

左手の腕時計を見た。仕事まで五時間。これを飲んだら帰ろう。そう思っていたらミズキさんに話しかけられた。

「サイトウ、まだまだ時間あるでしょ?」

「ええ」

「ざつと五時間くらい」

「よくわかりましたね……」

「バイトしてかない? 団体さんとまではいかないけど、このあと予約のお客さんがそこそこくるのよ。千束は今抜けてったし、助っ人が欲しいでしょ」

「三時間くらいなら」

「そこをなんとか、四時間半!」

「今は懐が温かいんで。三時間」

「四時間! バイト代に追加でシヤグ一袋!」

「乗った!」

「即答!? いいけど!」

俺とミズキさんはがっちり握手を交わした。俺がいつも吸って

いるシヤグは一袋で八五〇円、正規のバイト代にプラスしてくれるなら乗らない手はない。

ミカさんの方をちらつと見たが、まんざらでもなさそうにひげを撫でていた。ミカさんのこういうところが俺は好きだ。この人は決して、他人の内心を無遠慮に踏み荒らしたりしない。

俺とは違う。

「リコリスじゃなくてヤニカスね」

「酒カスに言われても悔しくないっス」

「貴様あ！」

「はあ!? ちよ、いででででで!!」

握手は現役DAと元DAの握力対決に変わった。

奇襲には焦ったが勝ったのは俺だ。若さってやつだね。

うん。

ここはやっぱり、楽しいな。

§

「こつちに来るな、よせ! やめ——」

心臓に一発。頭に一発。間髪入れずに撃ち込んだ。サブレッサーで大きく減退したマズルフラッシュが薄闇に閃く。死に顔の残像が一瞬だけ目に焼き付いた。

こいつは下っ端だから死んでいい。本命は、

「ああああクソが! 死ねっ!」

「無理」

「がっ!」

刀を振り回してるこいつでもない。撃ち殺す。銃弾が脳を確実に弾けさせたのを視認してから、俺は血の海と化した大座敷を銃のフラッシュライトでぐるりと照らした。

突入してから今まで作った死体の数はざっと三〇ってところか。銃を持つてるやつは少なかった。正直、銃を持ったヤクザよりも、そのヤクザが庭へ放ったドーベルマンの方が脅威だった。

ああそうだよ、しっかり腕かじられて地べた引きずり回されたよ。悪かったな万年白服サードのヘボで。

……暴排条例が敷かれて長いのに、平屋とはいえこんな要塞みたいな邸宅を維持できるとは、まったく大したもんだ。

念を押すと、俺がこうしてヤクザの大豪邸を単独で荒らしているのは偏にDAの指示だ。

たきなに撃たせてしまったあの時、あの廃ビルでは、大規模な銃取引があったのだという。だが一〇〇〇丁もの銃は俺たちが突入した時点で既に現場にはなく、かわりに武装したチンピラがひしめいていた。

銃はどこから仕入れられ、どこへ消えたのか。俺は仕入れ元を探るため、ひいては執行対象を皆殺しにするためにここへ派遣されたというわけだ。

銃といえばヤクザ。安直な考えだろ？ 俺もそう思う。でも、リコリスの身分で他に調べられそうなどころがないんだよ。

俺たちは俺たちなりにできることをやるしかないのさ、なんて。自分で言ってるやる気が削がれてきたな。

「クソ仕事だな……おい、俺の後ろにいるお前」
「ッ！」

鎌かけに引つかかりやがった。素人か、ブラフか。

マグチェンジしながら振り向くと、データベースで見た覚えのある厳つい顔の大男がいた。素人だったか。

「お前、清石組きよいしの若頭わかしゅだな？ ちようどいい。聞きたいことがあるんだ。組長はもう喋れねえからさ」

「こんのジャリイツ……！」

「清安せいあんビルでの銃取引について知ってることを話せ。お前たちのシマだろ？」

答えるとは思っていない。もっと怒らせたいんだ。

確実に捕まえるには、奴の視野をもっと狭めて、逃げられないようにしなきゃいけないから。

俺は若頭に背を向けると、座敷の真正面にかけられた大きな掛け軸

に近づいていった。その下には、ついさつき殺したばかりの老人の死体が暗がり沈んでいる。

「ほら早く。あたしは気が短いんだよ、チンタラされると……」

若頭。あんた組長に拾われて、ずいぶん世話になったんだってな？

「イラついてしょうがねえ」

俺はその頭を、サッカーボールみたいに蹴り飛ばした。

雄叫びと一緒に重戦車みたいな足音が急速に近づいてくる。

ああ。

まったく。

クソ仕事だ。

「あああああああああー！」

得物はドスか。柔らかい死体を踏みながらよくそこまで速く駆けられる。恵まれた体重を載せて一直線に刺してしまえば、なるほど。女子高生くらい簡単に轢き殺せるだろう。撃てば当たるが、グロック17のストッピングパワーじゃ軌道は変わらないだろうな。

セミオートならね。

スライドの最後端、普通なら撃鉄がある位置——これは例えだ。グロックシリーズはストライカー式だから元々そこにはなにもない——に増設されたセレクターを切り替える。立方体型のパーツを貫いてSEMIと書かれた右側に飛び出していたピンを押し込んで、左のFULL側へ頭を出してやる。

相手は正面。的は大きすぎるくらい。感覚で当てられる。リコイルの吸収だけ考えればいい。

CARシステムの基礎中の基礎。胸に銃を密着させたハイ・ポジションに持つていく。

引き金を戻すなよ、俺。

「恨めよ若頭」

眩い炎と共に、亜音速の暴力が黒い背広に殺到した。

二秒足らずで弾倉は空に。スライドストップ、ホルドオープン。着弾の衝撃で砕けた弾頭が煙幕みたいに飛び散る。ミカさんの非

殺傷弾だ。とはいえこれは、ヘビー級ボクサーが全力で繰り出した一九発のパンチ——マガジンエクステンションがついているから二発多く入る——を一斉に食らうようなもの。人間の意識など抵抗する暇もなく消し飛ぶ。

気絶と同時に脚をもつれさせた若頭は、死体に脚を引っ掛けて、俺の目の前で派手に転んだ。白鞆のドスが鉄臭い畳の上を滑って、峰が俺のローファーにぶつかる。

家紋の入ったそれを拾い上げて、波打つ刃紋を眺めて。

「悪いな」

遠くに投げ捨てた。

手足を縛った若頭を担いで、来た道に戻る。普通のリコリス一人じゃ運べなかつただろうな、こんなデカイ男は。リミッターのない筋繊維が過負荷で千切れて、その端から再生していく。この程度なら治るペースのほうが早い。

「フォックストロット・ワン、執行対象の処理を終了。生存者、目撃者共になし。これよりターゲットを連行する」

『本部了解。ランデブーポイントにて待機せよ』

玄関口へ続く廊下で連絡を入れたが、それでも庭を出て山中の道路に出た頃にはもう、迎えの偽装護送車が来ていた。

商用のワンボックスカー。運転席には青服のリコリスセカンドが乗っている。自動運転じゃない。

なるほど、残業ね。わかったよ。

『フォックストロット・ワン、本部到着まで尋問を続ける。屋敷には調査チームを派遣している』

「へえへえ、りょーかい」

俺は担いだ若頭と一緒に座席のない荷室へ乗り込んだ。

DAからはその手のお喋りのスキルも買われている。なにせこの世に存在する痛みはおおむね経験してるから、どこをどうしたらどんな苦痛を与えられるかは手に取るように分かるんだ。

「車、出してくれ」

鍵付きのおもちゃ箱には例によって痛そうな道具ばかり。だから

まあ。

「頼むからぶっ壊れる前に吐けよな、おっさん」

クソ仕事は、早く終わらせるに限るんでね。

§

「ご苦労だったな」

「え、あ、お疲れ様です！」

DA本部地下駐車場。トランクを開け放った護送車の荷室の縁に腰掛けて煙草を吸っていたら、信じられないことに司令に会った。慌てて立ち上がったせいで車が揺れる。

「いい、そのまま聞け」

「は、はい。失礼します……どうなさいました？」

疲れ果てていたから喋りたい気分じゃなかったけど、そう言わないといけない気がした。

……若頭、根性あつたな。情報部の奴らは手を焼くだろう。あいつを拷問するためだけに本部出向とかになったら嫌だぞ、マジで。

「部下を労いにな」

「ああ、車出しますか？」

司令は口の中で小さく唸った。

数秒後、俺は閃いた。鈍いつて？ だって眠かったんだもん。

「……え、ああ部下つて」

「お前以外に誰がいる？」

何が起こつてるんだか本当にわからない。そりゃあ、俺の仕事は内容が内容だからよそのリコリスより司令とは随分顔を合わせてる。でも、こんなことを言われるようなことをした覚えは一切ない。

俺は警戒を強めた。面倒事を押し付けられるようだったら体調不良を装ってカウンセラーのところに逃げてやる。

「お気遣い、ありがとうございます。それで……自分に何かご用でしょうか」

携帯灰皿で煙草を揉み消そうとしたら、司令に手で制止された。困

惑していると、司令は白いコートの内ポケットから縦長の箱を取り出した。藍色のパッケージの六割くらいが健康被害にまつわる警告文で埋まっている。

煙草だ。楠木司令って喫煙者だったの？

知らなかった。なんかもう、驚くことが多すぎていくら煙を吸っても味がしない。

司令の最初の一吸いを、俺はぼーっと見てた。

そもそもここは禁煙だったと思うんだよね。排ガス対策に換気がしっかりしてるし、滅多に人は来ないし、それにリコリスとしての査定とかクソどうでもいいから構わず吸ってたけどさ。

……ずっと無言だからだんだん不安になってきた。

「そんな顔をするな。別に取って食いやしない」

「す、すみません」

「建前じゃないってことだよ。お前は人に気を遣いすぎるくらいがあるな」

「……っス」

こんなこと、言う人だったっけ。わからない。

そもそも俺、司令のことを何も知らないから。

「お前は好きで喫むのか」

「……はい。何も考えない時間が欲しいときに」

「私は、旨いと思ったことがない」

「そうなんですか？」

司令は地面に灰を落とした。俺は携帯灰皿に。

この人の言いたいことが何なのか、探そうとしている自分がある。こんな聞き流してしまえばいいのに。

ひよっとして俺は、楠木司令のことを知りたがってるのか？

それは、どうして？

「きっかけも覚えちゃいない。今は、惰性だ」

また灰が地面に落ちた。ペースが早い。火種も赤々と燃えている。ああいう吸い方をすると、辛くて苦い味ばかり出る。

見ていたら自分の煙草の火が立ち消えしかけていたから、ファイル

ターから息を少しだけ吹き込んだ。こつちに注意を割いてしまえば、いらぬ考えが消えてくれると思っただけだな。

「お前は変わった吸い方をする。趣味だな、そこまで来ると……さて、しばらくお前の仕事はない。報告も明日、ラジャータに通せばそれでいい。今日はもう帰れ」

司令は自分の灰皿に吸い殻を放り込んだ。

「……あの」

気づけば彼女を呼び止めていた。

俺は何をして……くそ。昼間にもこんなことがあつたつけ。考えがまとまらない。ここで話すことなんか何も無いはずなのに、それでも口が動いた。

司令は踵を返してこつちを見ている。

心はぐちゃぐちゃに絡まったまま。

もう、どうにでもなれ。

「よければ、試してみませんか」

俺は煙草を灰皿にねじ込むと、そばに置いていたシガレットケースを開いて新しいのを一本取り出した。

煙草葉はハーフ・スワレ。

ペーパーは甘草、スローバーニング。

「煙草の味は吸い方です。僭越かとは思いますが、私で良ければご説明させていただきます」

十秒にも満たない沈黙があつた。そして、ワゴンのサスペンションが音もなく沈んだ。司令が俺の隣に腰掛けたからだ。

俺はシガレットを司令に渡した。

「黒いな」

「リコリスの巻紙です。甘草のほうの」

俺は自分なりの手順をひとつひとつ、教えていった。

点火にはマッチ。火種は小さく。

舌を使って柔らかく煙を導き、燃焼温度を上げない。

火が消えるか、消えないか。その境目を維持する。

「……甘い」

司令は密やかに呟いた。聞いたことのない声音だった。

俺は領き、彼女と一緒に煙を吐いた。天井の蛍光灯をタールで汚染してやった。クソみたいな職場を上司と共謀して破壊すると気分がいいってことを、俺は今日初めて知った。

「司令……不躰ですが」

生まれてからずっと、聞きたくても聞けなかったことがあったのを思い出した。答えてくれないとは思うけど、この際だ。言うだけ言うてみることにした。

「なんであたしは、死なないんでしようか」

司令の目がこちらを向いた。視線を合わせるのが怖かったから、煙草の先の赤い光を代わりに見つめた。

「ありえないですよ。受けた傷はたちどころに治り、流れた血は無尽蔵に湧き……フィクションの住人にしても、メアリー・スーが過ぎると思いませんか」

「サイトウ。その件について、お前に知る権利は与えられていない」「……わかりました。では、質問を変えても？」

俺は肺の奥まで煙を落とした。いくら肺胞を汚し、痛めつけようが、一分足らずで新品に。どういう理屈なんだろうな。

「私は、あなたと同じ……人間なのでしょうか」

楠木司令は答えなかった。俺が巻いた煙草を、俺が教えた通りに吸い終えると、やはり何も言わずに立ち上がった。概ね、予想通りの展開だった。

短くなつた煙草を口元へ持っていこうとしたら、長い灰が崩れて落ちた。司令と一緒に吸い出したはずなのに。ずいぶん長く、黙り込んでいたんだな。

聞かなければよかった。

ひどく、疲れた。

目を閉じる。

「斉藤ヒマリー！」

瞬間、大嫌いな名前と呼ばれて、全身が総毛立った。

気持ち悪い。ああ、気持ち悪い。しかしそれよりも苛立ちが勝つ。

楠木の奴、俺が怒ると分かかってやりやがった。

俺は煙草を投げ捨て、跳ねるように立ち上がって車の横に回ると、地下駐車場のエレベーターホールの入口に立っていた司令を不敬にも睨みつけた。それくらいしないと気が収まらなかった。

「お前と私は違う」

歯を食いしばっていた。

だが。

「だが、お前は人間だ」

えっ、と勝手に声が出た。

「それは、どういう……」

「それと、煙草は控えろ。お前にはまだ早い」

「ちよつとお！」

呼び止めたのに、無視して司令は行ってしまった。

俺の直属の上司だろ、あんた。あんたが俺のアイデンティティを握ってるんだから、もつとこう、ちゃんと説明をしてくれよ。

まさか俺の出生の秘密、これで終わり？

嘘だろ？

「なんなんだよ、もお……」

俺が俺である訳は、あの人が全部秘めたまんまかよ。

マジかよ。

あの説明で分かってるのは、ないだろ。

いや。あれが司令の、精一杯の譲歩。だったのかな。

「……帰ろ」

俺は荷室の喫煙具を回収すると、ゾンビみたいに緩慢な動きで運転席に乗り込んだ。

バイバイDA本部。バイバイクソ職場。

次来るまでに喫煙所を作つていてくれよな。そこで司令を待ち伏せて、とっ捕まえてやる。

でもその前にリコリコに行くんだ。ミカさんのコーヒーを飲んで、地下のシューティングレンジで銃を撃って、煙草も吸って。

千束たちとの関係も、まあ、なるべく頑張るとしよう。たきなには

何か詫びの品を……喜びそうなものを買おう。千束のことはまあ、まだ怖いけど、今朝断ってしまった食事に、今度は俺から誘ってみよう。それでパワーを補充して、いつか逆襲してやるんだ。

だから待ってる、楠木司令。その時はキリキリ吐いてもらうぞ。俺の秘密も、俺の知らないあんたの姿も。

「待ってるよ！」

駐車場にブラックマークを刻んで俺は走る。

俺はサイトウ。高等機密を扱う暴力装置。

司令直属の密偵にして不死身の人間。

女の身体と男の精神、半々に混ざったリコリスだ。

シガレットローラーを両手の親指で一回転、二回転。

レギュラーサイズの紙巻き煙草と同じ全長七〇ミリのローラーに巻かれたベルトは何もせずにいると非常にゆとりがあり、真横からみると二本のローラーを頂点にして凹型にくぼんだ形になる。

そこに煙草葉シヤグとフィルターを詰め、片方のローラーの軸を動かして隙間を閉じてやると、くぼみは円筒形の空間に変わる。転がすたび、葉はその形に成形されていく。

三回転目で指に感じる抵抗が少なくなった。焦げ茶色のリコリス・ペーパーをローラー同士の隙間に差し込み、また一回転。

紙がすべて飲まれる寸前で止める。

リビングの照明を反射して光っている紙の端。糊が塗られているそこを、左から右へ舌でなぞって湿す。切手と同じだ。

最後にまた一回転。かかっているベルトごとローラーを摘んで軸をずらすと、そこには一本の紙巻煙草の姿があった。ハンドロールよりは手間だが、そのぶん綺麗に巻けて葉がこぼれにくいから持ち歩くには丁度いいんだ。

同じダイニングテーブルに置いていた金属製のシガレットケースにそいつを入れた。これでちょうど一〇本目。

ケースの中で隙間なく並ぶ煙草はフルロードした弾倉みたいで気分がいい。明日への活力だ。一日で全部吸うわけじゃないから、厳密には向こう数日間の活力だな。

「くあ……」

あくびをしながら壁掛け時計を見たら二三時を回っていた。ぼちぼち寝よう。

俺はテレビを消した。サブスクを使って見ていたのは、イタリア系アメリカ人の運転手とジャマイカ系アメリカ人のジャズピアニストが主人公の伝記映画だった。あなたへのおすすめ枠にあったから軽い気持ちで見えてみたら、いつの間にかのめり込んでこんな時間だ。

面白かったな。史実はどうだか知らないが美しい結末だった。特

に、レイシスト野郎を容赦なくぶん殴る運転手は痛快でよかった。俺は誰にでもフェアなやつが好きだ。

ダイニングテーブルに広げていたシャグの袋をガラスの密閉瓶に突っ込み、フィルターのパウチやらローラーやらと一緒にくたにしてキッチンのカウンタに置いてある戸棚に仕舞う。

つくづく一人で住むには広いセーフハウスだ。白服サイドにはそぐわない。四人家族くらいで丁度いいんじゃないだろうか。

まあ、風呂とトイレは別だし、ベッドルームで寝られるし、キッチンも自炊に苦労しない大きさだし、豪華な分には文句はない。

ベッドに潜ったら、サイドテーブルに置いていた仕事用のスマートフォンが震えた。暗闇の中メールボックスを開いてみると、一見してデタラメな英数字の羅列が十数行。暗号文だ。ラジアータの秘匿回線で送られてきて、読み終わると復元不可能なレベルで自動削除される。

まだ数行しか読んでいないが、どうにも嫌な予感がする。こういうのはもう、経験でわかるようになってしまった。

……予感は的中。制服を着ない任務だ。久しぶりに面倒くさい案件が来た。

俺は詳細を知るべく、平文と大差ないスピードでそれを解読していった。

「……ウォールナット。システムをダウンさせた野郎か」

奴はDAが誇る世界最高のスーパー・コンピューター、ラジアータを一時とはいえ乗っ取った、化け物みたいなウィザードだ。

奴が仕掛けたハッキングのせいで部隊の指揮系統は麻痺し、銃取引の現場でたきながマシンガンの引き金を引く羽目になり、結果約一〇〇〇丁の銃が行方知れずになった。

武器商人を捕縛できずに死なせた直接的な原因は俺のミスだが、そもそもウォールナットが攻撃を仕掛けてこなければ通信は途絶せず、オペレーターがその場の隊員に俺の行動を伝達していただろう。

……よそう、敵に責任を押し付けるのは無意味だ。本部からのバックアップに依存しきっていた俺が悪い。隠密行動中で通信途絶に気

づかなかったつていうのは、言い訳にならない。最悪の想定が甘かったんだ。

普通のリコリスならそれでいいが、俺に求められているのはもっと高いレベルの作戦遂行能力なんだ。俺はリコリスであつてリコリスではない、ある種の密偵みたいなものだから。

ウジウジ後悔するのはやめにして読み進める。

人員は俺一人。いつも通りの単独任務。

データリンクシステムのサポート、なし。石器時代かよ。

それで火器使用が、無制限……無制限!?

「はあ!？」

素っ頓狂な声と共に飛び起きた。タオルケットが翻る。せつかく風呂に入つてパジャマに着替えたつていうのに冷や汗が滲んできた。最悪だ。

拳銃しか携行できないリコリスにあるまじき火器使用無制限、その上制服着用なし。それで何をやらされるのか大体察したが、予想が外れている可能性を願つて最後まで読んだ。

俺の祈りは無駄だった。

これ、ウォールナツトの殺害命令だ。

§

「おーつとなんか元気ないですねお客さん。てか私服珍しつ、休み?」時刻は一一時。カウンター席で羊羹に黒文字ようじを突き入れていたら、和服を着た千束に声をかけられた。

リコリコの従業員はみんな和服だ。たまのバイトのときは俺も着ているが、正直趣味ではない。ガーリーとかフェミニンとか、そういう言葉で表されるデザインなんだよ。男性用もあるにはあるが、マイノリテイ少数派は人の記憶に残りやすいから選択肢には入らない。

私服も男装と呼べるほど好みに寄せたものではなく、ボーイッシュコーデ。あくまでレディースファッションの範疇に留めている。

とはいえ仕事以外でスカートなんて俺はごめんだね。誰に何を言

われたってそこを譲るつもりはないよ。

「休み。だから昨日遅くまで映画見てたんだ……くそ眠い」

「映画かあ、いいねえ！ サイトーってどんなの見るの？」

「割と何でも。こないだはヒューマン・ドラマで、昨日はホラーだったよ」

「サイトーって一人暮らしでしょ？ 家に自分しかないのにホラー

映画って怖くない……？」

「うーん、あたしはあんまり」

「度胸あんねー！」

「千束ほどじゃないよ」

俺は世間話を一区切りする意味で湯呑みに口をつけた。リコリコの煎茶は急須で出てくるのがまたいい。

元気がない本当の理由は連日連夜のブラック労働のせいだ。でも大丈夫、この体は常人より疲労しにくく回復も早い。これはただの気疲れってやつ。

心の疲労には甘い物が一番の薬だ。最後の一切れを口に放り込んで、急須に残っていた茶を最後の一滴まで湯呑みに注ぐ。

さて。

ウオールナットの殺害命令が出て今日で一ヶ月になる。奴の居場所を掴むのに二〇日、殺害計画を練るのに八日かかった。殺すのに必要なのは下準備込みでもたった二日だけなのに、やるせねえ。

思えばひどい任務だった。

制服を着ないってことは、殺しの免許証ライセンスに守られないってこと。

それが要求されてるってことは、その仕事は俺と同じ実働部隊リコリスにすら知られてはならないものだったこと。

つまり俺はこの一ヶ月間、事情を知らないリコリスと警察の両方に追いかけて回されるリスクを負いながらも、世界最高のハッカーをぶつ殺す算段を延々と整えてたってこと。

命がいくらあっても足りねえ。だからいくらでもある俺に回されたのか、ハハ。

笑えねえよバカ。

「今日はでかい仕事があるんだって？」

「そーなんだよ！　なんかね、すっごい羽振りいい依頼なの。なんと相場の三倍！」

「うーわ、すげー裏ありそう……」

具体的な内容は聞かないし、彼女も言わない。俺は喫茶リコリコの仕事には関知せず、また喫茶リコリコも俺の仕事に首を突っ込むことはしない。

DAとリコリコは実質、別々の組織みたいなものだからな。お互い余計なことを知りすぎずに共存するためのルールだ。

「まーまーポジティブに考えましょうよサイトーさん。大丈夫、備えはする」

「気をつけてね」

「まあかしときなさい！　明日は三人でパンケーキだもんね！」

カフェには俺から誘った。パンケーキが好きと言っていたような、いないような、そんな記憶があったから。

もつとも二人きりでは確実に俺が気まづくなくなるから、たきなに緩衝材の役割を期待して三人とした。

千束とたきなはそこそこ仲が良さそうだし、最悪俺が黙ってても場は持つだろう。お前らはお前らで存分に楽しくやってくれ。俺は邪魔にならないよう静かにしてるよ。

腕時計を見た。いい時間だ。ぼちぼち出るか。

ちようどミカさんが店の前に準備中の看板を出して戻ってきたところだったから、湯呑みを空にして会計を済ませた。

スキニージーンズの尻ポケットにスマホと長財布を突っ込みながらドアノブに手をかけたその時、言い忘れていたことを思い出した。

振り返ってたきなを目で探すと、奥の座敷から食器を回収してきた彼女もこちらを見た。頬のガーゼはもうない。

「そういうえば、たきなって千束の戦い方、見たことあるんだっけ？」

「先日見ました」

「ああ、ならいいんだ。初めてだったらびっくりするかなと思って。それじゃあ、また」

「私からも一つ」

開きかけたドアから外のぬるい空気が流れてくる。

「プリン、ごちそうさまでした。美味しかったです」

「……そっか。そりやよかった」

俺は笑った。

たきなが言っているのは、表参道のとあるパティスリーで買ったプリン詰め合わせのこと。店で食べて美味かったから、この間左遷のお詫びに四個入りのやつを贈った。

あそこは墨田区から足を伸ばして行くだけの価値がある。特にダークチョコレートのやつがおいしい。

買うの結構大変だったんだ。まあまあ人気ある店だし、やらなきやいけないことは山程あったし。だからここ数週間はろくに寝てない。それでもほとんどパフォーマンスが落ちないこの体を呪うべきかね。「え、たきなサイトーにプリン貰ったの!? ねーねーそれ初耳なんだけどー!」

おっと、うるさいのが食いついてきた。逃げよ。

「へいへい待って待ってちよっと待ってサイ」

トーを聞く前に扉を閉めてダッシュで逃げてやった。千束も店の前に出てきてこつちを見ているが、俺はすではるか遠く、豆粒サイズ。

残念だったな、俺はこれから仕事だ。千束に片手をひらひらやりながら背を向けて歩き出す。

さあ、地獄みたいな超過勤務もこれで最後だ。せいぜい暴れるとしよう。フラストレーションが溜まってしょうがないんでね。

何しろここ最近の俺の仕事は、都内各所に点在する監視ポイントをひたすら行き来して、DAの捜索網の隙間を現実とダークネットの両方からチマチマ調査するという地味なものだった。それもほぼ二四時間営業で。

奴だって人間だ。飯を食い、眠り、用を足さなきや生きていけない。生活に必要な物や人の流れは、決してゼロにはできない。電気、水道、ガス、食い物、その他生活必需品のあれこれ……配達に頼って引きこ

もってちやあ尚更分かりやすい。

死なないだけあって経験だけはそれなりに豊富でね。命じられればCIAのエージェントだって見つけてみせるよ、俺は。これだけのスキルを活かす機会が日本国内に限られるのが悲しいところだな。

一〇分ほど歩いて閑静な住宅地に差し掛かったそのとき、ベージュのカーディガンを着た老婦人に声をかけられた。すべては定刻通り、計画通りだ。

「すみません、豊原さんのお宅をどこ存知ないかしら？」

「六番地の豊原さんで合ってますか？ それなら、あの十字路を右に行ったところに」

「あら、ありがとう。お礼を差し上げたいんだけど……べっこう飴、若い子は好きじゃないわよね」

「そんなことないですよ、ありがとうございます」

去っていった老婦人——DAの連絡員が渡した飴を口に放り込み、透明な包み紙に小さく印刷された一〇桁の数字を見る。意味はこうだ。

本部はターゲットを再びロスト。補給地点一三の二に装備あり。索敵を継続されたし。

なんでこんなに回りくどいことをしなきゃなのかというと、本部が俺とのデータリンクをずっと切断してるから。俺が持つてる端末を踏み台にラジアータに侵入されるのを避けるために、こんな古典的な手段を取ってるんだとき。

……ターゲットをロストか。監視カメラだけに頼らず、人を置いて見張らせたほうがいいと進言したのに聞かなかつたな？ 本部は奴を見つけることより奴から隠れることを取ったんだろう。

つたく、一度ハッキングされたからってウォールナットにビビりすぎだ。

「まあ、ここまでは想定通りか」

俺は自分が街頭の監視カメラの死角に入ったのを周辺視野で確認してから包みを口に含んで溶かし、飲み下した。オブラートは処分しやすく助かる。

プランを微修正、少し巻く。気持ち、早歩き。

拠点からは間違いなく逃走されてるだろうから、狙撃ポイントに付きなきや。当初の予定通り、今日が最初で最後のチャンスになりそうだ。

閑静な住宅街を外れて街中の方へ歩く。景色は少しずつ変わり、風の音以外にも人の声や車のエンジン音といったノイズが増えてくる。背の低い雑居ビル、コンビニ、飲み屋、クリーニング店……それらを取り巻く、ある種濁ったような空気は駅に近づいてきた証拠。

俺は右手に見えてきた三階建てのアパートに入った。ガラス戸を押し、誰もいない受付を素通りして階段で最上階へ。唯一、ポストにスーパーのチラシが刺さっているドアを選んで入り、すぐに鍵を締める。

カーテンが締め切られた室内はしかし、昼間だけあって薄明るい。短い廊下の先の家具一つないダイニングには、ありふれたデザイアのダツフルバッグが無造作にフロアリングへ置かれていた。

バッグのファスナーを開けて中身を探り、俺が最初に取り出したのはワインレッドのシングルライダースジャケットと濃紺のジーンズ、そしてボトムスと同色のYシャツに靴下。

今回の仕事着は男物か。いいね、今着てるのより好みだ。私服を脱いでシャツとジーンズに着替え、ライダースだけは着ずに置いておく。

俺は手当たり次第に取り出した物資を床に広げながら、シャツの上から細身のチェストリグやシオルダーホルスター、タクティカルグロブといった装備を身に着けていった。

銃は初代ジエムズ・ボンドも使ったワルサーPPK。銃口付近を斜めに切り落としたような形をした小さい拳銃だ。

両手で構えて重みを確認する。どうやらマガジンには弾が装填済みらしい。一応スライドを少しだけ引いて確かめたが、さすがにチャンバー内は空だった。予備マガジンはすでにリグのポーチに入れてある。

「もつとデカいのじゃダメかな？ いいけどさ」

PPKはグロック17に比べると小型にすぎ、女の割に大きめな手にはいまいち馴染まない。それでも脇下のホルスターに収めると、一つだけ欠けていたパズルのピースがやつと嵌ったかのような、なんとも言えない充実感がある。頼りない見た目だが、この取り回しの良さは気に入った。

あとは太腿に黒のレッグパネルを巻き、そこにコンバットナイフを鞘と一緒にナイロン製MOLLEシステムの帯で固定して、床に放っていたジャケットを羽織れば一丁上がり。その辺のリコーズに見つかれば即座に銃弾をぶち込まれること間違い無しの暗殺者コーデが出来上がりだ。

最後にダッフルバッグの一番底に押し込まれていた薄っぺらいバックパックを背負う。これには主にファーストエイドキットが入っている。命を助けるものというよりは滴る血を止めて痕跡を残さないようにするものという意味合いが強い。

刃がくの字に曲がった救急バサミに粉末の止血剤、止血帯、ガーゼ、包帯、スリット副木、緊急時の焼灼止血用にガスバーナー。あとは……すげえ、この注射器って最近実用化されたDARPAの発泡止血注射システムじゃないか？ どこから仕入れたんだろ、こんなの。

なにはともあれ、欠品はなし。計画通りだ。俺は脱ぎ散らかした服と私物の一切を空になったダッフルバッグに突っ込むと、玄関の靴箱からクラシカルなライディングブーツを取り出して履いた。

柄にもなく緊張してきた。こんな大仕事は久しぶりだから、ちよつとビビってる。

胸に手を当てて、四秒息を吸う。

四秒息を止める。

四秒息を吐く。

また四秒息を止める。

心拍数が下がっていく。

緊張感を持つ。だが緊張はしない。

「……とつとつとぶつ殺してパンケーキ。そうだろ？」

軽口が言えるなら、もう大丈夫。ライダースのファスナーを閉めて装備を隠す。

俺は補給物資を使用したことをD Aに知らせるため、外に飛び出ていたチラシを中に引き込んでからドアを開けた。

次に俺が向かったのはアパートの駐車場だ。住民の買い物車に紛れて赤いスポーツバイクが止めてある。

スーパーチャージャージャー付きの四〇〇cc。セプレートハンドルの端にヘルメットフックがあつて、ミラーシールドのフルフェイスがカラビナで引っかかっている。

被ってみるとやや重い。防弾加工とは嬉しいね。

このバイクは普通二輪のくせに大型並のパワーがあるつてことでえらく売れたハイパフォーマンスモデルだ。カウルも軽量なカーボン製で、赤黒のツートンカラーが映える。惚れ惚れしちゃうな。密かに乗ってみたかつたんだ、これ。

喜び勇んでライダーズのファスナー付きポケットから鍵を取り出そうとして、妙なものが入っているのに気づいた。

出してみると煙草のソフトパックだった。銘柄はノース・ポール。日本製。サラリーマンがよく吸ってるありふれたやつ。もしやと思

い反対側のポケットを探るとジツポと携帯灰皿まで。なんだよ、これがあるならボックス呼吸なんかしなくてよかつたじゃないか。俺は喉の奥でくつくつ笑つた。

呆れたよ。緊張に負けてライダーズを羽織つた時に気づかなかつた自分にも、こんなサプライズを仕込んだ相手にも。

犯人は補給担当のタチバナさんだな。こんなことをするのは、というかできるのはあの人しかない。全く、お茶目なんだから。

まあ、おかげでやる気が出た。帰つたら礼を言つとこう。シートに跨つてサイドステップを払い、キーを回す。

始動は良好。軽く回してみると、四気筒エンジンの滑らかな回転に呼応してスーパーチャージャージャーが高級な管楽器みたいに吠えた。最高だ！

ギアはニュートラルのまま地面を蹴り、バックで切り返す。足つきもちょうどいいし、そこまで重くもない。これならカーチェイスだつて楽勝だろう。

スロットルを軽く開けながら一速へ。クラッチミートは素早く。考えるまでもない。ウインカーを出して車道へ出る。

それから俺は大通りへ出ると荒川方面へ一五分ほど走り、道路沿いの中層マンションの地下でバイクを止めた。

さつきまで走っていた通りを道なりに行くと、首都高の入口に辿り着く。ウォールナットの拠点からは近すぎず遠すぎず、羽田空港にも近い。

DAの監視がない逃走経路はここしかない。それ以外の有力なルートは、昨日俺が起こしたトレーラーの横転事故で通行止めか、指名手配犯潜伏の報に踊らされた警察が検問を張っているかのどちらかだ。だからここで迎え撃つ。

ヘルメットは被つたまま、地下の立体駐車場からエレベーターに乗る。

行き先は屋上。そこだけはすでにDAが人払いをしているから目撃者を気にする必要はないが、問題は狙撃の後だ。通行人の通報を受けた警官や、銃声を聞きつけた巡回中のリコリスが絶対に来るだろうから、顔は隠しておかないと。

エレベーターが止まる。ペントハウスの外はやけに風が強い。長距離狙撃をするわけではないからいいけど、観測手なしでどれだけ精度が出せるか。

道路沿い。首都高への入口とは反対側にあたる、俺から見ると左奥の角。そこだけ落下防止の手すりを取り外されていて、代わりにバイポッド付きのライフルが置かれている。狙撃銃を頼んだのは確かだけど、やけにデカイ。

俺は不審に思いながらも近づいていった。

本部がどんな銃を用意したのか、俺は知らない。数日前、このポイントに狙撃銃を置いておくよう要請したけど型の指定はさせてもらえなかった。

距離的に、セミオートのSR-25なら万々歳。ボルトアクションのM24やAWPとかでも全然悪くない……けど、件のそれは今挙げたどの銃とも形が違う。もしかして338。ラプアマグナムを撃ち

出すようなやつだろうか。

「……嘘だろ」

338^八・ラプア^六なんて生易しいものじゃなかった。

こいつの名は、M200 Intervention. 408。

口径一〇・三六m m、最大射程二kmオーバー。

常識外れの大口徑スナイパーライフルだ。

「司令は相当キレてんな」

本部が一式一万ドル越えのライフルと一発一〇〇ドルの専用弾薬を惜しみなく用意してくれたのは、別に俺の仕事に期待してるからとかじゃない。それだけウォールナットを確実に殺したいんだよ。

ラジアータに攻撃を仕掛ける意志があるうがなかるうが、その能力があるってだけで危険だ。奴は既にハッキングでこつちのデータを抜き取ってるんだから、尚更殺さなきゃまずいつて思ってるんだらう。

だからってこんな象撃ち銃みたいなのを使わせるかよ普通。一発でターゲットを確実に仕留められるのはメリットだが、いくらなんでも貫通力が過剰だ。奴の体を貫いた弾がそのまま罪のない市民に当たるなんてことも十分ありえるぞ。

ため息をひとつついた。

今回もなんとというか、例に漏れず――

「クソ仕事だ」

小馬鹿にするような調子で呟いた。

真面目にやるのがアホくさくなってきた俺は、銃の点検をしながらノース・ポールを吸うことに決めた。狙撃地点に腰を下ろし、ヘルメットは脱いで地面にそつと置いておく。

ソフトパツクの煙草を包むビニールは上だけ取ることにしている。銀色の封緘紙を片方ちぎって、ゴミは全部、パツクパツクに入れてあったチャック付きの袋へ。痕跡は灰の一欠片も残さない。

右手でパツクを指で上部を叩く。せり出てきた最初の一本を口で引き抜きつつ、同時に左手でライターを取り出す。分厚いグローブがうつつとうしい。

親指でジッポの蓋を弾き、返す動きでフロントホイールを回しながら箱を持つ右手で風よけを作る。火はそれでも揺らいでいたが、消えはしなかった。

吸い込んだ煙にオイルのニュアンスを感じた。手巻き煙草じゃなければライターを使うのもたまにはいいかもな、なんてことを考えた。

くわえ煙草のまま片膝を立て、膝射しっしゃの態勢に移行。短いバイポッドを地面より一段高くなった天端部に立て、ストックに肩をつけると、長大なサプレツサーが付いたM200のバレルはやや斜め下を向く。

道路を走る車を撃つには理想的だが、今は点検中だから街中に銃口は向けたくない。ストックを地面に置き、銃には上を向かせておく。

そのままボルトを少し引き、チャンバーをチェック。初弾は装填されていない。

煙を口に溜めながらマガジンを外す。バカみたいに長い弾が詰められていてずっしり重い。弾を指で押し込んでもあまり沈み込まないから、どうやら七発全部入ってるらしい。

溜めた煙はそのまま吐いた。あまり知られていないが、ノース・ポールは肺に落とすより口腔喫煙のほうが旨い。加湿していないからバニラの着香に先んじて辛みが来るが、これはこれで。

ゼロインの調整は既に行われているはず。まさかここで試射して修正なんてできないからな。

だからスコープのエレベーションノブとヴァインテージノブ——上と横にそれぞれ飛び出ているつまみがどれだけ回されているか、それだけを確認しておく。

俺が撃つのは、本番の一発だけ。

この銃は弾速が速すぎるから、弾が強烈な衝撃波を生む。サプレツサーでも銃声は消しきれない。

一発撃てば、必ず見つかる。

警察にも、リコリスにも。

隠密行動中ならDAは俺をリコリスの目からそれとなく匿ってくれるが、発見されれば一切助けない。目の前にいる凶悪犯を見逃せ、

だなんて、何も知らないリコリスに命令すれば必ず不信感が生まれるからな。

自力で追跡を振り切るまでが計画のうち、ってこと。

そう、すべては計画通り。携帯灰皿を取り出すついでに、支給品の腕時計を見る。奴が来るのは五分後。

せいぜい無駄な抵抗を楽しめウォールナット。お前はもう袋の鼠だよ。

ああ、お前はネズミじゃなくてリスだったな？

今日の午前三時二七分。警察が持つてる街頭防犯カメラのネットワークシステムを手当り次第にクラックしながら、人目につかない深夜帯を選んで拠点を引き払ったのはいい判断だった。

だが、逃走用の着ぐるみを今の今まで着っぱなしっていうのはさすがに迂闊だな。

カメラが見ていなくても、俺は見ていたぞ。

キャリアケースを引いてマンションを出るお前の姿を。

「……残り三分一〇秒」

計画に遅れはなし。煙草もまだ三分の一残ってる。

何も問題はない。後は奴が乗る車がこの通りに入るまで待つだけ。

残り一分を切ったところで、フィルターぎりぎりまで吸ったノース・ポールを携帯灰皿に入れた。

ストックに肩を付ける。銃口はやや斜め下。ボルトを引き、戻し、弾をチャンバーに送り込む。

レンズの反射を気取られないよう付けたままにしていたスコープのキャップを初めて外す。

ズーム。中央分離帯のない全四車線すべてを視界に収める。道路はこの狙撃地点から三二四mの地点でゆるく右にカーブしていて、その先は向かいに並ぶ建物の陰になつて見えない。

そこからウォールナットが乗った車が必ず来る。大して遠くもない距離からフアンシーなリスを探して撃ち抜く、それだけの仕事。

右目でスコープを覗きながら、開けたままの左目で時計を見る。残り三〇秒。考えられる誤差はプラスマイナス二〇秒。

そろそろだ。集中力を高める。横転事故の影響があってもなお交通量は決して多くない。すべて目で追える。だからここに誘い込まないだ。

二〇秒。

一五秒。

一〇。九。八。七——いた。白黒の軽自動車。

風を読みながら照準を合わせる。六。

ステアリングを握るリスの着ぐるみ。五。

後部座席に垣間見える青と赤。四。

ウォールナットとリコリスが同じ車に乗っている。三。

あれは——二。

千束と、たきなに見える——一。

リスの後ろに、千束が——ゼロ。

気づくのが遅かった。

俺は。

俺の指は。

もうトリガーを引いていた。

肩を打つ反動にも、耳を刺す衝撃波にも、トリガーを引いた自分にも、すべてに現実感を抱けなかった。

跳ね上がる銃身を体が勝手に抑え込む。頭の中は真っ白なのに、右手はいつの間にかボルトを往復させて次弾を装填している。

俺はストックから頬を離して、銃から吐き出された巨大な空薬莖が乾いた高音を立てて地面を跳ねるさまを他人事のように眺めていた。

薬莖は屋上の隅の、深さ数センチもない排水溝に転がり落ちた。弾頭が圧入されていた穴——ケースマウスから出る一筋の白煙。同時に薄く漂う硝煙の悪臭。それが、俺を夢から覚ました。

#2:

Business as usual,
Murder as usual

「……あ」

喉の奥から漏れるかすれた声は、自分の意志で出したものではなかった。

俺は今、何を撃ち抜いた？ わかりきっているはずの問いが何度もリフレインする。まるで結論を出すことを拒否するように。

スコープを覗く。ズームアウト。視界の震えが止まらない。

白黒の軽自動車はすでに俺が撃った瞬間の地点にはいない。タイヤ痕がずっと手前に続いている。二本の黒い線と一緒に筋を残す液体の正体を、俺は知りたくなかった。

車は六〇mほど手前に来たところで停車していた。フロントバンパーは対向車に強く擦ったらしく一部がひしゃげていて、反対車線にはみ出したボンネットの隙間からは、エンジンから噴き出したとおぼしき茶色いオイルが血のようにじくじくと滲み出ている。

そうか。道路を汚していたのは、これだったか。

俺は呼吸を思い出した。

「は、はっ……はあっ……はあっ……」

距離約二七〇m、マンションの高さは二五m。だから約五度の俯角をつけてフロントガラス越しに胸元を狙ったつもりだった。

けど、風の影響か、車速を見誤ったか、千束とたきなの姿に驚いて反射的に力むかした結果、弾は本来よりやや下のグリルに飛び込んでエンジンを貫いた。

状況を分析すると、そういうことになるのかな。

アルミ製のシリンダーブロックが盾になったなら、さしもの408Cheytac弾も威力が多少落ちる。ウォールナットはともかく、後ろにいた千束にまで当たる可能性は低いはずだ。

俺は祈る思いで二人の姿を探した。車内にはいない。リスの着ぐるみはまだ運転席にいる。背を丸めて腹を押さえ、痛みに悶えているような仕草を見るに、初弾は命中したみたいだ。

今なら確実に仕留められる。邪魔するものは何もない。もう一度、トリガーを――駄目だ。目標が移動した。赤い制服を着た腕がウォールナットを開け放たれたドアの陰に引きずり込んだ。

車の反対側でも青い袖がちらりと見えたかと思えば、助手席に積まれている黄色いキャリーケースが消えた。例に漏れず、ドアと地面の隙間からはローファアを履いた足が見えている。

ドアでは弾は止まらないが、狙いは絞れない。ウォールナットに当てられても、今度こそ本当に千束を巻き添えにしてしまう。

それだけは絶対に嫌だ。味方殺しなんて胸糞悪くしようがない。何度やっただって慣れない。思い出したくもない。本当はそんなの、間違っているんだろうけど。

考えるな、俺。それを考えるべきは今じゃない。俺という名の武器のパフォーマンスに支障が出ることは避けないと。そう言い訳して、記憶に蓋をする。

懺悔は後ですればいい。今は仕事の時間だ。

現在、彼女たちは狙撃を警戒して車を離れられずにいるが、俺もフレンドリーファイアを恐れて撃てずにいる。

千日手のようでしかし、こつちにはいずれ通報を受けた警察カリコ

リスか、最悪両方が来る。それがタイムリミット。細かい風向きや偏差を教えてくれるスポッターがいらないからなるべくしてなった事態ではあるけど、初弾で仕留められなかった俺は凄まじく不利だ。

こうなったら接近して懐のワルサーPPKで仕留めるしか手はない。どうせウォールナットの死亡は確認しなきゃいけないんだ、やってやるさ。

そう思って銃を置きかけたが、その時スコープとは反対側の左目が漠然と見ている景色に違和感を覚えた。こういうのを職人の勘がささやいた、というのかもしれない。

右目で初弾を撃った場所をもう一度見ると、やはりいた。

ワンボックスが一台、軽に気づいて急停車した。車内にはプレートキャリアを着た男が、前から見えただけで五人。全員サングラスで視線を隠している。それに筋肉の付き方が素人じゃない。

このタイミングでこの格好、九九%黒だ。

俺は狙いを助手席の一人に定めた。いつでも撃てる。

「頼むから撃たせるな、退け……」

千束とたきなはスナイパー、もとい俺を警戒して身動きが取れない。今後ろから攻撃されたら一卷の終わりだ。俺がカバーしないとまずい。

ウォールナットは殺す。でも二人は死なせたくない。同じ人間なのに矛盾してるよな、フェアじゃない。

俺は誰にでもフェアなやつが好きだ。

だから俺は俺が嫌いだ。

ああそうさ。俺にこんなクソ仕事を押し付けるDAも、そんな組織が作るイミテーションの平和をありがたがる日本も、そんな内情を欠片も知らないこの世界も、全部嫌いだよ。

みんながみんな、仕方ないって、こうするしかないって、いかにもどん詰まりですみたいなツラをして、俺を腐りきった大気で取り巻いて窒息させようとする。

同じ汚れた空気なら、俺は味がするほうを吸って生きていく。ジツポやマッチの火が、このどうしようもない閉塞感を焼き払って、一時

だけでも忘れさせてくれると信じている。

だから傭兵、殺される前にとつと失せろ。お前らのようなのがいるから俺の息が苦しくなる。俺が俺でいられなくなる。自分が好きでいられなくなる！

「馬鹿野郎が」

座席の下に手を伸ばして、足元のアサルトライフル——木製ストツクのAKを拾い上げたそいつを、俺は何のためらいもなく撃った。知り合い以外の人生を守るほど、俺は強くなかった。

トリガーを引いた瞬間、フロントガラスが一面真っ白にひび割れた。弾丸が通り抜けた小さな穴だけが異様に赤黒く、その奥ではきつと、男の胸部が木っ端微塵に吹き飛んでいた。ひよつとすると後ろにいた人間さえもそうなただろ。

ボルトを引いて排莢。

ボルトを押し装填。

レティクルを左にずらす。全開にしたフロントドアの後ろに隠れているのが一人。お構いなしに撃つ。ドアに弾痕が刻まれると同時に、下にはみ出た二本の足首が飛び跳ねて一瞬消え、こちらに靴底を向けて倒れる。バケツをひっくり返したような出血量だ。もう助からない。

排莢。装填。

サプレッサー付きとはいえ、馬鹿でかい銃声を三発も鳴らして二人を確実に殺している。下の道路はもう大混乱だ。みんな血相を変えてすっ飛んでくるだろうな。

早く退かなきゃなのに、何やってんだろう、俺。

心とバラバラに、俺の目は傭兵の生き残りを探した。

俺から見て右側のスライドドアが開いた。助手席の後ろにいた男が、出血する腹を押さえながら這うように出てきて車の後ろに隠れた。角度の関係で姿は見えない。流れ弾が怖い。こいつはやめておく。

撃てそうな敵がないから、俺は代わりにワンボックスのエンジンを撃って破壊した。ラジエーターからぶちまけられた緑色の冷却水

が道路に広がっていく。これでもう、こいつらは千束たちを追えない。

排莢。

安全のためボルトは引ききったまま、索敵がてら彼女たちの無事を確かめようとスコープの倍率を切り替えたその時、千束がドアの陰からワンボックスのほうに飛び出していくのが見えた。

彼女の片手には銃、もう片手には鞆。何をやる気だ？ 俺は一瞬戸惑ったが、すぐに気づいた。

そういえばそうだったなって、思い出した。

錦木千束は、敵の人生を守るだけの強さを持つ人間だった。そして、その選択肢を選ぶことが許される場所にいた。

ワンボックスの後ろに隠れていた、赤いキャップを後ろ向きに被った長髪の男のもとへ、彼女は走った。それで初めて、俺は敵の顔立ちや髪型といった要素を認識した。

俺は銃を置いた。時間を使いすぎたし、すぐに撃てそうな敵はいないし、それに千束の決断を踏みにじる気もなかった。

足元のフルフェイスを被り、ミラーシールドを完全に下ろす。赤いシングルライダースの前を開けて脇下に軽く触れ、ホルスターと予備マガジンの位置を手で確かめる。

だがこれはあまり使いたくない。背負っていたバックパックを探る。ファーストエイドキットのポケットを押しのけて、底に沈んでいたグリップ付きの催涙スプレーと特殊警棒を引っ張り出した。

特殊警棒を持つ左手に、スプレーのピストルグリップを握る右手を乗せる。これはハリエス・テクニックといって、本来は拳銃と懐中電灯を同時に構えるためのものだ。

制服を着ない任務のとき、俺は必ずこうした低殺傷武器を用意させる。見知った顔の人間を殺すときほど、気分の悪いものはないから。

エレベーターへ走りながら腕時計を見た。本当ならとつくにウォールナットの死に顔を拝んでいるはずの時刻だった。計画通りに進む計画は少ない。仕方ないさ。

下りきのボタンに触れようとした瞬間、頭上のランプが動いた。一

階から誰かが上がってくる。考えるより早く、俺は隣の内階段を駆け下りていた。

警察かな。リコリスかな。特殊急襲部隊^{SAT}だったら面倒だな。手すりから一瞬だけ顔を出して、階下の様子を伺った。

三階下でベージュがかった白の制服がちらりと見えた。巡回中の白服^{サイド}か。敵としては当たりの部類かな。

不意打ちしよう。駆け足から忍び足へ。腰を落として手すり壁の陰へ身を隠す。ビブラムソールが木目調の床に吸い付く度に発する耳障りな鳴き声はずいぶん小さくなった。白服の部隊は被害拡大を恐れてか、けたたましい音を立てて駆け上がってきている。俺が近くにいることには気づけない。

先頭の隊員が俺が隠れている踊り場に足を踏み入れた。

その瞬間、クラウチングスタートのように前へ踏み込みながら立ち上がる。

飛び出してきた驚きに眼を見張る少女。彼女が下ろしていた銃を持ち上げるより、俺が顔に催涙スプレーを噴射するほうが早い。予め構えていたんだ、当然だ。

短い悲鳴を上げる彼女を押し退けて、後続と、そのまた後続の隊員にもスプレー。三点バーストみたいにく。

四人目は近かったから、スプレーの下で順手に持っていた警棒を手のスナップで振るい、拳銃を手からはたき落とした。奇襲にうろたえる顔を流し目で捉えながら横を抜けつつ、返す手首で脇腹に手加減した打撃を入れて制圧。息が詰まるほど痛いだろうが、痕が残るほどじゃない。そこでじつとしてろ。

階段を駆け下りると踊り場で五人目と鉢合わせた。さすがに反応してきて、銃を向けてきた。少しヒヤっとしたが、この距離で腕を伸ばして撃つのは良くないな。

俺はそのまままっすぐ突っ込んで、グロツクの銃口を自分の薄い胸に押し付けて引き金をロックさせた。ショートリコイルの銃は、マズルを何かに押し付けるとセーフティが働いて撃てなくなるんだ。

そのまま相手を抱き締めるように引き寄せ、密着した姿勢から優し

い膝蹴りを叩き込む。もろに食らって、華奢な体が少し浮く。吹き飛ばして壁に頭をぶつけさせるわけにもいかないから、俺は気絶したそいつをそのまま抱いて勢いを殺してから、そっと床に寝かせた。

五人だから、一個分隊にプラス一人。残り三人は？

手すりから下をクイックピックすると、二階下からすぐに撃つてきた。手すり壁がコンクリ製で助かった。白服二人はいつでもなるが、危ねえな。あのトリガーハッピいな青服。セカンド

手すりを飛び越えてショートカット。銃弾が翻るライダーズの裾を掠めた気がする。かがめて身を隠すと、奴らはしつかりと牽制射撃を入れながら上ってくる。頭を出させないつもりだ。

じゃあ手はどうかな。催涙スプレーだけを手すりから出して、向かいの階下側を薙ぎ払うように連続噴射。悲鳴と咳が聞こえる。目が使えなきや撃てないだろう。

ヘルメットのベンチレーションを全閉。ありつたけ息を吸って止め、また手すりを飛び越えて強襲。悶える三人の真ん中、階段の中腹に着地。

白服二人は制服の襟までオレンジ色の催涙剤で濡れて、両目を抑えながら激しく咳き込んでいた。戦うどころか立っているのすら辛そうに見える。無視。

問題はさつきしこたま撃ってくれた青服だ。白服と同じ惨状なのに、充血した目からぼろぼろと涙を流しながらも俺をしつかりと睨んでいる。大した根性だ。

両肘を曲げ、銃を斜めに構えたエクステンデッド・ポジション。いい選択だ。だが俺の左右には戦意を喪失した仲間が二人。精密に狙えないその構えで、お前は本当に俺を撃つのか？

体が硬直した。撃てないよな。それを狙ったんだから。俺は彼女に警棒をそこそこの力で投げつけた。前腕に当たる。構えが崩れて――まずい、足を踏み外した。

俺は彼女に飛び付き、空中で姿勢を入れ替える。階段の角で何度も背中をぶん殴られた。初めてのダメージだ。

「離せこの、変っ態！」

庇ってやったのに心外なことを叫んで暴れるそいつの手から銃のスライドだけを奪って俺は立ち上がった。何回肘打ちしやがるんだお前。まだ脇腹が痛てえよ。

回収した警棒を畳んで尻ポケットにねじこみ、階段を降りようとする。彼女はグリップだけの拳銃で俺を撃とうとした。

俺は奪ったスライドを見せびらかしてから、踊り場から内廊下に全力で――俺の全力は常人の全力とは違う。俺のは過負荷で筋繊維が千切れるくらい、つまり火事場の馬鹿力って意味――ぶん投げて逃げた。撃ちたきや取ってこい。

その戦闘を最後に、俺は追っ手に会うことなく地下駐車場へ続くドアの前にたどり着いた。

出くわしたのは八人、痕が残るような怪我は負わせてない。理想的だ。ただ催涙スプレーは残り四割ほど。駐車場に何人いるかだな。

丸いノブをひねり、金属製のドアをわずかに開けて偵察。

正面、出口の上り坂を塞ぐ形でパトカーが三台も停めてある。リボルバーで武装した警官が車の周囲にぎつと見えただけで六人。

バイクなら通れそうだが、車同士の隙間を通るのにスピードが落ちて捕縛されるだろうから無力化は必須。住民の車を盾にして銃撃戦を演じてもいいが、相手が警察じゃあ時間をかけるほど応援を呼ばれて大変なことになる。それにウォールナットにも逃げられそう。

考えろ俺。こんなの慣れっこだろ？　今までどれだけヤバイ案件をこなしてきたと思ってる。物資もある、銃もある、恵まれてる方じゃないか。

敵は六人。密集している。

俺の持ち物はワルサーPPKにナイフ、警棒、催涙スプレー、あと止血用の諸々と、ジツポと煙草と携帯灰皿。

五秒、喉の奥で唸って閃いた。

あいつら、催涙爆弾で一網打尽にしよう。

一度ドアを閉める。バックパックから追加で取り出すは、救急キットに入っていたガスバーナーと止血帯が一つ。

カセットボンベから取り外したバーナーを床に置き、上から押さえ

ながら太腿の鞘シースに挿していたコンバットナイフを思い切りノズルへ叩きつけ、無理矢理長さを切り詰める。銃身長一センチつてとこかな。

次に催涙スプレーとカセットボンベをわずかに上下にずらし、止血帯で束ねて固定。缶がちよつとへこむくらい強く締め上げたからそうそう外れたりしないはずだ。

最後にボンベに短くなったバーナーを戻す。炎の吹出口は催涙スプレーの缶へ向けておく。ノズルの長さは読みどおりだ。どこにも干渉しない。これならしつかり中身を熱してくれるだろう。

これで爆弾は完成。点火してから何秒後に爆発するか全く分からないのが唯一の難点だが、即興で作ったにしてはいいクオリティだと思う。まさに即席爆発装置即席爆発装置って感じ。

ぶった切ったバーナーに火を点ける。すぐに爆発してほしいから火力は最大にセット。たった数秒でボンベは二本とも温かくなってきた。怖すぎる。

一秒たりとも持つていたくないから、ドアを開けるや一目散にパトカーのもとへダッシュ。明らかに危険な物体を持っている俺に警官が怒号を飛ばす。

あんたたちが腰に挿してるM360Jは飾りじゃないんだ。爆発物を持った凶悪犯には警告より先に銃弾をくれてやったほうがいいよ、お巡りさん。

警官がホルスターから銃を抜いた頃にはもう、俺は催涙爆弾を投げつけて左へ飛び退き、駐車されていたセダンを盾にして伏せていた。数秒後、耳が痛くなるくらい大きな破裂音がした。

トランクの方からフルフェイスに守られた頭だけを出して見ると、駐車場の出入り口にはオレンジ色をした霧が立ち込めていた。屈強な警官たちは霧の真っ只中で一人残らず地べたに倒れて、まるで赤ん坊みたいにもせび泣いている。

炸裂したボンベの破片で負傷して、そこに催涙剤のカプサイシンが……死にはしない怪我だが、下手すると死ぬより辛そうだ。完全に拷問の手口だよ。尋問対象にやったことあるもん、俺。

不要な苦痛と怪我を負わせてしまったことに心の中で深く謝罪しながら、俺はバイクの元に走った。

エンジンをかけて早々にスロットルを大きく開ける。前輪をブレーキでロックしたまま後輪を滑らせてクイックにターン。激痛に苦しむ警官たちとパトカーの間を縫って地上に出て、左折。ウォールナットの元へ急ぐ。

路上は無人だった。走っている車は一台もない。みんな乗り捨てられている。DAは一体どんなカバーストーリーを流布したんだろう。都市ガスのパイプラインが破裂して爆発の危険あり、とか？

まあ、何でもいいか。それは俺の仕事じゃない。俺の仕事はターゲットを殺すことだ。

さあ、リスの姿を探せ。

千束とは戦わない。どうせ勝てやしない。

たきなども戦わない。銃の腕じゃ敵わない。

俺より強い護衛が二人か。きついな。

でも、ウォールナットは手負いだ。見つけ出して鉛弾をぶち込んで、本格的に警察が追っかけて来る前に逃げられれば、なんとか俺の勝ち。正面戦闘なんかしなくていいんだ。

大量の放置車両の隙間を縫うように、俺は来た道を遡る。この先に、奴らがいる。

M200で撃ち抜いた軽自動車まで、あと一〇〇m。その時、道路の真ん中に人が立っているのが見えた。速度を落として近づく。

青い制服に学生鞆、長い黒髪に隠れたインカム。たきなだ。

「ここから今すぐ逃げて！ テロです！」

そうだね。俺がそのテロリストだよ、たきな。

ライディングポジションをもっと低く。バイクのカウルでホルスターやリグを隠す。

悟られないよう、首はそのまま。目だけでウォールナットを探す。このあたりにはいない。軽自動車を見て、いなければそこから血痕を追おう。

「あの、聞こえますか！ テロが起きて……！」

聞こえてるよ。声を聞かれたくないから、返事をしないだけ。

スロットルを大きく開ける。スーパーチャージャーが吠える。エンジンが絶叫する。さっきのアクセルターンで温まったリアタイヤがたわみ、粘り、急加速。

そこをどいてくれ、たきな。

あんたを轢き殺したくはない。

そう、飛び退け。それでいい。

「千束さん、不審なバイクが一台抜けました！ 色は赤と黒——」

クソ。そりやいるよな。最強のリコリスがさ。

でも、千束の銃には非殺傷弾しか入ってない。

勝てなくても、やりようはある。

接敵はすぐだった。千束はミニバンの屋根に上って、まるで門番みたいに軽自動車の斜め前に立ちはだかっていた。あんたがそこにいるってことは、その後ろにいるんだろ、ウォールナットが。

しかし上から見られたか、さすがに武装していることがバレただろうな。案の定、銃口がこちらを向く。まだ距離はある。非殺傷弾は精度が悪いから、めいっばい接近されなければ撃たれても当たらない。よしんば当たっても俺はバイクを手放さない。

その構えは虚仮威しだ。そうだろ？

千束は焦ったように目を見開いた。そうだよな、銃で狙われてるのに構わず突っ走るなんて狂気の沙汰だ。

千束の銃弾は撃っても撃っても当たらない。

俺はそうなるって知ってたよ。

「たきな！」

千束は葛藤するように目線をわずかに下げたのち、その名を呼んだ。

悪い予感がする。まさかこれだけ離れてて？

後ろから殴られるような衝撃が、一、二、三。

順に左肩、腰、右太腿。なんて正確な射撃。

喉から熱くて鉄臭いものがこみ上げてくる。

千束。お前、信条を曲げたな？

俺はバイクの姿勢を強引に乱し、あえて転倒させた。

カウルの両脇に突き出した樹脂製のスライダーが路面に当たり、猛烈な勢いで削れていく中、俺はハンドルから手を放してその庇護のもとを離れる。

何度も何度も転がった。アスファルトで全身がすりおろされた。今更痛みに反応することなんかないけど、無様な気分だ。何秒地べたを滑ったんだか、数えちゃいないが、結構長かった気がする。

頭がくらくらする。血がたくさん出てる。足が削れてて立ち上がるのが億劫だ。倒れたまま、シヨルダーホルスターからPPKを抜いた。

計算が正しければ——ほら、上を向いたらいた。

軽自動車の裏。へたりこんだリスの着ぐるみ。腹にダクトテープを巻いている。

ああ、だから千束は近くにいたのか。たぶんこいつの応急処置で時間がかかって、ミニバンに上るしかなかったんだ。どうりで、最後の門番には適任じゃないなと思った。

寝転んだまま、血まみれのグローブをつけた両手で銃を構える。スライドを引いて、初弾を装填。めいっばい上を向けば、照星は奴に被った。

腰を抜かして後ずさるそいつに、一発、二発、三発。

心臓に二発当てた。最後の一発は、被弾の衝撃で後ろに倒れていくウォールナットの顎をかち上げた。頭を狙ったつもりだったんだけど、当たったんらしいか。

真つ赤な血が噴き出す。俺とおそろい。ざまあみろ。

誰かが遠くで叫んでる。でもそれは俺を心配したものじゃない。傷はそのまま、立ち上がって、その拍子に——

——着ぐるみの、首と体の継ぎ目から、亜麻色の髪がちらりと見え

た。

「……………」

俺はその、ウェーブのかかった髪の持ち主を知っている。着ぐるみは胸から血を流して動かない。

そうだ。止血。救急キットがある。

血を止めなきや、死んじやう。

でも先に、本当にそうなのか確認しなきや。

俺は着ぐるみの頭を外そうと一歩近づいて。

脇腹に碎けない弾が一発撃ち込まれた。

倒れそうになったけど、なんとかぎりぎり、つんのめるだけで耐えられた。

確かめたい。でも二人が来る。

助けたい。でも捕まったら、顔を見られる。

走る。

大破した体は動かすのが難しい。でも今再生したら、二人に暗殺者の正体が俺だってバレる。フルフェイスはボロボロだけど、まだちゃんと顔を隠せてる。バックパックも破れてない。俺を割り出せる証拠は何も残らない。

血液や肉片なんてくれてやる。そんなのじゃDAに秘匿された俺は見つけられない。存在しない人間の一部分がいくらあつたって意味がない。

ひび割れた視界の端っこ、ワンボックスの陰、俺の狙撃を食らった赤いキャップの男。前に乗ってたやつが威力を殺したおかげで生き残れた男。

そいつはすごい顔で俺を見た。知ってる言葉でなにかを言ったけど、意味を持ったものには聞こえなかった。

走る。走る。走る。

後ろから声がする。怖い声がする。俺は千束が怖い。

怖い。眠たい。気持ち悪い。吐きそう。捕まりたくない。血が足りない。難しいことが考えられない。なにもかも最悪の気分。

倒れているバイクを引き起こす。エンジンはかかりっぱなし。

またがって、ギアを入れて、酔っ払いみたいにふらふら走った。壊れた体でどこまでも逃げた。

逃げ続けた。

びくりと体を震わせて起きた。

いつの間にか服が自分のもの変わっている。全身の傷もない。

自分がどこにいるかわからなかったけど、持っていた空の紙コップを見たら、ちゃんと理解できた。

俺、あの後ちゃんと逃げ切ったんだ。

他人事みたいな思い出し方だった。

ここは古い遊覧観光船の中。俺は木製のベンチシートに腰掛けている。もうじき日が落ちるのか、向かいの窓は暗い紫色をしていた。他の乗客がいないせいで、夢を見ているみたいに現実感がない。

「疲れてるな」

男の声がして、右を向いた。彼は俺から少し離れたところで、窓枠に手をつけて外を眺めていた。俺を呼びに来たんだって、なんとなくわかった。

「日の出埠頭まで、あと一〇分ってとこだ。一眠りするなら外しとく」
「いや、いいよ。そこまでじゃない」

紙コップに口をつけて、もう数滴しか残っていないコーヒで喉を潤した。どこにもこぼした形跡がないから、ほかはたぶん居眠りする前に全部飲んだんだと思う。

「そうか？ 大立ち回りだったって聞いた」

「……M200が大体の原因だよ」

男は外を眺めたまま、何度か小さく頷いた。

「SR―25を、配置する予定だった。フルサイズでセミオート、精度も十分。だろ？」

「俺もそれかかって思ってた。経験あったし」

「何日前、突然上からお達しがあったんだ、五〇口径を置けと」

「……じゃあ、抵抗したんだ」

「ああ。M200が限界だった」

「それでも、ありがとう」

「よせよ、当然のことだ」

「ノース・ポールを黙って仕込んだのも当然？」

「もちろん。だってお前の任務だ」

「おおー、仕事のできる男じゃん？」

「お前こそ、俺の仕事っぷりを一番わかってる男じゃん？」

彼はそこで初めてこちらを向いて得意げに笑った。笑った顔が褒められるのを待つ子犬に似ていたのがおかしくて、俺も喉の奥で笑った。

お互い満足するまで笑ったあと、彼が伸ばしてきた拳に、俺は自分の拳を打ち付けた。それは俺たちが無事に仕事を終えた時の、ある種のお約束みたいなものだった。

「なにはともあれ、お疲れさん」

「タチバナさんも」

俺たちは示し合わせたわけでもなく一緒に外へ出た。

それから二人で何を喋るわけでもなく、狭苦しいプロムナードデッキに置かれたベンチの両脇にそれぞれ座って、夕日に照らされていた街並みが少しずつ暗くなっていくのをぼうっと目で追っていた。

普段ならいくらでも出てくるはずなのに、どうしてか話したいことは一つも見つからなかった。でも別に、沈黙を不安に思う関係でもなかった。

「ブルズアイは好き？　ダーリン」

「ハハ。最高じゃん？　ハニー」

途中、煙草を貰って一緒に吸った。燃えるのが早くて、煙が山ほど出た。俺たちは吐いた煙で輪っかを作って遊んだ。

そして、汽笛が鳴った。

「またなサイトウ」

「うん」

「なあ」

船を降りる俺の背中に向けて、タチバナさんはこう言った。

「一ヶ月ぶん、たっぷり寝ろ」

俺はその言葉に曖昧に頷いて、タラップを渡った。それから後ろに立っているはずのタチバナさんに片手をひらひら振って、歩き出し

た。

歩きながら、スキニーのポケットからスマホを出して時間を見た。今から行っても、着く頃にはリコリコは閉まっている。でも。

ミズキさんの無事が知りたい。

千束とたきなの無事が知りたい。

明日、パンケーキを食べに行く約束していたから、誰にも傷ついてほしくない。引き金を引いたのは自分のくせに、身勝手にもそう思っている。

あのととき俺は、誰を撃った？

わかりきっているはずの問いが、目覚めてからずっとリフレインしている。まるで結論を出すことを拒否するように。

その感覚は、昼間の狙撃のときと同じ。

千束を殺したんだと、そう思ったときと同じ。

息ができない。

腐った大気が俺を取り囲んでいる。

俺はタクシーを捕まえてリコリコに向かった。道中何度か居眠りしたせいで、時間の感覚が飛び飛びで、気づいた頃には完全に夜になっていて。

そして、CLOSEDの札がかかったドアの前にいた。

俺はみんなの連絡先を持っていなかったから、こうするしかなかった。

明るい窓は一つもなかったけど、ドアのステンドグラスだけはおぼろげに中の光を透過して、暗闇の中で幽霊みたいに浮かび上がって見えた。

誰かが中にいる。

俺は断頭台に上る気持ちでドアを押す。

カウンターに、一人。

亜麻色の髪の毛。ウェーブのかかった長髪。カウンターライトだけが点いている暗い店内で、それだけが光を受けて鮮明に見えた。

「…………え」

夢だと思った。俺の本当の体はまださっきの船で居眠りをしてい

て、この光景は、ミズキさんを殺した事実を受け入れられない自分が作り出した妄想なんだ、って。

「遅かったわね」

穏やかなはずの声に俺はひどく怯えた。無意識に後ずさって、背中がドアにぶつかった。自分の体なのに制御がきかなかった。

いつもはこんなじゃないのに。

「晩酌に付き合ってちょうだい？」

私服姿のミズキさんは振り返らない。ただ、カウンターに置かれた一升瓶を持ち上げて、隣の席のグラスに中身を注いだ。

俺は茫然としたまま、そこに腰掛けた。

隣でグラスを置く音がする。

「幽霊に会ったみたいな顔」

俺は何も言えなかった。いかなる時も機密は守られなければいけなかった。

「ねえ。この間、あなたのスケジュールを当ててみせたの、覚えてる？」

俺はグラスになみなみ注がれた焼酎の液面を見ながら、小さく頷いた。そこ以外に視線を向けるのが怖かった。

無意識に震える手を、俺は反対の手で強く握って隠した。

「なんで分かったと思う？」

「……わかりません。俺の仕事を知ってる人間は、DAの中でも限られます。デジタルデータにさえ残らない時もある」

グラスをゆっくり持ち上げて、今にもあふれそうな酒をすするように飲んだ。度数二〇%前後。この体にとっては水同然だ。

「前はDAにいたって話、したでしょ？」

「はい」

「知り合いがまだいるのよ。四六時中おちやらけてるダメ人間なんだけど、仕事だけは誰よりもできるやつだね。そいつが時々、気まぐれに教えてくれるの」

「それって……」

さつき、船に。

「まさか、タチバナさん？」

「知ってるの？」

「兵站を、担当しています。俺の仕事の。それでよく会う」

「アイツほんつと悪ガキでしょ？」

「まあ、無邪気っていうか、なんていうか」

「もう、あんなのに気い遣うなんて優しいんだから！」

ミズキさんが笑ったのが聞こえて、俺もぎこちなく口角を上げた。嘘でも笑うと手の震えが収まる気がした。

俺はグラスの焼酎を三分の一、ごくりと喉を鳴らして飲んだ。

「そう、それで……ウオールナットの依頼を受けたときに、あなたが動いていることを知ったの」

「……わかってたんですか」

「二週間前に知ったわ。だから、対策してた」

「俺がウオールナットの拠点を割る前……」

「着ぐるみは派手に血が出る細工つきで、私がウオールナットになりすまして死んだふり。タイプIVアーマーと防弾プレートで全身ガチガチにしてたから、ご覧の通り無傷よ！ スナイパーの弾より熱中症が怖かったくらい」

座りながら上半身をくねらせて得意げにポーズを取る彼女の発言に、俺は心臓が止まりかけた。

「待って、タイプIVですか？ 俺が撃つたのは、408シャイタックです。それじゃ防げない……」

「え、そんなヤバいので撃たれてたの私!？」

俺は自分なりの分析をミズキさんに話した。

奇跡的に照準がずれて、エンジンごと着ぐるみを撃ち抜いた。それで威力が殺されて、二人は助かったんだろう、と。

「狙いが狂わなければ、俺はミズキさんを殺してた。後ろに乗っていた千束もです」

俺は脳裏にこびりつく最悪の想像をかき消したくて、残りを一気に飲み干した。それでも俺は欠片も酔わない。不死身の体は毒殺にも耐えるらしく、薬にも酒にも、人間離れた耐性があった。

こういう時くらい、酔えたらいいのに。

「怖かったでしょう」

「えっ?」

自分の耳を疑った。どうして彼女からそんな言葉が出るか、全く理解できなかった。

殺されそうになったミズキさんのほうが、俺を怖がるべきだ。銃口を向けられて、後ずさってたじゃないか。

肩に手が乗せられた。怖い。

触れられるのは、怖い。

心の内に、触れられてるみたいで。

「あなた、ずっと震えてる」

ミズキさんは俺の目を見ていた。

千束と同じ目だ。

考えを見通されてるみたいで、怖い。

「え、や、そんなこと」

こちらに向き直って手を伸ばしてくるミズキさんに、俺は反応できなかった。引つ張られる。恐怖に耐えかねて小さく悲鳴を上げた。その時にはもう、目は固く閉じていた。

最初に感じたのは温かさだった。目を少しずつ開けると、ふわふわした亜麻色の髪とミズキさんの肩が見えた。

抱き締め、られてる。手が、背中をさすっている。

どうして?」

「大丈夫」

なんで。

「大丈夫……」

どうして。

「私も、千束も、ちゃんと生きてる」

どうしてそんなに、優しくするの?」

息が、うまくできない。

頭を、撫でられている。短い髪が、優しく撫でられている。

「あなたは悪くないわ」

喉の奥から、変な声が勝手に出た。

「ひ、ぐ……う……うっ……」

そっか。

俺。

泣いてるんだ。

「ごめんなさい……」

「大丈夫」

「ごめ、なさい……」

「いいの」

「おれ、なんてこと……」

「大丈夫。大丈夫。私はここにいるわ……」

泣いたのなんて、初めてだ。

温かい腕に抱かれていると、この人はちゃんと生きているんだって、そう思える。殺さなくて済んだんだって、感じられる。

泣いていたのは、たった数分のようにも、数時間のようにも思えた。涙が流れれば流れるほど、心は洗われていった。

俺は新しい涙が出なくなるまでそうしていた。

「……すみません。もう、大丈夫です。ありがとうございます」

そう言っつて、離してもらった。なんだか足元がふわふわしているような気がして、幸せな夢を見ているようだった。

「あ、ごめんなさい、涙で服が……」

「ううん、気にしないで。力になれてよかった」

俺は目頭に残っていた涙を指で拭いた。その間、ミズキさんは一度席を立って、酒瓶をカウンターの後ろに隠しに行った。

スマホの時計を見た。思ったより時間が経っていた。外はきつと真っ暗だろう。

俺はカウンター越しに話しかけた。

「ミズキさんはどうやって帰るんですか？」

「歩きかな、飲んじやったし……あ、グラス頂戴」

「はい……家まで送ります」

「ほんと？　ありがとうー！」

二人で手分けして戸締まりをした。明かりを消して、グラスを洗って、すべては元通り。今夜あつたことは、俺とミズキさん以外、誰も知らない。

街灯の下を並んで歩く。前にも後ろにも人はいない。二人分の足音と、誰かの家の庭から聞こえる虫の声だけが聞こえている。

静かで、いい夜だと思った。

「あんたさ、せっかくだし上がってきなさいよ。宅呑みしましよ」
「え、でも」

「家主がいつて言っただから、あとはあんた次第よ」

「……じゃあ、お邪魔します」

「っしや決まり！ さっさと帰って酒よ酒ー！」

「まだ呑むんスカミズキさん……」

二人きりで路地を歩いていると、古い映画を思い出す。線路を歩いて、森に死体を探しに行く四人の悪ガキたちの話。

その再現を試してみたくなって、俺は歩きながらミズキさんの尻を足でちよいと小突いた。

いたずらに気づいた彼女はにやりと笑って足を振りかぶり、俺の尻を力いっぱい蹴り返し、快音を夜の住宅街に響かせた。

「痛つてえ！ マジの蹴りじゃん今の！」

「オホホホ！ 捕まえてご覧なさい！」

「あ、逃げた！」

走り出すミズキさんを俺は追いかけた。

そう、丁度こんなシーンがあつたつけ。

……いや、やっぱりちよつと違つたかな？

純度九六%のアルコールは、なんというか酒というより薬品って感じだった。

舌に触れた瞬間、気化して冷たい。そのくせ針で刺されたような強烈な刺激。ごくりと飲み下せば熱いような痛いような感覚が胃袋まで落ちる。喉元過ぎれば何とやらというが、こいつは過ぎてもまだ焼けるようだ。

そんな常軌を逸したウオツカ、スピリタスの瓶から口を離し、俺は真剣な表情を作って言った。

「……死にますよこんなの飲んでたら」

「グビグビ飲んでから言うの何、不死ジョーク？ 私だって一口でやめたわよ。さすがにその一線は超えねーよ」

——これは飲み始めてすぐの記憶。ミズキさんはふざけ半分で買ったはいいいけど全く消費していなかったスピリタスを俺に飲ませて、酔うかどうか人体実験をした。結局俺はボトル一本飲み干してもほろ酔い止まりだった。

「この家って蛇口からウオツカが出てきたりしないよね？」

「水しかでねーよー」

「一応聞いただけ、あんたの家だもん」

ミズキさんはソファに座ったまま、背後のキッチンで水を飲む俺に黙って中指を立てた。何考えてるんだか知らんがこつちを向いて邪悪に笑っている。

中指はやめろ下品だから。

——これがだいたい真ん中くらいの記憶。なんで俺の口調から敬語が取れたんだっけ。明確なきっかけはなかったはず。この辺からミズキさんの感情がぶつ壊れてきて、泣き上戸になったり笑い上戸になったり絡み酒してきたり、わけのわからないことになってきた。

「明日は何時に待ちあわせ？」

「午前一一時に」

「じゃあ朝帰りでも間に合うわね」

「でも……」

「疲れてるでしょ。そんな雰囲気がある。誰かの気配を感じて寝るのも、悪くないわよ」

——長い長い宴会の末。一周回って静かになったミズキさんはソファに寝転がったまま、帰ろうとする俺を呼び止めた。家に帰って寝るのもここで寝るのも大して変わらないでしょ、とも言っていた。

「あなたを家に上げたのはね。あなたの心が男の子でも体が女の子だから大丈夫だと思ったとか、そんなのじゃないってことはわかってるね」

「……うん」

「あなたがあなただったからよ」

「……うん。ありがとう。おやすみなさい」

「おやすみ」

目を開けたらもう辺りは明るかった。カーテン越しの太陽光が空を黄色く染めている。

俺は首を持ち上げようとして、背中がやけに熱いのに気づいた。それに、肩の上に少しの重みを感じる。何かが乗っているようだ。

下を向くとわかった。ミズキさんの腕が、俺を後ろから拘束している。ひよつとして抱き枕にされてる？

よくよく耳をすますと、真後ろ。至近距離から寝息が聞こえた。

ああ、なるほど。この人さては寝返り打った拍子にソファから落ちたな？ 結構酔ってたみたいだし、戻るのすら面倒になってそのまま寝ちゃったんだろう。

俺はそうつと、本当にそうつとミズキさんの腕を持ち上げて拘束を脱した。身を少しずらずらすと、部屋の空気が俺の背中と彼女の体の間に滑り込んできて心地いい。どれくらい長く密着してたのかわからないけど、暑いな。寝汗大丈夫かな。

静かに体を起こす。テレビの上にかけられた時計は九時半を指している。寝たのいつだっけ、一時か。

結構寝ていたらしい。カーペットが敷いてあるとはいえ床の上で寝たはずなのに、妙に気力に満ちている。こんなに深く眠ったことな

なんてあつたかな。

さて、どうしよう。ミズキさんを起こそうか？ でも、この人二日酔いになってるかも。だとしてら先に水を用意したほうがいいかな。ソファの後ろ、カウンターで区切られたキッチン。そのの食器棚から適当なコップを見繕って蛇口の水を注ぐ。

水の音で目覚めたのか、ソファの向こう側から何やらうめき声が聞こえてきた。

「み……ず……」

たつた今墓から蘇ったゾンビみたいな声だ。やっぱり二日酔いみたい。

「今持つてく」

「うう……」

コップ片手にミズキさんのもとへ。すると彼女は凄まじく怪しい挙動でムクリと身を起こした。ゾンビじゃなくて女幽霊の方だったかもしれない。

彼女は俺が持っているコップを全く見ていなかった。目をこすりながらテーブルの上で視線をさまよわせている。

「あの、ミズキさん？ もしもーし？」

ミズキさんは唐突にテーブルのロックグラスをつかんだ。透明な液体が揺れている。まずい。そっちは昨夜の俺の飲みかけのジンだ。

「あ、そっちは水じゃ——」

俺は気づいた。今のミズキさんは裸眼だ。その上ひどい二日酔い。周りが見えるはずがない。

口に運ばれていくグラスを止めようとした。でも、片手に水を入れたコップを持っていたから俺は派手に動けない。

ごくりと鳴った喉は、俺のかミズキさんのか。

「ブフツッ！」

霧。そう、度数四〇%のジンの霧。ボタニカルな香りがする。

俺はミズキさんの凶行を止めようと、彼女のほとんど真正面にいた。片膝をついて、空いた手でグラスを取り上げようと。

水がこぼれてしまう。飛び退くことは、不可能。

俺の目は酒に焼かれた。

「ぐああああっ！」

「ゲッホ！ ゲッホ！ ごめ……あ、れ、今何時……？」

口元を手の甲で拭う彼女の顔色は悪い。俺にジンを吹きかけたからってばかりでもなさそう。

「九時半ですよ眠り姫^{プリンセス}」

俺は目を何度かしばたかかせて眼球の表面から酒を追い出しながら言った。

「あ！ リコリコ！」

「定休日」

「あそつか、びっくりしたあ……うー頭いた……」

「はい、本物の水」

「ウオツカじゃないでしょーね」

「この家って蛇口からウオツカが出るの？」

「だってわたしんちよお？」

「自分で言っちゃおしまいだよ」

「てゆーかお酒ぶっかけちゃってごめんね……シャワー使って、服も貸すわ……」

「ありがとう」

「あとさイトウ、私の財布知らない？」

「いや。持ってないの？」

「ううん……探してみる」

水を豪快に飲むミズキさんを尻目に、俺は玄関に続く廊下へ出た。相変わらず脱衣所のドアは開きっぱなしで、一本のジーンズが廊下を塞ぐ形で放置されている。

扉が閉められないからどかしておこうかとも思ったけど、触っていないものか分からないし、それにこの家にはミズキさんしかいない。身体の性は同じだし、別にいいだろうと自分を納得させた。

入って目の前の洗面台の隣に衣類かごがあったけど、そこにはすでにミズキさんの服が入っていたから脱いだ服や下着は畳んで洗面台の縁に乗せておいた。

……廊下を塞いでたジーンズは氷山の一角だったとだけ言っておこうか。脱衣所の床がどうなっているかについてはノーコメントで。風呂場はこちんまりしていたが、浴槽は足を伸ばして入れるくらい大きさがあった。まあ、そっちには入らないけど。

水栓を押す。シャワーは数秒でお湯になる。そういえば給湯器のスイッチを押していなかった。ミズキさんが気づいてくれたみたいだ。ありがたい。

「あー……」

頭からシャワーを浴びてべたつく寝汗を洗い流すと、思わずそんな声漏れた。疲れが溶けていく。

こんな姿、千束に見せたら絶対からかわれるだろうな、事実はどうあれ。

中原ミズキ、未成年と密会！ みたいな。

それかこうだ。女子高生と喫茶店員の禁断の愛！

目に浮かぶよ。スマホで写真バシバシ撮って、キヤーキヤー騒いで。飲んだくれに春が来た！ くらいは絶対言いふらして回る。賭けてもいい。

シャンプーを借りてベリーショートの髪をがしがし洗っているが、なんかそれを考えてしまうとこれもあいつが喜ぶ要因なんじゃないかと思っちゃうな。二人から同じシャンプーの匂いがするって。

ボディソープは……いいか。汗は流れたし、家でもう一回ちゃんと洗えば。

別に千束を警戒してるわけじゃない。いや、本当に。嘘じゃない。マジだって。

俺はほんの少しだけ憂鬱な気分です浴室を出た。二人でしこたま呑んで一緒に眠っただけなのに、なんでこんなスキヤンダルに怯えなきゃいけないんだ。

バスタオルを探すと、すぐ右の洗濯機の横腹に貼り付けられた四角いタオルホルダーに何枚か刺さっていたから、手を伸ばしてそれを借りた。手触りがいい。全身を軽く拭き上げる。

体から滴る水がなくなつたのを確認して、俺は洗面台の鏡で全身の

傷の有無を確かめた。

「たまに深い傷が塞がったあと、薄い痕になることがあるんだ。それもほっとけば消えるんだけど、今日は一応、外出するから身だしなみの延長として調べている。」

頭頂部から、顔。首。肩。胸。腕。掌。ウエスト。

目と触覚のふたつで診る。空港の身体検査みたいのに、手を滑らせて。

腹。腰。尻。太腿。膝……やっぱりあった。左膝。転倒させたバイクから身投げしたときに、地面で削れて開放骨折したところ。意識してそこを再生すると、固く盛り上がっていた傷痕はすぐに消えた。他にはなさそう。下着を身につける。

女物の下着なんて趣味じゃないが、女の体をしてる以上は身につける。俺にとってはそれだけのものだ。戦闘時に動きを阻害せず、かつ、日常で着用がストレスにならなきゃそれで十分。

ところでミズキさんは服を貸すと言っていたけど、どれだろう。衣類かこの中、それともこの……床に落ちてる奴ら？

俺は下着姿で脱衣所を出て少し声を張った。

「ねえ、借りてもいい服ってどこ？」

「なんでもいいわ、強いていえばかごの中のが洗ったやつ！」

リビングの方から返事が帰ってきた。まだ財布は見つからないのか。リコリコに忘れてったんじゃないかと思うんだけど。

そんなことを考えながら、俺はかごからYシャツ——レディースだからブラウスカ——を引っ張り出して羽織った。ちよつとビツグシルエツト気味だ。

ボトムスを何にしようか考えていたら、呼び鈴が鳴った。今の俺は格好が露出狂のそれだから、ミズキさんが出るだろうと当たりをつけて無視した。

そしたら呼び鈴が連打された。喧嘩なら買うぞお前。

それでもそのまま聞いてたらピピピピピピ、ポーンって具合で、スーパーマリオの一面の曲を演奏しだした。ウツザ！ 絶対千束だこれ！ キレそう！

「あーもー……！はいはいはい出るわよー！」

案の定キレ気味のミズキさんがこつちに歩いて来た。二日酔いな
のにおちよくられてかわいそうに。頭痛のせいもか足元が少し危うい。

あ、廊下にはみ出たジーンズ。気づいてる？

「このウザさは千束ね……うえあ!？」

足を引つ掛けた。やっぱり気づいてなかった。

俺は脱衣所を飛び出して、つんのめるミズキさんの肩を抱きとめ
た。なんとか転ぶのは防いだが、このままじゃ勢い余って脱衣所と反
対側の壁にミズキさんの頭をぶち当ててしまう。

身をひねって立ち位置を入れ替える。俺が壁側に。

「うおっと、つとー！」

たたらを踏みながら壁に背中をぶつけた。

ミズキさんは転んでないし、頭をぶつけてもいない。完璧だね。

「つぶねー、ちよつと大丈夫？無理しないでよ」

「んへへ、ごめんごめん……」

その時、すべての時間が止まった。

「やさしーやさしー千束お姉ちゃんがあ、酔っ払いの財布を届けてあ
げに来ましー——」

ドアが開けられた。ミズキさんの財布を持った私服姿の千束が、そ
こにいる。

彼女は言葉の途中で絶句した。

千束が置かれた状況を説明するところだ。

玄関を開けたら、着衣の乱れた成人女性ミズキさんが下着の上——今気付い
た。まだ俺、キヤミソールを着てない——にぶかぶかのブラウス一枚
だけを羽織った女子高生サイトウの首筋に顔を埋めてしなだれかかっていた。
ちなみに女子高生の足の間には成人女性の足が差し込まれていた
し、なんなら両手も前を開けたブラウスの中に滑り込んでいる。

成人女性の手は女子高生の左の鎖骨、そして右脇腹——うっすら割
れた腹筋から形のはつきりした腹斜筋にかけてをつかんでいた。

女子高生の両手もまた、成人女性の肩を抱いていた。

濡れそぼつ黒い短髪。両者の間に薄く漂う酒精の香。

「あ……」

ミズキさんは硬直したまま、感情の死んだ声を発した。奇遇だね。俺も同じ気持ちだよ。

それだけこの絵面はヤバい。

千束はずっとフリーズしている。

「お」

彼女は突如として再起動した。お、って何？

顔が赤い。視線は玄関の俺の靴。

違うぞ。お前が想像してるようなのじゃ絶対にないぞ。

おい、下を向くなこつちを見ろ。俺の目を見ろ目を！ 待て、結論を急ぐな！ 話せばわかる！

「お邪魔しました……」

耳まで真っ赤にした千束は、そつとドアを閉めた。

二人きりにされた俺たちは、無言で顔を見合わせた。

玄関のドアを二人して見て、もう一度顔を見合わせて。

なんか急に恥ずかしくなってきたお互い目を背けて。

「違うー！」「違うー！」

俺たちは同時に叫んだ。

「あの一」

午前一一時。場所は駅前。喧騒の中。

俺は同じ壁に寄りかかる彼女に思い切って切り出した。

「そろそろ復活してもらっていつスか、千束さん」

俺は今、あの世まで見通せるくらい遠い目をしていると思う。

「……スイヤセン」

「駄目そうだな」

例の事故の後、俺は一度家に帰ってから仕事の報告を秘匿回線で済ませ、まともな外出着に着替えてここへ集まった。

結局、俺はミズキさんのブラウスと彼女が足を引つ掛けたジーンズを借りて帰った。こうなったすべての元凶をあの家に放置しておく、よりヤバい事態を招く予感がしたからだ。

そしたらたまたま、帰り道が被っていた千束と途中まで一緒に歩く羽目になった。あのジーンズは呪いのアイテムか何かだったらしい。その時の地獄みたいな空気は一生忘れられそうにない。トラウマものだ。誤解を解くために状況をしっかりと説明したんだけど、どうも言ってることが耳から耳に抜けていつてるようで手応えを全く感じなかった。

それでも時間を空けてもう一回会ったらシラフに戻ってるだろうと思つた。事実、俺の次に待ち合わせ場所に来た彼女は平気そうだった。

でも俺の顔を見た瞬間この体たらくだ。どうすりゃいいんだこんな。

俺は途方に暮れて腕時計を見た。秒針が偶然、てっぺんに着いた。一一時ジャスト。

「お待たせしました」

たきなの声がした。すごい、正確だ。

「いや全然。今来たところ——」

顔を上げた瞬間、俺は今朝の千束みたいにフリーズした。それでも

爽やかな愛想笑いは崩れない。腐っても俺はD A司令直属の密偵、こういう場面でのポーカーフェイスは得意だ。

「制服かあ！」

「はい」

「鞆の中身は銃？」

「財布と無線もあります」

「……いいね！」

何がいいねだアホ。自分の発言に内心で突っ込みながら、俺は隣の千束を肘で小突いた。

「千束、たきなが来たよ」

「ハッ！」

彼女はやつと現世に帰還してきた。周囲をきよろきよろと見回して、俺を見てまたあの世に行きかけていたけど、目の前のたきなを見つけてなんとか意識を保った。

「……なんで制服着てきたオメー」

「服装の指定がなかったの」

「パンケーキ食うのに銃はいらねー」

「制服を着ているので逮捕されることはないかと」

「そーゆーこと言ってるじゃねー」

千束は目を剥いて俺を見た。魂は抜けてない。

なるほど、彼女に何かあったらとりあえずたきなをぶつければ正気に戻るのか。覚えておこう。

「サイトーどういうことこれ」

「あたしが聞きたい。ごめん、ちよつと作戦会議！」

「あ、はい」

俺たちはフル装備のたきなを放置して顔を突き合わせた。ここまですべても千束はバグらない。件の事故よりたきなの格好の衝撃が上回っているんだ。

そのまま今朝の記憶も飛んでくれねーかな。

「あたしはただここに集合って伝えただけ」

「私服持っていないとか？」

「……まさか」

「だつてたきな、こないだまでリコリス寮にいたんだよ。今も戻る気満々だし」

「ならありえない話じゃないね。プラン変えよつか」

「お店の予約何時だっけ？」

「一一時から一一時半。ランチを兼ねて」

「じゃあパンケーキからのシヨツピングで」

「いいね。場所はモール？」

「うん、モール」

「了解、じゃ行こう！」

自分で誘った手前、一応俺が先頭に行く。後ろには千束とたきな。二人は並んで談笑しながら——とはいえ喋ってるのは七割方千束だ——歩いている。

いいぞたきな、聞き役を続けて千束の気を逸らすんだ。俺の尊厳は君の働きにかかっているぞ。

「この二人が不仲……？」

千束の陽気な喋り声に混じって聞こえてきたたきなの呟きに、俺は反応しなかった。

「ったく、誰が言い出したんだか。リコリコの常連客か？ 遊びの誘いを断るのは仲が良くないからなんて安易な理屈だ。」

そんな単純な問題じゃないよ、俺とこいつの関係は。まして性自認の話でもない。ざっくり言えば生き方の話だ。

程々の距離でつかず離れず。俺にとってはそれくらいが一番丁度いい。お互いこれでうまくやってるんだ。それを千束がどう思ってるかは、わからないけど。

だから今こうして一緒に遊んでる。お前を嫌ってるわけじゃないんだつて示すために。

ま、いいさ。ふわふわキラキラのいかにも女子高生が好きそうなパンケーキと一緒に自撮りでもすれば、そういう噂も駆逐できるだろ。

「ここだよ」

「レトロだ！ かわいいー！」

「実際、老舗だからね」

駅前の大通りを外れて少し歩いたところに件の喫茶店はあった。今の店主は二代目で、もうじき息子さんが後を継ぐことになっている歴史ある店だ。

入って右手のカウンターは創業時からずっとそこにある。そこに座る客層は様々で、老人もいれば若者もいた。常連らしき人たちが気持ち多いかな。でも繁盛してる。三代目どころか四代目まで続けられそう。

俺たちはウェイターに導かれて、カウンターと反対側のテーブル席に座った。壁際には洒落た革張りのメニュー表と一緒に、丸っこい形のおみくじ器が置いてある。

たきなの隣で物珍しげに店内を見回す千束の姿を見ると、なんだか自分の店でもないのに誇らしい気持ちになった。

いいだろ、ここ。店の奥には当時物のパックマンも置いてあるんだよ。さすがにもう動かないからインテリアになってるけど。

「すっげー……全部かわいい……」

「初めて来ました、こういう場所」

「パンケーキが特に美味しいけど、その他にもいっぱいあるよ。なんでも好きなの食べな、何食べてもおいしいから」

向かいの二人にメニューを手渡した。俺はもう見なくても注文できる。

「お何でもある！ たきな何にする？ 何食べちゃう？」

「……私見ます」

昔ながらのライスカレーやオムライス、サンドイッチにナポリタン。それらをはじめとする伝統的なメニューに加えて、上から下まできれいなグラデーシヨンになってるクリームソーダや、バナナアイスやフルーツを宝石のように散りばめたフレンチトースト、トッピングを山盛りにしたふわふわのパンケーキなど……SNS映えを意識した若者向けの品が混在しているのがこの店の特徴だ。懐かしいのに新しい、それがきつと繁盛の秘訣なんだろう。

「はいはいはいサイトーさん！」

「何でしょ」

「おすすぬ教えてくだささい！」

「ダブルベリーパンケーキバナアイストッピング、BLTサンド、
ダッチ・コーヒー。それがあたしの目当て」

「いーねえ、あんたわかつてんねえ……」

「オーバーカロリーでは？」

「かもね、でも気にしたことない」

「体脂肪率の増加は職務上好ましくないかと」

「一八%台をキープしてる。平気だよ」

「じゅ、じゅうはち……!?!」

たきなと一緒に見開きの端っこを持ってメニューを眺めていた千束がいきなりすげえ顔をしてこつちを見てきたから、俺は飲んでいた水を噴きかけた。

「……え、サイトー体重は？」

「六五キロ」

「……身長」

「一七四センチ」

千束はしつかりメニューを頭上によけてからテーブルに突っ伏した。あ、たきながしれつと冊子を取り上げた。こいつも大概いい性格してるな。

「体重以外ぜんぶまけた……一二センチもまけた……」

「大丈夫だよ、千束はまだまだ伸び代あるって。まだ一七歳でしょ？」

「先輩の言うことはちげえなあ……よよよ……」

「え、先輩？」

「え？」

「……え？」

何故かたきなまで声を漏らしてこつちを見てきた。最後の時間差あるのがそう。たきなってこんなに愉快的キャラだったの？ 知らなかったんだけど。

「待って、二人はあたしのこと何歳だと思ってるの？」

「大人っぽいから一八歳か、もしかしたら一九歳くらいかなーって

……」

「私もそのくらいかと」

「そういえば言っただけ……」

俺は目頭をそっと抑えた。この頭痛って心因性かな。

「あたし一六歳」

「年下じゃんっ……！ えっ……！ ウソでしょっ……!?!」

小声で叫ぶなんて器用だな。こいつおもしろ。

いや、まさか今までそんな行き違いがあったとは夢にも思わなかった。リコリコの大人組は誰も教えなかったのか？

あ、黙ってたほうが面白いから言わなかったのか。確かに愉快だわ。たきなでさえ目かつ開いて動揺してるもん。こいつらおもしろ。

「こんな……こんなイケメン王子が……年下……!?!」

「王子で、そりや髪は短いけど」

「いやだつてミズキより背え高い子がまさか年下だとは思わないじゃあ——あ」

千束はもう一度突っ伏した。何もしてないのに自爆したよこの人。あーあ、もう知らねえ俺。しばらく復活しないだろうし注文取っちゃおうかなもう。

「千束さん、どうしたんですか。体調悪いんですか」

たきなもたきなだ。耳が赤いからって無理矢理テーブルとデコの間に手差し入れて熱を測ろうとするなって。無自覚に追撃入れてるよ。

「あう……」

「熱があるみたいですけど、大丈夫ですか？」

「大丈夫です……」

「ご注文はお決まりですか井ノ上様」

「はい」

「錦木様は？」

「ハイ……」

じゃれ合うポンコツ二人に付き合いきれなくなったので、俺は注文を聞き出して近くを通りがかつたウェイターに伝えた。

彼が離れていったのを見計らって、俺は声を抑えて言った。

「千束、朝のは事故って言ったでしょ」

「過ち……!?!」

「一夜のじゃねーよ耳年増。やっぱ話聞いてねえだろ」

「聞いてたけどさあ……」

「聞いてたけど何？」

「その……破壊力がすごくて、頭にずっと……」

「はかつ……あれくらい映画とかでもあるじゃん」

「知り合い同士のなんてないじゃん……!」

「……まあ、それはそうだけど。ちゃんとわかってくれてるなら、いいや……」

ゴっつっ、と千束の額が再びテーブルに着弾した。

いよいよ話すことがなくなつて、俺は手持ち無沙汰になった。ていうか、たきながこつちをじつと見つめてきているのが不穏すぎて顔を上げられない。ずっとテーブルの上に置いた自分の手を見ている。

「サイトウさん、朝のつて」

「……言いたくねえ」

俺もテーブルに突っ伏した。

ちなみにパンケーキはおいしかった。自撮りも撮った。

§

「たきなトランクス履いてた……」

「はっ」

耳打ちでなんてこと言うんだお前は。俺は思わず手に取っていたリップグロスの小瓶を取り落としかけた。背伸びして、商品棚の上から店員が見ていないのを確認。よし、大丈夫。地面に落ちる前にキャッチしたしセーフだろ。てかどうせこれ買おうし。

危機を脱した俺は改めて千束に向き直った。ちよつとこれは聞き流せそうにない。

「トランクス？ メンズのもの？ なんで？」

「なんかね、どんな下着がいいか分かんなかったから先生に聞いたんだって」

「……話が見えてこねーな？ まあ、下着も買ったほうがいいってことはわかった」

「サイトーなんかここで買ってく？」

「うん、すぐ行くから先行ってて。PEACHでしょ？」

「そだよ」

目当てのコスメを買い物がごに放り込んでいる間も、商品をレジに通している間も、俺はずっと混乱していた。

千束はたきながトランクスを履いてるってなんでわかったんだろ。スカートめくりでもした？

いや、さつきセレクトショップで千束がたきなに着せる服を選んでいる時に一緒に試着室に入っていったのを見たから、多分その時だ。

……そもそも試着室に二人で入るなよ、おかしいだろ。何がどうなったらそういう流れになるんだよ。着方がわからない服でもあった？ いや、着方がわからないってなんだよ。

「ありがとうございます」

「どうも」

なんかどつと疲れてきたな。あいつら愉快だけどブレーキつてもんがない。真面目に考えてると脳が焼き付きそうだ。

俺は化粧品店のテカテカした袋を片手に、同階のランジェリーショップに急行した。入ったことないな、このPEACHって店。俺はあまりモールで買い物しないからこのあたりのことは千束の方が詳しいだろう。

赤い私服のアホと青い制服のアホはすぐに見つかった。パステルカラーのガーリーな壁紙が鬱陶しい店内でなお目立つ。

「よう妖怪トランクス、妖怪スカートめくり」

「めくってねーわ妖怪星の王子様！」

「オメーはいっぺんデグジュペリにぶん殴られる。で、何を悩んでるの？」

「いや、好きなの選べって言ったんだけどさあ」

「仕事に向いているのってないんでしょうか、サイトウさん」

「これなんだよお……」

「なくはないでしょ」

「あんの!? 銃撃戦向けが!？」

「それはないけど、自分の体型に合ったやつなら動きに支障は出にくいでしょ。ちよつと待ってて」

俺は尻ポケットからスマホを取り出して、ある店のホームページを見せた。実店舗のデザインと同じく、黒の背景に金の縁取りでいっそくどいほどの高級感を出している。

「フルオーダーが一番いい。紹介しようか?」

「いくらすんのそれ」

「四万。パンツは二万」

「高っ! JKに手出せるもんじゃないっしょ!」

「出せるでしょ、二人とも高給取りなんだから。っーかあたしだって今着てるもん」

戦闘時に動きを阻害せず、かつ、日常で着用がストレスにならないもの。俺が求めるすべてを満たすのがこれだ。

自分が女物を着ているって事実をあまり認識したくなくて自然な着用感を追求していったら、いつの間にかこんな超ハイエンドモデルに辿り着いてたってわけ。

「計六万……」

「高いけどここのが一番ノンストレスなの。そこらの下着に戻れなくなるのがネックだけど」

「サイトウさん、詳しくお願いします」

「食いついちゃったよこの子……」

「ああうん、後でね。今日はとりあえずここの——」

突然スマホが震えたので画面を自分側に向けた。電話の相手は、
「げ、司令だ……ごめん、ちよつと出てくる」

タイミングが悪いな。変に追求されそうでちよつと嫌だ。スマホを耳に当てながら店を出る俺を、たきながちらちらと見ている。

この通話に使っているのは専用の基地局を介した特別な秘匿回線

だ。DAとそのエージェントの間で完結していて、専用のOSで動いている。ラジャーとはまた別の閉鎖されたネットワークだから、ハッキングでどうにかできるものじゃない。

スマホは違うだろうか？ 残念。回線をアサインしてるのはこの端末の権限によるものじゃない。必要なタイミミングで勝手に繋がれて勝手に戻されるんだ。こいつはトカゲの尻尾なんだよ。

『情報の裏が取れた。清石は白だ。関与していない』

「やはりそうでしたか。ところで例の写真の解析結果は」

俺は店の前の下着を着たマネキンの横で呟くように話した。辺りを歩く客は少ないが、そもそも部外者に聞かれるような不用心を俺はしない。その程度のスキルはある。

『情報部にやらせているが、解像度が低い。期待はするな』

「了解しました。頼まれていた市場調査の件ですが、相場に変化はありません。どこかに流れているわけでもなさそうですよ」

『一〇〇〇丁もの銃が犯罪者の手の中か』

「おっしゃる通りです。それと高度な電子戦能力を持っているのは、ウォールナットだけではないかもしれません」

『続ける』

「ロボ太ってハッカー、ご存知ですか。ウォールナットに次いで腕がいいとされてる奴なんですけど」

『ああ。奴もラジャーに仕掛けるだけの能力があるのか』

「可能性はあります。奴は功名心がえらく強く、ウォールナット超えを意識している節がありますから、サイバー攻撃への警戒も強めたほうがいいでしょう。相手は一〇〇〇丁の銃と弾薬を買える金持ちです。ハッカー連中を雇ってバックドアの設置を強行しないとも言い切れません」

『……サイトウ。お前は奴らがDAと事を構えるつもりだと言いたいのか？』

「私が銃の買い手ならそうします。リコリスはテロ遂行の最も大きな障害です。排除できるだけの力があるなら、潰しておきたい」

『だが、それほどの戦力規模ならラジャーが捕捉するだろう』

「そこでロボ太ですよ司令。取引現場での前例をご存知でしょうか？
私はもう、あれをあまり信用していません」

『一理あるな』

「くれぐれも厳重な警戒をお願いします。嫌な予感がするんですよ、
この案件は」

『わかった、お前は引き続き調査を。どんな些細なことでも報告を上
げろ』

「はい。司令もお気を付けて」

俺は何食わぬ顔で二人のもとに戻ったが、たきなだけはやけにこちら
を見てくる。司令とのホットラインを持つてるとはいえ、俺にでき
ることはなにもないよ。

俺は壁一面のフックに陳列された下着を漠然と眺めながら言った。

「仕事の話だよ」

「……司令、でしたね」

「直属の上司なの」

「サードのリコリスが、司令直属ですか」

「ちよーいちよいちよいたきな、深いことは尋ねないの！ サイトー
も色々事情あるんだよ」

俺の仕事を二人に言っているのか。少し考える。

今朝、ミズキさんがウォールナットをリコリコで匿っていると
言っていた。奴は既に俺がこの手で殺した事になってるから、DAの追
跡は問題なさそう。

こいつをうまく今の仕事に使いたいんだよな。

共同戦線、ってほどじゃないけど。

「やー、ごめんねサイトー」

我々は銃の買い手を見つけられていない。情報戦で敵に先を行か
れている。頼みの綱のラジャーは信用できない。

そこでウォールナットを使えば、事態の収束はぐっと早まるはず
だ。でもこいつには殺害命令が出てるから、生きているのを見過ぎし
てるのがバレたら俺の身が危ないかも。

でも成功すれば大手柄だ。司令はその戦果を決して無視できない。

俺の利用価値を示せる。

「……サイトウ？　大丈夫？」

機密をいくつか破らなきゃいけないな。でもリコリコは完全な部外者ってわけじゃないし、そこまで致命的ってわけでもないか？

ゆっくり、頭を掻いた。

メリットとデメリットを天秤にかける。

眉に皺が寄る。

リスクーだけど、やる価値はあるよな。

仲間が死ぬのは気分が悪いし。

「ごめん……嫌なこと、思い出させた」

やけにトーンの低い声が聞こえて、はつとして千束を見た。いたずらがばれて叱られるのを待つ子供みたいに目線を落としている。

くそ、しまった。完全に俺の失態だ。彼女、俺のトラウマを刺激したと勘違いしてる。

千束は訳あって俺の後ろ暗い任務のことを知っている。別に俺は大して気にしてないんだけど、昔、なんか変に同情を買ってしまったんだ。

「あ、いや、そういうことじゃなくて！　どこまで話していいのか考えただけだから、そんな顔しないで」

「えっ、あ、そうなの？」

「うん。だから本当に気にしないで」

「よ、よかったあ……口から心臓出るかと思ったあー！」

彼女はふにやふにやと脱力した。うん、お前はそれでいいよ。四六時中うるさくしてろ。

「たきな、詳しい話知りたい？」

彼女は困惑したまま、こくりと頷いた。確かに何が起きてるんだかわからないよな、このやりとり。せつかくだからそれも全部説明しようかな。

「なら最後にリコリコで話そ。今日は定休日だけどボードゲーム大会やってるはずだから、店には入れる」

さてと。この仕事を終えた俺は、無事にお天道様の下を歩けるか

な。

でもクソ仕事じゃないから気分は悪くない。
いままでより随分、息はしやすいよ。

§

「紹介しよう。あそこにいるのが新顔のクルミだ」
「よろしく」

ウォールナットはえらくちんまい女だった。いや子供？ 少女？
年が判別しにくい。スタッフ用の座敷の奥の押入れを仕事場代わり
りにしてるなんて、変なやつ。着てるパーカーも手が見えないくらい
ダボダボだし。

俺は押入れの上段に引きこもったまま手を振るそいつにいたずら
心が湧いた。ちよつと驚かせて余裕を崩してやろう。

「どーもウォールナット。よくキャリアケースに入っけいられたね。
昨日は大変だったでしょ」

「え、いや、な、何の話だかわからんなあ!?!」

露骨にビビりだした。こいつちよろいわ。

俺は座敷の入口に立って、満面の笑みで手を振り返してやった。

「あたしはサイトウ、DAのリコリス。これからよろしくねウォール
ナット」

「はわわわわわわわ……!」

恐怖でおかしなことになってきたウォールナットを放って、俺はカ
ウンターの裏側でミカさんに向き直る。彼は驚きこそすれ、クルミの
殺害を恐れているような雰囲気ではなかった。察しが良くて助かる。
「彼女のことと秘密の提案があつて来たんですけど……聞きます?」

ミカさんは愉快げに笑った。

「聞かせてもらおうかな」

「後悔させませんよ」

俺はバックヤードから表に出て、店内をぐるりと見渡した。ミカさ
ん、ミズキさん、千束に、たきな。いつもの面子がちゃんといた。

俺は大企業のCEOが会場でプレゼンをするみたいにな、芝居がかった調子で言った。

「皆さん。あたしと一緒に——テロリストどもをブチのめしませんか？」

会場はまばらな拍手に包まれた。ありがとう、ありがとう。気分はさながらジョブズだ。

さあ、仕事の話しよう。

「早速詳しい話に入りたいんだけど、この提案には実働部隊の権限では知ることが許されない機密が大量に含まれてる。あたしのことを知るってことは、そういうことなの。ミカさんやミズキさんともかく——千束、たきな」

俺はカウンター席に座る二人に順繰りに目を合わせた。真剣な表情を読み取ってか、彼女たちは体ごと視線をこちらに向けてくれた。「二人は最悪、ライセンス抹消どころかそれ以上の処分さえありえる。だから話を聞くかどうかは慎重に決めてほしい。あたしも、他のみんなも決して無理強いないし、聞かなかつたからって仲間外れになるわけじゃない。知らないぶんには、デメリットはなにもないんだ」
たきなは難しい顔をして数秒、逡巡した。

「私は……やめておきます」

俺は彼女の言葉に深く頷いた。

不干渉という賢い選択を、俺は掛け値なしに称賛したい。自分の領分を超えることに首を突っ込まないというのは、とても大事な能力だと思っから。

俺はそれができないやつを何人も見送ってきた。

この手で、送り出してきた。

「わかった。それじゃ少しだけ、地下のシューティングレンジにいくくれる？　そこなら声は聞こえないから。終わったら呼びに行く」
たきなの背中がバックヤードに消える。徐々に小さくなっていく足音が完全に聞こえなくなったのを見計らって、俺は千束を見た。

「聞かせて」

「……わかった。後悔は」

「しないよ」

千束は、そうか。今更か。真摯というか、頑固というか。

敵わないな、とつい笑みがこぼれた。

俺は入口のそばの座敷に腰掛けて、軽い雑談でもするように話し始めた。

「まずはあたしの仕事について話そうかな。提案を聞く上で、前提案件を知っていてほしいから。みんなある程度わかるところまで、確認の意味を込めて。新顔もいるしね」

俺は二階席の方に視線をやった。欄干の隙間から顔を出して話を聞いていたクルミが一瞬だけ身を固くする。

やっぱりちよつとビビらせすぎたかも。

「あたしは楠木司令直属のリコリス……この仕事を簡単に言うとは、密偵スパイみたいなもの。普通リコリスは犯罪者を犯行前に殺すのがメインだけど、あたしはその一つ前。見つけ出す方。HUMANITとSIGNITを主任務にしている」

話しながら同じ座敷に座るミズキさんをちらりと見た。合点がいった顔をしている。さすが元DA情報部員、基本は押さえてる。

「民間人への聴取、ダークウェブからの情報収集、ハッキングやクラッキングも少々。あとは支部間の伝令、身辺調査、潜入、誘拐、尋問、拷問、口封じ、暗殺……ハニー・トラップ以外の後ろ暗い仕事は大体やる」

話せば話すほど空気が重くなっていく気がして、俺は自分の失策を疑い始めた。仕事を一緒にする上で必要なことだから話してるだけなんだけど、みんな少し優しすぎる。

「制服を着てリコリスとして動くこともあるけど、それはどちらかというと諜報活動の一環として、という形になるのかな。有益な情報を握る容疑者を生け捕りにしたり、不都合なことを知ってる人間を任務を装って殺したり」

ジョブズごつこの愉快的雰囲気はすっかり失せていた。誰も彼も、火葬炉に入れられる棺を見送る時みたいに沈痛な顔をしている。

そんな調子だから最後の仕事については迷ったが、この際だから打ち明けることにした。これ以上深刻なムードにはしたくなかったが、協働するなら教えておくべきだと思った。

「それとたまに、機密に触れた者を殺して黙らせることもある。非戦闘員であれ、リコリスであれ」

空気が一瞬で凍った。

驚愕。絶望。そして、怒り？

それとも、悲しみ？

みんなの揺れる目が訴えるものは、一体なに？

「さっき言った、ライセンス抹消以上の処分つてのがそう。DAは秘匿性が高い組織だから、情報漏洩だけはどんな手を使つても避けなきゃいけない。未然に防ぐことが求められてるんだ」

リコリコの面子では千束しか知らない。彼女は俺が唯一塞ぎ損ねた口だ。仲間を殺すところを見られて、消そうとしたら見事に返り討ちにあつた。

あの時は監視の目がなくて助かった。おかげで俺が仕損じたことは誰にも露見せずに済んでいる。

「ここままで何か、質問とかある？」

俺は空気を一切読まず、あくまで気安い口調を保った。悲劇のヒロインを気取ろうとは思わない。そういうのは好きじゃないんだ。

それにもう、自分の中で決着がついていることだから。

ミカさんは眼鏡を押し上げた。この重圧の中だ。言葉を発する前に、一拍置きたくなる気持ちはわからないでもなかった。

「いつから君はその仕事を？ それに一体どこでそれだけのスキルを……」

「四歳から八歳までは訓練施設を転々と。移動中は毎回目隠しをしていたので場所は知りませんがね。なので、実戦は九歳からになります」

「まだほんの子供じゃないか……」

「あたしは過労死しません。二時間睡眠で万全なパフォーマンスを維持できます。それで浮いた時間を訓練に回していましたが、当時でも十分な練度がありました」

普通の人間は人生の三分の一を寝て過ごすと言うけど、俺がその気になれば一二分の一で済む。

起きていられる時間が長ければ、当然使える時間も増える。同年代のリコリスとはそこで圧倒的な差がつく。それにいくら追い込んで俺は死なないんだから、訓練の過酷さは言わずもがなだ。量も質も

段違いさ。

米海兵隊のブーツキャンプじゃ、だいたい九時間訓練して八時間眠って、残りの七時間は食事やシャワー、休憩、余暇に充てられる。

俺は一九時間訓練して、二時間眠る。休憩はなく、食事とシャワーと次の訓練の準備に三時間。二倍以上の密度がある。俺の四年は実質、常人の八年より長かった。

どんな凡人でも八年間鍛えれば、それなりのものにはなるだろ？

「それにリコリスってのはみんな子供ですよ、ミカさん。あたしが特別ってわけじゃない」

俺はそう締めくくり、肩をすくめて微笑んだ。

これは本心だ。俺も喫茶リコリコもDAも分野が違うだけ。それぞれの苦しみはあるだろう。でも、誰のが特別重くて誰のが無価値だとか、そういう道理はないはずだ。

生きるのが全く辛くない人間なんていない。

俺はその苦痛を尊重したい。

そこにあるんだ、って認めたい。

わかったような口を利いて、軽んじたくないんだ。

「……そうだな。話してくれて、ありがとう」

ミカさんは柔らかく笑い返してくれた。俺の言いたいことはちゃんと伝わったみたいだ。

そうして一段落したところで周りを見た。

千束はなにか言いたげだったが、言葉を探すのに苦慮しているように見えたからそつとしておいた。

ミズキさんはずっと俺から顔を背けている。閉じた足の上に乗る両の拳は固く握られていて、今にも震えだしはしないかと心配になった。

軽蔑している？ いや、彼女はそんな人間じゃない。昨夜の出来事を経て、俺は傲慢にもそう信じている。

だからこそ思ってしまうことがある。

ミズキさんは高潔な人だ。

そんな彼女の目に、俺はどれほど醜く映っているんだろうか。

俺の所業を知ってなお、あなたは悪くないと言っただろうか。

犯罪者も、そうでない者も、誰かの親も、誰かの子も、誰かの友も、誰かの愛する人も、別け隔てなく殺し、時には拷問にかけてきた俺を許すのだろうか。

ミズキさんには嫌われたくないな、なんて。

俺は過ぎた願いを抱いている。

「なあ」

クルミが上で手を上げた。際限なく膨らんでいく思考を断ち切ってくれるのが、今は嬉しかった。

「過労死しないってどういうことなんだ？」

「言葉の通り、死なないんだよ。傷なんかすぐ塞がるし、血はいくらでも作られるし。薬物だつてすぐに代謝しちゃう」

「にわかには信じがたい話だな……」

「ちよつとクルミ——」

「いい、千束。みんな普通そう思う……そうだなあ、昨日赤いライダーを着た暗殺者が大量出血しながら逃げて行かなかつた？ ああでも、キャリアケースの中か」

「いや、着ぐるみに仕込んだカメラで見てた。バイクで事故つた上四発も撃たれてたな。逃げたところで死ぬだらあれじゃ」

「それ、あたしなんだ」

千束が視界の端で俯いた。お互い不可抗力だったんだ。罪悪感を抱かれるのはかえって居心地が悪い。なんとかしなきゃ。

「二月前からウォールナットの殺害命令を受けて動いてた。同じリコリスにも正体を気取られないよう、秘密裏に消せつてね」

今思えば、上層部は支部と本部の表立った衝突を警戒して制服着用を禁じたのかもな。全部バラしたからそんな思惑も台無しになったけど。だとしたらざまあみろだ。

「じゃあ狙撃も？」

「あたし。撃つてから千束たちが乗ってるのに気づいた……本当に焦ったよ」

「お前もなんていうか、大変だな……」

「ありがと。……ねえ、千束」

彼女はおずおずと顔を上げた。敵意のない、柔らかい微笑を意識する。何時ぞやのたきなにも見せた、安心しろのスマイルだ。

「あんたもたきなも悪くないよ、仕事だったんだから……あたしの狙撃の件を許せとは、言わないけど」

彼女には俺を恨む権利がある。

俺と違って死ぬんだから。

「……ありがと。私も気にしてないよ。ただ……」

「ただ？」

「痛かったでしょ？ 撃たれて、転がって。血が——」

ああ、全く。お前ってやつは、

「——あんなに出て」

優しすぎる。

人の痛みを、そんなに引き受けることはないのに。

「痛覚は、確かにある。でもなんていうか……みんなほど頓着してないんだ、多分。他の人は撃たれて泣き叫んだりすることもあるけど、あたしはそういうのがない。死なないからかな」

だから気にしないで、と続けようとして、やっぱりやめた。そう言っても、彼女は聞かないだろうと思った。

苦痛で行動を阻害されるような感性は、実質八年間の訓練の前に殆どが削ぎ落とされ、その後数年の実務によって完全に失せた。

この仕事をする上での必須技能ってやつだ。

だが、この感覚はきつと誰にも理解できない。

「そろそろ仕事の話に入りたくないんだけど、みんないいかな？」

そう言った瞬間、千束とミズキさんは静かに立ち上がった。ミズキさんはそのまま俺のすぐ右隣に。千束はこっちに近づいてきたかと思うと、ボディランゲージでもっと右に寄せろと意思表示してきた。

命令されるがままに隙間を作ると、彼女は壁と俺の間に強引に尻をねじ込んで座った。反対側のミズキさんにしわ寄せがいかないよう、開いていた足をぴたりと閉じておく。

左から、壁、千束、俺、ミズキさん。満員電車みたいにぎゅう詰め

だ。

「……えっと、これは？」

返答はない。かわりに二本の手が俺の頭に伸びた。硬い黒髪をかき分けて、頭皮に触れる指の腹。

二人の手は、俺が想像していたよりも小さかった。

困ったな。同情を引くつもりはなかった、なんて言うのも気遣いを無下にしようでいけない。

悲しませるくらいなら、詳細は省くべきだったかな。

いや、それでも正確な認識の共有は必要だし。

本当に、困った。

どうしよう。

「二応、自分なりに納得してやってるんだ。この仕事は。あたしが仕事をすれば、DAは対価としてあたしの身柄を保護してくれる。だからこんな体でも、実験動物モルモットにならないで済んでる」

遠回しに、俺は自分自身の境遇を嘆いているわけではないことを伝えられないかと思つて、そう言つてみた。

「そりゃもちろん好きじゃあないけど……何が何でも嫌つてほどじゃないんだ」

実際そうなんだ。口八丁手八丁で取り入った同じリコリスを後ろから撃つ時でさえ、いくら気分が悪くとも引き金を引く指の動きは微塵も鈍らない。感情と行動は完全に切り離されている。

勝てるかは別として、仮に千束を撃ち殺せと命じられたら、俺はきつとためらいなく撃つてしまうだろう。

罪悪感や良心の呵責では、俺はもう止まれない。

最近はそのような感情すら薄れつつあるような気さえしている。初めて人を撃つた時の深い悲しみと絶望は、もう訪れてくれなくなつて久しい。

千束は誰も殺さない。

俺は誰でも殺す。

そういう生き方が染み付いている。

俺は千束が怖い。踏み込まれたくない。気を許せば、彼女はきつと

いつか、俺の正体にたどり着いてしまうから。

そんな独りよがりな考えだ。

考えるのは、いつも自分のことばかり。彼女を慮ることもせず。本当に俺は、ろくでもないな。

「……これは、撫でたいから撫でてるだけ。続けて」

どこまでもお人好しな彼女は、優しさを向ける相手を間違えている。

「……左に同じく、お構いなく」

ミズキさんもそうだ。彼女が唾棄するDAの、その一番どす黒い汚泥の底に俺はいる。なのに。

……よそう。俺が俺を好きじゃなくても、誰かが俺を好きでいてくれる、それはとても得難くて、幸せなことのはずだから。

だから、

「ありがとう。二人とも……ありがとう」

今は感謝を、素直に述べよう。

心なしか撫で方が激しくなった頭上の手をそのままに、俺は再び口を開いた。

「あたしは今、一〇〇〇丁の銃と一緒に潜伏中のテロリストを追ってる。そいつらを探すのに、みんなの力を借りたい。これはDAからではなく、あたし個人からの協働依頼」

命令違反に機密漏洩、報告なしの独断専行。二重スパイ扱いされても文句は言えないな、これ。

失敗はできない。

やるからには、テロ屋どもを殺すか捕らえるかだ。

「主な対価はクルミの保護。ウォールナットはあたしが殺したことになるから、黙っていればDAは捜索しない。もちろん洗浄済みの報酬金も契約期間に応じて別途払うし、捜査に必要な機密情報があれば、あたしが取扱資格を使って合法的にDAから抜いてくる。ハッカーが手出しできないスタンドアロンのデータベースからもね」

話しながらクルミの表情を盗み見た。よし、食いついているな。ハッカーからしてみれば現地作業員は喉から手が出るほど欲しいは

ずだ。

「DAは日本を監視社会にしたクソだ。でも今組織が潰されればそこらじゅうが戦場になる。テロを防ぐには、世界最高のハッカーであるあんたが必要だ」

褒め言葉は誠実に、真剣に、相手の目を見て。そうすればおのずと最大の効力を発揮する。

「……いいだろう」

ほら、彼女は立ち上がった。階段を下りてくる。

俺は頭を撫で続ける二人へ控えめに目配せして手をよけてもらい、小さなハッカーに歩み寄っていった。

座敷の高さを加味してもなお、彼女は俺より背が低い。自然と見下ろす姿勢になった。

「取引成立？」

「ミカ、ぼくは受けてもいいが」

「私もだ」

「なら成立だ」

クルミは余りに余った袖を左手で抑えながら、日焼けとは無縁な生白い右手を差し出した。

「いい買い物をしたな、エージェント」

「お褒めに預かり光栄です、ウイザード殿」

俺たちは片頬で笑い合い、握手を交わした。やっと空気が軽くなってきた気がする。

もうひと押ししたいな、なんて考えていたらクルミの肩越しにいいものを見つけた。彼女の背後のちやぶ台の上に、トランプサイズのカードの束と小さな砂時計が置かれている。

へえ、今日のポドゲ会はこれをやったんだ。丁度いい。使わせてもらおう。

「話変わるけど、ボードゲームは好き？」

「ちやうど今日好きになった」

「……やろうぜ、みんなで」

「やるか、みんなで！」

最初に千束とミズキさんの二人が意気軒昂とばかりにすつくと立ち上がった。一方で戦いの気配を感じ取ったミカさんは一瞬だけ鋭い眼光を放ち、人数分の茶を淹れに厨房へ引っ込む。

「たきな誘ってくる」

俺はこれから起こるだろう激戦に新兵を引きずり込むべく地下のシューティングレンジへ急行した。縞鋼板の階段を下りていくと、足音を聞いたらしい彼女は壁際のアウトドアチェアからゆっくりと立ち上がった。ちなみにあれは元々俺の私物だ。今はもう共有物になってるけど。

「終わったよ。待たせてごめんね」

「いえ……この後は解散ですか？」

「うん。ただ、話の流れでみんなとボードゲームやることになったから、もしよければ混ざって」

俺は手近なレーンに入り、装甲シューティング・ストールされた仕切りと一体のテーブルに寄りかかった。何しろ俺は体がでかいから、出入り口を塞ぐような立ち位置だと、たきなに不要なプレッシャーを与えそうで良くない気がした。

無理強いされてやるゲームほどつまらないものはない。だからなるべく本人の好きにさせたかった。

「人事権は持つてなくてね。司令に進言できるのは作戦立案のときだけだから」

打算で参加するイベントも、またそうだ。

射撃場を出ようとするたきなが止まったのが、途切れた足音でなんとなくわかった。

「あたしがサードなのは、部下を持たないから。隊長と隊員を分ける必要がないんだ」

機密に触れないよう、慎重に言葉を選んだ。事実は含むが、それが全てじゃない。

部下がいらないなら、たきなが来る前の千束みたいに赤服フェーストでもいいわけだ。そうしないのは、白服サードが一番数が多いから。サードならどこにいても不審ではなく、また同じリコリスにも威圧感を与えない。

DA制式仕様のグロック17を使うのも同じ理由だ。単独行動に伴う火力不足の解消のためにサードパーティ製のフルオートセレクターキットを取り付けた個体はともかく、普段は純正状態を保った方を携行しているからなおのこと目立たない。その上、シリアルナンバーや旋条痕からの特定防止に銃本体は五丁、バレルは一〇本以上を使い分けている。

木を隠すなら森の中というように、敵からも味方からも群衆のイメージに没して隠れ潜む。俺の仕事にはそれが求められている。

「……」までしか話せない。「ごめん」

たきなの方に顔を向けようとして、しかし、金属の冷たい風合いをそのまま残した仕切りが視界を遮った。

そのせいで彼女の表情は窺えなかったが、怒気の類は抱いていないように思えた。そんな類推をした理由は、自分でもわからなかった。

「いえ、ありがとうございます。では……帰ります」

足音が少しずつ離れていく。DA本部への復帰を切望する彼女に、また遊ぼうとは言えなかった。

階段を上がりきったのだろう。硬質な音は右上方で消えた。

できることは、言えることは、多分した。ベストではなかっただろうけど。

板挟みだ。なまじ左遷の理由を知っているだけにばつが悪い。叶わない願いを追う彼女に、俺は何も言えない。

ため息をひとつ。そしてレーンを出て、

「え」

階段の最上に気負いなく立つたきなを見つけた。彼女は振り向いて俺の目を見た。

「今日ありがとうございます」

「ああ、うん」

まだいたとは。不意を突かれて驚いてしまった。

呆気にとられている間に彼女は去ってしまったが、どこことなく表情や仕草が明るかったような気がする。まして社交辞令を言うような性格でもなし。

……誘ってよかった。主にたきなを引つ張り回していたのは千束だったから、特に何をしたわけでもないけど。

あの二人、正反対の気質に見えて中々相性良さそうだし、これをきっかけに仲良くなってくれればいいな。

そんなお節介なことを考えながら階段に足をかけると、どういうわけか遠ざかっていったはずの靴の残響が猛烈な勢いで近づいてきた。まるで時間が逆巻いたみたいに。

忘れ物でもしたのかと思つて背後の椅子を見た。彼女が掛けていた布張りの座面にも、アルミ製の白い脚の下にも何も無い。買ったものはみんな上に置いてあるから当然といえば当然だ。

あ、思い出した。忘れてたのは俺だ。

俺も階段を駆け上がつて、中腹でたきなと鉢合わせた。

唇の動きを読んで言葉が被せにく。

「下着の件」「下着の件」

真剣な表情で頷く彼女があんまりにも面白かつたから、俺は顔を背けて苦笑した。

「電波入らないから上で」

防音の射撃場と違って、店内は表のみんなのおかげでバックヤードさえ騒々しい。

俺はその騒がしさが嫌いではなかつた。煙草を吸い終えて上に戻るときはいつも、暗い水の底から浮上するような、あるいは深い眠りから目覚めるときのような心情を抱く。

心理的にこの場所に依存していることは明らかだ。でも、それが悪いことだとは思わない。誰だつてそういうものの一つや二つあるだろう。特に命のやり取りを生業にするリコリスには。

思うに、執着が人を生かすんだ。

なんでもいい。美味しい飯を食いたいか、どこそこに遊びに行きたいとか、やりたいことがあるから生きるために戦える。

涅槃なんかそくらえさ。

満足げな顔をして死ぬようなやつが俺が一番嫌いだ。

世界は広いんだぞ？ そのスケールを知つたかぶつて、執着をやめ

て、生きることが諦めるなんて馬鹿げてる。

しかもそれじゃあ、まるで見捨てられるみたいじゃないか。お前に会えなくても、もういいんだって、もう沢山なんだって言われてるみたいで。

安らかな顔で死んでいく仲間達に、俺を置いていくなど叫んだのは一度や二度じゃない。

みんなすぐに死ぬ。いつも俺だけが生き残る。

置き去りにされる。

でも。

「来たなサイトー、こないだの借り返しちやる！」

「はいはいちよつと待ってねー、たきなが帰るからねー」

「ああんいけずうー！」

座布団の上であぐらをかいてのんきにカードを切っているこいつなら——不死の俺を唯一負かした彼女なら。

信じてもいいのかな。

「リンク送ったよ。届いた？」

「確認しました」

たきなは俺から店のリンクを受け取るや否や、座敷の片隅に置いていたショッピングモールの買物袋を両手いっぱい提げて玄関前に立つ。それだけ何も持っていなかったってことだよな、彼女。

「お疲れさまでした」

「またね」

「あ、たきなバイバイ！」

彼女はペコりと頭を下げて、心なしか足取り軽く出ていった。なんだか退勤の挨拶みたい。でも彼女らしくて好ましい。

また遊ぼうとは言えなかったけど、また会おうなら言えた。俺が踏み込めるのは多分ここまでだ。願わくば前途は明るくあつてほしいけど、俺はどちらかといえば暗闇に突き落とした側の人間だから、そういうことはあまり言えた義理じゃない。

真にたきなを救えるのは千束だ。そんな気がする。

「覚悟はいいか？ エージェント」

俺を振り向かせたのは、揶揄するようでしかし、どこか喜色を隠せない声音。

ちやぶ台を取り囲むは、ボードゲームに並々ならぬ闘志を燃やす四人組。

「ウォールナット……心理戦で諜報員と張り合う気か？」

俺はギャングのボスがひっ捕まえた商売敵を恫喝するみたいに、いかにも悪党然とした酷薄な笑みで応えた。

「カード配るよー！」

「はいよ」

靴を脱いで座敷に上がり、円卓の一角に席を並べれば。

ここはもう、戦場だ。

チャージングハンドルを引き、小枝のように細いフォールディングストックに増設された貧弱なチークパッドに頬を付ける。

ピカティニー・レイルにマウントされたチューブ型のダットサイトを覗けば、中央の赤い光点は黒いボディアーマーを着せられた弾道ゼラチン製のトルソーと重なった。

光を反射しないよう、対物レンズ側にキルフラッシュと呼ばれる目の細かいハニカム状のフィルターが取り付けられていたが、思いのほか視界はいい。

彼我の距離は五〇m。室内戦闘を想定。

セレクターはすでにセミオート。

トリガーにかかる指が号令を待つ。

一方で左手はハンドガードの先端を横から掴む。ショートフォアグリップの付け根に設けられたくびれ部がハンドストップとして機能するから非常に負担が少ない。

これなら素人に撃たせても中々良い精度が出そうだ。

「始め」

イヤーマフに内蔵されたスピーカーがデジタル処理された楠木司令の声を耳に届けた瞬間、二発の $7.62 \times 35m$ 弾が人形の胸をアーマーごと貫いた。

サプレッサーで減退した銃声を上書きする鋭い風切り音は、その弾丸が超音速で飛翔していることを何よりも雄弁に主張する。

短機関銃と見紛うほどコンパクトなカービンライフル、MCXラトラーの銃口を下ろしたのは、その衝撃波の残響が射撃場から失せてからだった。

「本装備は我々に不足する対テロ作戦能力を大幅に拡充するものではありません。既存のベクター短機関銃では貫徹不能な防弾装備を着用したターゲットに対しましても、ご覧の通り十分な殺傷力を発揮します」

抜いたマガジンをテーブルに置き、二度のコツキングで確実にチャ

ンバーを空にする。

その間にも人形を吊るしたクレーンは遠ざかっていき、後ろのミーティングディスプレイでは打ち合わせ通りに着弾時のスーパースロー映像が流れていることだろう。

今のうちに息を軽く整えておく。四秒サイクルのボックス呼吸。

背後で人だかりを作っている政府高官一行のことも、素人の彼ら彼女らにも通じるよう簡便な言い回しでプレゼンを続ける司令のことも、今は一旦忘れる。

人形は射撃場のちょうど半分、一五〇mの位置で止まった。

「——加えて、小銃の高い射撃精度は流弾被害を抑制し、より安全な任務遂行を可能とします」

この距離の的を銃身長たった五^一四^四センチ半のライフルで撃てだなんて。伏射なら三〇〇^ニ七〇^メメートル先まで狙えるんだけど、委託なしの立射じゃあな。

リハーサルでの命中率はトータルで七割ってところだが、室内は無風だし、大体の癖は練習中につかんだ。後半はほぼ必中だったんだからなんとかなるだろ。ていいうかなくてくれ、頼むから。

「始め」

さつきと寸分違わぬ調子の号令を聞いた俺は手早くマガジンを挿入して初弾装填を済ませる。何度も練習した動きだ。いちいち銃を見ることはしない。

ストックを肩と頬に付けるところまではさつきと同じだ。違うのは、ダットサイトの手前に装着したマグニファイアを使うところ。銃の側面に倒されたそれを引き起こしてやればサイトが擬似的なスコープになって、遠距離の目標も多少は狙いやすくなる。

狙うは頭部。サイトの中で揺れている。ずいぶん小さい。

実戦じゃとてもありえない時間をかけて照準を微調整。だが、あまりのんびりしていると銃身が冷えすぎて弾道が変わってしまう。言うほど余裕はない。

「——シッ」

呼吸を止めてトリガーを絞る。

跳ね上がるバレル。着弾音。弾ける桃色の脳。

背後の人ばかりでどよめきが起こる。

接近してくる人形を確認すると、弾はちょうど眉間を抜けたのだろう。後頭部が無惨に破裂していた。狙い通りだけど、まさか本当にそこへ命中するとは思わなかったから自分でも驚いた。

マガジンを外し、チャンバーから抜弾しながら、ひっそりと安堵の息を吐く。

こんな曲芸ショーは二度とごめんだ。見栄えは良くても実戦的じゃないし、やたら難しいし。

聞こえてくる司令の話に耳を傾けると、内容からしてそろそろ俺の出番が近づいてきたようだった。

銃口からサプレッサーを取り外し、ストックを折り畳む。すつかり小さくなったラトラーをスリングごと背中新型モジュラー戦術鞆——従来モデルよりわずかに大型化したサッチェルバッグの側面を展開して格納。手元に残ったポリマー製マガジンは底部の隠しポーチへ差し込み、サプレッサーも同じ面の専用スロットへ収納する。

この重戦闘仕様戦術鞆の場合、携行弾数はマガジン三本になる。計九〇発と少ないが、大規模な正面戦闘の際はプレートキャリアが支給されることになったから、持てるマガジンは六本に増える。一人一八〇発もあればよほどのことがない限り足りるだろう。

どうせ中身を使うのは人払いを済ませた後の現場だ。こいつは武器をそこまで運搬するための装備という意味合いが強いから、内蔵マガジン数はそんなに大事じゃない。

話題がリコリスの対テロ装備の解説に移ったのを聞いて、俺は模範的な回れ右で客の方を向いた。

足は肩幅。手は後ろに組んで休めの姿勢。視線はやや上。プロパガンダポスターに描かれる兵士みたいなきりつとした表情を作って静止する。

一気に集まる中年男女の視線は好奇と驚嘆を多分に含んでいた。

脇腹を守るサイドパネルはもちろん、スロートアーマーにシヨルダーアーマー、鼠径部用のグローインアーマー。そんなフルオプシヨ

ン仕様の防弾装備に加えて、軍用デジタルイヤーマフ、超高分子量ポリエチレン製の戦闘ヘルメットまで装備した武装女子高生だ。そりゃあ興味津々だろう。

凄まじく不快だから絶対に目なんか合わせてやらない。物見遊山気分でこんなところに来る奴らだ。身寄りのない子供に殺し合いをさせることへの後ろめたさなんか誰も抱いちゃいない。

クソ共め。

司令が指示棒で俺の装備を指しては、まるで小学生に向けたみたいな簡単な説明を述べていくが、つまらないので半分聞き流していた。煙草が吸いたいから早く終わってほしい。

頭からケツまで無駄なんだよ、この時間。新装備導入にあたる説明会ということになっていくけど、本当に説明が必要な各省庁にはとっくの昔に話をつけてあるから、これは形式的なものに過ぎない。

必要性が失われても形だけ残ってる無意味なものって多いよな。仕方ないといえば仕方ないんだけどさ。

「それでは只今より質疑応答に移ります。ご質問のある方は挙手をお願いいたします」

質問に対する回答はすでに用意されている。台本をなぞるだけの出来レースだ。俺は暗記した文言を喋ってDAの忠犬を演じるだけ。予定通り、数人の手が挙がる。活字で読んだのと全く同じセリフに、俺も広報の誰かが書いたであろう美辞麗句と社交辞令を返してやる。

リコリスの身分は誇りであります！ 光栄であります！ 平和のため、死力を尽くします！

発言を締めくくるのは概ねこんな感じのリップサービスだ。今後政府と良好な関係を保っていくには、こういうご機嫌取りもしなきゃならない。

そんな具合で六人目の質問に答えを返し終わると、もう挙がっている手はなくなった。

俺の仕事はここで終わり。司令に導かれて射撃場を出ていく背広の群れを一〇度の敬礼で見送る。

装甲扉が閉じられた瞬間、俺は肩の力を一気に抜いた。

「はあ……」

完全装備のまま、防弾ガラスの窓と鉄筋コンクリートの壁で区切られた後ろの待機室にとぼとぼ歩いた。レーン数の関係であまり広くはないが、最近完成しただけあって清潔だ。

等間隔で並ぶベンチのひとつにどつかと腰掛けると、重い小銃を格納するためにやたらと頑丈に作られた新型鞆に背中を殴られた。中身が入っていると鈍器みたいだなこいつ。危ないから床に置いておこう。

ベルクロをベリベリ剥がしてプレートキャリアを脱ぎ、下に着ていたソフトアーマーと一緒にベンチの端に置くと、やっつくつろげるようになった。

まったく、大変な午前だった。

俺と司令と、あと数名の職員が相手をしていた彼らは朝早くにDA本部を訪れた。俺はそのために一週間前から泊まり込みで会の段取りを整えていたんだけど、これがまあ面倒くさかった。

信じられるか？ 当初の予定じゃ人形は三〇〇m先に配置される予定だったんだぞ？ ラトラーの有効射程がそれくらいだからって理由でさ。

広報部の奴ら、射撃姿勢を全く考慮しやがらない。リコリスをターミネーターかなんかだと勘違いしてる。

そんな調子だったから説明会の計画は大幅な手直しを余儀なくされた。

広報のポカに陰でイライラしてた司令を宥めつつ、監修としてデモやプレゼンの内容に赤ペンをつけ、過密なスケジュールの間を縫うようにしてなんとかラトラーの慣熟訓練を行い……同時に色々なことをやりすぎて頭がこんがらがりそうだった。

でも、そんな苦行もたった今終わった。俺は自由だ。

さよなら、一時間睡眠。ただいま、三時間睡眠。

まず射撃場の後始末をして、次に銃やアーマーを装備課に返却して、最後に医療棟で定期健診を受ければ家に帰れる……意外とまだや

ることあるな。

掃除はちよつと休憩してからにしよう。なにか甘ったるいのが飲みたい。

首をひねって後ろの自販機を見た。ボトルや缶よりカップで出てくるやつが飲みみたい気分だったから、そっちのラインナップを眺めているとミルクセーキを見つけた。

制服と中のYシャツの第一ボタンを外し、ついでに首紐を引っ張ってIDカードを出す。それを自販機のタッチパネルにかざして決済完了。

取り出し口の窓から小さな紙コップに液体が注がれるさまをぼうつと見ていると、政府関係者が出ていった方とは逆の装甲扉が開く音が聞こえた。待機室と射撃場をつなぐドアを面倒がつて開けっ放しにしていなかったら気づけなかっただろう。

「あれ、違った……?」

入ってきたのは青服^{セカンド}だ。明るい茶髪を短いツーブロックにしたやんちゃそうな子で、あたりを見回してはしきりに首を傾げている。

彼女知ってる。確か名前は乙女サクラ。フキさんの新しいパートナーだったはず。

多分道に迷ったんだろうな、この様子だと。転属して日が浅いから無理もない。

ヘッドセットごとヘルメットを脱いで、アーマーのすぐそばに置く。潰れた髪に適当に手ぐしを入れながら、俺は彼女に近づいていった。

「こんにちは」

「す、すみません立ち入り禁止だったでしょうか!」

サクラはこちらの姿に気づくや否や、慌てて気をつけの姿勢を取った。

制服の右胸あたりに垂れる名前のわからない布地にバッジをこてごてと付けていたから、多分俺をとんでもなく偉い人間だと勘違いしたんだろう。

一つ星を象った一級体力徽章^{きしやう}に始まって、一本線^{一級戦闘歩兵徽章}、金の短剣^{高等格闘指導官徽章}、

高等射撃指導官徽章 特別近距離戦闘指導官徽章 特別潜入技術徽章 電子戦技術徽章 個人戦功章
金の銃弾、引き起こされた撃鉄、彼岸花に藤の花……トリコロール
やバイカラーの略綬もある。

いずれも自衛隊のそれより小ぶりで、徽章は縦二列。略綬は縦三列。煌びやかな装飾が所狭しと並ぶさまはいつそ悪趣味といえた。

言っておくが俺のセンスじゃない。フォーマルな行事だから精銳ぶりをアピールするために付けておけと言われたんだ。

これだけたくさんの徽章があっても、別に昇給なんかのうまい話は決して多くない。そのくせ仕事の量と責任の重さは天井知らずに増していく。職務上仕方なく取らされた資格とかもまあまああるし。

世知辛いよ、この職場。

「いや大丈夫。困ってるみたいだったからどうしたのかなと思って」

「はっ！ しよ、小官は現在……えつと……迷子であります！」

だからサクラが思ってるような身分ではないんだ。俺が今ファーストの赤い制服を着ているのは、最下級の白服サードが政府関係者の前に出ていくのは体裁が悪いからってだけ。

話がややこしくなりそうだから勘違いは解かないでおこう。説明を曲解して、格下だと決めつけて舐めてくるやつも稀にいるし。

「ああ、ここ広いもんね」言葉を切り、眉を下げた微笑で共感を示す。

「どこに行きたいの？」

話を聞けば、彼女が行きたかったのは拳銃用の第一射撃場らしかった。

ここ、第六射撃場は長射程大威力のライフルなんかに対応するため、半地下の独立した建物になっているが、拳銃用のはリコリス寮棟に近い第一訓練棟の中だ。地図上じゃほとんど正反対の位置になる。説明してやると、彼女はそれはそれは盛大にしよげかえった。短めの太眉も相まって病院に連れていかれた柴犬みたいに見える。

元気出しなよ。ミルクセーキ飲む？ うまいよ？

「案内するよ」

「ありがとうございます……ですがこれ以上ご迷惑をおかけするわけには……」

「あたしもそつちに用事あるから、迷惑なんかじゃないよ。急ぐ？」

「いえ全く、なので平気です！ 教官のご都合に従います！」

「そっか。ありがとね」

教官だつてさ。合ってるけど、同年代の子に言われると少しむずがゆい。

待つてくれるというから、自販機からちよつと温くなったミルクセーキを取り出して一気に飲み干す。くずかごに紙コップを投げ入れて振り返ると、サクラの視線がベンチの上のボディアーマーに向けられているのに気づいた。

「ああそれね、さつきデモに使った新しい対テロ装備。知ってる？」

「はい。噂には聞いてましたけど……すごいですね、特殊部隊みたいだ」

「ライフも配備されるよ」

「それは初耳です。ピストルキャリバーではなく？」

「300AACブラスクアウト。一〇グレインの超音速弾」

「MCXですか!? ほんとに軍隊並じゃないっすか！」

詳しいな。装備を見る目が輝いているし、マニアなのかも。そういうことなら特別だ。

「見たい？」

「いいんですか？」

俺が首肯すると、サクラはその何倍も深く頷いた。

床に置いていた鞆を背負い、実戦さながらの動きで格納されていたラトラーを引き抜くと、彼女はそれだけで歓喜の悲鳴を上げた。

鞆底面のスロットから引き抜いたサプレッサーを取り付け、ストックを展開。アッパーレシーバーを持ってグリップを差し出す。どうせマガジンも弾も入ってない。構わないさ。

「ふわぁ……」

銃口は下に向けたまま、おそろおそろるグリップとハンドガードを握る彼女。恍惚とした表情でチャージングハンドルを引いてチャンバーをチェックしている。誰から渡された銃でも安全確認を欠かさないその姿勢、いいね。

「かつけえ……」

放っておいたら銃に頬擦りしそうな勢いだ——あ、今ストツクのチークパッドに頬擦りした。頬付けじゃなくなてな。

なに、面白いやつしかリコリスになれないとかそういうルールでもあんの？

すっかりサクラのことが気に入ってしまった俺は、とことんサービスしてやることにした。

「使っていい弾がまだあってさ。せっかくだから撃ってみない？」

「ぜひ！」

彼女に防弾装備一式を着せ、さっきまで俺がいたレーンに立たせる。リモコンでクレーンを操作して、頭の吹っ飛んだトルソーを距離五〇mの位置まで離れた。

「最初はセミオートで何発か撃ってみて。ベクターより反動は強いけど、コントロールできる範囲だから、いけそうならフルでもいいよ」「はい！」

MCXラトラーはDAが二〇〇七年から運用してきたクリス・ベクター短機関銃の後継だ。かねてから計画はされていて、各方面への根回しも進められていたんだが、この間の銃取引の件が影響して予定が大幅に繰り上げられた。

最初に配備されるのはフキさんの隊だ。彼女らを始めとした優秀な隊員が数十名ほど選抜されて、数年前から俺と一緒に銃の選定と採用試験の両方に関わっている。

最初から一定の練度が見込める奴らを即戦力にしようって思惑だ。転属してきたサクラは例外だから、別途訓練を受けることになるだろうけど。

まあ、今撃つのも後日撃つのもさして変わらないだろ。大丈夫、何かあったら責任は俺が取る。

「よし、撃ち方始め！」

サクラは胸部に二発撃った。模範的なダブルタップだ。初めての銃なのに集弾もいい。どこぞのたきなには負けるけど、あんな規格外と比べるのは野暮ってものだろう。

「いい腕だね！」

間隔を開けて二連射を続ける彼女に、俺は木霊する衝撃波に負けな
いよう叫んだ。

「ありがとうございますー！」

やつぱり耳を保護するものがないと少しうるさいな。音量より音
圧が凄い。至近距離で何時間も聞き続けたら耳が痛くなるんじゃない
だろうか。それとも慣れるかな。

「フルオートを試しま——教官？」

その言葉を聞いた俺はそつとサクラの背に密着し、彼女の手に分
の手を重ねてグリップとハンドガードを包み込んだ。力は入れず、触
れる程度に。

「そのまま構えてみて。危なそうなら抑える」

「は、はい」

彼女の腕前なら跳ね上がった銃で自分を撃ち抜くような真似はし
ないだろうが、念の為だ。何かあってからじゃ遅い。

過去に数人いたんだよ、いい加減な撃ち方で短機関銃を暴れさせた
やつがさ。なんならそのうちの一人の流れ弾を俺は食らってんの。
他の誰かに当たってたらと思うと怖いだろ？

セクハラにあたらなかったって意見も理解できなくはないが、その前
に人命がかかってるんだ。AEDを使うのに、男性が女性の衣服を脱
がすのをためらってはられないのと同じだよ。

「大丈夫、力まないで。吹っ飛んだりしない」

「はいっ」

サクラの手に必要以上の力が入っているのがこわばった感触でわ
かった。俺は彼女の頭の左側に顔を出して、目についた改善点をヘッ
ドセット越しに囁いた。

「肩付けも頬付けも綺麗だね。左手はもう少し下側に回して……そ
う、上手。無理に押さえ込まないで、自然体でね」

彼女からは脱力を意識するあまり、かえって五体に妙な力みを残し
てしまっている印象を受けた。呼吸も気持ち浅い。

「鼻から息を吸って。一、二、三……止めて。一、二、三……口から吐
く。一、二、三……止める」

何度か深呼吸させると、吐息は徐々に凧いできた。余計な力が抜けていくのがわかる。もう大丈夫そうだ。

せつかくの集中を乱さないよう、声量を極力抑えた無声音で伝える。

「——いつでもどうぞ」

「んいつ!」

あ、ガク引きした。散布界がやや右に逸れる。でもリコイルコントロールは見事だ。連射は八発続いたが、いずれも命中。実戦なら十分だ。

「お見事!」

「あ、ありがとうございますっ……」

サクラは自分の顔を手で扇ぎながら早口で呟いた。そのせいか、排莢口から漏れ出た燃烧ガスがこっちにも流れてきてちよつと臭う。

ふと思いつ出した。今朝、来客の対応に備えてウツデイ調の香水をへそ周りに軽くつけたんだけど、これだけ近いと結構香りがするんじゃないだろうか。時間的にラストノートに入っているから平気かな？

不安になってきた。俯いて襟元の匂いを嗅いでみる。淡い残り香を感じるが、体感個人差が大きいらな。

「……ねえ、変なこと言うんだけどあたし臭くない？ 大丈夫?」

「んっ!? いえっその……」

サクラは銃を構えたまま露骨にうろたえた。しどろもどろ、そわそわ、あつぶあつぶ、そんな言葉で表される類の心理が全部同時に訪れている感じ。その反応は俺に気を遣ってるのか緊張してるのかどっちなんだ。

彼女は決心したように目を瞑り、その後一気呵成にまくし立てた。

「いい匂いですっ!」

そこまで言えとは言ってねえ。

「そっか、急にぐめんね……ほんと」

変態チックなことを言わせてしまった罪悪感で猛烈に死にたくなってきた。何したら死ぬのか分かんねえけど。

……なにはともあれ、続けるか。

空襲莖に混じってテーブルに転がっていた弾を拾い、一度外したマガジンに詰め直した。さつきチャンバーから排除した二発だ。

「これで残弾二三。撃ち切ろう」

サクラが信頼に値する射手であることを理解した俺は彼女から体を離そうとしたが、本人が安全のためにこのままがいいと言うからもう一度背中にひつつくことになった。

なんか既視感を覚えるな、このやり取り。おととしの特殊火器取扱講習を思い出す。その時も参加したりリコリス達に今やつてる二人羽織をやたらとせがまれた。

受講者は養成カリキュラムの都合で一・二歳。それでみんな体が小さいから——ちなみに俺の場合、当時は一四歳だったけど既に身長は一七〇センチに達していて周囲から浮きに浮いていた——フルオート射撃が怖いのかと思って、当時は気にもしなかった。

やっぱり自分より大きい奴に支えてもらおうと安心するのかな、なんてとぼけてみる。

が、これは俺がそう信じたがために都合の悪いことを無視して考えた推論だから、事実からは著しく乖離かいりしているだろう。

より真実に近いであろう理由も一応考えてはいる。でもそつちを認めてしまうのは自惚うぬぼれてるみたいですがごく嫌だ。

いやだって、何とは言われないがありえないだろ。そんな確率、天文学的だろ？

……ありえないよな？

ありえなくあつてくれよ、なあ！

「三点バーストを試してみて。回数は任せる」

愚にもつかない思考を追い払って俺は言った。

「じゃあ、撃ち切りますね」

最初の連射は二発で止まった。次は四発、その次が三発。射撃の合間に軽いアドバイスを挟むと、集弾性のほうも少しずつだが確実に向上していった。

もう一度三発。最後に一発。チャンバーがオープン。

やっぱりこの子上手いな。銃の個体差やコンディションによって発射レートは変わりやすいから、感覚をつかむには時間があるはずなのに、最初から誤差一発で収めるのは優秀だ。

「飲み込みが早いね」

「教官のご指導の賜物っス」

「サクラちゃんのセンスがいいんだよ」

「ヒュッ——あ、先輩助けて私この先生好きになっちまうありがとうございます……」

俺は褒めて伸ばすタイプだった。あいにくこれ以外の方法を知らない。今までにこやかに接してきて急に突き放すのもなんか違うと思うし。

なんだろう、すごく心が痛い。俺、今めちゃくちゃひどいことしてる気がする。実際してるんだろう。

撃たれるより痛え。

「それでは、ホルスター」

「はい」

新型鞆への収納も問題なし。新型と言ってもほとんどマイナーチェンジみたいなものだから、初めてでも混乱はないみたいだ。

「装備課までついてきてくれる？ あ、あと鞆ちょうだい。背負うから」

射撃場の掃除は後でいい。誰の予約も入っていないのは確認済みだ。

俺はアーマーを着たサクラを伴って外へ出た。

空はいけ好かない客どもの背広と同じ暗灰色。日光を遮って気温を過ごしやすいものにしてくれるだけ、奴らよりは幾分マシだった。

「教官は本部にお住まいなんですか？」

「うん、関東本部」

「じゃあ、一緒ですね！」

「ただ、あたしリコリス寮じゃなくて職員宿舎に住んでるんだよね……教官を兼任してる都合で」

「ああ……」

サクラの太眉がついっと下がるのを面白く思うと同時に、いよいよ

もって胃が痛くなってきた。

やったな、俺。

「最近はあるまり教えられてないなあ、本業が忙しくて」

「そう、なんですね……」

「がっかりしないで。きつと任務で会えるよ」

「……はい」

切なげに笑う彼女を直視できずに目をそらす。

本部施設に続く未舗装路^{グラベル}。その両脇を挟む背の高い林を風が通り抜けた。遠くの方から集まってきた木の葉という木の葉のざわめきが、二人の間に生まれた沈黙を撫でる。

風め、いらねえ演出しやがって。

「あたしはやめておきなよ」

鳴り続ける葉音に紛れてつぶやいた。

「……教官？」

サクラには聞こえていなかった。

#3: Two broken Hearts

時間は少し飛んで。

「やったな、お前？」

「はい……」

俺は万力みたいなパワーで耳をつねられていた。

「二人羽織はやめろつつつたよな、みんな勘違いすつからよお」

「すみませんでした……」

「安全を重視するのはいい。そこは文句ねえ。でもお前はもうちよつとこう、自分の……なんだ。影響力^{インフルエンス}を考えろ。それがわからねえ奴じゃねえだろお前」

「面目ないっス……」

「悪気がないのはわかってる。わかってるけど……それとこれとは話が違えよな？ あいつを正気に戻すのはパートナーの私なんだよ」

「代替策を講じます……平に、平に伏してお詫び申し上げます……」

「はあ……再発防止に努める、以上」

驚掴みにされていた耳をやつと放してもらえて、俺はフキさんの身長に合わせて曲げていた背筋を伸ばした。もうちよつと長引いてたら右耳がもげるところだった。

耳たぶの血管が脈打っている。そつちだけ真つ赤になつてるだろうな、今。

振り向くと、さつきまで第一射撃場を取り巻いていた剣呑な空気はすっかりどこかに消えていた。

ライセンス更新のために本部を訪れていた千束と、それに同行してきたたきな。

加えて、装備を返却した後、ようやく目的地に着いたかと思つたら居合わせたたきなに突然喧嘩をふっかけやがったサク^狂クラ^犬に、装備課で一度別れた彼女がまた迷わないか心配になつてこつそり後を追つてきた俺。

そして、尾行中の俺にばつたり会うや否や全てを理解した顔で尻をシバいてきたフキさん。

不思議な組み合わせだ。あるいは、作為的な。

イレギュラーは俺？ いや、俺も込みか？

「……二階級特進、おめでとうございます」

「は？」

最初に口を開いたのは何やら苦い顔をしたたきなだった。次いで、間抜けをやらかした俺に呆れていたフキさんが素つ頓狂な声を出した。

「サードでしたよね？」

「いや、時々セカンドだったりファーストだったりするぞこいつ。理由は知らねえけど」

「先輩いません、自分意味分かんないっす。階級つてそんなポンポン上げ下げされるもんじゃないっすよね？」

「サイトーはほら、なんかこう……なんだろうね？」

「お前も分かんねーのかよ」

「フキだつて知んねーじゃん」

混沌という言葉がこれほどマッチする空間はそうそうないだろう。俺は頭をかいた。小さくため息をついて——気をつけ。爪先を四五度に開き、寄せた踵を打ち鳴らす。

「では、改めまして自己紹介を」

サクラとたきなが俺の豹変ぶりに目を見開く。千束は感心したように口角を上げ、フキさんは敬礼の交換に備えて姿勢を正した。

「DA関東本部作戦司令部隷下、特命情報調査室長の斉藤ヒマリと申します。どうぞ今まで通り、お気軽にサイトウとお呼びください」

一〇度の敬礼。フキが礼を終えるのに合わせて、姿勢を戻す。堅苦しい所作は最小限でいいだろう。

「そういうわけでリコリスも教官も兼任しますが、本業じゃありません。仕事の都合に合わせて階級も所属も変わります。最優先である司令の命令を除いて、指揮系統はそれに準じる形になりますね」

「聞いていい話なんだよな？」

「ええ、もちろん。公式な組織図にも表記のある部署ですので」

今のところ人員は俺しかいないけど。でも確か、今度の組織改編でタチバナさんが俺の兵站主任と副室長を兼任するんだ。

作戦の調整が円滑に進むのはもちろんだけど、楠木司令の狙いはどっちかという和政府との連携強化だろうな。タチバナさんは内閣官房、さらにいえば内閣情報調査室の出身だから。

DAは独立治安維持組織を名乗っているが、秘匿性を重視するために人材育成システムがあまり充実していない。だから結局、日本の各省庁や情報機関——これには自衛隊の情報本部なども含まれる——から信用に足る人物を引き抜いて不足する人手を補っているのが現状だ。

結局、国と相互に協力しなきゃ我々みたいなトンチキ秘密組織は立ち行かないんだよ。持ちつ持たれつだ。

「簡単に言うと、直属の上司……楠木司令が指定した事件におけるラジアータの取りこぼしを拾うっていう地味な仕事ですよ。軽いフットワークが要求されるので、何かと大層な権限が与えられてるんです」

「へえ、エリートだったんだな」

「だったら良かったんですけどね。実際のところ、体のいい便利屋みたいなもので……」

「ああ、お前も苦労してんのな……」

「いえ、隊長ほどでは……」

フキさんと俺は二人仲良く目を細めた。笑ってるんじゃない。数々の気苦労を思い返してチベットスナギツネみたいなシケた顔になってるだけ。

今まで勝手に吊り目仲間だと思ってたけど、苦労人仲間でもあったらしい。

なんか、俺とフキさんが変に通じ合っちゃったせいで場が余計に混沌としてきた。俺たちファースト三人衆がまるで十年来の親友同士みたいな小慣れた空気を醸す中、たきなどサクラの間には、共通の友人を持っているだけの他人同士によく発生する気まずい空間が形成されている。

もつとも、両者が抱いている感情はそれだけじゃなさそうだ。俺がこの場にいることで辛うじて膠着状態にあるだけで、目を離せばすぐに厄介事が起こるだろう。

たきなが俺を誤射した件に関しては、俺の特性が露見することを恐れた上層部が嚴重な箝口令なかつたことにしたを敷いたからそつちは大丈夫だと思いが、それでも人質に取られた味方を無視して敵を撃った事実は手つかずのままだ。本部でもリコリス達の間で噂になってるくらいだし、サラはさつきそこをつついたんだろう。

でも、指揮系統が麻痺した状態では、あれしかエリカを救う方法はなかった。俺にできなかつたことを彼女はしたんだ。

たとえそれが原因で調査室の仕事が無尽蔵に増えたとしても責められるもんか。その後が発生しうる重大事件の抑止と解決は、俺と夕チバナさんと司令の仕事だ。

誰にも彼女の決断を侮辱させやしない。誰にも。

「話変わるけど、二人とも検査は終わったの？」

それにしても、司令は俺に何をさせたいんだ？ たきなに彼女の後

釜のサクラと、そのパートナーのフキさんを引き合わせて。

答えらしきものはなんとなくつかみつつあるが。

「うん、私もフキも。なんでわかったの?」

「千束は根っからのズボラ。フキさんは訳ありの案件を調査中、人事異動が重なって激務に追われてた。そして今日は九月登録組のライセンス更新に係る体力測定および健康診断の最終日」

「ちよちよちよ誰がズボラじゃ」

「ハッ! どうせ前みたいにミカさんに口利きしてもらおうと思って先延ばしにしてたんですよ。店に出頭通知届けたのあたしなんだからわかってんだよ、全部」

「んああ! ファーストの威厳がああ!」

「ハナからねーよ。先生に迷惑かけてんじやねえ」

「フキまでえ!」

「これが最強……? なんか拍子抜けっスね」

「サクラちゃん、あなたと千束は初対面。マナーを大事にね」

「あ、すいません……」

「拍子抜けなのはわかる」

「サイトーコルア! ツラ貸せえ!」

「でもあたしより強いよ」

「あらー! あらあらあらー! 褒めても飴ちゃんしか出ませんわよおっ!」

「事実だろーが。つかマジで飴持つてんのかよ、仕舞え仕舞えっ」

俺を折檻したフキさんよろしくドスの利いた低音でもって騒ぐ千束を牽制。同時に首紐を引いて、未だに第一ボタンを外しっぱなしの制服の内から身分証を取り出してたきなに提示する。

DA職員への職務執行にはこのプロセスが義務になる。警察手帳みたいに。

さて、一芝居打とう。なるべく平和的な方向で始末をつけたいが、一度爆発させてガスを抜いたほうがきれいに収まることもあるからな。その時はその時だ。

「調査室の者として聴取したい事項がいくつかあるんだけど、来ても

らつてもいい？ 時間はかからない」

「構いませんが、その……」

「司令なら、来客の対応でまだかかると思うよ」

彼女の狙いにはもう、見当がついていた。

「あれえ、左遷どころかしよつぴかれちやう感じつスかあ？」

サクラの口から唐突に放たれたその言葉は、毒々しい悪意にべつとりと濡れていた。ああくそ、この大馬鹿野郎。それで俺に取り入ったつもりか？ 悪口と軽口を履き違えやがって。

いや、それとも何か吹き込まれた？ そうであつてほしいけど。

彼女の人柄は嫌いじゃないが、なんにせよ友人を悪く言われるのは不愉快だ。喋りを営業モードに切り替えて感情をセーブする。

「ハハ、そんなのじゃないよ。他の子たちにも聞いて回つてるの知つてるでしょ？」

「味方殺しに聞くことなんてあるんです？」

あ、ヤバい。俺は多少ムカつくだけで平気だけど、この話題は——
「やめろっ！」

——やっぱり。

嘲笑を浮かべるサクラが鼻白むほど大きな声だった。

千束の堪忍袋の緒が、切れた。

尋常じゃなく大きな感情に飲まれて二の句を継ごうとする彼女へ、俺はサクラの視野の外から人差し指を自分の唇に当てて沈黙を促す。

「……おお、こっわ」

サクラはあくまで平静を装うも、千束に気圧されていることは明らかだった。我に返った本人が自分の音量に自分で驚くほどだ。無理もない。

彼女が想起したのは、俺の初めてのリコリス殺し。

俺は当時のことをほとんど覚えていない。だからあまり、気に留めたことがない。というか、留めようがない。下手をすると現場を目撃した千束のほうがよく知っているんじゃないだろうか。

千束に向かつていって、手も足も出ずにボコボコにされたのは辛うじて覚えている。でも、その前に何があつたのかは、どうしても思い

出せない。

忘れてしまうくらいどうでも良かったのか。

忘れなきゃ耐えられないくらい辛かったのか。

「いいや、射撃は正確でエリカに怪我はなかった。噂に尾ひれがついているみたいだね……嘆かわしいことだよ、リコリスが流言飛語に惑わされるなんて」

自己から欠落した、大切だったはずのなにか。それを意識してしまったからだろうか。思ったより数段、乾いた声が出てしまった。

珍しく、体が心に引きずられている。珍しかったはずなのに、最近はこのことばかりだ。

「……教官」

「サクラ、相手が違う。自分でもわかってるでしょう?」

たきなに目配せをした。

「行こう。場所は用意してある」

彼女にはこれ以上傷ついてほしくなかった。

でも、司令に会いたいというなら連れて行こう。D A 復帰の望みが無くても、いや無いからこそ、現状の正しい認識が必要だ。きっと彼女は打ちのめされるが、それが必要なプロセスだ。

もちろん、殴り返す機会も与えるべきだろう。

俺がこう思うのも、あなたの計画の内ですか? 司令。

「突然の面会、すみません」

「サイトウから話は聞いている。手短に済ませろ」

俺たちは司令とその助手の背中を追って、第一訓練棟と第二訓練棟を繋ぐ渡り廊下を早足で歩いていった。

目線をやることもしない司令は一見して冷たく見えるかもしれないが、事実、スケジュールはそれほどまでに切迫している。

これから政府の客一行に、ベクター短機関銃を使った対テロ戦想定
のCQB訓練を見せなきゃならないんだ。サード・リコリス同士の
チーム戦形式だから、セッティングに少し時間がかかる。

俺は隣を歩きたきなにアイコンタクトをとった。

「二分間。それ以上は引き伸ばせない」

意を決したように頷く彼女の姿を見ると、罪悪感がどうしようもなく胸を刺した。

本当なら俺だつて、こんな回りくどい小芝居なんかしないで真実を告げたいよ。

ウォールナットがラジアータをクラックしたから銃取引現場の通信は途絶しました。あなたはスタンドプレーが原因で処分されたんじゃない、セキュリティホールを隠蔽するための生贄にされただけなんです、つてさ。

俺は周りが思っているほど職務に忠実じゃない。俺はDAのためではなく、自分と、自分が大切に思う人のために生きている。

友人の力になれるなら組織に背くくらいいけない。

だから三人で遊んだリコリコと契約した日の夜、俺は記録の残らない秘匿回線で彼女に、どこまで知りたい？ と密かに聞いた。

彼女は何も、と答えた。

レベルVIIセブン機密取扱資格所持者——楠木司令や俺を始めとするDAの基幹スタッフや、我々の上位組織に所属するやんとびっきりのクソどもごとない方々以外は、一連の情報を知ってはならないことになっていたから。

もし規則違反が発覚すれば、原隊復帰への障害になりうる。そうい

う判断だった。

「私は銃取引の新情報となる写真を獲得し、提出しました。この成果ではまだD Aに復帰できませんか」

「復帰？」

でも、知らないばかりにこうして傷を負うことになる。

「何の話だ」

「成果を上げれば、私はD Aに——」

「そんなことを言った覚えはない」

司令はにべもなくそう言った。取り付く島もない様子に、たきなは狼狽した。

俺はもつと、彼女のために何かできたんじゃないのか？ そんな考えが頭の中をぐるぐる巡る。

巡るだけで、名案は出てこない。

「サイトウ、リコリスに求められる第一の要件はなんだ」

「……命令に忠実であることです。我々は殺害対象の命も、それ以外の命も、容易く奪うことができます。故にその能力は、綿密な作戦計画のもとに行使されなければなりません」

「そうだ。リコリスは兵士だ。コントローラブルでなければならぬ」

お前はその要件を満たせなかった。

渡り廊下の先、第二訓練棟八階。学科教室群。

授業中の幼い訓練生達が鉛筆を走らせる小刻みな擦過音だけが微かに聞こえる密やかな空間に、司令の無感情な声が淡々と染み入る。

無人の廊下に響く四つの靴音のうち、一つが止まりかけて、しかしすぐに遅れを取り戻すために歩調が早まった。

静寂の中で司令は呟くように続ける。

「商人はサイトウと千束に拘束させ、販路を吐かせる手筈だった。しかしお前の発砲で全滅だ。行方をくらました一〇〇〇丁の銃はいつ誰を撃つとも知れん」

楠木さんは司令部の長だ。組織を管理し、最高の効率で稼働させることが責務になる。そこに個人のセンチメンタリズムが介入する余

地はない——させてはならないんだ。

「……無礼を承知で申し上げます、司令」

だからこれは、俺のわがままだ。

司令には拾ってもらった恩義がある。DAという組織はこの上なく嫌いだが、そのシステムに組み込まれた個々人のことまでを憎むのは、俺には無理だ。

それにこの人は、俺を人間だと言ってくれた。

敬意を払いたいと思える人だ。

でも、たきなだつて大事なんだ。

板挟みなんだよ。

「過誤は我々作戦司令部にも存在します。取引時間の予測を誤ったことも、当該インシデントにおいては無視できない要因かと」

「撃たせたのは我々だと?」

「一助になったことは、否定できません」

司令は歩を進めながらも、わずかに首をひねって俺を見た。その表情は、睨んだと表現するには穏やかにすぎ、ただ目を合わせただけというには険しい。

やめろつてことね、わかりましたよ。

控えめに肩をすくめてみせたら視線が外れた。

「それでも、撃たない選択はできた」

決断を否定されて、たきなが黙っていられるはずはなかった。

「見殺しにはできませんでした!」

「するべきだった。リコリス一名の犠牲で未曾有のテロを防げるならば、な」

そう言うしかないよな。司令としては。

真つ当とは言い難くても、それが仕事なんだから。

胸糞悪い話だけど。

「私、は……」

たきなはついに立ち止まってしまった。

彼女の瞳の揺らぎは、アイデンティティの揺らぎでもあったのだらう。

俺もつられて、歩みを止めた。

「たきな——」

「サイトウ！ 来い」

「……すぐ戻る」

ああ、俺はたきなを見殺しにするのか。

三クラス分ほど離れてしまった司令を小走りで追い越して、突き当たりのエレベーター乗り場の下降ボタンを押す。

「話は終わりだな？」

「言い過ぎです」

「ああでも言わなければわからん」

音もなく開いたドアのストッパーを手で抑えて、二人に乗車を促す。乗り込む間際、司令助手の女性は頷くように頭を下げた。

俺は乗らずに、首だけを戸口に突っ込んだ。

「後は勝手にやりますからね」

「好きにしろ。機嫌取りは任す」

「なにも司令が憎まれ役を買って出なくても……」

「お前がやりたかったか？」

「今の役回りだって嫌です」

「文句を言うな。いつまでも未練がましくいられては叶わんだろ」

「そりゃあそうですけど……あつあと、サクラにはもう変なこと言わせないでやってくださいね。司令の仕込みでしょうアレ？」

「吹き込んだゴシップをそのまま喋りそうな奴が他にいなかった。後任の立場も都合がいい」

「威力過剰でした。それにあれじゃサクラが嫌われちゃいます。ああいうのよくないです、本当に」

「……わかった。わかったから手を放せ。閉まらん」

熱弁すると、司令は珍しく鉄面皮を崩して渋い顔をした。七年間一緒にやってきてダメージらしいダメージを入れたのは初めてかもしれない。

申し訳ないけど、少しだけ胸がすく。

「あ、あのー……」

置いてけぼりを食らっていた助手の女性がおずおずと手を上げた。偶然タイミングが合って、司令と俺は同時にそちらを向いた。

「聞く限りですと、先の会話は予定調和だったんですよね？ それにしては、お二方が一緒に打ち合わせをしているところを見たことがないので……」

「こいつなら違和に気付くと踏んだ」

「気付いたので、用意されているであろう筋書きに合わせて行きました」

「え？」

「すみません、話すときいたので、また後で」

「ええ……？」

ドアを押さえていた手を離すと、司令はすかさず閉ボタンを押した。俺たちのペースに呑まれた彼女は、最後まで困惑した表情のままだった。

まあ、そりやそうなるよな。傍から見たら意味不明だ。いろんな文脈がすっぽ抜けている。

いやほら、俺たちこれでも付き合い長いからさ。

さすがにちゃんとした任務の話は一言一句のニュアンスまでしっかり詰めるけど、それ以外の諸々はお互い口に出さずともなんとなく分かるようになっちゃったんだ。仕事以外で接点なんかないのに。

まあ、それはどうでもいい。

俺は立ち尽くすたきなものもとへ走って戻った。放っておいたら、この病的なまでに清潔な廊下の空気に溶けて消えてしまいそうで、なんだか無性に怖かった。

「どっちつかずでごめん。あたし……卑怯者だ」

「……あなたが謝らないでください」

たきなは俯いたまま、わなわなと震える唇を動かして、吐き捨てるように返した。

はち切れんばかりに濃密な感情が言葉の内に秘められているのを感じて、俺は口をつぐむ。

「本当はわかってたんです。味方を撃った私が、戻れないことくらい」

「君は味方なんて撃ってない」

「あなたを！」

叫びかけて、黙った。廊下は無人でも教室にはいる。余計なことを喋るわけにはいかないことを、彼女は理解していた。

「いいや、撃ってないんだよ。あたしはフキ隊長と一緒にいた。報告書にはそうある」

「それは、そうですが……」

「重軽傷者ゼロ、死者ゼロ。それが、あの時起きたことのすべて。誰も死ななかつたのは、たきな。君がエリカを助けてくれたからだよ」

「……サイトウさんは、間に合ったじゃないですか。私が撃たなくても……そう、私が撃つ必要なんて……」

「そんなこと言ったらあたしだって突入後にしくじったかもよ？ なあ、もしもの話はやめよう。きりがない」

俺だつてわかつていた。

俺のやり方で彼女を立ち直らせることはできない。事実をもとに主張を否定することは、彼女を救うことにはならない。

情緒的なケアって苦手だ。

普通の人間と、不死身の俺とでは、どうしても生き方が大きく違う。感性が噛み合わないことは珍しくない。

別にいいじゃないか。体に大穴が空いたつて。

痛みなんて、呼吸と同じくらい慣れ親しんだ生理だ。血や臓物がこぼれても、洗濯が面倒になるだけ。

どうせ全部、元に戻るんだから。

初めから何も起きなかつたみたいに。リコリスに殺される犯罪者みたいに。

最初から存在しない。それと同義。

存在しないものを気にすることはできない。でもみんなは気にするみたい。

どうして？ 俺は死なないのに。

痛いから？ そんなの気にしてないのに。

なのにどうして、俺を痛ましげな顔で見るの？

わからない。

俺にはわからないよ……。

「……千束と、話をしてごらん」

「どうして、そこで千束さんが……」

「うまい言い方が見つからないんだけど……あいつなら、たきなの悩みの助けになる。と思う」

「私は——」

中身が男の、不死身の俺じゃ、欠けてるものを埋められない。

「——すみません。少し、頭を冷やしてきます」

去りゆく彼女の背は小さく、親とはぐれた子供のよう。

不甲斐ない。ひたすらに。

「どうしたんだ、あの子」

若い男の声がして振り返った。

「タチバナさん。見てたの？」

「下で司令とばったりな。暇ならお前のヘルプに入れと」

「ああ……じゃあ、キルハウスを一室押さえて欲しいんだけど」

「オーケー、ボス」

「ありがとう」

彼がDAにいながら、職員が着用する軍装めいた意匠の制服ではなく、一般的なダークスーツを着るのは、出向人員はどちらを着ても構わないことになっているため。

もつと言えば、その人間がどちら寄りなのか。そのスタンスを暗示するものでもある。

DAと政府。両方に籍を置く者は、意外と多いんだ。

「俺はそこを使う奴らと呼んでくる」

「追いかけてなくても良いのか？」

「たきなは千束に任せるよ」

「あの子がそうか……お前もなかなか、苦労してるな」

「まあね」

「他にはあるか？」

「大丈夫」

「分かった。それじゃあな——ああ、そういえば」

エレベーターの方に向けた足はそのまま、タチバナさんは振り返った。

「いい弱みが手に入ったぞ。防衛大臣の不正献金記録だ」

「さすが！ こないだ狙ってた内閣総理大臣は？」

「いやあ、さすがに高すぎて競り落とせなかった。でも、周りの人間と交渉して圧をかければ、なんとかなるかも」

「うまくいくといいね」

「ああ。ま、時間はかかるだろうけどな」

「懐は大丈夫なわけ？」

「安全マージンと損切りラインは厳重に決めてるさ」

「身持ちは崩さないでよね」

「任せろ！」

まさか夢にも思うまい。

公には内閣官房寄りのスタンスを示す彼が、戸籍さえない一介のエージェントに真の忠誠を誓っているなど。

「今度聴きに行くよ」

「楽しみにしとけ」

俺と二人で、このクソつたれな体制を破壊するべく密かに動いていることなど。

§

「一四〇〇から訓練だったよな」

「ええ、ですから訓練ですよ」

「おーそうか。じゃあ始める前に一個質問していいか？」

「何でもどうぞ」

「……なんで教官がお前なんだよ！ おかしいだろ！」

フキさんのバカでかい叫び声がキルハウスの高い天井まで響いた。

段々に角ばったヴォールト屋根の外側には廊下が通っていて、そのガラス張りの壁面には大勢のギャラリーが詰めかけていた。白服

がほとんどだ。

「なんでつてそりゃあ、こんなでも一応高等教官ですから。射撃でも格闘でも、ファースト・リコリスに教える資格があります」

「そういうこと言ってるじゃねー。なんで教官が変更になったんで聞いてんだ」

「どうしてもやりたかったんで代わってもらいまし——」

あ、フキさんの顔が般若になった。

「——というのは冗談で！ 本来の教官、病欠してるんですよ。あたしはその穴埋めに」

「マジだったのか……てつきりタチの悪い冗談かと」

「あたし信用ないっスね」

「すまん……」

「いえ、心当たり多いんで……」

へへへへへ、と二人してシケた顔で笑った。

ところでさつきからフキさんの陰でサクラが小刻みに震えてるんだけど。

「あー、サクラちゃん？」

「ぐああ……ぐああああっ……！」

頭抱えて悶絶しました。え、怖っ。

「フキさん、この子どうしちやっただんですか？」

「正気に戻ったとこだ。自分の行動を客観視して悶絶してんだろ」

「ああ、それはかわいそうに……」

「お前のせいだからな」

「ウツス……」

俯いて苦しむサクラにそっとにじり寄ると、彼女は俺の靴が目に入ったのだろう。バネじかけのおもちやみたいに首を跳ね上げて、俺の両肩を鷲掴みにした。

「その、マジでごめん……」

彼女は歯を食いしばり、吐息だけの悲鳴を上げながら俺を前後に激しく揺さぶる。抵抗しなかったからぐわんぐわんと視界が揺れた。

「どうしてくれんスか……！ どうして……！」

「す、すいませんでした……」

「返せよおつ……!」

「えっと、何を?」

「私のは……は、は、ハアツ!」

「え?」

「聞くなあつ!」

「あっはい」

首をひねってすぐる思いでフキさんを見た。

んべ、と舌を出された。薄情者!

「わりと真剣に悩んだんすよお! 自覚なかっただけで私本当はそうなのかなってえ! 教官もそうなのかなってえ!」

「深読みさせちやつてごめんね……」

「だってこつちに來るときに何か言つてたじゃないっすか! 聞こえなかったけど! そんなの嫌でも気になっちゃうでしょお!」

「それは……あたしはやめときなつて。独り言で」

「え」

「いや、リコリスより特別危ない仕事してるから、そういうの、断つて……」

揺さぶりが止まった。肩を掴む力は更に強まる。

てか俺を見上げるサクラの顔が近え! あとなんか上階の方がキヤーキヤーうるせえ! お前らが期待してるようなのじゃねえからな!

「……返答次第では私はあんたを許せないかもしれない。でも、答えてください」

とんでもなく真剣な顔で言われたから、つい頷いてしまった。いや、この状況でNOを突きつけられるわけなくない?

「あるんすか。こ、こ……告白、されたこと」

「何回か……あの、サクラちよつと近——」

「男スか!? 女スか!」

「全部、リコリスの子からだつた」

サクラは目を瞑つて、大きく深呼吸した。

俺は嫌な予感がして顔を背けた。

「ズバリあんたはどつちが好きなんだよ……！」

「はあ!? 何言ってるのお前!」

「サクラあ、その辺にしとけ。みんな見てんぞ」

「いいえ先輩、やめません! 男が好きでこんなことしてんだつたら不誠実なんてもんじゃあないでしょ!」

「相手の勝手な勘違いに誠実も不誠実もねーよ。そもそもサイトウは誰にもアプローチかけてねえんだよ。まずそれをわかれ!」

「それでもっス! 答えてください教官!」

理屈が通ってねえ。そのくせ勢いだけは凄い。だからなんだか答えなきやいけない気がしてくる。何なんだよこいつ押し強すぎだろ!

答えてやる義理なんてない。でもなあ、答えなかったら絶対ずつとうるさいよな。それも嫌だなあ。

「……お」

言いかけて、やつぱり黙った。サクラが異常な眼力でこつちを見てくる。もう一度顔を背けた。

真面目な話、俺は元々、男だったんだと思う。四歳より前のことは覚えてないけど、それでもその時から、体は女でも性自認は男だった。トランスジェンダーとは似ているようで違う。自分でも何が違うのか、決定的なところはまだ言語化できていないが、とにかくそれとは違う感覚があるんだ。

とはいえ便宜上は、事実とは異なるが、俺は単なるトランスジェンダー男性、ということになる。

体が女の男。着たい服は男物だし、恋愛対象も今の所――

「女の子、です……」

電気ショックを食らったみたいに、一度びくりと跳ねたきり動かなくなってしまうたサクラの腕を払い除けて逃げた。今度は俺がフキさんの陰で震える番だ。

別に隠してたわけじゃなのに、なんで口に出すとこんなに恥ずかしいんだろう。

やたら熱い顔を両手で覆い隠した。こんな姿、誰にも見せられたもんじゃない。

「あー、あのさ」

しゃがんで丸まった背中にフキサンの手が置かれた。衣擦れの音がしたから、多分、俺に合わせてわざわざ膝を折ってくれたんだろう。

「うちのアホがすまん。もっと強く止めるべきだった」

「うう……」

「すまん……!」

「はいはいお待たせー、千束ですよー。じゃ、ちやつちやと模擬戦始めましよ——え、何この空気。昼ドラ?」

「千束、ちよつと待て。こいつに立ち直る時間をやってくれ……」

「わ、耳赤……こんなサイトー初めて見た……」

結局、顔の火照りが落ち着くまでかなりかかった。

因果応報というには、代償が重すぎやしないかな。

キルハウスを見下ろす管制室に俺たちはいた。

「結局さ、一種の縁よすがなんだよ。生きて帰るための」

オフィスチェアの背もたれに体を預けて、窓の上のモニター群に投影された定点カメラの映像をぼうつと眺める。

千束はフキさんとサクラのタッグをたった一人で圧倒していた。だが俺は誰にも死亡判定を出していない。撃たれた者が一人もいないからだ。

彼女はたきなを待っている。そういう奴だった。

「リコリスの任務は一方的な暗殺ばかりじゃない。でも、正面切って戦うには通常装備じゃ火力も抗堪性も足りない。死傷者は珍しくない」

防刃および簡易防弾——せいぜい跳弾被害を防ぐ程度の戦闘制服だけを身に纏い、訓練用のシミュニシオン弾で撃ち合う彼女達。

着弾点の壁が、ドアが、樹脂製の弾頭に封入されたインクで染め上げられる。誰が撃ったものかを可視化するために、一人一人、色が違う。

それらが頭や重要臓器など、バイタル・パートに当たればその瞬間に死亡判定。腕や脚なら負傷判定。負傷が一定数累積すれば、それでも死亡判定。

実戦は更にシビアだ。

命の危機という強大なストレスを前に、兵士の心拍数は分間一七〇回を超え、視野も著しく狭まる。浅い呼吸に、手の震え。平時の自分は鳴りを潜め、本能が顔を出す。

撃たれれば死んでしまう者にとっては致命的な症状だ。本来の實力を出しきれないまま死ぬなんてこともしょっちゅうある。

「戦闘損耗の約九割は近接近C戦闘戦Bで起きる。そういう地獄じゃ、何か、自分をこの世につなぎとめるようなものの有無が生死を分けることがある」

「それが熱烈なフアンの正体、か……ここまで比率が高いのは偶然

「じゃなさそうだな？」

俺は画面に視線を向けたまま頷いた。

「女所帯だからね。男とつるむことなんてそうそうないから、自分が異性愛者か同性愛者か、正確に理解してる子は少ないんじゃないかな」

それがその手の申し出を頑なに断り続けている理由だ。

「それで、本当にそうか、そうでないか、たとえ分からなくても……縁よすがとして、自分の感情を恋とか愛とかそういう枠組みにねじ込んじゃうんだよ」

根拠となる感情がはつきりしないままでは、きつといつかひどい形で破綻する。

だから俺は、問い質す。

その気持ちは、本当に恋、あるいは愛なのか。

心の底から、そうだと断言できるものなのか。

ひとつひとつ、そう思うようになった経緯を一緒に紐解いていって——最後にはやはり、相手は自身のそれが、恋などではなかったことに気づく。

俺が欲しいんじゃない。心の拠り所が、生きて帰るための道標が欲しいんだ。

その重責は俺に務まるものじゃない。

死なないことと、いなくならないことは違うから。

「親愛や憧憬も、鉄火場の吊り橋効果で一緒くたに？」

「うん。戦場では仲間と命を預け合う。生存本能が一番働く異常な環境だ。そこでは健全な家族より強い連帯と共感が生まれる。もつともそこに性愛がついてくるのかどうかまでは、わからないけど」

「一種のロマンシスなのかもな」

「うん。俺の認識では、その表現が妥当かな」

「興味深い心理だ。プラトニックプラトニックと言ったらしいのか……なんというか、ごみごみしたものとは無縁だな」

「悲壮とは言わないんだね」

「悲壮かどうかは本人以外が決められることじゃないさ。まして、エ

イロマンティックには」

「ひよつとして卑下してる?」

「まさか! 俺のは武器だ。こういう仕事じゃ、馴れ馴れしく近づいてくる人間は腹に一物あると相場が決まってる。特に俺の場合、女はな」

タチバナさんは恋愛的にも、性的にも、誰かに惹かれることがない。エイロマンティック・エイセクシユアルというマイノリティの一種だ。

「良き伴侶を得られないなら、孤独を貫け。孤独に歩め。悪を為さず、求めるところは少なく。林の中の象のように」

そんな一節を思い出した。

彼は恋などせずとも満ち足りている。

しからみ 柵の少ない、軽やかな世界に思える。

どんな心地なんだろう。

時々、羨ましくなる。

「仏陀ウダーナ・ヴァルガの感興の言葉、第一四章『憎しみ』……いや、お前のことだ。イノセンスだろ?」

「当たり前」

「伴侶とは違うが、良き相棒は目の前に」

「林の中の象とメスゴリラのように」

「動物園かよ」

苦笑するタチバナさんにつられて、俺もくつくつと喉を鳴らした。

不死の副産物として、自壊する筋肉と骨格の再生を前提としたリミッター無視の怪力がある。それでパワーを活かした戦い方をよくするから、俺を嫌ってる一部のリコリス達に陰で本当にメスゴリラ呼ばわりされてた時期があったんだよ。

もちろん、二度と生意気が言えなくなるようお灸は据えた。仲直りした今となっちゃ、あいつらにとっても俺にとっても笑い話だ。

それ以外にも、組織内での役どころなんかを考えるとなかなかうまくいこと言った気がする。なんだろう、すごく自画自賛したい気分かも。

「あ、たきなが来た」

「廊下か？」

「うん。ほら、上じゃなくてデスクのモニター。監視カメラに映ってる」

「ぼちぼち終わりだな」

俺もタチバナさんも、千東とたきなの勝利を微塵も疑っていなかった。フキさんとサクラはすこぶる優秀だ。だが、今回ばかりは相手が悪いとしか言いようがない。

心の中で謝りながら、俺は席を立った。戦闘は録画されているから、見ていなかったからといってデブリーフィングの際に困ることはない。最後に終了の号令を出せば、ここでの仕事は終わりだ。

「この後は？」

「解散。俺、検診あるから」

「なら俺は特調に戻るよ。設備移管は、そうだな……明日の昼までには終わると思う。追加人員はその時に」

「情報部、補給部、作戦司令部……六人ずつで計一八名か。司令も思い切ったよね。部署をお飾りのままにしておく気はないってことでしょ？」

管制室に盗聴器の類がないことは確認済みだ。カメラはあるが、顔をそちらに向けなければ唇の動きを解析される心配はない。

ラジアータは全知全能の神なんかじゃない。出し抜く方法は必ずある。

「ああ、お前をトップにした事実上の独立部隊になる」

「たかだか一六のガキにそこまでの権限を与える意味がわからない。悪さしようと思えばできちゃうじゃん、そんなの」

「卒業後の就職先が内定したと思えば気楽ではあるが……悪さをさせることが狙いだったんじゃないか？」

「うん、鈴付きの首輪だと思ったほうが良さそうだね。素性を洗ってみるよ」

「頼むぞ。ここじゃ肩身が狭くてな」

そう言つてタチバナさんは大げさに肩をすくめて困り顔を作つて

みせた。絶対困ってないだろその様子だと。

ま、俺のほうがあちこち嗅ぎまわっても怪しまれないのはその通りだろう。俺は内、彼は外。そういう役割分担が一番合理的だ。実際ずっとそうしてきた。

窓の向こうで歓声が上がった。モニターを見れば、ちょうどフキさんが遅れて来たときの奇襲を受けてインクまみれにされていた。

サクラはいつの間に関死判定食らってたんだ？ いや、フキさんとほとんど同時にやられたのか。たきなが来た瞬間に仕留めるとは、千束もえげつない真似をする。

立ったままデスク型のアンプを操作して、マイクをキルハウス内のスピーカーに繋げた。

「状況終了。チャンバークリアののち、待機スペースに集合してください。お疲れ様でした」

端的に告げて、マイクオフ。視線を上げると、キルハウスの上の観覧スペースに固まっていたリコリスたちがこちらを見ていた。

サクラお前、マジで覚えてろよ……。

そんな内心はおくびにも出さず、試しにたまたま目の合った連中を中心に、控えめに手を振ってみた。口角も少し上げて。無視するのは良心が傷んだんだ。

すると。

なんかその場でびよんぴよん跳ねるやつ。友達と顔を見合わせて話し込むやつ。ゲリラ豪雨の中を走る車のワイパーみたいなスピードで手を振り返してくるやつ。そんなのが十人くらい発生した。

お前らマジかよ。逆によく今まで大人しくしてたな。

「モテる男はつらいな？」

「ファンでいてくれるうちはいいよ……」

その程度の希薄な繋がりなら、いいか。

誰かのものにはなれないけど、誰かの生きる理由の一つになるくらいなら、ね。

握ろうとした手の内に突如として拳銃が生じた。

「えっ？」

耳を刺す発砲音。目の眩むような一瞬の炎。

反動は実弾のそれだった。

ブローバックしたスライドがゆっくりと前進する。

薬莖はまだ宙に浮いている。

目の前に差し出されていた小さな手が、震えて。

青い制服の胸元に赤黒い染み。

のけ反る彼女の体を、俺は抱き留めようとする。

しかし背中に回した腕は、ついぞ何も掴まなかった。

忽然と姿を消していた。

顔を上げると、そこは無人の街だった。

車道の真ん中に立っていた。摩天楼を見上げると、ビルというビルの窓ガラスが内側から破裂したように砕けていて、その破片は例外なく空中に静止している。それらは降り注ぐ陽光を弾いて、白昼の砂漠のごとく輝いていた。

色褪せたアスファルトと、その上で渋滞を作る無人の車列に、網目のような集光模様が微動だにせず張り付いているのはそのせいだった。

「……先輩」

俺はそんな光景に目もくれず、いなくなった彼女を探しに駆け出す。

車の間を縫い、辺りを何度も見回し、横道に逸れる。焦燥に駆られて必死に探し回る自分の体を、心はどこか冷めた目で俯瞰している。

見つかりつこない。もう、どこにもいないのだから。

理解していた。それでも、認めるわけにはいかなかった。

やがて俺は、古いアパートの解体現場に辿り着いた。

鍵のかかかっていない、目隠しの板が張られた重いゲートを片手で開ける。建物自体の解体はほとんど済んでいて、鉄筋コンクリート製の柱や梁は、一階から三階の一部までしか残っていない。

左手にはプレハブの現場事務所、二階建て。反対側には空荷の大型ダンプや、アームの先端にコンクリートブレイカーを取り付けられた油圧ショベルといった種々の機材が放置されている。

現場一帯に敷かれた鉄板をかつかつと踏む音は、俺が発するひとつだけ。

広いばかりで誰もいない箱庭の四方は背の高い目隠しに覆われて、外の様子は窺えない。

「いるんですか？ こっくに」

彼女の実在を祈る思いで天を仰いでも、空しか見えない。世界から隔離されたかのように何もなかった。

全てがミニマムに完結している。

思い出したように息を荒らげて、膝に手をつく。

ずっと、全速力で駆けていた。倒れなかったのが奇跡的でした。

激しく咳き込むと、どこから来たかもわからない血が喉に絡んだ。吐き捨てようとした瞬間、気配を感じて前を向くと——彼女がそこにいた。

否。

彼女一人だけではなかった。

白服サードが、青服セカンドが、赤服ファーストが——二人のリコリスが、俺に背を向けて立っていた。

後ろ姿だけで、分かった。

分かるに決まっていた。

一人一人の名前はもちろん、人となりも、信条も、美点も、欠点も。大切な仲間だ。

全員、俺が殺した。

廃墟の方へ去りゆくみんなに、一步踏み出した。

「待って——」

言いかけて、嫌に柔らかいものを踏んだ。

死んだ男の腕だった。

足をどけても、死体。後ずさっても、死体。

死体。死体。死体。死体。死体。死体。見渡す限り屍の山。俺が殺した人々が幾重にも積み重なって、今まで立っていたはずの敷鉄板を覆い隠していた。

彼らの手足の隙間から赤黒い死血がじくじくと湧いてくる。このむせ返るような腐臭は一体いつから漂っていたのだろうか。

死者を踏みにじってみんなを追う。不安定な足場に苦慮している間に、液位は足首に達した。生ぬるく、べたついた、不快な感触が靴の中に侵入してくる。

距離は縮まらない。もはや辺りは屍肉の海、空すらない暗闇の中。街など跡形もない。

「待ってー！」

誰も振り返らない。彼女たちは赤黒い水面の上を滑るように歩いている。血飛沫を蹴散らしてみつともなく走る俺とは速さがまるで違う。

「待ってください！ 私も——うあつー！」

急に深くなつて、一気に胸元まで沈んだ。死体はもう見えない。どこまでも血の海だ。

波がある。みんなの方から、俺の方へ、鉄臭い風に吹かれた血が粘り気のある塊になって、打ち寄せてくる。まるで拒絶されているみたいに。

知るもんか。半分泳ぐような格好でなお進む。

「私も連れて行ってくださいー！」

名前を呼べば振り返ってくれるんじゃないかと思つて息を吸い込んだ。けれどもいざ発声しようとした途端、喉に何かが詰まったような感覚が生じて、何一つ、音にできなかつた。

波は徐々に勢いを増していく。濁流と言つても差し支えないほどに。

押し戻されそうだ。

「置いていかないで！」

ひとりにしないで。

「私も、そつちに……！」

ついていかせて。

「独りは、嫌です……」

制服が死血を吸う。五体が際限なく重くなっていく。みんな、俺を置いて去っていく。

俺の歩みが遅いせいで、行ってしまう。

一際大きい波が俺を飲み込んだ。

足がつかなくなった。

顔の穴という穴に腐った血液が入り込む。体がひどく重い。毛穴のひとつひとつにさえ纏わりついて、水底に引きずり込まうとしているかのようだった。

それでも視界は広く、像は鮮明で、水面を歩く姿がまだ見えた。

だからまだ届きそうな気がして、もがく。

絶対に浮かび上がれない。

みんなはもう、はるか上。何もできない俺はせめて、水面を歩いて去っていく背中を、決して忘れまいと目に焼き付ける。

ああ、それでも。

待って。

置いていかないで。

ひとりにならないで。

一緒に連れて行って。

そして。

どうか、俺を。わたしを。

罰してください。

「――終わりました。起き上がれますか?」

心の軋む音が聞こえそうなくらい、悲しみと悔恨に苛まれているはずだった。

それなのに、目が覚めたときには、全て忘れていた。

何もかも、何もかも。

「……はい」

手術台の上で身体を起こす。やけに頭が重い。何よりも、
「気分はいかがですか?」

「……吐き気が」

胃袋を握り締められているような不快感があった。

両手で顔を包もうとして、左手に刺さった点滴に気づく。そういえば麻酔をかけられる前につけられたんだっけ。忘れてた。

「まだ薬が残っているのかもしれないですね」

「今まではこんなことなかったんですけど」

「体質は変わりますからね。車椅子を持ってきましようか？」

「ああいえ、立てます」

出ていこうとする女性看護師をそう言って制止した。他の医療スタッフの姿はない。いつも、俺が目覚める前に姿を消す。

裸足がほこりひとつない床に触れる。指を動かしてみたけど、違和感はない。運動機能はもう平気みたいだ。

「気持ち悪……」

思わずぼやきながら、立ち上がる前に横目で傍らの医療用ワゴンを見た。

全身麻酔、プロポフォールの空き瓶——濃度二%、一〇〇mlのもの
が最上段に見えただけで一〇本はあった。

定期検診の所要時間はせいぜい三時間に満たない。体重は六五キロだから、常人の場合、めいっばい多く見積もっても一瓶あれば十分保つ。

俺じゃなかったら完全にオーバードースだ。この身体の薬物耐性を乗り越えて麻酔を効かせるためには、ここまでやらなきゃいけないらしい。

部屋に残された備品をそれとなく見てみたが、やはり大したもの
残っていない。検査のたびに何をしているのか、俺は知らされないし、知ることできない。

手術衣の前を閉めるついでに自分の裸体を見下ろす。唯一の手がかりは、全身に幾条も走る薄っすらとした傷痕。

胸、腹、袖を捲れば上腕に、裾を翻せば大腿にも。ジグソーパズルもかくやというほどあちこちかつさばかれているのは間違いない。縫合の形跡がないのは、復元を再生力に任せただからだろう。だからい

つもこんなに早く済むんだ。

それにしても、開腹するのに飲食を禁止されなんなんて、一体どういふことなんだろう。手術中にうっかり消化器系を破って中身をぶちまけようものなら大惨事だろうに。

ともあれ、今回も収穫なし。何も分からず。

次は再来月か。面倒くさいな。

「制吐剤ありますけど」

「お願いします」

「取ってきます。待合に……行けそう、ですかね？」

「……大丈夫です」

介助されているところを誰かに見られたくないがためのやせ我慢だった。五体満足なんだからいいよ、足があるなら歩ける。

静脈カテーテルの刺さった左腕で点滴スタンドを引いて手術室を出る。輸液バッグは二つともなくなりかけで、それぞれ製剤の名前がラベルに書かれていたが、どちらも全く聞き馴染みのないものだ。

ずいぶん前にどんな薬なのかこつそりネットで調べたけど、表層でも深層でも何ひとつ情報が出てこなかった。だからそれ以来、詮索するのはやめになっている。

知りたいけど、きつと危険だろう。

「あ、やば……」

むやみやたらに長い廊下を無理して歩くのはやっばりまずかったんだろう。顔から血の気が引いて脂汗が滲んできた。ここらが臨界点か？

さすがにこんなところで吐くわけには。

前後を確認。前方に待合室がある関係で人の気配はあるけど、ここから姿は見えない。大丈夫なはず。

ゆっくりと膝をつく。正座にも似た姿勢で、額を壁に預けて深呼吸。薄っぺらい手術衣以外何も身に着けていないせいで少し寒いのが、悪寒とは違うから平気だろう。

休んでいると次第に落ち着いてきた。目を閉じていると少し楽かも——遠くで何かが落ちる音がした。靴か何かのように聞こえる。

何かと思つて音のした右を向いた。

「……あ」

待合から出てきたのだろうか。フキさんだ。殺人現場の第一発見者みたいな、驚きと恐怖がない交ぜになった表情のまま、固まってしまつて動かない。

彼女の足元には音源らしきサツチエルバッグが落ちている。手に提げていたのを取り落としたのか。

いや、そんなことはどうでもいい。

問題はこの盛大な勘違いをどう解くか——さつきまで仲良くお喋りしていたはずの同僚が、明らかに重病人の格好で医療棟の廊下へたり込んでいるというショッキングな絵面を、どう説明するかだ。

「サイトウツッ！」

本当にどうしよう。猛ダツシユで近づいてきちゃつた。めちやくちや足速い。

いらん心配をかけてしまつて本当に申し訳ない。

「いやあ、麻酔が残っちゃつたみたいで気持ち悪——」

「お前、その身体……！」

「え？」

手術衣のゆったりしたシルエットのせいだ。袖や襟元の間隙から色々と見られてしまった。うかつだったな。手術室を出る前に消しておけばよかった。

「ああ、これ。定期検診のせいですよ。終わるまで全身麻酔で寝てるんで、あたしも詳しいことは知らないんですけど」

「それが検診なわけ……」

悪心がピークを過ぎたから立ち上がってみると、わずかに立ちくらみが起きた。

一步一步、確かめるように歩き出す。

「上がそう言うなら、そういうことにするしかないですよ。知ってるでしょう、あたしの体質のこと」

隣に行く彼女は何も喋らなかつた。沈黙が気まずくて、俺は更に言葉繋ぐ。

「こんなのはすぐ消えるからいいんですけど、今回は麻酔が抜けきらなくて。気持ち悪くて休んでたんですよ」

「本当にそれだけか？ 尋常じゃなく顔色悪いぞ……」

「ゲロ吐く二歩手前くらいですけど、それ以外は何も。フキさんはどうしたんですか？」

「ん」

彼女は自分の頬を指差した。模擬戦で殴られてできた、ちよつとした痣だ。腫れはもう引いているし、大したことはなさそうだけど。

「たきなですか」

「ああ。ほつときやいいって言ったんだけど、千束がうるせえから。やることやって暇だったし……」

言い訳するような口調だったからつい笑みがこぼれてしまった。

「律儀ですねぇ」

「うるせー」

「皮肉じゃないですよ？ なんだかんだ言って面倒見いいじゃないですか、フキさんって」

「手間かかる奴ばっか回ってくるからだ」

「最初のパートナーが千束だったのが運の尽きというか、それでマネジメント能力の高さがバレましたからね……」

「本当だよ！ あいつといいお前といい」

彼女は歩きながら鞆を拾った。

「特にたきな、何だあいつ。見た目で油断したわ。骨の髄まで狂犬じゃねーか！」

「フフツ」

「笑ってんじゃねーぞ」

「すいません」

大学病院さながらのただっ広い待合室に人気はない。任務から帰還したらしきりコリスが数名、隅っこの席に固まってひそひそと雑談しているくらいだ。

部屋の一面はガラス張りで、中庭が見えた。

平滑な石畳が敷き詰められた外はもう暗く、床に埋め込まれた照明

が黄色く光っていた。青々と茂っているはずの植え込みは、夕陽色と混色して立ち枯れたような焦げ茶色。

受付カウンターのの上に掛けられた時計によれば、時刻はもう一八時。

街は今頃帰宅ラッシュだろう。リコリスが最も忙しくなる時間帯のひとつだ。だから人が少ないのか。いや、ここは最近刷新された訓練カリキュラムの恩恵だと思いたい。

俺たちは手近なベンチシートに並んで座った。点滴スタンドがあるから、俺が左端だ。

暇つぶしに治癒を始めると、フキさんは中庭の方に顔を向けつつ、しかし横目で俺の首元から胸の正中線にかけてを縦断する、最も太く目立つ傷痕をちらちらと見てくる。

次第に薄くなっていく様子に好奇心はあるけど、気を遣ってまじまじとは観察しない。そんなところか。

フリーな右腕を持ち上げて、肘を彼女の小さな肩に乗せた。なんだよ、と鬱陶しげに言われたが払い除けられはしなかった。

そのまま体重を預けるようにして耳元に口を寄せ、

「えっち」

「は!?!」

言ってやった。

「ちが、違う!・ 違う違う違う!」

「人の乳ジロジロ見てたでしょ。あたしのは見応えないですよ」

「見……てねえとは言い切れねえけどそっちじゃねえ!」

付け込むようで悪いが、フキさんは体調不良の人間を振り払えるほど非情じゃない。俺の独壇場だ。とはいえ、延々イジリ倒すのは後が怖いからやめておこう。

「ちゃんとわかってますよ、からかっただけです」

「テメー……」

「他の子にはやりませんって。それで……傷の治りが気になるんやしよっ!」

フキさんの方に体を向けた。乗せていた肘をどかして、指で胸の傷

をなぞる。

「人に説明できるような感覚ではないんですけどね、ある程度コントロールできるんですよ。一番近いのを挙げると……瞬きみたいな感じですかね？」

「普段は無意識にやってるけど、意識すれば瞑ったり開いたり出来る……」

「ええ、そうです。触ってみると分かりやすいですよ」

「む……」

「畏じゃないですって！ 真面目な話！」

そこまで言うと、ようやく細っこい指がおそろおそろの伸ばされた。

ちっちゃい手だなあ。そりゃ、タツパのでかい俺と他を比べたらみんなそうだけど、一四〇cmと少ししかないフキさんは特別だ。これよくフルサイズの拳銃を扱えるもんだ。

俺は一七四cmだから、身長差はざっと三〇cmくらいになるのか。だいたい頭一個半くらい違うんだ。それなのにファースト・リコリスって相当すごいよな。

「うお……なんか、中で動いてる……」

「再生の終期です。普通の傷痕と違って、あたしのは皮膚でできたかさぶたみたいなものなんです。止血のために表面がまず塞がって、それから中身を再生してるみたいで」

「てことは、塞がってても痛みはあるのか？」

「はい」

答えた途端、手が弾かれるように引っ込んだ。

「早く言え！ ちょっと押しちやっただろ！」

「いちいち言うまでもなくくらい大したことないってことですよ。その気になれば、ほら。もう消えた」

「……今は？」

「完治してますんで、何も」

もう一度指が近づいてきた。じれったかったから、手首を掴んで掌を強引に胸骨のあたりに押し付けると、フキさんは上ずった悲鳴を漏らした。

「わかりますか、切開した骨が完全に繋がってるの」

「……お、おお？　ほんとだ。押されてるのに動かない」

体が本当になんともないことがわかると安心したんだろうか。急に手付きから遠慮がなくなつた。なんなら胸だけじゃなく、勝手に俺の袖をまくつて、すつかり手術痕が消えた上腕をぺたぺたと触り始めている。

そんなに心配だったのかな。なんかちよつと照れるな。

「全くわからないな、こうなると……手触りも普通だし」

「フキさんは怖がらないんですね？」

何の気なしにそう言うのと彼女は手を止めて、不思議なものを見るような顔でこちらを見てきた。そんなに変なことを言つたつもりはないんだけど。

「何を」

「あたしを」

「なんで」

「大抵ビビるんですよ。目の前で体を治すと」

「余計なんでだよ。普通喜ぶだろ、死んだと思つたやつが生きてたら」

「それが普通じゃないから怖いんじゃないですか？」

今度はむつとした顔で、二の腕から手を離した。

俺も触りやすいように差し出していた腕を下ろした。

フキさんの肩がほんの少しだけひそめられる。

「お前は普通だ。普通の……」

言葉の途中で顔を背けた。俺はそんな彼女の横顔を、黙って見つめ続けた。

「生意気な後輩だよ」

ほとんど独白に近い調子で、声は小さかつたけれども、俺は決して聞き逃さなかつた。

度量が大きいというか、剛毅というか。

「……かっこいいなあ」

「茶化すな」

「本気！」

信用ないなあ、なんて言いながら口を開けて派手に笑うと、フキさんはますます呆れた様子で特大サイズのため息をついた。

げんなりしないでよ、本当に尊敬してるんだから。

「ありがとうございます。でも、卑下してるつもりはないですよ。そんなものに押し潰されて自分を使い捨てる気はありません」

笑うのをやめて真剣な口調で言うと、フキさんは横目にこちらを見た。普段じゃれついてばかりの俺がこんなことを口走るの、ちよつと意外だったのかもしれない。

俺とみんなは違う。ギャップは確かに感じる。でも、そんなものじゃない？ だって他人同士なんだから。程度の問題はあれど、違いがあるのは当たり前だ。

違いが大きいか、少ないか。

受け入れやすいか、受け入れ難いか。

人によつてそのボーダーラインは違う。

たまたま、俺には難儀な性質があつて。

たまたま、それを受け入れてくれる人が近くにいて。

「幸い、あたしは恵まれてますから」

色んなものを貰つてばかりで、一つもみんなに返せていない。だからせめて、俺はみんなのために戦いたい。

戦うというのは何も、D Aが指定した殺害対象とではない。

すべてだ。孤児に人殺しをさせる組織も、犯罪者を殺して平和を演出する国も、罪のない人々を傷つけるテロリストも。

全部、全部、ぶつ壊す。

だってこんなの、おかしいじゃないか。

俺たちは、幸せになつていいはずなんだ。

俺たちはきつと、そのために生まれてきたんだ。

俺が普通のリコリスだったら、とつくに諦めていただろう。あるいはそんな考えが浮かぶような歳になる前に殺されていただろう。

でも。

「これは武器です。うまく使えば自分だけじゃなく、仲間だつて守れる」

俺には力があつた。ともすれば、自分が思い描く理想に届くのではないかと。そう思えるだけの。

タダで張れる命だ。やらなくてどうする。

「……そういうもん、なのか」

「ええ。友達を失うのは、怪我なんかよりずっと苦しい」

同時にそれは呪いでもあつた。

「あたしはいつも置いていかれる側です」

みんな俺より先に死ぬ。

俺の腕の中で冷たくなつていく。

命を分け与えることができればいいのにと、もう何度思つただろうか。

「死なないでくださいよ、フキさん」

望めば、いつだつて鮮明に思い出せる。

消した命の数々を。今際に遺された強烈な情動を。

誰もが抱くその感情に貴賤はない。

本当はわかつていた。

敵にも、味方にも、死んでいい奴なんて一人もいないんだ。

心を守るために、知らないふりをしていただけ。

敵なら殺せるという考えは、歪だ。

フェアじゃない。

フェアじゃないのは、嫌いだ。

「ちやんと卒業してくださいよ。隊みんなで」

もうこの世にいない仲間を思い出してしまったからだだろうか。存外に弱々しい、継るような声になつてしまった。

「……約束はできない。でも、努力する」

フキさんはどこまでも穏やかにそう言った。

同じ人間とは思えないほど、小さくて、繊細で、触れれば壊れてしまいそうなその体躯が、今は不思議と逞しく見えた。

彼女の言葉を噛み締める。数秒の沈黙が生まれた。

自然と、ある音が聞こえた。

かすかな衣擦れに加えて、ローファアの足音。

「サクラ」

優しい声音を意識して、後ろにある待合室の入り口近くにいるであろう彼女に呼びかけると、フキさんはぎよつとした顔で俺を見た。自分の耳を指差して片頬で笑ってみせると、納得した様子で頷きかけて、やつぱり首を傾げた。

別に驚くことじゃない。ただの反響^{エコーロケーション}定位だ。訓練次第で誰でも習得できる技術に過ぎない。

日常的に周囲を音で見ている視覚障がい者に比べれば精度は甘く、地形や人の位置が大まかにわかる程度。とはいえ、視界外の状況を知れるのは便利だ。特に単独行動、単独戦闘が極端に多い俺にとって
は。

「どうしたの？ おいでよ」

振り返ると、サクラは観念した様子でとぼとぼと近づいてきた。太眉が完全にハの字だ。また病院の柴犬モードかよ、なんか見慣れてきたわ。

「本当に……本つ当に、すいませんでした……！」

彼女は俺の横に来るや否や、暑さで干からびた朝顔みたいにしおっしおな表情を取り繕うこともせず、前屈かと思うくらい深々と頭を下げた。

「あー、あれか……」

つい苦笑が漏れた。

「すいません……マジですいません……」

「ううん、気にしないで」

そうとしか言いようがなかった。次会ったらデコピンの一発でもくれてやろうかと思ってたんだけど、ここまで平謝りされたらそんな気も失せるというもの。

それに一応、過失は俺にもあるし。

「あと、その、たきなにも謝つといたんで。一応伝えときます……」
頭を上げた彼女がそう付け足した瞬間、失礼にも変な声が出そうになった。

そっか。そういうタイプだったか。どうしてもたきなに突つか

かっつたイメージが強くて心配してたけど、

「めちやくちやいい子……」

「そ、そっすかね？」

うんうんと何度も頷くくらいには、俺の中で彼女の株が急上昇していた。こういうところがしつかりしている人は希少だ。世間じゃ当たり前前みたいに思われてるけど、まったくそんなことはない。

人の振り見てわが振り直せだ。俺もしつかりしよう。

「あたしもごめん。きつい言い方しちゃった」

「いえいえ！ 全然大丈夫です！」

「サイトウも大概律儀だよな」

「ふざけるところは選んでますから……ちよつと、なんで渋い顔するんですかそこで」

「合つてんのがなんかムカつく」

「理不尽！」

「見た目に騙されんなよ、サクラ。こいつお前が思ってる一〇倍はうるせえから」

「そうなんスか？」

「だつてフキさん面白いんだもん。ねえサクラ？」

「あーしに振りますそれ!!」

「パートナーじゃん？」

「その前に後輩っすから！」

「ダメだつたら言うのかオイ」

「あー違つ！ 先輩、違くて！」

「ごめん、全然しつかりできなかつた。結局いつもの夫婦漫才^{じゃれ合い}だ。でもこれフキさんも乗つかつて来てるよな。

「サイトウせんぱあい！ 助けてくださいあい！」

「助けてつて、そいつが発端だろ……」

「ヨーシヨシヨシいい子いい子。怖かつたねー」

「えへへへ……」

「犬みてえに撫でられてプライドとかねえのお前……？」

まあ、サクラが元気になったんならいいか——待て。足音がまた来

る。騒いで気づかなかつた。近いぞ。

「あつ」

振り返ったら司令だった。

フキさんはとくに立ち上がっていた。

遅れて気づいたサクラはというと、俺の両手でツーブロックの頭を包まれた格好のまま、ぴくりとも動かない。

すごく気まずい！

「お、お疲れ様です……」

「……仲がいいようで結構」

え、それだけ？ なんかもつとこう、何やってるんだお前くらい言われるかと思っただけだ。

姿勢を正して立ち上がろうとしたら手で制止されたし。

なんか今日優しくない？ 気のせいかな？

三人で喋ってたらしいの間にか気持ち悪くなくなってたから、顔色だってもう悪くないはず。

じゃあなんでだ？

「予測が出た。例の案件に関連している可能性が高い」

「私の専任事案ですか……いつです？ 場所は？」

「三週間後、北押上駅構内。対テロ任務だ」

「遠いですね」

「それだけデータがあるってことだ。お前たちが集めた、な」

ほら、やっぱり優しい。理由はわからないけど。

「大規模な戦闘になるだろう。作戦の骨子は司令部が作るが、春川、サイトウ。お前たちにも専門家として口を挟んでもらう。詳細は明日追って伝える」

思わず俺はフキさんと顔を見合わせた。

作戦立案にリコリスが起用されるのは初めてだ。現場の声を直接伝えられるとは、DAも風通しが良くなったな。司令様々だ。

「思ったより早かったですね、新装備の初陣」

「間に合わせたというのが正確だな。政府は我々に火力を持たせたがらん……あの阿呆ども」

その点、お前たちの相手は楽でいい。

司令は恐ろしく疲れ果てた声でぼそりと零した。なるほど、俺たちに甘いのはそういうわけか。

リコリスが駄弁ってるだけの光景に癒やされるくらい参ってるのかよ、司令。重症じゃん。

「お疲れ様です、本当に……」

よくよく見たら顔が若干やつれてるような気がする。確かに最近
は霞ヶ関とここを行ったり来たりして随分忙しそうだった。

俺が頑張るべきところだな、これは。

「終わったら手伝いに伺います」

「……頼む」

そう言っただけで待合室を去っていく彼女の背中からは、なんだか煤けて見え
た。

やっぱ世知辛いよ、この職場。

「卒業したら、私らもあんなのかな……」

「なりますよ。あたしはもうなってます」

「DAって、結構ブラックなんスね……」

その後の俺たちの話題はもっぱら、第一線を退いた後のキャリアについてだった。無敵の楠木司令が参っているところを見てしまったから、リアルな危機感があったんだ。

そこに、もし生きていられたら、なんて弱気な仮定はどこにもない。

あるのは、絶対に生き延びる覚悟だ。

背後のシャッターが密やかに下りていく。

目を開けば、そこは無人の地下鉄駅。

構内は微かな耳鳴りが聞こえるほど静かだ。

「作戦開始五分前。各分隊長は状況知らせ」

左耳のインカムに指を添えて言った。

深紅の五式一等戦闘制服七型はすこぶる快適で、布質もさることながら、今のように腕を上げてても生地が突つ張ることがない。何よりフロントに携帯端未用のポケットが追加されたのが嬉しかった。被弾率の高さから、在庫処分がたら大量に支給されていた丸お〇式古のそれは雲泥の差だ。

言い換えれば、そんな細々した部分さえ成否に関わるものとして考えればならないほど困難な任務ということになるんだが――

『アルファ配置完了。問題なし』

『ブラボー配置完了。問題なし』

『チャーリー配置完了。ですがすみません、チャーリー・フォーのコンデイションが……』

「戻らない？」

『はい……』

「無理させなくていい、離脱させて。欠員はフォックスロット・ツィが埋める」

――俺はなぜだか全く緊張していなかった。

作戦立案の後、二週間に渡って行われた、任務中に発生しうるあらゆる状況を想定したシミュレーション訓練のおかげではない。

NIJ規格にしてタイプIV相当――
 30-06スプリングフィールドの徹甲弾Aさえ食い止める炭化ホウ素製防弾プレートと衝撃吸収用のトラウマパッドを入れたプレートキャリアに安心感を覚えているわけでもない。

ましてや肩に担いだ、フルサイズ弾による高貫通力と優秀な基礎設計からなる確かな信頼性を備えたPKM汎用機関銃がテロリストに

風穴を開けることを期待しているからでもない。

何一つ、理由が分からなかった。

「デルタ分隊はどうか」

『デルタ配置完了。問題ありません』

「よろしい。エコー分隊、緊急離脱ルートの確保は？」

『ブリーチ完了。一番、二番、四番開通。されど三番経路内に民間人あり』

「了解。エコー分隊は当該ポイントを防衛せよ。三番は民間人退去が終了し次第、速やかに発破すること」

『了解』

不思議な心地だ。これから命のやり取りを——不死身の俺がこの言い回しを使っているのかは分からないけれど——するとはとても思えない。これは油断なんだろうか。

「小隊長より各員へ。作戦は定刻通りに開始する」

妙な胸騒ぎを覚える。肌がぴりつくような、そんな感覚が漠然とあ

る。それでも、心は不自然に凜いでいた。

「緊張なくていい、訓練通りにやれば何もかも上手くいく……生き残って、全員で家に帰ろう。オーバー」

本当に、上手くいくのか？

#4:

Birds of a feather
Flock together

俺のPKMは例の銃取引現場から回収した一丁だった。たきなが使ったものと同じ個体だ。

オーバーホールついでにバイポッドを外して軽量化を図るとともに、木製銃床ストックの肉抜き部分をノコギリで切り落とし、床尾を銃床の付け根に極力近づける形でビス止めしている。

強引なDIYで近接戦闘近接戦闘用に仕立てた歪な代物だが、これがなかなか

か悪くない。肩からグリップまでの距離が近づいた分右手は少々苦しいが、全長がぐつと短くなった上、重心位置が改善されたおかげでそれ以上に取り回しがいい。

無論フキさんにはこんなに重い銃を室内に持ち込むなんて正気の沙汰じゃないと言われたが、あいにく俺のフィジカルは常人のそれをはるかに凌ぐ。弾薬込みでもたった八kgちよつとのマシンガンなんか屁でもなかった。

そうだ。俺ならこの一〇〇連ベルトリンクの大火力を誰よりも軽快かつ正確に叩き込めるはずなんだ。

なのになぜだ？

嫌な予感、地下三階のホームへ続く階段を下りるほどに強まっていく。

だが、ラジャータの予測通り、ここまで敵は誰一人いなかった。全てうまく行っているはず。

ああ、そうか。

計画が計画通りに進んでいるのが、怪しいんだ。

『こちら第三後方支援中隊。特務車両の運行に遅延なし。只今より突入カウントを開始します……ご武運を』

「実働小隊了解。ありがとうございます」

『二〇、九、八、七』

まあ、いいさ。危ない目に遭うとすれば俺だ。

『六、五、四、三』

階段の中腹で足を止める。

『二、一』

銃床を肩に付けた。

『〇』

瞬間、夥しい数の銃声が轟いた。数秒程度ではまるで止む気配がない。非武装の市民を虐殺するのに反撃を考慮する必要はないから、きつとマガジンを空にするまで続くだろう。

それが自分の首を絞めることになるとも知らずに。

大音響に紛れて、再び階段を下りていく。耳を使って相手の人数と

装弾数を把握しておくのも忘れない。

音量が音量だから聞き分けが難しいが、おそらく一〇名前後。

東側系の大口径アサルトライフルに加えて、フルサイズ弾薬を使うマシンガンもあるようだ。ていうかこの音、PKMじゃないか？

試射した時に聞いたものと酷似している。

「……そうか、お前らか」

一〇〇〇丁の銃の買い手は。

『突入および発砲タイミングは小隊長の判断に委ねます。こちらからチャンネルを変更しますか？』

『指示後は戻して。相当うるさくなる』

『了解』

列車の悲鳴にも似たブレーキノイズに、次々吐き出される薬莖に、砕ける強化ガラスに、AK系列特有のトップカバーのガタつき。予想通りマガジンチェンジはなし。

聞き分けた音の要素をもとに下の様子を推察し、然るべきタイミングに合わせて歩調を修正。

デジタルイヤーマフの防音性能は大したものだが、集音装置の精度ばかりは生身のそれに一步劣る。片耳にかけるだけのインカムでなければこうはいかない。

ほとんどの敵の残弾数が二桁を割った。

まだだ。弾切れまで待つ。

発砲が止んだその瞬間――

「撃て」

――俺の号令を受けた三個分隊^{二名}のリコリスが、装甲された列車内から一斉にアサルトカービンを掃射した。

MCXラトラーの^{7.62×35mm}300BLK弾はもとより近距離での殺傷力を重視した弾薬だ。それが一二の銃口からそれぞれ秒間一五発、合計して秒間一八〇発ものペースで放たれるのだからたまったものではない。

「フォックストロット・ワン、突入する」

『了解。第一梯団^{ていだん}、撤退開始』

列車の停車時間は、たった三秒。

たった三秒の一斉射撃で、ホームは地獄と化した。

瞬く間に全身を穿たれた男達の断末魔は、何重にも重なる絶え間ない銃声と超音速弾が発する衝撃波ソニックブームにかき消され、ついぞ俺の耳に届くことはなかった。

だがそれだけの大火力をもつてしても、奇跡的にホーム中央の柱に身を隠せた数名の生き残りが突撃銃AKMSを手に反撃の機会を窺っているのが見えた。

想定内だ。そのために、俺がここにいる。

動き出す車両の中から、交互にリロードを挟んで絶え間ない制圧射撃を浴びせるアルファ、ブラボー、チャーリー分隊。

彼らと入れ替わるように、最後の数段を駆け下りながら発砲。

眼前で無防備な姿を晒していた作業服の男は、一秒と保たなかった。

7・62×54mmR弾のストッピングパワーは凄まじく、一発一発が彼の骨を砕き、肉を爆ぜさせ、それでも足らぬとばかりに奥の柱に隠れていたもう一人を貫いた。

十字砲火の完成だ。列車から身を隠そうとすれば俺に撃たれ、さりとて俺から逃げるのに柱の陰から出れば列車のリコリスに撃たれる。

こうなつてはもう、何をしたらって死ぬ。

「悪いな」

口ではそう呟きながらも、一度引いたトリガーを戻すことはしなかった。

際限なく跳ね上がっていかうとする銃口を力づくで抑え込み、視界に入った人型へ手当たり次第に弾をばらまく。

一番手前の柱で二人を解体した。

そのまま横一直線に薙ぎ払い、ホームドアを乗り越えて逃げようとしたもう一人を両断。男は腹から臓物をぶちまけながら、まるで人じゃなく物みたいに線路へ落ちていく。鉄筋コンクリート製の円柱とトンネル内壁には、拳大のクレーターがいくつも空いた。

恐ろしい火力だ。いつぞやの俺もこうなったのか。

たきなはさぞ怖かっただろうな。

『残り一、左方から回り込んできます』

「ああ、それなら」

列車が駅を出て行き、動きを縛るものがなくなったテロリストは、どうやら逃走より報復を選んだらしい。

それとも、生き延びることを諦めただけか。

俺にはどちらでもよかった。

冷静さを失って無謀に突撃してくる敵ほど、

「今射殺した」

対処しやすいものはない。相手が飛び出してくるであろう方向に銃を向けて撃ちっ放しにしておくだけで、自分から弾幕に頭から突っ込んで即死だ。

『残敵、確認できません』

「いや、マシンガンが一丁捨てられてる。多分監視カメラの死角だ」

一発の被弾もないことを喜ぶ間もなく、俺は銃床に頬を付けたままホームのクリアリングを急いだ。

空気が張り詰めている。この状況がそう感じさせる。

もし本当にこのテロリストグループが一〇〇〇丁もの銃を買った張本人であるなら、その組織規模は相当大きいはずだ。得てしてそういう連中には、戦術・戦略の両方を組み立てられるスペシャリストが必ずいる。肥大化した集団はそうでもなければ統率できないからだ。専門家がこんなずさんな襲撃計画を練るはずがない。

何かが起きる。絶対に。

「上り線に予備の車両を通過させろ。生き残りがいれば轢き殺せ」
『了解』

辺り一帯が不気味な沈黙に覆われる中、空冷され収縮した銃身が、キン、キン、と気紛れに鳴る。

視界外の偵察に使うには音量が足りない。こちらの位置を悟られるのは癪だが、吸着音クリックを出すか。

上顎、いわゆる硬口蓋に強く押し付けた舌を、勢い良く離す。関西の方じゃタンコというんだったか。

耳を澄ませば、壁や天井に反響した音が返ってきて——いた。下り線ホーム直下、線路脇の退避スペース。

このような鉄とコンクリートで作られた閉鎖空間じゃ、靴音すら遠くまで届く。そんな場所で跳ね返ってこない音があるとすれば、人の着衣に吸われているとしか考えられない。

走り出した勢いをそのままに跳躍。ホームドアに足をかけて、さらに跳ぶ。

前宙。

天地がひっくり返る。

P K Mを構えた。

上下逆さの視界に映るは長身の男。

引き金を引くより早く、その男は横つ飛びに転がって射線から退いた。

四分の一周回って、黒ずんだ天井と架線。

もう四分の一で、北押上駅、と書かれた駅名標が目の前に。

迫ってきた壁を蹴り付け、身を捻り、再び空中へ。

アイアンサイトを覗く暇はない。地に足つくまで本^{インステインクト}能射撃で撃ち下ろす。

馬鹿げた破壊力を秘めた銃弾が、コンクリートの道床を爆ぜさせる。不規則に波打ちながら緑髪の男へ急速に近づいていくそれは、姿なき怪物が残す足跡のよう。

その怪物が逃げる男の足首にいよいよ食らいつくるところで、不意に肩を突き飛ばされて、足跡の軌道が斜めに逸れた。男が懐から抜いた拳銃によるものだ。プレートキャリアに増設されたシヨルダーアーマーに赤銅色の弾頭がめり込んでいる。

着地。一拍遅れて、持ち上がっていたプリーツスカートの裾がすんと落ちる。

唐突に、背後から光が射した。

そして耳をつんざく擦過音も。

急ブレーキ？ 今はまずい！

「駄目だ、止めるな！」

『危険です！』

「いいから加速！」

制圧射撃で釘付けにする暇もなく、男は呆れるほどに素早い身のこなしでホームドアをよじ登って上に消えた。よつほど壁ごと撃ち抜いてやろうかと思つたが、車両はもう背後に迫っている。

道連れにできないならここに留まる意味もない、か。

仕方なしに跳躍し、筋繊維の断裂を代償に約二mの高さを一足飛びに越えた。直後、背後に強烈な風が吹く。中途半端な速度でなければ、これで仕留められたんだが。

奴の姿は見えない。線路沿いの黄色い誘導ブロックに、何やら白っぽい破片——割れた強化ガラスが散らばっている。

「野郎、乗り込みやがった！」

『停車させます』

「いや、もっと加速させて降りられないようにした方がいい！」

『それではあなたが！』

「支障はない！」

右隣を抜けていく車両の、自分からなるべく遠い位置の窓に一発だけ撃ち込んだ。

弾痕を中心に広がる蜘蛛の巣状の罅ひびを見て。

全身に力を溜めて。

割れた窓がぐんぐん近づいてきて。

今だ。

感覚を信じて、列車の横つ腹に飛び込んだ。

さしたる抵抗もなく粉々になる窓。

着地後、首を左右に振って索敵。

前方車両の奥に例の男。

一步踏み出した瞬間、急制動を続けていた列車はついに止まった。

そう、止まってしまった。

俺のペースにバックアップが付いてきていない。明らかに飛ばしすぎだ。だがこうでもしなければ、きつと取り逃すだろうという予感があった。

男の手の中に、ピストルグリップのような黒い物体。目を凝らすと、銀色の細長いアンテナが生えているのが見える。

ラジャータの戦力分析に爆発物の類はなかった。

向こうが一枚上手ってことだ。

男が振り返って、俺を見た。

意地悪く片頬を持ち上げて、そして。

起爆装置デトネーターのスイッチを押した。

§

目覚めて最初に見えたのは、灰色の砂とガラスの粒にまみれた自分の右腕だった。

左耳のインカムからは何も聞こえてこない。駅の構内に仕込んでいた中継機が死んだのかもしれない。後方支援中隊の隊長殿は、パニックを起こさずに副系統に繋ぎ直してくれるだろうか。

空気と一緒に粉塵を吸い込んで、何度か咳き込んだ。

「んの野郎……」

唇が粉っぽい。舌でなぞると鉄臭い。飛んできた礫つぶてが何かで頬を切ったみたいだ。

口の中に入り込んだ砂粒を唾と一緒に吐き捨てる。

肘について立ち上がろうとしたら、左腕を強く引っ張られた。

目を向けると、そこにあったのはひしゃげた巨大な金属の板だった。

トンネルの天井に爆薬を仕掛けていたんだろう。降ってきたコンクリートの塊が客車の屋根を幾筋にも引き裂いて、その結果生じた刃物のように鋭い破断面と鈍器の混合物コンプレックスが、俺の左腕を完膚なきまでに叩き潰し、床に縫い止めていた。

上腕から先は瓦礫の下敷きになって見えないが、もう腕が原形を留めていないことは感覚でわかった。

総身が痙攣するほどの激痛という形で。

「ぐ、う……う……う……」

歯を食いしばり、意志に関係なく漏れそうになる呻き声を押し殺す。腕を失うのは久しぶりだ。何度やられても堪えるな、これは。

瓦礫を一つ一つどかさような時間はない。

緑髪のあいつがまだいるなら、追わないと。

腕を、切断しないと。

潰されずに済んだ二の腕には骨が残っている。順当にいけば、まずそれを碎いてから肉をナイフで切り裂くところだが、俺は面倒な手順をすつ飛ばす名案を思いついた。

ちようどここに、人体を簡単にバラバラにできるくらい強力なマシンガンがあるじゃないか。

無事だった右手で握り締めたままのPKM。その銃口を、左の上腕に押し当てる。切り詰めたとはいえ一m近い長物だ。右腕をいつばいに伸ばさなければトリガーに指がかからなかった。

大丈夫、すぐに済む。

大丈夫。

自分に言い聞かせる。まだ感覚のある四肢を切り落とすことへの心理的抵抗なんて、その程度の自己欺瞞で誤魔化せてしまえるような些細なものでしかなかった。

薄暗い車内に橙色の発射炎が何度か光って、眩さに目を細める。

遅れてやってきた壮絶な痛み。それを合図に、一気呵成に立ち上がる。

聞こえてくる。

勢い任せに引き千切られた肉の、ぶちぶちと裂ける音が。

フルメタル・ジャケット弾に打ち砕かれた骨が、なおもびりびりと震える音が。

うるせえな、俺の体。

ガタガタ言うんじゃねえよ。

『すみませんフォックスストロット・ワン、主回線が——』

「車両を出せ、逃げられる……！」

復旧したインカムに叫びながら走り出そうとした瞬間、バランスを崩して転倒した。軽くなつた左半身に対して、PKMは重すぎた。

惜しいが、置いていこう。

代わりに、うつ伏せに倒れたまま背中の中のサッチェルバッグからグロック17を抜く。心臓の鼓動に合わせて断端から噴き出る血液がたちまち血溜まりを作って、上体をひどく濡らしてしまったが、隻腕では四つん這いにもなれず、どうしようもなかった。

車両と車両の継ぎ目の、客室キャビンから一段狭くなった幌に右肩を押し付けるようにしてなんとか立ち上がると、ちょうど足元から連結器の作動音が聞こえてくる。

潰れた車両は放棄して、生きている前方の三両だけを走らせるってことか。

それでいい。速度が乗れば、飛び降りて逃げることはできなくなる。密室の完成だ。

前に一步踏み出せば、列車はそこかしこを軋ませながら辛うじて動き出し——頭と胸に、間髪入れず銃弾が叩き込まれた。

防弾ヘルメット越しに脳を揺らされる。仰け反りながらも撃ち返すが、どうせ当たらないだろう。

座席はすべてベンチシートで、身を隠す場所は少ない。この射撃精度からして相手は間違いないと凄腕だ。このまま撃ち合っても、先手を取られている状態で相手を仕留めるのは厳しいものがある。

だから追撃を避けるため、下手に抵抗せずそのまま仰向けに倒れた。弾は防弾素材に止められているが、そもそも左腕を失っているから不自然には見えない。

死亡確認のために近づいてきたところを一気に仕留める。プロほど引つかかりやすい、俺の定石のひとつだ。

正気を失ったように暴走する列車の激しい揺れと、悲鳴のような走行音に紛れて、足音が近づいてくる。

目を閉じて、さらに聞き入った。

エコーケーション
反響定位で位置を割り出す。

俺がいる三両目に入ってきた。

撃鉄が引き起こされる音がする。

「おいおい」

リボルバー？ いや、そもそもなんで、

「死に損なっちゃまったみてえだな？」

なんで見抜かれた？

「緊急停車！」

目を開けて叫ぶ。

直後、足方向にかかる強烈な減速G。

上体を起こす。慣性が動きを助けてくれる。

飛び起きる。走る。

眼前の男が発砲。

ライン・2000DS
小型拳銃に右脚を撃ち抜かれた。

構わず跳躍。

空中で両足を突き出し、ドロップ・キック。

金属カップ入りのローファーが男の胸にめり込んだ。胸骨と肋骨

のいくつかをまとめてへし折り、砕く、確かな感触。

扉を突き破り、吹き飛ぶ男。

インパクトの反動を利用して後方宙返り、着地。

グロックをエクステンデッド・ポジションに構え、制圧射撃を加え

ながら離れた間合いを詰める。重心の狂いがひどく、思うように走れ

ない。ともすればまた右腕から転びそうだ。

俺が二両目に突入すると、倒れていた男は跳ねるように立ち上がった。

軽やかな動きだ。折れた骨が内臓に突き刺さっても構わないっ

てのか、イカれ野郎め。

そして応射も驚くほど早く、正確だった。

顎を引いていなければ、ヘルメットではなく額に当たっていたら

う。さすがに俺も、脳みそをぶちまけてしまったらどうなるかわから

ない。

死の予感がする。

長らく、あるいは一度も感じたことのなかった、死。

寒いような、熱いような、不可思議な感覚が背中に這い上るのを感じ

じる。

俺は怯えているのか？

それとも、
嬉しいのか？

「……クソッ」

べたべたと脳裏にまとわりついてくる不快な思考を振り払うように、俺は何度もトリガーを引いた。

男は三角跳びの要領で壁を蹴り、宙を舞い、ロングコートを翻す。地に足つけた相手を狙った射撃など当たるはずがなかった。

この動き、どこか千束に似ている。当然、射線を読んでいるわけではないんだろが、このセオリーを鼻で笑うような常軌を逸した挙動はまさしく天才の動きだ。

空中の男の爪先が、いつの間にか至近に。

とつさに右腕を持ち上げて防ぐ。

軽い。力がさして籠もっていない。フェイントだ。

本命は、そうか。リボルバー。

手遅れと知っていても、顔をめいっばい逸らした。

むき出しの側頭部——ヘルメットはイヤーマフとの併用を想定して耳周辺の装甲が排除されている——が焼けるように熱い。視界が強烈に揺れて、光が散る。

一瞬遅れて、自分が死んでいないことに気付いた。

頭蓋骨が銃弾を弾いたらしい。入射角が浅かったのか。

理解と同時にグロックを前に突き出す。撃つと見せかけて、そのまま銃口で顎を殴りつけてやった。こうでもして隙を作らないと今みたいにカウンターが飛んでくる。

構図は直前の焼き直しだ。今度は俺が胸元に銃を寄せたハイ・ポジションで奴の頭を狙う。

が、それより男が態勢を立て直す方が早く、射撃は髪を数本散らすだけに終わった。ジャブとはいえクリーンヒットしたってのに、どれだけタフなんだ。

ライノの銃口がこちらを向く。撃たれる直前に辛うじて右手で弾くと、

「ハッハアッ！」

男は嘲笑した。理由はすぐにわかった。

がら空きになった左腕、その断端を、拳が抉った。

剥き出しの肉が潰れる。体が右に傾ぐ。強化ガラスの細片が残る窓枠へとつきに肘をつけて耐える。

間髪入れず短い横髪を掴まれた。弾丸に切り裂かれたばかりの頭皮に男の長い指がめり込む。

顔を叩きつける気か。舐められたもんだ。

思ったのはそれだけだ。

痛みなんかねじ伏せる。

「調子……」

ぶちぶちと抜ける髪を無視して強引に立ち上がり、戦闘の高揚に歪んだ目を睨みつける。

男の表情から余裕が消えた。今度は驚愕と恐怖が半々。

「乗んなあっ！」

俺とほとんど同じ高さにある顔面にヘッドバットを叩き込んだ。男の鼻骨がへし折れる。さすがに効いたのか、苦悶の声が聞こえた。

それでも手は離れない。左腕があれば簡単に引き剥がせるのに。パワーで上回っていても活かせないのがもどかしい。

一朝一夕に腕は生やせない。五体満足なら対等に戦えるかもしれないが、隻腕ではたとえ再生しながらでも押し負けるだろう。応援を呼んだところで、ファーストでもない他の隊員にこんな化け物の対処は絶対に無理だ。

作戦を変えよう。悔しいが。

グロック17を手放し、宙に放り出された右手を掴んでプレートキャリアに押し付け、すかさず男の指越しにトリガーを引く。

ライノ・200DSはダブルアクション対応のリボルバーだ。それだけでシリンドーに残された最後の一発は発射され、防弾プレートで止まった。

そのまま手を握り込む。

握り潰す。

「お前、んだよそれ……!?!」

「ああ？ 見りや分かんたら」

俺の握力は計測器では測れない。

筋肉が全て自壊する
全力を発揮する前に針が振り切れる。

そんな力でプレスされたらどうなると思う？

「テメーの骨をブチ折ってんだよ！」

束ねた木の枝をまとめて手折ったような、軽くて乾いた音がした。掌の中で、男の大きな手が歪に形を変えたのが分かった。

単純骨折二本。粉碎骨折一本。そして開放骨折——折れた拍子に肉を突き破った骨が二本。

全滅だ。少なくとも数ヶ月は全く使い物にならないだろう。治っても後遺症が残るかもしれない。

ざまあみろ。腕の借りは返したぞ。

でも、ここらが限界みたいだ。男が俺の髪から手を放して、腰の裏に隠し持っていたナイフを抜くのが見えた。

ショルダーアーマーとプレートキャリアの隙間に白い刃が深々とねじ込まれ、否が応にも肩の力が抜ける。

右手の拘束が僅かに緩んだのを目ざとく察知した男は、すぐさま脇の下を扶るように突いてきた。

痺れるような痛みが走った。神経が軒並みぶった切られたらしい。右腕はもう指一本動かせないだろう。いや、どのみち怪力を発揮した代償でお釈迦か。

そして最後に、顔面への左ストレート。インカムが耳から外れて

吹っ飛ぶと同時に、鼻から嫌な音がした。

確実に折れたな、これは。

頭突きの仕返しのももりかよ。なんて内心でぼやきながら、俺は脱力して重力に身を任せた。

背中と頭を床に打っても痛みはない。出血多量で意識が朦朧としていた。血を造ろうにも、あまりに多い流血はかえって怪しまれる。あくまで人間一人の範疇に抑えないと。

「……ククク」

男は、俺を見下ろして笑った。ぼさぼさの緑髪に隠れていた目元が

よく見えた。

「ハ、ハハハ……」

つられて、俺も笑った。

無邪気に笑った。

楽しかったんだ。

スポーツの爽快感に似たものがあつた。

殺し合いを楽しく思ったのは初めてだった。

なぜそう思ったのか、自分でもわからなかった。

「イカれてんぞ、お前」

「言えた口かよ、マリモ頭」

列車はとづくに止まっている。逃げようと思えば簡単に逃げられるだろう。

その前に、少しでも情報を集めないと。

そうだ。まだ気絶できない。意識を失えば、この体は生存本能に従って急速に再生を始める。次の戦いを有利に進めるためには、手札を知られるわけにはいかない。

それに、特別イカれたこいつに不死身なのがバレたら耐久テストにかけられそうだ。拉致されるのは避けたい。

気張れよ、俺。一番の踏ん張りどころだ。

「名前、教えろ。死ぬ前に」

舌がうまく回らない。いや、それ以上に頭が鈍ってきているのがきつい。集中していないと言葉が聞き取れない。

「先に名乗るのが筋だろ？ 死に損ない」

「誰が世界一ツいてねえ男だよ……フォックス・ロット・ワン」

「おい」

「本当だよ。戸籍、ないし」

「はあ？ 気色悪い組織だな……真島」

「真島……」

爆破の余波で壊れたのだろうか。天井の照明が頼りなく明滅している。

死闘が嘘のように静かだ。

「あんだ、これからどうすんだ」

「心配すんな。日本の警察じゃ俺を捕まえんのは無理だ」

「そうじゃなくて……あたしたちは死んでも隠蔽されて終わりだ。テロじゃなくて、事故として報道されるだけだよ」

「てことは、この列車もそういうことかよ……チツ」

折れた鼻から喉に流れ込んだ血を飲み込んだ。

「……いや、そういうことなら決めた。手始めにお前らを潰す。んで延空木もブツ壊す」

真島は実に得意気だった。俺がじき死ぬことを微塵も疑っていないらしい。そりやそうか。死なない人間なんて、いないものな。

せっかくだし遺言でも残そうか。こつちが有利になるような打算を含んだ、ね。こういうのは言うだけタダだろ？ 都合よくインカムも外れたことだし。

「叩くなら上にしてよ……あたしたちをこんなにしたのは、あいつらだ……あいつらばかり、安全なところで……」

目を閉じた。自分を中心に周りの景色がぐるぐる回っていて、気持ち悪かったから。

「……ほお、任せろ。バランスが狂ってんのは嫌いだ」

けれど思わず、目を開けて彼を見上げた。

もう焦点がうまく合わなくて、表情は読み取れなかったけれども、直感で分かった。

こいつ、本気で言ってる。

俺に、似てる？

「……気が合うなあ、俺もフェアなのが好きだよ」

「なんだよ、惜しいやつをぶっ殺しちゃったな」

「ツイてねえな、お互い……」

「全くだ！」

真島はそう言いながら、手近なドアの上に手を伸ばすと、カバーを開けて中の非常用コックをひねった。

逃走方向を確認するために、首を横に倒してそちらを見た。視界が暗いのは車内照明の電源が落ちかけているからじゃない。そろそろ、

本当に限界だ。

抗えない眠気に、瞼が勝手に落ちた。

「……頼む」

駄目だ。耐えられない。何か喋っていないと。

「俺の分まで。死んでったみんなの分まで」

心の古傷を抉った痛みで、辛うじて意識を保つ。

「全部ぶっ壊してくれ……」

怨嗟を込めて、吐き出した。

嘘に混ぜるにはもったいない、俺の本心を。

「任せろ！」

線路の上に降り立った真島は、去り際にそう言った。

仮に。

出会い方や、生まれや、立場が違ったとしたら。

いや、もしもの話はよそう。この間たきなにも言ったじゃないか。

意味がないって。

遠ざかっていく足音が完全に聞こえなくなってから、さらに安全マージンを取って三〇秒後。俺はようやく傷を癒やし始めた。

左腕の断端や脇下などは最低限の止血に留め、まずは右腕の神経を急ぐ。

繋がり次第、寝返りを打って、殴られた拍子に飛んでいったインカムのもとへ這いずった。奇跡的に壊れてはいなかった。

再装着してチャンネルを変更。本部の発令所に繋ぐ。楠木司令が作戦行動を監督しているはずだ。

「こちら……フォックストロット・ワン。対象が、一名逃走。半蔵門線を通って……」

うつらうつらしながら、なんとか言葉を紡いだ。出血性ショックなんて珍しくもない。このくらい慣れっこだ。

「徒歩で、渋谷方面に向かいました」

造血に意識を向けると、少しずつだが眠気が和らいできた。それでも血に蓄えられていた熱がみんな体外に出てしまったのはどうしようもなく、猛烈な寒さに身震いさせられる。

『一帯を監視させる。外形的特徴を急ぎ報告しろ』

「身長一八〇cm前後の黄色人種男性、日本人と推定。頭髮を緑に染色。コート、ズボン、革靴は黒。それとサーモンピンクのYシャツを着用しています」

『記録した。逃走というのは、お前を無力化してか?』

「ええ、左腕のもげた私をボロ雑巾にしていきましたよ。利き手を破壊しましたが、それでもファースト未満では全く対処不能でしょう」

『……知られてはいらない?』

「はい、もちろん」

『ならば構わん。現時刻をもって掃討作戦を終了。部隊はこちらで撤収させる。お前はホームで回収班を待て』

「カメラを外しても?」

『許可する。それと、後ほど開発部が使用の所感を知らせることだ。付き合ってやれ』

「はい……」

『オーバー』

通信が切れた瞬間、俺はまるでうたた寝から目覚めたばかりの猫みたいに、身を横たえたまま大きく伸びをした。

「だあー!・クソ痛ってえー!」

ついでに誰もいないのいいことに、素の口調で叫んでみたり。そんなことができるのも、出血が止まって血液量が回復してきたおかげだ。

俺はジョージ・A・ロメロのゾンビとは違う。生物としての仕組みを無視して動けはしない。

例えば、頭を撃ち抜かれて脳幹の大部分を失ったりしたら、呼吸や心拍のコントロールが効かなくなる。

嫌気生物じゃあるまいし、そうなたらあらゆる細胞に酸素が回らなくなつて死ぬだろう。呼吸が必要で、なおかつ腹が減るってことは、代謝が行われているってことなんだから。

TVゲームの無敵状態のようにはいかない。

そのほうがいい。そのほうが、救いが――

「……ちゃんと撮れてっかな」

思考を中断して、瞼越しに左目を触った。

血溜まりから身を起こして、背負っていたサッチェルバッグを前に抱える。サイドの隠しハッチから手をつ突っ込んで中を探ると、硬く冷たい直方体に指が当たった。

工具箱をそのまま小さくしたような金属の箱だ。手近なベンチシートに置き、蓋を開ける。

中には球形のソケットが二つ。どちらも空いている。蓋の裏にはまつ毛アイラッシュカーラーによく似た形状のツールがはめ込まれていた。

俺はそのカーラーもどきを鋏のように持ち、先端をためらいなく左の眼球に当てがった。

痛みはない。あるはずがない。

掴み、引き抜く。

湿った水音を立てつつも眼窩からするりと外れたその眼球は、筋肉や神経とは一切繋がっていなかった。

俺の黒い瞳を模して作られた義眼だ。

といってもただの義眼じゃない。五千万画素の広角カメラと不揮発性フラッシュメモリ、そしてポピュラーな全固体バッテリーを内蔵した、DA情報部並びに開発部渾身の作……もとい、まるで洗練が足りない未熟児。プロトタイプ

装着するには生身の目を丸ごと摘出しなきゃいけないし、そんな手間が必要な割に録画時間は短いし、衝撃に弱いから普段は専用ケースに収納してなきゃいけないし、重量があるせいで違和感が凄いし、あとなんか常に生暖かく発熱してて気持ち悪いし。

隠し撮りに使うだけならまだしも、これを着けて戦うなんて無茶だよ。右目しか使えないんじゃない、視野が狭くなるだけじゃなく、距離感がまるで掴めない。

まあ、誰も目そのものが録画装置だとは思わないからまずバレないってのは利点ではある。あれだけ勘の鋭かった真島もこっちは全く気付いてなかった。

こっちもまたゼロから再形成しないと。

完治まで何日か、かかるな。欠損は普通の傷と違って壊れた組織を材料にできないから。全身から骨や肉を集めて再形成する都合上、体重も落ちる。鍛え直した。

『こちらフォックストロット・ツー。聞こえるか?』

外した義眼をケースに仕舞ったところで、ちょうどフキさんが通信を入れてきた。

「感度良好。どうしました?」

『お前をすっ飛ばして司令部から撤退命令が出た。何かあったのか?』

立ち上がって、自分の体を見下ろしてみた。

左腕は上腕で離断。右肩と右脇下に深い刺し傷。右大腿に銃創。左眼球は全摘。鼻骨折。右頬と左側頭部に広範囲の裂傷。出血量は……血の海と化した周りを見る限りだと、一・五リットルより少し多いくらい?」

以上を今までの経験から総合的に判断すると、

「問題ありませんよ」

即答できるくらいの平常運転だ。

「ちよつと面倒な奴が逃げましたが、情報部が追っています。あたしも元気ですし」

『そうか。こつちも怪我人一人いない。お前もとつと帰ってこいよ』

「お気遣い、感謝します」

『オーバー』

思わず安堵のため息が出た。

サードライフル
主力小銃と汎用機関銃^Gで武装した集団と正面から撃ち合って全員が無傷だなんて、今までからは考えられないことだ。

もちろん個人の技量が影響しにくい作戦ではあつたけれど、アサルトカービンと防弾装備の有効性は立証できたはずだし、これを機に配備が進んでくれればいいな。

千束のような、敵まで救うだけの力は俺にはない。

だからせめて、仲間だけでも。そう思って準備を進めてきた。

対外的な交渉や折衝は楠木司令が、交渉に使う諸々の――あらゆる超法規的な手段を駆使した――材料集めは俺が。

二年がかりの一大プロジェクトだった。

だがこれはあくまで通過点だ。殺される可能性が減るだけで、なくなるわけじゃない。対症療法に過ぎない。

リコリスも、リリベルも、誰も戦わなくていいようにする。それが、俺の夢。

俺の生きる意味だ。

「何年かかってもいい。この体がどうなつたつて構わない……そうだよな」

捨て置かれていたグロック17を拾い上げた。

サプレッサー用スレツ^{ねじ}デツ^{加工}ドバレルと金属製ハイサイトを備えた凡庸な銃だ。マガジンエクステンション以外は一切無改造で完全なDA制式仕様を維持しており、見る者の印象に残ることはない。

ジョン・ウィツクみたいに片手でスライドを引いてチャンバーを覗いた。9×19mmパラベラムの強装^{+P+}弾が見える。

ストップングパワーからして真島のライノもおそらく同じ口径だろうが、向こうは銃身長が二^{五〇}イン^mチと短い上、シリンダーギヤツプから燃焼ガスが逃げるリボルバーだから、威力は銃身長約四^{一四}イン^mチ半のこちらが勝るだろう。

これを啜えて撃てば、多分、俺は俺を殺せる。

銃口を覗き込んだ。

グロック・マークスマン・バレルの鋭いライフリングが、明滅する光に照らされて白く輝いた。

夢を叶えた俺は生きる理由を失うわけだけど、そうなつたらどうしようか。

少なくとも幸せを求めようとは思えない。

殺してきたツケは払わなくちゃいけない。

勝ち逃げは、フェアじゃない。

「フェアじゃないのは、嫌いだな」

銃身を顔に近づける。残り香というには濃密すぎる硝煙が目沁

みて、我に返った。

自分に陶酔しているみたいで気分が悪い。

余計なことばかり考えて、一体どうしたんだよ。真島に殺しても
らえなかったのがそんなに心残りか？

「……バツカみてえ」

グロツクをバッグのホルスターに収納して、呟く。

袖を伝って肩から流れてきた血のせいで、掌一面に砂粒がびっしり
張り付いているのに気づいてげんなりした。固まりかけてゼリー状
になっていたから感触は最低だ。

完全に乾くと大変なんだよ。そのまま歩いたりすると、剥がれた欠
片が脇や太腿に擦れて傷だらけになってき。そこからまた出血する
とかザラだし。

散々怪我した上でそんな目に合うのもアホらしい。できれば一歩
も歩きたくない。なんて思っていたら、床が鈍く震えて、車両がさつ
きとは逆方向に動き始めた。

「へえ、気が利くじゃん？」

破壊された窓から吹き込む乾いた風を背に、どっかとシートに座り
込む。サツチエルバッグを隣の席に置いて禁断の座席二個使いを敢
行すると、なんだかえらい贅沢をしているようで愉快だ。

そう、ここはもう戦場じゃない。電車が時速二〇kmにも満たない
低速で駅に向かうにつれ、心が日常に近づいていくのを感じる。

そういえば、千束達は今日水族館に行くって言ってたっけ。

制服の比較的汚れがマシな部分を探して、そこに右手をぐしぐしと
擦り付けてあらかた綺麗にしてから、バッグの奥底にしまい込んでい
たスマートフォンを引っ張り出した。通知欄を見ると思った通り、千
束が個人チャットにメッセージを送ってきている。

トーク画面を開いた瞬間、俺は噴き出してしまった。

魚群が泳ぐ大水槽の前に片足で立ち、下手くそな平泳ぎみたいな
ポーズを取って何かを叫ぶたきなの写真が貼られている。千束はそ
れに対して一言、

——さかな——

慌てて撮ったのか微妙にブレていて、妙な躍動感が生まれているのが余計にシユールだ。

そっか。楽しんできたんだな。

たきなはもう、大丈夫みたいだ。

店の公式アカウントに時たま投稿される写真でなんとなく二人の仲がいいことは察していたが、これは予想以上かもしれない。

行きたいな、リコリコ。

掃討作戦が終わり次第、俺は調査任務に復帰することになっていく。きちんと結果を出している限り、多少遊び歩いても楠木司令は何も言わない。気楽なセルフハウス暮らしだ。

俺にとつて日常は贅沢品だ。どれだけ残されているかわからない。そもそも、本来与えられるはずのないものだ。

だからなんていうか、うまい言い回しが見つからないけど、

「ふふ……」

嬉しいんだ。こういう、映画だったら真っ先にカットされてしまうような、なんでもないやり取りが友達とできるだけで。照れくさいから誰にも言えないけどね。

そういうわけで文面上は平静を装っておく。

だが送信ボタンをタップしようとした瞬間、写真がもう一枚送られてきて、

——ちんあなごー！——

俺はツボに入ってしまった。

#4+:

Half Drunk

Under A Full Moon

「鉛筆みたいに持てばいいの?」

「基本は指二本ね。まあ、二本でも四本でも投げやすけりやいいのよ」
「オツケー先生」

床に刻まれた黄色いスローラインの前に立つと、白黒の派手派手しいダーツボードはやたらと遠く感じた。親指、人差し指、中指の三本でやわらかく包んだダーツはびっくりするほど軽く、それがかえって頼りなく思えて落ち着かない。

教えられたことを反芻して、狙いを定める。

ボードと、ダーツと、目を一直線に合わせて。

投げるといふより、優しく送り出すイメージで放る。

手を離れていった安物のハウスダーツはゆるいカーブを描いて――あ、やべつ。さすがに弱すぎた――ブルと呼ばれる的の中央から大きく斜め下に逸れ、最も面積の狭い帯状のエリアであるトリプルリングに突き立った。

一九の三倍トリプルだから、五七点。ほぼ最高得点だ。

……マジで?」

「Nice dart!」

呆気に取られていると、すぐ左隣にいたミズキさんが陽気な声を上げた。彼女が座る壁際の小さなテーブルには、一〇本近いビールの小瓶がまるでピラミッドみたいに積み上げられている。

そこでやつと集中の糸が切れて、周囲の喧騒が戻ってきた。

ジュークボックスから流れるダンスブルなUKロックは、フランツ・フェルディナンドのDo You Want Toだ。背後ではビリヤード・ボールが衝突する硬い音。空間を満たす話し声は賑やかだが騒々しきはない。この広々としたダイニングバーにいるのは節

度ある大人だけだった。

なんでも人様にひどい迷惑をかける阿呆はもれなく、元爆撃機クルーにして現ボディビルダーのボスにつまみ出されるんだとか。

「ダーツにもビギナーズラックってあるんだね」

「まーまー、運も実力の内！ あと二本よ！」

「はいよ」

最近完治したばかりの左手に束ねて持っていたダーツを右手に持ち替えて、今度は少し勢いをつけて投げてみる。ブルの真横にずれて、ナンバー六。たったの六点だ。

密かに気を落としてつつも三投目。下手に知恵を回すとまた失敗する気がして、何も考えずにただ投げた。

すると結局それが一番良かったようで、ダーツはごく自然に指から離れて、見事ブルの縁ギリギリにとどまってくれた。

もう一回やれって言われたら絶対無理だな。

「上手いじゃんーん！」

「喜びづれー……」

ミズキさんの拍手に苦笑で応えつつスローラインを踏み越えて、浅く刺さったダーツを一本一本回し抜く。一体何人の客に投げられたんだか、ボードは穴だらけだ。

「あー！ ミズキがイケメン連れてるうー」

意識の隙間に差し込まれた甘い声に、俺はつい振り返った。からかっているというよりは、じゃれつくような調子だ。ほら、フキさんにウザ絡みするときの俺みたいな。

自己弁護をしておく、その言い方が興味を惹いただけだ。誓ってイケメン呼びに反応したわけじゃない。さすがにそこまでおめでたい頭はしてねえ。

「モネー！ 来てたの」

「アオイもいるよ」

声質に反して彼女のファッションは中々パンキッシュで、特に耳なんかピアスがいくつも空いている。インダストリアル——二箇所ホールに橋を架けるように通す、とても長いピアスのこと——って実

在したんだな。初めて見た。

「それでえ、こつちのイケメンさんはミズキのイイ人？」

「初めまして、斉藤です」

「サイトウちゃんね！ よろしくよろしく！」

モネさん……漢字で書くなら萌音や百音、桃音あたりになるのかな？ 分からないが、とにかく彼女は両手で俺の手を取ってぶんぶん上下に振った。頬がやや上気しているのを見るに、すでに若干酔っているらしい。

店の壁掛け時計をちらりと見ると、もう二一時だ。二軒目ならこんなもんなのかな？ 外で飲むのは初めてだからよく分からない。

「すぐそこに四人席取ってるんだ。よかつたらどう？」

「ミズキさん、どうしよつか」

ダーツを的の下のホルダーに戻しながら聞いた。別にスコアシートは書いていないから、ゲームを中断することに未練はない。

「モネ、あんた確か今日って……」

「ううん、大丈夫。ここじゃ賑やかにつてプランなの」

「あらそう？ ならせいぜい賑やかすか！」

ミズキさんが緑色のビール瓶片手に席を立ったのを見て、俺も座席に引つ掛けていたユニセックスのテラーードジャケットを羽織った。

俺の荷物はこいつと、小ぶりなクラッチバッグの二つ。出掛ける相手が千束やたきなだったら、尻ポケットにスマホと財布とハンカチを突っ込んで終わりにするところだけど、今回ばかりは化粧直しをサボりたくなくて珍しくバッグを持ってきた。

「ミズキ飲みすぎじゃない？」

「まだ四本しか飲んでないわよ」

「ああ、その瓶の山はだいたいあたしが」

「お、サイトウちゃんイケる口だね！ いいねえ……」

俺は今日、一六にしてビールの味を知った。同時に結構気に入った。あの日の夜にミズキさんの家でジンとウォッカとアイラ・ウイスキーをグイグイやってたことを思うと、遅すぎるデビューかもしれない。

コンプライアンス？ うるせえよ今更。発育に悪影響があると言われても、俺の体はそんなもんでどうにかなる造りをしてないからな。

それに法的にも問題ない。財布の中の免許証の上では、俺は二〇歳ってことになってる。誰も不利益を被ったりしないさ。

「アオイー、連れてきたよー！ こっちの子はサイトウちゃんね！」
「よろしく」

席につく前に、初めまして、と会釈を返す。

黒いロングヘアを真つ直ぐ伸ばした彼女は会社帰りなのか、洒落たパンツスーツを見事に着こなしていた。ボリューミーなミディアムボブのモネさんとは好対照だ。

そして俺の目がおかしくなったんじやなきや、ハイボールらしき琥珀色の微炭酸が注がれたタンブラーを持つ彼女の左手の薬指には指輪が嵌まっていた。

それも、モネさんが左の薬指に着けているものと同じ。

なるほど。最初、ミズキさんが遠慮したのはそういうわけか。

「すごく久しぶりに感じるけど、一月しか経ってないのよね。お酒の量が減ったんじやない？ ミズキ」

「まあーねっ！」

「その調子の乗り方、本人の努力じやなさそうね……背の高いお友達のおかげ？」

「ぐっ!？」

「ミズキさん、見張ってないと止まらないんですよ」

「ぐああっ！」

「あはは！ おっかしー！」

「うっせー！ 笑うんじやねー！」

言いながら、ミズキさんは瓶ビールを呷った。これで五本目だ。そろそろ強いのはセーブしてもらおうかな。もちろん無理のない範囲で。

「サイトウさんはミズキと長いの？」

アオイさんは控えめな抑揚で喋る人だった。しかし口調が柔らか

いおかげで無愛想という印象はない。

「だいたい三年前からですね。リコリコ——喫茶店に通うようになったのがそのくらいで」

途中で隣のミズキさんに目配せすると、

「私も丁度その時に転職したから」

彼女は俺の言葉を引き継いだ。口裏は三年前に合わせてあった。DAに拾われた——あるいは拐われた?——と思われる四歳前後の時分を除けば、記憶の欠落が一番ひどい頃だ。

今はそれ以上のことを思い出す気にはなれなかった。まだ心の準備ができていないし、何より今夜は楽しむと決めていたから。

月並みな表現だが、胸がちくりと痛んだ。

大切なものを、軒並み捨て置いているように。

大丈夫。近いうちに必ず決着をつける。こんなことをしている場合じゃないなんて思う必要はないんだ。

ないはずなんだ。

「私達と同じくらいね」

「そういえばミズキと初めて会ったのもここだったっけ。もつとずつと前から一緒に飲み歩いている気がするわあ」

そこから先の展開は早かった。

ビール片手にポテトサラダをもりもり食べながら、友達の友達はどう友達、などというゲシユタルト崩壊を誘発する持論を展開するモネさん。

グリルドサーモンをアテにス胡椒を振った・ハイタリスカーボールを上品に傾けておいて、モネとは一心同体だからモネの友達は私の友達、とシラフじゃ閃きさえしないような台詞を平然と言い放つアオイさん。

ミズキさんは言わずもがな、ほら、その……クルミの件で色々あったから、もう互いに遠慮するような仲じゃない。元からそうといえ、確かにそうだけれど。

でも間違いないあの日から、関係は少しだけ変わった。一種の信頼関係に近いものが築かれたような気がしている。

もちろん、罪悪感を忘れたわけじゃない。リコリコのみんなが俺を

許してくれたとしても、俺は俺を許さない。

それでも。

ミズキさんは、ここにいていいんだと言ってくれた。

「あたし」でも「俺」でもない、斉藤ヒマリという一人のありのままを肯定してくれた。

生きていていいのかもしれないと思わせてくれた。

救われたんだ。

いつの間にか、時刻は二二時を回っていた。

俺はその一時間でカリフォルニア・レモネードとジン・フィズを飲んだ。女三人寄ればかしま姦しい、ということわざは真実だったようで、誰も喋ってない時間なんてのは一秒もなかった。

静かになったのは単純に、全員のスタミナが切れたからだ。そろそろ飲み会も潮時かな。そう思つて帰るタイミングを伺っていたら、

「さあて、そろそろ——」「ミズキさん、そろそろ——」

ちようどミズキさんと言葉が重なった。こんなしょうもないことで吹き出すの、なんか悔しいんだけど。

「そういうわけで、あたし達はこれで」

とりあえず俺が言い切った。

「そっか、もうそんな時間かあ。私らも出よっか」

「そうね。化粧直ししてくるけど、モネはどうする？」

「じゃあ、サイトウちゃんに上見せたげたいな。それに……ね？」

「ん、皆まで言うな」

「なんか企んでませんか？」

「まーまー、悪いようにはしないからちよつとおいで。ミズキ、サイトウちゃん借りるよ」

「おう。早く返せよー」

どうやら拒否権はないらしかつた。あつたところで別に拒否なんかしないけど。

ハンドバッグを持ったモネさんの背中を追いかけていくと、彼女はバーカウンターの前を横切つてホールを出た。この店はキャッシュ・オン・デリバリー、注文ごとに会計を済ませるシステムだから問題は

ない。だから一応、廊下も店舗の一部になっていて、化粧室なんかはそこにあつた。

「屋上にも席あつてさ、煙草吸えるんだ。だから一緒にどうかと思つて」

その廊下にある階段を上りながらモネさんは言った。

非喫煙者にとって煙は凄まじい悪臭ということとは重々承知していたから、誰かと一緒に控えている。それをやんわり伝えると、

「ミズキは気にしないよ」

返す言葉が見つからなくて諦めた。

屋上は全面テラスになっていた。下のそれよりだいぶ小ぢんまりした屋根付きのカウンターを囲うようにして、丸いガーデンテーブルがいくらか置いてある。それなりに高いビルのてっぺんだから、よそに煙草の煙が流れる心配はないだろう。

人混みを避けて、テラスの端の席に掛けた。

じき、夏が来る。だからだろうか。風は切り裂くような冷たさも、周囲のビルが放つエアコンの廃熱とも無縁で、火照つた顔を冷ますのに丁度よかつた。

歩道をひしめく酔っ払い達の騒ぎ声はもちろん、地上を走る車のロードノイズや排気音も、ここまででは上がつてこられないようだ。

ゆるく張られたストリングライトの薄明かりの中では、時間の流れさえ緩やかに思えて。

大人達がこぞつて来るわけだ、と納得した。

「……いいところですね」

「でしょ？ 私も好き」

膝の上のクラッチバッグからソフトパックを取り出した。

手首のスナップでパッケージを振り、飛び出た一本をくわえながら、もう片方の手でジップライターのフリントホイールを擦る——横から気配がしたから目線だけでそちらを見ると、モネさんは古木の円卓に頬杖をついてニマニマと笑っていた。

「……なにか」

「んふふ、サマになるねえ。なりすぎてるくらい」

火を付けてから「年相応には、見えない？」と聞いてみた。口からかすかに白煙が漏れる。

「二年……いや、一年フライングしたでしょ」

当てられてしまった。喫煙歴という意味ではそうだ。

「二〇歳はたちになったら辞めようと思ってたんですけどね」

「あはは！ 悪い子だあ」

「真面目に待つ人っているんです？」

「私は待ったよ。なんせしつかり者ですから」

細長い紙巻を、これまた一〇〇円ライターのか細い火にくぐらせながらモネさんは言う。テーブルに置かれた明るいグリーンボックスは、典型的な女性向けの銘柄だった。

「……………笑うところよ？」

「勘弁してください」

「優しいのね」

存外に真面目な調子でそう言われてしまって、少し戸惑った。

動揺を隠すようにフィルターを口に運ぶ。紙ではなく、焦げ茶色をしたシートタバコで巻かれたリトルシガーだ。

珍しく煙を肺に入れた。呼気と一緒に出ていくそれが夜空に溶けて消えていくのを、二人で何度か見守った。

「ミズキが気に入るわけだ」

「あたしの話を？」

「ええ。結構気にかけてるのよ、あれで。だからどんな男のかなーと思つてたら」

テーブルの中央に置かれた灰皿に、二人揃って灰を落とす。

「超カッコいい女子でびっくりしちゃった。アオイとくつつく前だったら声かけてたかも」

モネさんは特段気負った様子もなく、冗談めかした口調でそう言った。だがどこか、ぱっと見ただけでは分からない程度に、五体が緊張している気がする。

俺の反応を確かめようとしているのか。

口を開いて、当たり前障りのないことを言おうとして、やっぱりやめ

て。少し逡巡してから言葉を返す。

「……半分、男でも？」

「私はそうね。身体の性が女の子なら、あとは相性。イケメンならなおよし！」

大丈夫、だった。

煙を吐く仕草に紛れて、ほっと一息つく。

緊張していたのは俺も、か。

「あ、でも最初はミズキにちよっかいかけててえ！」

「ゲツホツ!？」

「あはは、マジマジ！ 知り合ったばかりの頃……二一の時ね、結構いい線行ってたんだけどフラれちゃったあ」

「えっ、あの、あのミズキさんが女の人と……？」

あの、をことさらに強調すると、モネさんは煙草を挟んだ手で口元を抑えて、ひどく苦しそうに大笑いした。断じて悪意はなかったんだが、俺もつられて笑いが込み上げてきて、腰を曲げて腹筋を震わす羽目になった。

気の済むまで二人で悶え苦しんでから、半分ほどになった煙草を一口吸って区切りをつける。

「ま、結果オーライね。もしミズキと付き合ってたら今の関係はなかった。こっちのほうに心地良いわ」

「気まづくなったりしないものなんですか？」

「気まづくなるトコまで行かなかったからねえ。あの人、そうなる前に我に返ったの。私は異性愛者^{ヘテロ}だって」

「気の迷いだっただ」

「どうだろうね？ ^{ジェンダー}性は流動的な、ひとつの属性でしかない。背が高い、低い。髪が長い、短い。そういうね」

「タイプじゃなくても惹かれることはある……ってこと？」

モネさんは柵の向こうの摩天楼に視線を向けたまま、鷹揚に頷いた。

俺にはよく分からなかった。そもそも好きなタイプがどうとか、あまり考えたことがない。男がストライク・ゾーンのはるか外ってこと

だけは確かだけど、逆にそれ以外はさっぱり。

「冷静に考えた結果、交際を断った……計画性があっていいように思えるけど」

「あら、正気の恋ほどつまらないものはないわよ?」

恋は盲目、みたいなの? 内心で呟く。専門外の分野だから余計なことを言うのはよしておいた。実体験の伴わない知識は大抵役立たずだ。

「正気の、恋?」

「恋愛感情と混同しちゃいけないものは沢山ある。でもそれは自覚をなさなくてだけで、一緒にあっちゃいけないわけじゃない」

モネさんは煙草を一口吸って、続けた。

「ごちゃごちゃしてていいのよ、最初は……いえ、きつと最後まで分かんなくなつていいんだわ。どうしてその人が好きなのか、一緒にいたいのかなんて」

付き合ってからわかることだつてあるしね、と彼女は最後に言い足した。

静かな口調に深い郷愁を感じた。聞いていると、居住まいを正さなければならぬような気持ちになる。

他人事ではないからだろうか。

「先のことばかり考えてしまうのは、やっぱり良くないでしょうね」

「逃したくない相手がいるのね」

「……傷つけたくない女性です」

「相手のことをそう思えるなら、きつと大丈夫よ。真摯に話し合つて、それでも妥協点が見つからないっていうなら、潔く失恋するしかないけど……ま、そのときは私達が慰めてあげる!」

朗らかに締めくくるや、モネさんは吸い殻がまばらに植わつた灰皿の隅に、桃色の口紅が薄く付いたスリムフィルターを押し付けた。その微かに上る紫煙からシトラスメンソールの爽やかな残り香を感じられるのは、きつと喫煙者だけだろう。

最後の一口は長く吸つた。温かい煙を細く吹きながら、俺もリトルシガーを揉み消した。

「……頑張ってみます。色々」と

「応援してるわ」

今日は満月だ。

§

「そういえばあんた、屋上で何喋ってきたの？」

「秘密」

「ケチい」

「ヤダ。恥ずかしい」

信号が青に変わった。普段より随分丁寧にアクセルを踏んだ。デュアル・クラッチ・トランスミッションが瞬時にギアをファーストに切り替える。低回転からでも強烈に立ち上がる過給圧を見極めて踏力をじわりと緩め、同乗者に加速Gを感じさせないまま巡航速度へ。

とても送迎には使えたものじゃないな、この車は。見た目はただの三ドアハッチバックだけど、エンジンが凶暴すぎる。

やっぱりセダンに乗ってくるべきだったか。でもあれ、若干高級志向だから自称二〇歳には似合わないんだよな。まして装甲バンなんて論外。中間が無いのが悩ましい。

交差点を真っ直ぐ抜けて、首都高の入り口に入る。法定速度を若干オーバーしながらゆるいコーナーを曲がり、見えてきたETCゲートを通過――

「やっぱ乗り心地いいわね、この車」

――マジで？

思わず助手席のミズキさんを横目で見た。サイドウインドウに赤らんだデコをくつつけて呑気に夜景を眺めている。この様子じゃお世辞ではなさそうだな。

「そう？・よかった」

口ではそう言いつつも、こっさり首を傾げた。俺が敏感すぎるだけなのかな。

確かに電子制御式サスペンションの減衰力は限界まで落として柔らかにしているし、ターボにはリミッターをかけてピークパワーを三〇〇馬力に制限中。ボディも剛性強化の際には変な共振が起こらないよう、振動特性にえらく気を遣った。

それにしたって、取り繕えない挙動の硬さはあると思うんだけど。

「ボディ剛性とスプリングレートが噛み合ってる、タイヤが路面にしっかりと吸い付いてる……熟成されてるわ」

「……うん。結構、頑張った」

「ウチの社用車もこんくらい速いといいのに」

「リッター五キロしか走らなくなるけどいい？」

「最高！」

ミズキさんもスピード狂だったか。

わからないな、全然わからない。俺はまだまだこの人を知らない。だからこうやって一緒に出かけるのが楽しいのか。

いや、きつと全部わかってても楽しいんだろうな。

「ね、合流で踏んでみて！」

「えー……車内に吐かない？」

「そこまで酔ってねーやい！」

「なら、ちよつとブースト上げるよ」

ダッシュボードの小物入れを開けて、中に隠していたタッチパネルからエンジンの制御モードを切り替えた。

「これで四五〇馬力」

「ちよつとで出しているパワーじゃねーな……」

パドルシフトを弾いてマニュアルモードに入れ、ギアをひとつ落とす。右ウインカーを出しながら前後を確認。周囲に車がないか、特に覆面パトカーの存在をチェック。

アクセルを底まで踏んだ瞬間、俺たちはワーブした。

タコメーターの針が一瞬でレッドゾーンに迫る。あまりの加速に内装がぎちりと軋む。一度のシフトアップを挟んでなお、それが緩む気配はない。

「う、お、おとおあああつ……！」

隣で苦悶の声が聞こえる。見れば、亜麻色の長い髪が慣性でみんなシートに張り付いていた。

四速の回転^{レブリミット}上限までたつぷりぶん回して、ようやくアクセルを抜いた。たった数秒ベタ踏みしたただけで時速一六〇キロオーバーだ。こいつに次元転移装置を積んで一・二二ジゴワットの電力を食わせれば、停車状態からでもたった四・五秒で時速八八^{一四}マイル^{一キロ}に達してバック・トゥ・ザ・フューチャー^{バック・トゥ・ザ・フューチャー}未来に吹っ飛ぶことができる。

「アーツハツハツハ！ ヤバーい！」

エンジンブレーキでゆるゆると減速していく車内でミズキさんは高らかに叫んだ。お気に召したようで何より。

やつと回転数が落ちてきて、カーステレオから流れるレトロなポップソングが聞き取れるようになってきた。フラテリスのHalf Drunk Under A Full Moonだった。シンデレラを自称する某喫茶店員のリクエストだ。

「あ、見て」

速度が二ケタまで落ちたところで、ミズキさんは不意にそう言った。視線は正面、ずっと上。フロントガラスに鼻を擦り付ける勢いで身乗り出している。

「満月」

「本当？」

彼女を真似て、俺も空を見た。

雲の切れ目に、確かにあった。

黄色くて、大きくて、

「綺麗だね」

錦木千束は悩んでいた。

「むう……」

原因は目の前の四畳半にあった。ちゃぶ台の上にラップトップを広げ、何やら恐ろしい速度でキーを叩きまくっている一人の少女だ。なぜか彼女のあぐらの中にすっぽり収まってこっくりこっくり舟を漕いでいるクルミはまあ、この際いい。

黒目黒髪、白い肌。個々の要素を抜き出せば、我らがリコリコのクールビューティー担当で知られるときなど共通する部分もないではない。だが、長いまつ毛に縁取られた切れ長の目と、大胆に眉と耳をさらしたベリーショートヘアが織りなす中性的な色気は唯一無二のものだ。

極めつけは男勝りの上背。そして、一グラムの贅肉さえ見当たらないスレンダーなボディライン。

千束は思う。

このルックスで腹筋割れてるのはズルじゃん、と。

未成年喫煙常習犯だけど何故か全然タバコ臭くないし。むしろふんわりいい香りするし。

顔が凛々しすぎて一見怖いと感じる人もいるけど、喋ってみると案外気さくだし。それに笑うと目尻が柔らかく下がるのがカワイイし。

頼めばめちやくちや綺麗にメイクしてくれるし。

料理上手だし。機械に強いし。誰にでも優しいし。手大きいし。

無自覚なギャップ萌えの嵐で一体何人の女の子を狂わせてきたのか——男の子より男の子してるから異性と付き合ってるイメージがイマイチ湧かない——恐ろしいったらない。

そう。あくまでも自覚なしにイケメンムーブをぶちかます。そんな極めて罪深いスタイルをサイトウは今日まで貫いてきたはずだった。

はずだったのだが。

「むむむ……」

「何してるんですか。もうレジ閉め終わりましたよ」

「いやさあ」

「……なんですか?」

背後の厨房へ、重々しく、シリアスに振り向いた。

給仕服のたきなは呆れ顔だ。当然だろう。仕事が終わったならあとは着替えて帰るだけ。だというのに、一旦始まると中々終わらないことで有名な千束劇場を開演しているとくれば、誰だってそんな顔をしたくなるというもの。

それでもチクチクと突き刺さる視線をあえて黙殺して、千束は口を開く。

「今日のサイトーかわいくね?」

本人に聞かれないよう、声量を抑えて言った。

そう、カワイイ。時々、表情が柔らかい。まれに魅惑の低声アルトがほんの少し高くなる。

大人の間に混じっても違和感を覚えないほど成熟し、達観した彼女が、その瞬間だけは年相応に無邪気な表情を見せるのだ。

肩の荷を下ろして、心の底から幸せそうに。

それは千束が彼女に出会ったその日から、密かに願い、夢見てきたことでもあった。故に見逃すはずがない。

この目はごまかせない。そんな自負を示そうと、じつとたきなの瞳を見つめる。

彼女は視線を受け止めると、細い指を自らのおとがいに当てて熟考した。

そして、

「……恋愛相談ですか?」

「ちがわいい!」

千束はすつとぼけたクールビューティーに一喝した。

「千束さんの勘が囁くのよ、絶対なんかあったって!」

「別に普段と変わりなさそうですよ」

「ちつちつちつ、お主もまだまだじゃのおたきなちゃん。見ればわかるよ」

「早く帰りたいんですけど……」

口ではそう言いつつも覗きに付き合ってくれるたきなを伴い、千束は戸口の陰に身を隠す。

サイトウはクルミの仕事部屋押し入れを背にしており、二人のいる厨房から見れば左を向く格好になる。つまり、ここは完全な死角。仕事に集中しているようだし、わざわざこちらに顔を向けるようなこともないだろう。

そんな無敵の布陣で機を伺う。サイトウのデレは希少だ。引き出そうと思つて引き出せるようなものではない。今は待たねば。

「クルミ」

「んあっ!? 寝てないが!？」

「デリバリーと賄い、どっちがいい?」

バネのように飛び起きたクルミは心底気まずそうに賄い飯を所望した。彼女の体軀に見合わず大きな胃袋はサイトウに掌握されて久しい。

サイトウはキーボードに載せた手を忙しく動かしながら、穏やかな調子で続けた。

「もうすぐお風呂が沸くから、よかつたらご飯の前に入っておいで」

「……すまん」

「保守整備なしに最大効率発揮できない。そういう打算だよ」

「感傷は嫌いか?」

「クルミが好かないだろうと思つて」

「殺し文句だなあーお前!」

千束の脳内Jアラートがサイトウの言動に反応しかけ、しかし直後に誤報を発表した。あれは素のスパダリムーブだ。あえて言うなら攻めであつて、デレではない。

そう、基本的にサイトウは面倒見がよかつた。今もあぐらの中から抜け出して風呂場へ行こうとするクルミへの、

「シャンプー切れかけてるから、詰め替え用持つて行ってね」

細やかな気遣いを忘れていない。

おのれはオカンか! はよデレろっ! 千束は内心で絶叫した。

後頭部に突き刺さるクールビューティーの視線が段々痛くなってきたがゆえの焦りだった。

だがほどなくして彼女の心配は杞憂となる。茶の間のもう片方の出入り口、脱衣所やらトイレやらに続く廊下から、クルミと入れ替わるようにしてミズキが現れたのだ。

「っしやあ大本命……！」

ミズキはサイトウが最もデレやすい人物だった。同年代の高校生に比べてずっと大人びている彼女のことだ。年上の方が何かと馬が合うのかもしれない。

千束もたきなもサイトウとは時折街に繰り出す仲だが、わちゃわちゃと無軌道に盛り上がる二人をさり気なくエスコートしてくれるのはいつも彼女だ。合わせてもらっているような感覚は否めなかった。

「お疲れ様」

いつもの私服に着替えたミズキを見るや、サイトウは作業の手を止め、柔らかな声でそう言った。いたわる気持ちがあふれんばかりだ。

そりやあもちろん、サイトウは誰にだっていい加減な「お疲れ様」は言わない。しかしなぜだか、千束の胸中には謎の敗北感が去来した。具体的に言うとうと、ハンカチを噛んで、さながら小鳥の威嚇のようにキーツ！ と鳴きたくなる類の。

「鍵は一通りかけたから、帰る時に玄関だけよろしくね」

「ありがとう」

「残業は終わりそう？」

「おかげさまで。コード見る？」

「見るー！」

サイトウがラップトップを対面に向けるより早く、ミズキは四畳半をぐるりと回り込み、身を弾ませるようにして彼女の隣に座り込んだ。仲良し二人組の微笑ましい一コマだが、千束からすればたまったものではない。とっさにたきなを尻で押しつけていなければ、今頃出歯亀……もとい人間観察を咎められて厄介なことになっていたら

う。

突然のヒップアタックに対する報復の消音ケツピンタを甘んじて食らっている、キーボード中央の赤いポインティング・スティックを慣れた手つきで操作していたミズキが奇怪なうめき声を上げた。

「これICEブレイカーじゃない！ 国防総省にでもカチコむ気……？」

「ブラックマーケットのバックヤードにカチコむ気。ざっくり言う、とあるロシアン・マフィアの在庫と金の流れを追って」

「アングラサーバーにすら侵入対抗電子機器ボードが入ってる時代つてわけ……ジエネレーションギャップ感じるわー。私も歳食ったなあ」

言いながら、カラカラとニヒルに笑うミズキの横顔。その後ろでサイトウがわずかに身じろぐ。いや、亜麻色の豊かな髪に邪魔されてそう見えただけで、本当は肩をすくめたのかもしれない。

「ミズキさんは若いよ」

「アラサーは若かねーわよ」

「お世辞で言ってるように見えた？」

サイトウはちやぶ台に頬杖をつき、上体をわずかに前傾させた。いかん、気付かれる。だが、ああ、見るがいい。彼女の猫のように無邪気な仕草を。いたずらっぽい上目遣いを。ミズキだけに向けられたそれは、普段は鳴りを潜めている年下属性を存分に発揮した魔性の笑みだ。

かーっ！ 見んねたきな！ 卑しか女ばい！

「ほー、そう来るか。そうかそうか……」

ミズキはゆっくりとラップトップを閉じた。俯いた顔をウエーブのかかったロングヘアが覆い隠し、ステレオタイプな女幽霊がごときおどろおどろしさを演出する。

ぞくりと背中に怖気が走る。

千束の第六感が警鐘を鳴らす。

「なあこっ？」

呑気なサイトウは彼女が体をわずかにたわめたことに気付かない。

否。千束以外、気付ける者はいなかった。

「なにつて……これよっ！」

「え、ちよっ!？」

タイトスカートなど何のその。ミズキは素早く膝を立てると――

「だりやあつ！」

「うわあああつ!？」

サイトウの上に着弾し、瞬く間に彼女を組み敷いた。

齡二七。身体能力の全盛期を過ぎ、加えて非戦闘員でもある彼女の身のこなしは、正直そこまで素早いものではない。だが、その行動の突飛さと捨て身っぷりがサイトウに回避を許さなかった。

早い話が、避けたら私が怪我するぞと、自身を人質に取ったのだ。

あるいは、サイトウは決して避けない。そんな確信があったとも言えた。

「オトナをからかってんじゃあねえぞおー！」

「待つて待つて、からかってな、あ、あはは！ やめっ！ やめて、はははははっ！」

「ここか！ ここが弱えのか！ グへへへへ！」

「ぎゃーっ！」

放送コードに引つ掛かりそうなゲスい台詞を吐きながら、尻に敷いたサイトウをそれはそれは楽しそうにくすぐり倒すミズキ。千束にはそれがどうも照れ隠しのよう思えてならない。

サイトウもサイトウだ。彼女の重戦車じみた馬鹿力をもつてすれば、マウントポジションなどたやすく崩せるだろうに、反撃する様子は全くない。まるで女の子みたいな――いや事実女の子のただけだ――悲鳴を上げながら、懸命に身をよじってミズキの魔手から逃れようとしているが、その程度では気休めにもならないだろう。

自ずと答えは絞られた。

二人とも、この寸劇を楽しんでいやがる。

千束は過去数ヶ月に渡る記憶を大雑把に辿った。

彼女たちが急速に距離を詰めていったのはここ最近のことだ。サイトウ朝帰り事件に始まり、その日以来交わされなくなった敬語。そ

してこないだの、どうやらサイトウから誘ったらしいディナー兼飲み会。これらのイベントはさほど期間を開けず、立て続けに起きた。

サイトウとミズキ。本来、二人に共通項はほとんどない。趣味も嗜好も、性格だつてまるで違う。

そういう関係？ ナイナイ。サイトウにはボーイッシュなイメージこそあれど同性が好きという話までは聞かないし、ミズキなんて筋金入りの異性愛者だ。第一、朝帰り事件後の釈明でその線はとつくに否定されている。

大体、今までマッチングアプリやら婚活サイトやらでさんざん玉砕している飲んだくれアラサー女と、宝塚の舞台からそのまんま飛び出してきたような全自動夢女製造マシーン^{JK}がくつつくなんで、シユワちゃんが完全菜食主義者^{サイーガ}に目覚めるくらい荒唐無稽な話だろう。

……いや、そういえばあの人、晩年はずっとヴィーガンだったわ。まあそれはさておいて。

惚れた腫れたじゃないならやはり、友情を深めるきっかけが。つまり共通の話題になるような何かが発生した。そう考えるのが道理だ。瞬間、千束の脳細胞は激しくスパークした。あるではないか。すべてとは言わないまでも、大体の人間に通じるものが。

「はっはーん……分かつちった」

「しっ、聞こえますよ」

「たきな、あの二人密かに——」

そしてめいっばい得意げな顔を作つてたきなの方へ向き直り、

「——彼氏いるな」

「……は？」

斜め上の推理を誇らしげに披露したのだった。

#4++：Peek—a—Boo

「どうして二人に交際相手がいると考えたんですか？」

「言つてなかつたっけ？」

「何も説明されないままスクーターに乗せられてるんですけど」

「すみません！」

抗議の意味を込めてか、それとも交差点を曲がるベスパが減速したせいか、タンDEMシートにまたがる彼女のハーフ・ヘルメットが千束の後頭部をつついた。バンクした車体を起こしつつ、実はかくかくしかじかで、とスロットルグリップをひねりながら自らの閃きを今一度説明すると、

「尾行なんて、プライバシーの侵害です」

至極真つ当な反論とともにバツカでかいたため息をつかれてしまった。

ぐうの音も出ないとはこのことだ。だが千束は謝らない。友のためならば時には非道に手を染めることも必要なのだ。これは断じて無遠慮な野次馬根性からなる行為ではない。ないつたらない。少なくとも千束自身はそう信じてやまない。

ゆえに千束は、一つ屁理屈をかますことにした。

「うん、いけないことしてる。でもねたきな、想像してみ？ サイトーに本当に彼氏がいるとして、そいつが大学生とか社会人だったらどうよ」

「節度ある交際ならいいでしょう」

「じゃあ手出してたら？」

「最低ですね」

食い気味の即答だった。

そうだろうそうだろう、友達は大事だろう。支持を得られた千束はご満悦だ。

「でしょ！ ま、悪い男に引つ掛かるような子じゃないと思うんだけど、備えあれば憂いなしってことで」

「本音は」

「ウチのサイトーにコナかけよったヤカラのツラあ、拝まにや気が済まあん！」

食い気味の即答だった。

即答、してしまった。

赤い制服に守られていない二の腕から前腕にかけて、一気に鳥肌が

立った。

夏のぬるい夜風に当たって体が冷えることなどあるまい。間違はなく後ろからすつ飛んできた殺気のせいだ。

腹に回した腕で千束の緊張を感じ取ったらしいたきなは、しよーがねーから許してやらあ、とばかりに、もう一度大げさに嘆息した。

「千束はサイトウさんの何なんですか……」

「一三歳からの大・親・友ですがっ!？」

「大親友、というと？」

「あ、この辺で下りるよー。その話は今度ね」

「……錦糸町駅ですか」

千束は混み合った車道から、両脇の歩道を見た。仕事を終え、大挙として酒を飲みみに駅前へ押し寄せたサラリーマン達がぞろぞろと、列をなすほどではないにせよ歩いている。塾帰りの中高生もちらほらと。リコリスのゴールデンタイムだ。

二人は駅前のパーキングでスクーターを降りた。

「最近南口の飲み屋街のほうに通ってるっぽいんだよ。一人で」

「そういえば、仕事中に見かけましたね。制服も着てませんでしたし」

「うおお心配でお腹痛くなってきた……」

錦糸町はいわばプチ歌舞伎町だ。居酒屋に、クラブに、ホテルや性風俗店まで、人間の欲にまつわるものなら大抵ある。華やかで、猥雑で、だからこそ、その煌びやかな電飾と喧騒を隠れ蓑によからぬ商売に手を出す不届き者が絶えない場所でもある。警察の尽力とD Aの気まぐれな斬首作戦によってその手のごろつきはめつきり減ったが、それでもゼロとは言えないのだ。

北口前から、駅構内を素通りして反対側の南口へ。大通りを外れれば、背の低い雑居ビル群が通りいっばいに軒を連ねる典型的な繁華街が広がる。

千束はスーツの群れに混じって狭い歩道を歩きながら、背中のサッチェルバッグに納めるガバメントの重みを確かめた。まさか往來のど真ん中でぶつ放すわけにもいかないの、所詮は本当にまずい事態が起きた時のための保険でしかないが。

「探す当てはあるんですよね？」

「ふっふっふ、前もってクルミに特定を頼んでおいたので楽勝なのですっ！」

「ストーカー規制法違反」

「ごめんて……」

クルミが片手間に作ってくれた件のアプリは、警察の監視カメラ網に特定の人物が映った際、当該のカメラの座標を地図上に強調表示するという、ラジャータの機能を大幅に簡素化したような代物だった。

顔のサンプルには千束のスマホに収められた写真を使った。

例の朝帰り事件の日、真っ赤なダブルベリーソースがたっぷり絡んだパンケーキを口に運びかけ、カメラを向けた千束に気づいて視線を上げたサイトウ。

先日三人で行った猫カフェで、誰にも靡かなかったロシアン・ブルーのルカちゃんを一瞬にして手懐けて膝の上でゴロゴロ言わせているサイトウ。

リコリコ開店前の茶の間で、ミズキの長い髪を巧みに操ってヘアアップを結ってやっている——本人はどこをどうやっても結べないレベルの短髪のくせになんでそんなに手慣れているのかはこの宇宙最大の謎だ——サイトウ。

特にイケメン指数の高い、千束選りすぐりの三枚だ。

自分を信じて撮らせてくれた写真をこんな行為に使うなんて、正直申し訳なさで土下座どころか頭を地面に丸ごと埋めたくなってくるが、さりとて彼女が心配なのもまた事実。泣く泣く顔認識AIにデータを読ませる。

結果はすぐに出た。

「この通りの……すぐ先ですね」

「うおっ、たきな前、前！」

彼我の距離は一〇〇m程度と尾行の間合いとしては近めだが、雑多な夜の繁華街では下手をすると見失いかねない。だがそれでも、人混みの隙間に見えるその姿を見間違えるなど、千束にはありえないことだった。

ラフな私服から一転、今やポピュラーなものになって久しいメンズ仕立てのユニセックス・スーツを——それも着丈をぴったり合わせたオーダーモデルを纏った彼女は、一七四cmもの長身に見合った脚を大きく振り出して往来を堂々と闊歩していた。

微かに光沢を放つネイビー・ストライプの上下は、もしやシルクと高級ウールの混紡だろうか。独特の素材感が醸すラグジュアリーな印象はビジネスユースにはいささかもて余し、一般的な会社員のそれではない。

だが何より注目すべきは、そんな仕立てのいい背広にも、鏡のように磨き上げられたブラウンの革靴にも、左の袖にさり気なく覗く白銀のエベル・スポーツクラシックにも全く競り負けない素材のポテンシャルといえよう。

顔こそ見えないが、背中から漂う風格はもはやかつこいを通り越して威圧的でさえあり、年齢の推測などとても不可能。まして一六歳の女子高生だと言って一体誰が信じようか。

「ゴッドファーザーかオメーは」

というのが、千束の率直な感想だった。

フルアーマー・サイトウ、恐るべしである。

「よく見えましたね。一人ですか？」

「うん。特にお連れさんはいないかな……つと、今右に曲がって路地裏に入った。四つ奥」

「その道にはカメラがありません。このままでは見失います」

「うし、追っかけるか！」

「まさか誘い込まれてないですよね」

「さあすがに振り向きもしないで分かったらエスパ―よエスパ―。ここはどーんと大船に乗った気持ちで！ ネー！」

「だといいですけど……」

スマホ片手に人の合間を縫って足早に歩く二人は、傍から見れば、帰りを急ぐ高校生そのもの。学生服は街のあらゆる風景に馴染み、溶け込み、同化する。とはいえ相手は同じリコリス、それもファースト並みの超精鋭だ。いつものように行け行けドンドンではまずい。

だがそれもまた一興。たまには同じ土俵で鎬を削るのも悪くない。気心の知れた相手との競争は、なんだって楽しいのだから。それが模擬戦であれ、ボードゲームであれ、隠れんぼであれ。

§

……なんであいつら俺を尾けてんだろ？

なんであいつら俺を尾けてんだろ？

まあいいや。空気の読めない人間でもなし、仕事の邪魔はしないだろう。そう結論づけて、通りがかった高級SUVの黒く艶やかなバツクドアから目を離した。先鋭的なパネルラインに沿って激しく折れ曲がった鏡面は正確な像を結ぶことこそないが、どこに誰がいて何があるかを大まかに把握するにはそれなりに使える。無論、車が徐行しているときに限るが。

雑居ビルの両脇に張り付くようにして歩く群衆をすり抜けて、見知った横道に逸れる。歩調は緩めない。あくまで千束とたきなの尾行には気づいていない、という体を守る。

するとスーツの男が一人、人混みの中から抜け出て俺の背後についた。彼の名は原^{ハラ}。DA情報部第六課から特命情報調査室に引き抜かれた精鋭だ。

六課は主に、ラジアータでは追いつけない非デジタル情報の収集と抹消を担っている。俺と同じ汚れ仕事^{ウエツト}の請負人^{ワーカー}にして、強力な即戦力というわけだ。

その道のプロなだけあって、一五〇mほど後ろで基本的なセオリーを遵守したお手本のような尾行を続けるファーストとセカンドのコンビの存在にも、

「ハラ、無害だ。気にするな」

「そうか」

彼はとつづくに気づいている。

二人の尾行は十分実戦に堪える練度ではあるんだが、さすがに俺たちのような本職相手じゃあ、どうしても経験の差が出てしまうな。

俺が千束に正面戦闘で勝てないように、千束もまた諜報技術では俺に敵わない。専門分野の違いだ。

「たった今、合田^{ゴウダ}が侵入^{駅に着いた}したそうだ」

ハラが今言ったゴウダというのもそう。彼は陸上自衛隊特殊作戦群からDAにスカウトされた叩き上げのベテランで、二〇一〇年代の

中東で起こったいくつかの政変に関わる武力衝突に対する軍事介入にアメリカ海兵隊の身分で関わっている。

九条の制約を受ける陸自としてではなく、だ。

あとは想像つくだろう？ 特殊部隊スネーク・イーターが紛争地域でやることなんてさ。

そういう奴らばっかりなんだ、特調ウチは。全員がコードネームで呼ばれ、互いの本名など誰も知らない。その上構成人員も実働部隊については完全非公開。エージェントが何人いるか、また誰なのか、それらはたとえ同じDA職員であろうと部外者には秘される。

時に我々は、身内さえ調査の対象とするからだ。

不死身の人間兵器を従来の指揮系統から切り離し、最も効率よく運用するためだけに作られた名ばかりの部署が、今や司令の懐刀ときた。

俺もずいぶん出世したな。

したくなかったな。

「フェイスA21だ」

隣を歩くハラに言うのと、癖なのか、彼は首肯の代わりに、特段ずり落ちた様子もないメタルフレームのスクエア眼鏡を指で押し上げた。

「ハラは中村ナカムラと店に入って取引を始める。私はゴウダを迎えに行く」

俺が言い終えると共に、彼は人混みに紛れて消えた。お互い、それ以上の言葉は必要はなかった。

ハラとは反対に、道を逸れてさらに細い路地に入る。建物同士の間と言いつてもいい。人はずいぶん減った。壁には黒く汚れた細かい配管が無秩序に這っている。愛煙家の肺の中にいるようだ。事実、ここは一種の病巣であり、まっとうな人間が立ち入るべき場所ではない。

少し歩いて、左手に見えた裏口の前に立つ。

右手を二度、素早く握って開く。前腕へ直に貼られたセンサーテープが特定の筋電位パターンを検知し、耳の奥深くにねじ込まれた極小のイヤホンとシャツの襟に隠されたスロートマイクを起動した。一瞬のホワイトノイズが片耳を刺す。

「荒木^{アラキ}」

『一階はクリア。地下一階にガードが三名。その奥のサーバルームにタンゴ・ワン及びタンゴ・ツーを確認。全員非武装です』

「ゴウダは？」

『マルウェア注入作業を完了し、ICE無力化に成功。現在はサーバルーム内に潜伏中』

「警備を攪乱できるか？」

『目を盗んでいます。それ以上の妨害も仕込み終えました。いつでもいけます』

「了解。今から突入する」

ノブを掴んだ。やはり鍵がかかっている。

潰さんばかりに握り締めて、じわじわと引く力を強めていく。

七割ほどの力で強度の閾値に達したらしい。中の突起^{ラッチ}が壁側のくぼみ^{ストライク}を破壊しながら外れて、ドアは握り玉を起点にひしゃげて開いた。ひどく唐突な破局だった。

するりと中に身を滑り込ませる。間取りは既に把握していたから、サーバルームの階段を見つけてるのに苦労はしなかった。静かに、しかし素早く下りると、近くに気配。わずかに足音がする。

アラキ——オペレーター^{オペレーター}の彼女は喋らない。そのほうが俺としても気が散らなくて助かった。

階段の際に潜んで近づいてくる敵を待つ。蛍光灯の青白い光と一緒に落ちる薄い影が、俺の革^{ストリートチップ}靴の上にかかる。

身をたわめる。まだだ。

もう一步、踏み出させる。

目の前にジーンズを穿いた足。

飛び出して、無警戒な横っ面に拳を叩き込んだ。

声も上げずに昏倒した男の胸ぐらを倒れ込んでしまう前に掴んで、片手でゆっくりとビニルの床に下ろす。殺すつもりはない。それに派手に音を立てられても厄介だ。

『残りの二人は控室にいます。電子ロックですね』

「締め出せるか？」

『既に』

「さすがだな。ついでにゴウダに繋いでくれ」

それなりに大きなクラブの裏手、といってもメンテナンスエリアから隔離されたこのフロアは狭い。その上、リテラシーに欠ける素人がご丁寧にも回線を引いてくれているおかげでスタンダードアローンではないとくれば、苦勞する要素などありはしなかった。ここまですきんなつくりで今まで摘発されなかったのはラツキーと言うほかないだろう。

ひよつとすると不良警官から金で買ったラツキー、かもな。

『サイトウ、俺はタンゴ・ワンの真上にいる。ツールの確保は頼むぞ』

「二人に動きは」

『仕事熱心な野郎だ。朝まで放っておいても動かねえだろうよ』

「そうか、餌にかかったか」

『ICEブレイカーにウイルスのカクテルたあ、またずいぶん食い出のある餌じゃねえの』

「仮に食いつかなかったとしても、情報さえ抜ければ最低限の目標は達成できるからな」

『どつちに転んでも、ってわけか。意地が悪い』

サーバールームに続く鉄扉はアラキが開錠していた。肝心のICEが溶かされた瞬間、このぎまだ。なんでもかんでもセキュリティネットワークに繋がばいいってもんじゃないだろうに。

「行くぞ」

『了解。お前に合わす』

俺は隠れるそぶりもなしに、堂々と部屋へ侵入した。

さして広くない。旧型のサーバーラックが低い天井いっぱい詰り詰め込まれた、いかにも急ごしらえの空間だ。機材の型式はざつと五年落ちくらいだろうか。運用環境が悪いせいか、いくつかの冷却ファンがじりじりと嫌な軸音を立てている。

申し訳程度に天井へ配されたむき出しの蛍光灯は所々切れかけていて、不規則に明滅することで作業性の悪化に貢献していた。吊り下げ式の配線も相まって、壁や床に落ちる陰影はロールシャツハテスト

にも似てサイケデリックだ。

件の男は最奥のデスクでモニターを睨みつけ、椅子に掛けることも忘れて必死の形相でキーボードを叩いていた。よれたYシャツを肘までまくった、サラリーマン然とした人物だ。

こいつがこのアングラサーバーを管理している、コールサイン、タンゴ・ワン。彼の頭上を見れば、天井の石膏ボードが僅かにずらされている。手でも振ってやろうか。

「調子どう?」

タンゴ・ワンの背中に声をかけた。彼は一瞬だけこちらに振り返ったが、店の人間だと思っただのだろう。額に浮かぶ冷や汗を拭うこともせず、再びモニターに鼻をくっつけんばかりに顔を近づけた。

「直ちに、直ちに復旧します!」

「別にチクリやしないけど。そんなにまずいわけ?」

「……めちやくちやです、丸裸ですよ。ワクチンの生成を急いでいますが、バックドアを閉じないことには対症療法ですから」

人に向けて話しているというよりは、どちらかという頭の中を整理するための独り言のような口調だった。

「そういうえば、もう一人は?」

「その奥でICEボードを替えてもらってます。根こそぎ焼けてしまつて、CO2消火器まで使つたんですよ。ほら、換気装置がうるさいでしょう?」

彼が指差した先にあったのは、工事現場で使うような武骨な外見の送風機だった。壁に空いた換気ダクトに蛇腹のホースとダクトテープで無理やり繋がられて、床に溜まつた二酸化炭素を懸命に吸い上げている。こいつらも苦労してるんだな、とわずかながら同情した。

ホースをまたいだ先に彼女はいた。伸びるままに任せた長い黒髪に、度の強い丸眼鏡。そして野暮つたいジャージ。足元はなぜかふわふわのスリッパ。部屋着と言われても納得する出で立ちだ。

……それにしてもデカイ人だな。かがんでいるがそれでもわかる。「あつ、すみません、どきますすっ」

立ち上がってくれたからよく分かった。俺より背デカイわこの人。

なんだろう、このなんともいえない親近感。ちよつと毒気が抜かれる。

「おかまいなく、どうぞ続けて」

「あつ、はい……」

「ぐわーっ！ 防壁展開が間に合わない!? まずいまずいまずい、考えろ俺……!」

どちらのターゲットにも警戒心がまるで感じられない。お前らそれでも裏社会の犯罪者かよ。どっちかというところブラック企業に捕まってこき使われてる社畜って雰囲気なんだけど。

もちろん事前に分析したプロファイルに合致しているのは間違いないんだが、なんだかなあ。

『ハラ、ナカムラ、両名は目標ファイルの入手に成功。情報屋を護衛の上、作戦領域を離脱します』

『後はこいつら次第だな……』

ゴウダがささやく。そう。問題はこの二人がどこまで知っているかだ。

一〇〇〇丁の銃の行方と、その背景について。

知らないなら警察に身柄を引き渡すだけだが、そうでなければ、その時には。

「相手に見当は?」

「あつ、すみません、えっと、反撃を試みてはいるんですが、攻撃者はダミーの中継ポイントをいくつも経由してまして、それを頻繁に切り替えて侵攻ルートを何通りにも分岐させているようなんです。ですので、大元を叩くのはまだ厳しいですっ」

「素人意見だけど、回線を切ったら攻撃も止むんじゃないの?」

「オフラインになんてしたらマーケットの取引どころか、ネットカジノも配送システムもみーんな飛んじやいますよ! そうなったら我々の首も! 物理的に!」

タンゴ・ワンが泣きそうな声で叫ぶ。なるほど、この惨状の原因は無理解な上司のせいか。かわいそうに。

「あつ、なので、今はこの板、ICEっていうんですが、これでメイン

ブラック・フェイス
の攻性防壁を復旧させて、同時にバックドアを……えと、敵の侵入口を塞ごうと」

「正面玄関に悪い奴を通さないバリケードを作って、裏口の方は丸ごと潰しちゃう、みたいな？」

「あつ、はい！ まさに、そんな感じですよ！」

話を通じたことがよほど嬉しかったのか、タンゴ・ツィは不器用に頬を緩めてこくこくと頷いた。

愛嬌ある表情とは対照的に、空のラックに予備のサーバー・ユニットを組み込む手つきは恐ろしいまでに洗練されている。本人は自信なさげだが、ここまでできる人材は探しても中々見つかるものじゃない。

タンゴ・ワンだつてそうだ。ヤバイヤバイとしきりに叫んで顔を青くしているものの、そんな情けない姿とは裏腹に攻撃への対処は迅速で見事だ。

ここまでの才能を腐らすのは惜しいな。できれば何も知らない下っ端であつてくれないだろうか。それなら多少、やりようはあるからさ。

能力があるから助けるといふのは、無かつたら助けないという意味ではない。使えそうな者は使う。そういう話だ。

自分でもわかつてる。こんなのは所詮、千束の猿真似に過ぎない。今更、数えるほどの命を見逃したところで、何かが変わるわけじゃない。

罪から逃れることはできない。

だが、見て見ぬ振りもまた、できなかつた。

「じゃあ、その悪い奴らはサーバーに入つて何がしたいの？」

タンゴ・ツィから焼けたボードを預かつて、邪魔にならないよう隅に立てかけておく。破壊した数が数だから、彼女の周りにはもう黒焦げの薄箱だらけだ。

クルミ監修のICEブレイカーは効果てきめんだな。

「あつ、ありがとうございます……そうですね、今のところ攻撃されているのは、主に会計帳簿です。このサーバーを踏み台にして、幹部の

方々のパソコンから取引の記録を盗もうとしているようで。兄さんが辛うじて食い止めてはいるんですが、正直それもいつまで保つか……」

「やめろー！ 縁起でもないこと言うなー！ コンクリ詰めは嫌だあーっ!!」

「なるほどね。ところでその帳簿って、君達は見たことある？」

イエスカ、ノーか。

ここが分水嶺だ。

「あつ、いえ、いえ！ 私達はアクセスできませんから！」

「まさか！ 滅相もない！ 僕らだって命は惜しいですよ！ そもそも興味無いですし！」

嘘をついているようには見えない。顔色も、仕草も、さっきの世間話で観察したパターンの範囲内だ。二人は正常に焦っている。

嘘をつく人間は、大抵決まった挙動をするんだが、彼らにはそれがない。

『二人のアクセス記録をこちらで洗いました。事実です』

アラキのお陰で裏も取れた。

この二人はシロだ。

「それもそうか。わかった、信じるよ」

二人は器用にも、作業を続けながら大げさに胸を撫で下ろしてみせた。生きた心地がしない、と顔に書いてある。純朴な奴らだ。嫌いじゃない。

「最後に見て欲しい物があるんだけど、いいかな」

「あつ、はい、なんでしよう」

追い討ちをかけるようで悪いが、ぼちぼち連行するか。

スーツの懐に手を伸ばし、内ポケットの物を。

「私、こういう者で」

「えっ……え、ええっ!?!」

警察手帳を提示した。

「ゴウダ、出てきていいぞ。フェイスA33だ」

「了解。お人好しだねえ」

「うわあっ!?!」

タンゴ・ワンは天井から降ってきたスーツの大男にあっさり取り押さえられ、もとい押し潰され、抵抗する暇もなく手錠がかけられた。元特殊部隊員の奇襲なんてぞっとする。これが戦場だったら、今ごろ奴は首筋、脇下、内腿の順に血管を掻き切られて失血死しているところだ。

「痛い痛い痛い!」

「兄さんっ!」

「つたく、大げさな野郎……サイトウ、先に行くぞ」

「ああ」

「放せよおい! くそ、妹に何かしてみろ、お前らただじゃおかないからなっ!」

「何もしねえよ、こちとら警察だぞ」

まるで米俵でも担ぐようにしてタンゴ・ワンを背負ったゴウダは、重さを全く感じさせない軽快な足取りで部屋を出ていった。もうじき五〇になるつてのにちつとも衰えていない。あるいは、衰えた上でここまで動けるのか。

ともあれ、これでサーバールームに残されたのは俺とタンゴ・ツーだけになった。

へたり込んでわなわなと震えるだけの彼女に何ができるわけでもなく、守りの要を失ったサーバーはものの十数秒で制御を奪われ、同じネットワークに接続されたあらゆる機器から、データが根こそぎ吸い出された。

『全目標の転送を完了。システムをダウンさせます』

アラキが言ったその瞬間、すべてのサーバーラックから稼働音が消えた。ややあつて、タンゴ・ワンがかじりついていたモニターも。

沈黙。

送風機だけが健気に回っている。

ゆっくりと、膝を折った。

目を合わせて、優しく微笑む。

「ご安心ください。あなた方の身の安全は我々公安部が保障します」

「こ、こっつ公安っ……」

「よく聞いてください。お二人は一度逮捕されますが、司法取引による起訴の回避、および改正暴対法に基づく証人保護プログラムの適用が可能となります」

「ここまではよろしいですか？」

子供に言い聞かせるような猫撫で声で言うと、彼女は不安げに目を泳がせながらも、遠慮がちに頷いた。緊張は和らぎつつある。

「我々はある事件を追っています。この摘発は通過点に過ぎません。それほど大きな事件です。お二人にはぜひその捜査に、そして公判での証言にご協力頂きたい」

「あつ、あの、それは、どんな事件なんでしょうか……」

「平たく言うと、テロリズムです」

このサーバー内に存在するブラックマーケット、そこで銃の一部が仕入れられた。真島を擁する武装集団の全容を明らかにするためには、根元を辿らなければならない。

そして、断ち切るんだ。

「あなた方は我々の捜査に協力する。我々はあなた方に新たな戸籍を与え、その身を守る。政府の監視下に置かれることには、なりますが」提案の体をとった事実上の命令だった。

雇われエンジニアの彼らに大した罪状はつかない。どれだけ長く見積もっても、一〇年以上上堀の中にいることはないだろう。

しかし釈放されて心機一転、というのも難しい。苛烈なロシアン・マフィアは、これほどの大失態を演じた人間を決して許さないからだ。自由の身になった瞬間、なんの後ろ盾も持たない彼らは必ず殺される。

彼女はそれがわからない人間じゃない。

「助けて、頂けるんですか……?」

俺のことが救世主にでも見えているかのような口ぶりだった。冗貴なら違ったのかもしれないが、どちらにせよ選択肢はないんだ。関係ない。

「取引に応じて頂ければ、必ず」

俺はあくまで誠意を込めて、そう言った。

差し伸べられた俺の手を、彼女はおずおずと取る。

「わかり、ました。協力、しますっ」

「ありがとうございます」

手を握り合ったまま立ち上がって、そのまま彼女を助け起こした。「事が事ですから、署に着き次第すぐに取り調べが始まるでしょう。そこでは何も喋らずに私の到着を待ってください。お兄さんをダシに何かを言われたとしても、いえ何を言われても、それらはすべてブラフです。彼には部下がついていますから、くれぐれも信じないようお願いしますね」

「あつ、は、はい！ 分かりました！」

狭い廊下を歩く。階段前で昏倒させた男はしばらく目覚めないだろうし、残り二人もアラキが閉じ込めている。猫背なタンゴ・ツアの遅々とした足取りに付き合う時間は十二分にあつた。

強いて言うならそろそろ手を放してほしいところだが、追手が来やしないかとビクビクしながらしきりに背後を振り返っている様子を見るに、彼女にそんな余裕はないだろう。俺の手を握っているのは完全に無意識の行動のようだ。

大の字に伸びている男の前を素通りしたあたりで、イヤホンからアラキの嘆息が聞こえた。

『女たらしですね』

いや、今回は何もやらかしてないだろ俺。

「人聞きの悪いこと言うな……それでゴウダ。タンゴ・ワンは取引を飲んだか？」

『無事にな。それで今、福島が本庁に送っていった。タンゴ・ツアの車は小泉が路地の前に持つてくるとよ。しっかしサイトウ、規制線の向こうからリコリス二人がこつちを見てるんだが……ありやお前の連れか？』

「あー、中らずと雖も遠からずかな。社会科見学に来たちびっこみたいなもんだから、ほつといていい」

『ああそう……そんじや俺はぼちぼち上がらせてもらうぞ。表の店

にはもう警官隊が突入してるんでな、いよいよ手持ち無沙汰だ」
「そうか。また後で」

階段を上り切ってしまえば外はすぐだ。ついさつき派手に壊したドアを開けた先に警官の姿はなく、窮屈な路地の出口を塞ぐように黒いセダンが停まっている。リアのナンバーからして、あれがタンゴ・ツリーの迎えだろう。

「サイトウ、こっちだ。早く来い」

運転席でコイズミが手招きしている。息を切らす彼女の手を引いて近づくと、彼は車を降りてリアドアを開けてくれた。

彼は身振りで彼女を車内に導きながら、俺の耳元に口を寄せてくる。

「所轄の刑事連中が本庁の介入に騒いでる。見つかると手間だ、なんとか気を逸らしといてくれ」

「ゲツ……だからゴウダは消えやがったのか」

「なんだ、お前さんハメられたのか。そいつは災難だったなあ」

「はあ……とにかく、彼女のことは頼む。どうも訳ありっぽいんだ」

最後の一言は声を潜めた。

コイズミは皺に囲まれたその目を鋭く細めて、任せろ、と端的に答えた。まったく、いぶし銀なおっさんだ。

ドアを閉める前に、後席のタンゴ・ツリーに語りかける。

「もう大丈夫ですよ。すぐにまた、兄妹で暮らせませす」

丸い凹レンズの向こう側で、濡れた瞳が一度二度、瞬いた。

彼女の薄い唇が、何か、言葉を紡ごうと曖昧に震える。

喉の奥から空気を吸い込むかすかな音。

ついにはくしゃりと、相貌が歪む。

俺が差し出したハンカチを、彼女は黙って受け取った。

それでも零れ落ちた幾粒かの涙が太ももに落ちて、洗いざらしたポリエステルの生地に模様を作った。

ありがとう。

そう言われた。

悪い気分は、しなかった。

「……すげかったなあ」

「ええ」

「……すげかったなあたきなあ?! パトカーぎゅんぎゅんてさあ!!」

「前見て運転してもらっていいですか!?!」

割と本気でビビるたきなにベアハッグ並みの締め付けを腹に食らい、千束は思わず、ぐえつと品のない悲鳴を絞り出した。前を向きはしたものの、少なくともヘッドライトの光が当たる範囲に車はいない。

街中を抜けたせいもあるが、そもそも単純に夜が更けつつあるからだろう。

「サイトーが裏に回ってっってからさ、大体五分くらいでしょ? 警察来たの。めっちゃ早業じゃんね」

「違法クラブの摘発が任務、だったんでしようか」

「うーん、たぶん? でもなー、じゃあなんだったんだろーなー、あのいかちいおじさん。刑事さんにしては歩き方が強そうだったんだよなー」

「強そうというと?」

「体幹がどっしりしてるっていうのかな。重心が全然ぶれなくてさ、すごいプロっぽかったんだよね」

「……目がいいんですね」

「弾避けられるくらいね!」

「勘は鈍いようですが」

「うぐつ……」

いや、それにつきましては、ほんと、たきなさんのおっしやる通りです。誠にサーセン。

しどろもどろに千束は謝罪した。平謝りだ。

千束は結論を急ぎすぎるんです、なんてお叱りを受けた。

結局、サイトウのデレの理由を掴むことはできず。なんなら警官隊の突入に伴う混乱で彼女を完全に見失い、その上アプリを使って町内を調べても影すら掴めず、その後の追跡も断念。

完敗も完敗、狐に化かされたような気分だ。そもそも最初に見つけたサイトウは本当にサイトウだったのか、なんてありもしない可能性を大真面目に検討しかける程度には、千束は自分を信用できなくなっていた。

はあ。自信なくすわあ。帰って早く寝よ。

千束にあるまじき健康志向であった。

そこまでは良かったのだが。

「ここまでで結構です。ありがとうございます」

「おん……おやすみ……」

「おやすみなさい」

たきなを彼女のセーフハウス近くで降ろし、すっかり軽くなった車を発進させようとスロットルを捻ったその時、それは起こった。

バチン。そんな音が足元から聞こえたのだ。張り詰めた何かが切れたような異音が。

「おん？」

未だに失敗を引きずる千束は、麻痺した判断力の赴くまま、もう一度スロットルを煽った。

エンジンが軽やかに吹け上がる。

スクーターは進まない。

「おんおんおん……？」

もいつちよ煽る。

ぎゅぎゅーん、と唸る。

微動だにしない。

千束は努めて冷静にエンジンを切り、大きく深呼吸した。

吸って、吸って、吸って、肺いっぱい空気を詰め込んで――

「たきなヘルプー！ スクーター壊れたあー！」

――前を歩く相棒に、家に泊めてくれと泣きついたのだった。

「バッテリー電圧警告灯、点灯なし。油温よし。排ガスは綺麗、アイドリングも正常。テストライダー？」

「錦木千束よろしー！」

ベスパの小気味よい排気音と威勢のいい返事が、鉄筋コンクリート造の蒸し暑いガレージに反響する。車三台分の床面積のうち、右と中央の駐車スペースにはそれぞれ兵員輸送用の偽装バンと例の白いじゃじゃ馬ハッチバックが占めていて、俺たちは唯一空いた左端に工具を満載したキャディやら、車両を自立させるためのメンテナンスタンドやら、とにかく二輪車の整備に必要な物をありったけ広げていた。

俺はシャッターを持ち上げながら、愛車を走らせたくてうずうずしているオーナーに言った。

「今まで通りにスロットルを開けるとびっくりすると思う。最初は安全運転でね」

「マジ？ そんなに変わるんだ、楽しみー！」

「……最悪、安全運転はいいや。怪我さえなきや」

先にガレージを出て、初夏の強烈な日差しに頭を焼かれながら車道を確認する。車通りも人通りも皆無だ。振り返って、ワインカーを出して待機している千束に頷く。

「いってきまーすー！」

ミントブルーのベスパは小型犬のように可愛らしい唸りを上げてビルトインガレージを飛び出していった。駆動系をまとめてリフレッシュしたおかげで加速感は今までと段違いだ。逆に言えば、新車からそれだけ劣化していたということでもあるんだけど。

次第に小さくなっていく彼女の見送りもそこそこに、俺はそそくさとガレージへ引っ込んだ。クソ暑い中ぼーっと立っただけでもないかもしれない。帰ってくるまでに少しでも片付けをしておかないと。

頭ではそう考えつつも、つつい作業スペースの外れに置かれたスポットクーラーの前に足が向いてしまう。

ツナギを半分脱いで、袖をへその辺りで縛ってもまだ暑かったか

ら、中に着ていたタンクトップをめくってクーラーのノズルに被せた。

腹に直撃した冷気は拡散してたちまち上半身を巡って、襟ぐり、袖ぐりから吹き抜けていく。生き返るようだ。

当然、服が強風をはらんで暴れるが、この暑さだ。品性を捨てても涼を取らなきゃ熱中症になりかねない。

なんで俺ら、こんな蒸し暑い日にスクーターの整備なんかやってんだろう。

誰に向けたわけでもない愚痴を脳裏に連ねながら、キャスター付きのスポットクーラーを壁際のアウトドアチェアの近くまで引っ張って行って、ついでにその足で傍らのクーラーボックスを開けて小瓶のビールを取り出した。

チェアに浅く腰掛け、冷風を頭から浴びながら、王冠を素手で強引にもぎ取って一気に呷る。

喉を鳴らして最後の一滴まで飲み干し。

あまりの旨さにため息をついた。

グリーンボトルに赤い星のロゴが入ったそれは、オランダ製のオリジナルではなく、国内でライセンス生産されているありふれたものだが、これが一番舌に合う。

二本目に手を出そうか迷っているうちに、千東がベスパと一緒に帰ってきた。喜色満面つてのは、今の彼女みたいな表情のことを言うんだろう。

「どうだった？」

「めっちゃキビキビ走る！ もう今までなんだったのってくらい！」

車体と同色の半ヘルを脱いで隣の椅子に座ってきた千東に、クーラーボックスからコーラの缶を手渡す。彼女は冷たっ、と愉快げに吹き、ゆるいつナギの余った袖を手袋代わりにして缶を抱え直した。

「磨り減ったドライブベルトが滑ってたんだよ」

言いながら、スポットクーラーを首振りモードに切り替えた。

千東、ノズルに向かって「あー」って言っても宇宙人の声は出ないよ。扇風機じゃないんだから。

「力がうまく伝わってなくて遅かったのかあ」

「そう。それで昨日、とうとう千切れた」

千束がコーラに口をつける。

「あたしを尾行した帰りにな」

その瞬間、彼女の肩が小さく跳ねた。リアクション芸人でも食って
いけそうだなこいつ。

「ご、ごめん……」

「別に責めちやいないよ。嫌だったら見つけた瞬間に撒いてる」

その様子を鼻で笑いながら、二本目のビールを開けた。ネジ山のな
い瓶の飲み口を不思議そうに見つめる千束に、王冠を指で弾いて投げ
渡すと、彼女はすぐにそれがスクリュータイプのキャップではないこ
とに気づいたようで、目をひん剥いたまま数秒フリーズした。

半端に持ち上げられたままの赤い缶にグリーンのボトルをぶつけ
て乾杯すれば、薄っぺらいアルミの凹む歪な音を呼び声に、千束の意
識が帰ってくる。

「……つかぬことをお聞きしますが、どの辺から気づいてました？」

「千束があたしを見つけた時から」

「あんだけ離れてたのに分かったの!? 怖っ!」

「何が『怖っ!』だよ、怖えーのはあの練度で本職に仕掛けようと思っ
たオメーのクソ度胸だよ」

「一応教則通りにしたんだけどなあ」

「教則に忠実な分、行動を読みやすかった」

「うーわそういうこと! プロだねあんだ」

「プロっつーか社畜っつーか……」

九歳から週休一日、まれに二日で毎日だいたい一三時間、銃をぶつ
放すかあちこち嗅ぎ回るかしていれば嫌でもこうなるってもんだ。

「この手の機械いじりだって、元は自動車爆弾対策だし。嫌いじゃな
いからいいけど」

「むしろ好きって感じるよ?」

「ん、そうだね。楽しいよ」

殺しよりずっと、と内心で続けた。俺も弾を避けられたら、命令を蹴ってDAを飛び出せたんだろうか。

あーヤダヤダ。せっかくの休日だったのに気が滅入る。もしもの話なんて考えるもんじゃねえな。

「とりあえず一段落したけど、どうする？ 用事がないならご飯でも」

「え、マジ？ いいのー!」

「わざわざ一番暑い時間に帰すのもね。クーラー効いた部屋でホラーでも見て涼んで……そうだ、せっかくだしたきなも誘ってみるか」

「連絡してみる」

「たきなが絡むと仕事はえーな……」

胸ポケットから出したスマホをいじる千束を横目で見つっ、俺はプランを考えた。

手料理を適当に作ってもいいが、たきなが来るならファストフードにしよう。栄養バランス抜群のお上品な給食に慣れたりコリスにとつちや劇薬だ。どんなリアクションをするのかぜひ見たい。

「家で暇してるから行きたいってさ!」

よし、決まりだ。

「じゃあ車で迎えに行つて、その帰りにデカイピザでもテイクアウトする作戦でどう?」

「ピザと映画とコーラか……いいねえ!」

「でしょ? ま、とりあえず注文するだけしてシャワー浴びよ。さすがに汗だくで外には出たくねーわ」

「やーどうもすいませんねえ、何から何まで」

「整備手伝ってくれたからいい」

二人揃って飲み物の残りを一気に流し込んで立ち上がる。千束は車の後ろを通つて家の中へ続くガレージの裏口へ、俺はシャッターを閉めるために表へ。

ちょうどフック付きの棒をシャッターの下辺に引っ掛けたタイミングで、一台の黒いセダンがガレージの前に止まった。昨日、タンゴ・ツーを送るのにも使っていたDAの公用車だ。そうか、もうそんな時間か。

リアドアが開く。降りてきたのは黒目黒髪の、よく言えば諜報員に向いた、悪く言えば没個性な男。彼こそが特命情報調査室副室長にして俺の悪友、タチバナさんだ。

「すごい汗だな」

「友達のスクーターをちよつとね」

「せめて袖を通せよ。人目につくぞ?」

「人なんていねーじゃん。そっちこそ、まだクールビズじゃないわけ?」

タチバナさんは肩をすくめて降参の意を表した。ひとまずガレージに招き入れて、例によってコーラを渡そうとすると、彼は手を軽く振って断った。

「ベスパ946か。原付ナンバーじゃないんだな」

「二五〇ccの継続^{コンティニューエーション}生産モデルだつてさ」

「なるほど、いい趣味だ。君のかい?」

突然持ち上がったタチバナさんの視線を追うと、

「は、初めましてー……」

千束がやけに緊張した様子でバンの陰から顔を出している。

あ、汗か。相手が相手だから全く気にしてなかった。

おい、何笑つてんだタチバナ。俺とお前の仲なんだから今更いいだろ。

とりあえず脇腹に肘を入れておく。

「このバカノツポはタチバナ。あたしの部下」

「といつてもコードネームだがね。よろしく、錦木さん」

「私のこと知ってるんですか?」

「サイトウがよく話してくれてね。今度お店にお邪魔させてくれ」

「ぜひぜひー」

さわやかだなあ、タチバナさん。いつもの悪ガキモードを完全に封印してやがる。俺はさっきの仕返しに鼻で笑ってやった。

千束の前じゃやり返せないみたいだ。ざまあみろ。

「さて……これが例の資料だ。デジタルコピーは取るなよ」
「確認する」

渡された封筒には、物々しいFOR YOUR EYES ONLYの印字に加えて、閲覧に必要な機密取扱資格の等級が記してある。千束が空気を読んで車の後ろに引っ込もうとしていたから、その面を見せて引き留めた。レベルIVならファースト・リコリスの権限で足りる。

中身はステープラーで留められた十数枚の報告書だ。ミスプリントがないかぎつくり斜め読みすると、それだけでもあらかた内容を掴めた。

念の為、シャッターを閉めた。封筒に戻した資料を自分の椅子の上に放る。そして、真剣な面持ちでこちらを見やるタチバナさんに振り返り、

「米国による可変サイクルエンジンの供与……どういう風の吹き回しだ？」

声を低めて言った。

「ずばり、ユーラシアへの牽制だな。南鳥島沖のレアアース鉱床にちよつかいを出されたくないのさ」

「アメリカが一番の買い手だったね」

「ああ。世界総生産の四割を日本が握る時代だ。よその覇権国家に掠め取られちゃかなわん。蜜月をアピールするには——」

「技術共有が一番いい。国粋派はお冠だろうけど」

「ハッ、八咫鳥のキレっぷりは今思い出しても笑えるぜ。今年中にもストラト・ゴーストF-23J改用に本国版F-23Nから塩害対策を省いたF-16

0-1エンジンが一〇〇基。それと予備部品が二〇〇セット納入される。同時に生産用図面もな」

「この間の工場地策定はそういうことか。エンジンの製造とメンテナンスを丸々国内でやるなら、確かにあれだけの規模が必要だ」

「新型エンジンの発電能力があれば、F-23は無人機管制能力を獲得できる。第五・五世代戦闘機の戦略的価値は計り知れん……案の定、SVRと国家安全部が嗅ぎ回り出した。内調も公安も大忙しだ」「ロシアといえただけ……」

もう三歩、身を寄せた。まるで逢瀬のように彼の肩を抱いてその胸

にすぎり、千束の目から唇の動きを隠す。ケツ、無駄に背の高い野郎だ。

「今朝の報告書、読んだ？」

ここから先は彼女にも聞かせられない話になる。タチバナさんは俺とリコロコが協働していることを把握しているから、機密を大つぴらに話しても気にはしないだろう。しかし、それによって俺と彼の特別な関係を千束に勘付かれるわけにはいかない。

それだけは、誰にも。

「昨日の件は俺も把握してる。北押上駅で回収されたのも、確かロシア製だったよな？」

意図を察した彼が耳元で囁く。

「六割はそう。残りはルーマニアと中国のコピー品が占めてる。シリアルナンバーはまだ情報部が照合中だけど、今回潰したマーケツトが出処の一つとみて間違いない。一〇〇〇丁の銃は死んだ商人がいくつもの業者から買い集めたものだ」

「マフィアはロシア本国からの直輸入を謳っていた……」

「軍関係者、もしくは軍に縁深い人間による横流し」

「マフィアと軍の橋渡し役がいる。とはいえ国外の相手となると、D Aではな」

「内調の資料班にロシアに潜ってるのがいたら。そいつらから何か情報を得られないか？」

「よその組織に言われてリスクを冒しはしないだろう。俺が行くという手もなくはないが」

「いいアイデアだけど、今はあまり戦力を分散させたくないな。真島は延空木の破壊をほのめかしていた。その前に奴を止めないと——」
「D Aの存在を明るみに出す機会を失う。俺とお前は一卷の終わりつてわけだ」

「……タチバナさんまで道連れになる必要はないだろ。まだ、」

「まだ、なんだ。まだ引き返せるとも言うつもりか？」

強い口調で言葉を断たれた。飄々とした普段の姿からは想像もできない、硬質な芯を感じる響きを伴っていた。きつとそれが、今まで

ひた隠しにされてきた彼の本来の姿なんだろう。

「それだけはない。地獄の底まで付き合うさ」

「……何も変えられないまま、野垂れ死ぬかもしれないとしても？」

「俺は誰も愛さないが、だからといって大切に思う人間がいらないわけじゃない。わかるだろ」

「わかる。でも、わからない。どうしてそれが俺なのか」

彼の目を見上げた。

伏せられた眼差しには葛藤が見え隠れしている。言いたくないのか。

それでも。

「タチバナ。そろそろ教えてくれてもいいんじゃないか、俺に肩入れする訳を」

彼の両手が、俺の肩をそっと包んだ。

素肌と素肌が触れ合っても、どうしてか振り払おうとは思わなかった。

嫌な欲望を感じないからだろうか。

いや。

彼の手から伝わるのは、俺の知らない情感だった。

今まで受け取ったことのないもの。

本当なら受け取れるはずだったもの。

ミズキさんがくれたものによく似ていて、しかし、わずかに違うもの。

温かい？

わからない。

俺には何も、わからない。

「……長い話になる。俺が、お前が、何者で、なぜお前の体がそうなったのか。ろくでもない、どうしようもない、むごい話だ。それでも知りたいか」

反射的に息を？みかけて、彼の背後にいるだろう千束の存在を思い出して踏みとどまる。

言いたいことはたくさんあった。けれども今は、黙って頷いた。

「次の休みに、俺のセーフハウスに来てくれ。前にレコードを聴いたところだ」

どちらからともなく体を離した。
互いに平静を装う。

「それじゃ俺は行くよ。すまなかつたね錦木さん、せつかくの休日に仕事の話を持ってきてしまった」

シャツターを自ずから持ち上げて、彼はガレージを出ていった。一方で千束は返事もしない。彼女らしくないな、なんて思って振り返ったが、いない。忽然と消えやがった。

「おおおおおちおちおちおちつけ……」

「……ああ？」

耳を澄ませば、バンの後ろの方から何やら奇つ怪な鳴き声が聞こえてくる。

ああ、大体察したわ。お前さあ……。

「おい色ボケ」

「みぎやあああすんませんっ！ すんませんっ！ ジブンなんつも見てません！」

「オメーが考えてるようなのじゃねーよ、アイツは」

「い、命だけは勘弁してください、おねげえしますだあ——へっ？」

ひよいと顔を出して急襲するや否や、バネじかけのおもちやみたい
に忙しく土下座の体勢に移行したアホは、その澄んだ緋色の目を点
にした。

「機密レベル VIシックスに指定された案件について、速やかに協議を行う必要
があった。情報漏洩を防ぐための必要な措置だ」

千束は顔を引きたせながら曖昧に頷いた。

チツ、さては納得してねーなこいつ。さらにカードを切るか。

タチバナさんと仲がいいのは認めるが、別の意味で懇ろな間柄だと
思われるのは、なんか……すげーヤダ！

「第一に、タチバナさんは無性愛者だ。エイセクシユアルそれも、エイロマンティック・
エイセクシユアルだ。分かるか？」

「……あ、そうなんだ。押忍、理解しました」

「マリヤ・アレクサンドロヴナ・マギナ」

照明を落とされたブリーフィング・ルームに、楠木司令の声が朗々と響く。彼女の横のスクリーンには目鼻立ちのくつきりした若い女が繁華街を歩く様子が映っている。

マリヤ・マギナ、か。

今はそんな名前なんだ。

「ロシア^S対外情報^R庁の対日^V工作員だ。中東および北アフリカ諸国における複数の武力衝突を武器供与によって扇動した疑いが向けられており、また、国内に潜伏中であるテロリスト、真島との繋がりも指摘されている」

DAが収集した彼女のプロフィールが投影された。機密レベルがやけに高い。特に来歴なんかは黒塗りだらけだ。

確かに、俺はともかく一介のリコリスが知るには過分だろうな。

「三日前、警視庁公安部がこの女の密入国を確認した。よりにもよつて、日米安保条約改定に係る協議のため、米国防務長官および国防長官が来日するこのタイミングで、だ」

隣の席でサクラがあくびを噛み殺した。彼女のさらに右隣のフキさんやヒバナ、エリカといった面々は緊張に身を固くしている。

俺はどちらかというと前者に近い心境だった。

もつとも気分は沈んでいる。

手が冷たい。

「中央情報局^Cは人道に対する罪^Iの告発^Aを理由に、マリヤの身柄拘束とその引き渡しを日本政府に要請しているが……我々の仕事は変わらん」

できれば別の形で再会したかったよ。

「必ず殺せ」

先輩。

「先輩？」

無意識に口元へやっていた手を離した。

「なんか悩み事ですか？」

真後ろからの声が、俺の意識をとりとめのない思考の渦から引き上げた。

悩み事か。サクラの言う通りだ。とはいえ誰かに打ち明けることはできないし、しようとも思わない。出発前のブリーフィングの後、特調の俺だけに明かされたマリヤ・マギナの本当の名と、その来歴についてなど——彼女が元リコリスであることなど、誰も知る必要はない。

誰も得をしない。

俺はとつさに話を作った。

「いやさ。日本はレアアース供給を盾に日米安保をより有利な形に修正して……要するに親米路線で防衛力を高めようとしてるじゃん？
なのに、アメリカがマリヤ・マギナの身柄をねだっても構わず殺害命令を出すなんて、与党は意志の統一が上手く行ってないのかなあつて」

「げ、難しい話は勘弁してくださいよ。あーし政治アレルギーなんですよ」

「大丈夫大丈夫、別にこんなの覚えとく必要ないから。あたし達はただ、ロシアのスパイを殺すだけ。でしょ？」

「まあ、確かに。やることは変わらないっすもんね」

「今はそのやることがないんだけど、ね」

バンのステアリングに上体を預けて、並木道の先にある一棟の別荘を眺める。監視する、と言わないあたり察してくれ。

神奈川県葉山町。人里離れた山の中腹。オーシャンビューの美しいこの邸宅は、マリヤ・マギナの活動拠点と目されていた。

そして現在はリリベルの一個小隊がその中に突入しており、リコリスである我々はそのバックアップという名のお預けを食らっている。

楠木司令曰く、この現場ではあいつらに花を持たせてやってほしい

んだと。本来ファースト未満のリコリスには存在すら公開されていないはずの彼らを堂々と動かしてその仕事ぶりをひけらかすとは、上層部との間で何やら下らない政治があったらしい。

とは言うものの。

今の今まで銃声の一発も聞こえてこないのは流石に妙だ。すでに中にもぬけの殻、っていうのが俺の予想だが。

「……あいつらいつまでかかってんだ、たった一軒だぞ」

助手席のフキさんは待ちぼうけに耐えかねてずっとイライラしている。俺とサクラが定期的におやつを口にねじこむことで暴発を防いでいるが、コンビニで買ったマカダミアナッツチョコレートはそろそろ弾切れだ。

後部座席はもつとひどい。

サクラは私物の携帯ゲーム機で遊ぶなり、俺と世間話に興じるなり、フキさんに餌付けするなりして適当に暇を潰してくれているから全く構わない。

だが、今回はヒバナとエリカがいた。

たきなの機銃掃射を食らって一度ボロ雑巾になった俺に、不死身の俺に、怯えていた二人が。

ヒバナは時折、複雑な感情の入り混じった目を向けてくる。エリカは俺を見るたびおどおどと落ち着かない様子だ。

別に良いといえば良い。

そういう視線には慣れているから。

一〇歳の頃。ある卒業生から俺のパートナーを引き継いだ先輩は、通り魔に滅多刺しにされても悲鳴一つ上げなかった俺を生きていたことを喜ぶよりも先に気味悪がって、転属願を出してどこかに消えた。

その二年後。先輩、先輩、と無邪気に俺を慕っていた下級生を即席爆弾から庇った時。十秒ばかり失神したせいで勝手に体の再生が始まり、全身の肉をぶくぶくと泡立てて傷を埋めていく俺の姿を見て、彼女はその場で嘔吐した。

離れていった奴らを恨みはしない。その気持ちは理解できるもの

だから。

俺を人間扱いしてくれる人が隊に二人もいる。それだけで万々歳だ。これから一人減るかもしれないけれど、それは嘆いても仕方がない。

そう、仕方がないことだ。

「確かに時間がかかりすぎているかもしれないですね。ブービートラップでも仕掛けられていたか……」

「クソツ、なんで向こうの司令部は情報を回さねえんだ」

「我々はアウエーつてことですよ、フキさん。とはいえそれもいい加減、癪ですよね？」

「お前、何企んでる？」

「いやなに、特調の伝手から戦況を教えてもらおうかと」

「……合法なんだろうな」

「職務上、それなりのスタンドプレーは司令にお認め頂いていますので」

そう言つてニヤリと笑つてみせると、彼女はしばらく悩んだ末に、小さく頷いた。

インカムに指を当てる。

「ナカムラ。女王様のお許しが出た」

『了解、送ります！』

若い男の甲高い声が返つてくると同時に、カーナビと後席モニターに映像が出た。

建物の廊下を、低い視線から捉えた——なるほど、隊員のボディカメラか。

「お前いつから仕込んでたんだよ……」

「彼、あつちに顔が利くので、最初っから向こうの指揮車に相乗りさせてました。言つときますけどちゃんと言可は取ってますからね」

映像の主は四人の分隊の先頭を行くポイントマンのようだった。白地にペパーミントグリーンの戦闘服だからサードだろう。目の前には何の変哲もない押し戸がある。ドアノブを捻ると思いきや、彼はウエストポーチからビデオスコープを取り出し、ドアの下に差し込ん

でクリアリングを図った。

「慎重派だな、こいつ」

「道理で遅いわけだ」

スコープのモニターを注視する。リリベルがチューブカメラを巧みに手繰り、真上を映した。

Ｌ字型のドアノブの上に、プラスチックの透明なカップが乗っている。

中にはカーキ色をした卵型の物体が。

あれは、

「手榴弾……」

「えっ、まじスか?」

「うん。ピンが抜いてあつてさ、ノブに触ると落っこちて、カップで押えられたレバーが外れて起爆するんだ。古典的な手口だよ」

「怖っ!」

「でも、マリヤは単独だろ? それなら籠城戦で自分から逃げ場を潰すよりも、狙われていることに気づいた時点で拠点なんか引き払った方がずっと有利に立ち回れるはずだよな」

「フキさんもそう思いますか。このペースでいくと、三個分隊がかりでも相当かかります。それこそがマリヤの狙いって可能性は——」

閃光。

一瞬遅れて車が揺れた。

顔を上げた。

邸宅の窓から薄い黒煙が上がっている。

燃えている。

「言ってるそばからハマこいたぞ!」

「フキさん、あたしは先行してリリベルの救助に回ります。隊のみんなで後ろの救命コンテナをお願いできますか」

「非常時なら介入もやむなしか、わかった。任せろ」

「ええ、なんで二人ともそんな冷静に……」

「聞いてたなお前ら、全員装備B5を維持して負傷者の護送準備だ。建物には近づくな、破片、火炎、有毒ガス等による二次災害に留意し

ろ！」

皆に先んじて車を飛び出し、プレートキャリアの上にサツチエルバッグを背負いながら、全速力で坂を駆け上がる。やはりフル装備では多少なり機動性を損なう。重量はともかく可動域が狭い。

『室長、原因が分かりました。リモート式の焼夷爆弾です。隊は作戦を中断、撤退中ですが、チャャーリー分隊からの応答がありません……』
「隊長は一緒だな？」

『はい』

邸宅の前には四台の大型ワンボックスが門を包囲するように停まっている。一台は兵員輸送用のコミュニータータイプで、残りの三台は指揮システムや固定火器の類を満載した、リアウィンドウのない商用バンだ。

バンタイプのほうから目当ての一台を見つけ、スライドドアを乱暴にノック。返事を待たずに開け放つ。

「服部！」

「うわっ！」

そう、赤服ファーストのこいつに用があるんだ。

「チャャーリー分隊の様子を見てくる。医療班に準備させておけ」

「駄目だ、中はまだ安全化されてない」

「お前の意見は聞いちゃいねーよ」

「おい！」

制止の声を無視してドアを閉めた。今は口論の時間さえ惜しい。

二階の窓から吐き出される黒煙は明らかに濃くなっている。それにこの異様なまでの焦げ臭さ、鼻が曲がりそうだ。

屋内には何らかの燃料が撒かれていると見ていいだろう。急がないと骨も残らないな、あいつら。

正面玄関から這う這うの体で逃げ出してきた四人組とすれ違いううにして、中へ。

「ナカムラ」

『二階のゲストルームです。どうかお気を付けて、時間差で第二波が起爆される可能性も十分にありますから』

「ほかに残っている者は」

『ブラボー分隊は窓から脱出しました。彼らが最後です』
「わかった」

玄関の奥、真正面に見える木造の階段を上る。煙はあらゆる場所からこんこんと湧き出していて、どこが火元かは判然としない。つまり、もうそこら中に火の手が回っているってこと。マリヤはよほど周到に計画を練ったようだ。

二階に着くと、辺りを取り巻く熱気はますます強まった。見える範囲に炎はないが、きつと近い。黒煙の塊が絶えず天井を這っている。一酸化炭素中毒を警戒して身をかがめた。

『右に進んでください。左手に開いたドアが見えてくるはずです』

「……ああ、見えた」

それと、複数のうめき声も。

「チャーリー分隊だな！ 助けに来た！」

「……ろ、リコリス……！」

逃げろとでも言ったんだろうが、聞いてやらない。壁伝いに歩いて部屋を覗いた。

覗いて、納得した。確かにこれは絶望的だ。ここが火元の一つで間違いない。ナパームの石油臭に、奥で赤々と燃えるクローゼット。その直上では、何本もの梁が焼けた天井を突き破って崩れ落ちてきている。

口を開いた瞬間、喉から肺まで痺れるような痛みが走った。

「歩ける者はいるか！」

床に倒れる四人全員、爆風をもろに食らったのだろう。手足にガラス片や木片の類がびっしりと突き刺さり、激痛に喘いでいる。

そのうちの一人が頭をもたげた。煤だらけの頬には涙の跡があった。

ああ、そうだよな。

つらいよな。

「俺は、ぎりぎり。でもみんなはダメだ……指向性の破片で、脚をやられた……」

「お前、一人で脱出できそうか？」

「うん。でも……」

「仲間は私が全員運ぶ」

「じゃあ、相田を一番先に頼むよ。眼鏡の小柄な奴。そいつが一番ひどいんだ」

件の相田は火元に一番近かった。意識は辛うじてあるが、混濁している。声をかけても反応が薄い。瞼を開けて瞳孔を見たが、左右で大きさが違っていた。

脳内出血が起きている。

サッチェルバッグから捕縛用のボーラガンを抜いた。内蔵カートリッジからケーブルを一本引きずり出して、相田の脇下から背中にくぐらせていく。パラコードも持っているが、あれは耐熱性がない。これが一番信頼できる。

彼の脇の下から出てきた二本のケーブルを自分の両肩に回し、引っぱり、彼を背負う。そのままケーブルの余りを彼の両脚に通して一周させ、腰の両脇から出てきた終端を肩紐の下に差し込んで、胸の上で固く縛った。

本来なら担架で慎重に運ぶのがベストなんだが、四の五の言っていられないんでな。

残りの二人は背中のように脳へのダメージは見られなかったから、それぞれ小脇に抱えた。

背中に五〇キロ、右腕に六〇キロ、左腕に六〇キロってところか。全身の筋繊維が過負荷で絶えず千切れている。とはいえ、再生速度で補完できる範囲だ。問題ない。

「や、すごいなあんだ……」

「行くぞ。痛むだろうが、気張れよ」

「う、うん！」

アジトは既に無人。その上中はトラップまみれで、重症者が四名も。

初戦は完全敗北か。

さて。これから、どうしたものかな。

着火し損なったマッチが手の中でへし折れた。筒型のスタンド灰皿に放つて、もう一本を指だけで取る。

もう一度、片手で擦った。

また、折れた。

「……チツ」

「荒れてますね」

火が隣から差し出された。

「してやられたよ」

顔を近づけて、短く吸い込んだ。甘草リコリスの巻紙が燃え、独特の甘い芳香が鼻をくすぐる。

ため息をつくように煙を吹いた。鼻の奥がまだ焦げ臭くて、どうにも気が滅入った。

滅入りっぱなしだった。

「あなたに」

アラキは自分の煙草に火を着けた。

「私的な報告があります。マリヤ・マギナ——旧称、栗原百合についてです」

彼女の口から言葉と一緒に、ダークチョコレートにも似たほろ苦い香りの煙がこぼれる。それを尻目に、俺は革張りのベンチソファに深く座り直し、姿勢を正した。

「私のプロフィールは読まれましたか？」

「ああ。目を通してある」

「では、この脚についてもご存じですね」

彼女が指差す自身の脚は、スラックス越しにもわかるほど痩せていた。自重を支えられないことは、誰の目にも明らかだった。

「二〇年前、任務中の事故とだけ」

「では、話しておきましょう」

アラキカオリ
荒木佳織は、弱冠一五歳にしてファースト・リコリスに抜擢された

才媛だった。

そして同年に前線を退いた。

その後は本来四年を必要とするD Aの幕僚養成プログラムを半年の二年で終え、一七歳の若さで作戦司令部第二課配置に。かつての実戦経験を活かし辣腕を振るった彼女には出世が約束されていたが、彼女はそれを望まなかった。

ほどなくしてアラキは課長代行のポストを蹴り、より現場と距離感の近い情報部第六課へ転属。高い能力を評価した楠木司令は、特命情報調査室の組織規模拡大にあたり、彼女を手元へ呼び戻した。

それが、俺の知る彼女の全てだ。

「ラファートというテロリストがいました。その男は中東、クルデイスタンに発生した独裁国家の陸軍大佐で、米国の介入によって政権が崩壊するとともにシルクロードを辿り、偽造旅券で日本へ入国。潜伏を図りました。世間ではともかく、我々の間では有名な事件でしょう？」

「分かるよ。奴はアメリカへの報復テロを計画していたが、欧州に張られた捜査網を避け、あえて地球の裏側を行った」

「ええ。そして、D Aによる執拗な追跡を受け、これ以上の逃走は不可能と判断したラファートは標的を切り替えた」

同盟国である、日本に。

「私はその追討作戦に小隊長として参加していました。ファースト・リコリスとしての任務は、それが最初で最後です」

彼女らは各支部間との緊密な連携の末に、新千歳空港で消息を絶つたラファートを栃木県宇都宮市で再捕捉。首都圏を目指して南下を続ける彼に二四時間体制で絶え間ないハラスメント攻撃を加え、茨城県つくば市内の再開発地区に追い込んだのだという。

「ラファートはゲリラ戦を熟知していました。放棄されたアジトはおろか、逃走経路に至るまで、あらゆる形でブービートラップを残していました。多くは過酸化アセトンにガソリンを組み合わせた手製の焼夷爆弾で、解除にリソースを割くことを強要するものでした。彼は逃亡時に国庫から大量の金塊を持ち出していましたから、材料の調達

には困らなかつたのでしよう」

それはラファトが逃げ込んだ建設中の高層ビルにおいても同じことで。

「今思えば、我々はその男を追い込んでなどいなかった」

アラキ率いる選抜部隊は、ラジアータの——といつても当時は今ほど高精度の予測能力は持ち合わせていなかったが——演算結果に従い、おびただしい数のトラップを一つ一つ解除しながら慎重に進んでいった。

そしてついにはラファトを完全に包囲し、

「我々は、誘い込まれていた」

自爆に、巻き込まれた。

「ラファトだけではありません。同じ信号でビル内部に仕掛けられた複数の焼夷爆弾が起爆し、現場はすぐに火の手が上がりました。自爆で六名が死亡、四名が負傷。無事だったのは私と、私のパートナー、栗原百合だけでした」

そのビルは建設中とはいえ、複合商業施設や展望台、ホテルといった様々な施設を内包する巨大なものだった。火災の只中、どこに残っているとも知れないトラップを警戒しながら手足の吹き飛んだ仲間を運び出すような余裕は、二人にはなく。

「ええ、ええ。ご想像の通り、四人は見捨てましたよ。私と百合は、仲間の悲鳴を背に脱出しました。しかし直後に、我々の頭上で未解除のトラップが熱によって誘爆し、五階の高さまで組み上げられていた足場が吹き飛んだ」

さながら鉄パイプの雨だった、と彼女は呟いた。

「陳腐な言い方をすれば、あの時私が加害範囲から彼女を突き飛ばせたのは奇跡だった」

彼女の華奢な指が、灰皿に火種を押し当てた。

赤い光が、ちお、と一鳴きして消えた。

潰えた。

「私が司令二課に配属された翌年、百合はセカンド・リコリスとしての任期を満了し、CIAへ出荷された。日本政府が求める採用基準に、

彼女の能力は達しなかった。だがどういいうわけか、今は名を変え、S VRにいる」

アラキは自身の脚にまわりつくカーボンの骨格を撫ぜた。瓦礫に背骨を砕かれ、神経を損傷した彼女は、今やその筋電歩行補助外骨格なしに歩くことは叶わない。

「彼女は一線を超えました。もはや殺す以外にない」

マリヤ・マギナが別荘に仕掛けた即席爆発装置はラファートの事例に酷似しているが、脚への加害を重視した設計は彼女独自のアレンジだ。

あの場では、相手の機動性を奪うことで確実な焼死を狙うものばかり考えていた。だが今となっては、脚を潰すことが全く別の意味を孕んでいるように思えてならない。

マリヤは、百合先輩は、なぜそんなことを。

俺のために泣いてくれたあの人は、なぜ。

吸おうとした煙草は途中で立ち消えていた。

マツチ箱を掌の中で操り、片手で擦った。

今度は失敗しなかった。

「マリヤは、ラファートの事件に執着しているんだろうか」

彼女のことは、あえて今の名で呼ぶことにした。心理的な距離が少しは遠のくような気がしたから。

「可能性は高いでしょう。ナカムラの報告にもあった通り、彼女は捉から根室へ渡り、その後首都圏へ南下するルートを取っています。一〇年前とほぼ同一です」

「東京を素通りして神奈川へというのが気になるところだ。いくらロシアでもアメリカの人間を直接暗殺するような暴挙には出ないだろうとは踏んでいた。しかしそうなる、わざわざ事を荒立てた目的がわからないのも事実だ」

「諜報でもなく、暗殺でもない。では、陽動の可能性は？」

各所のモーターからかすかな高周波音を鳴らしながら、彼女は脚に至極滑らかに稼働させ、組み替えた。

「確かにそれなら説明はつく。でも国家の看板を背負った諜報員な

ら、陽動にしてももつと波風の立たない方法を選ぶんじゃないかと思うんだけど、どうだろう」

「なるほど。ラファトの場合は既に飼い主が消滅していたが、仮にも東側の大国が指示したとなれば話は変わってくる」

「今の時代、誰も第三次大戦など望まない。指導者の急逝に伴う内乱で国力を消耗しているロシアならばなおさら」

「下手に蜂の巣をつついて経済制裁などされたらたまったものではない。対外関係の悪化は極力避けたいはず」

「マリヤ・マギナのやり方は、ロシアへのメリットが何一つない……」
そこまで言って、俺も足を組んだ。火の粉をかぶって穴だらけになったタイツが嫌でも目に入った。忌々しいことに四〇デニールでは肌が透ける。本当はもつと分厚いのが穿きたかったんだが、夏の暑さに屈した。

だからスカートは嫌いなんだ。

駄目だ。負傷した四人のリリベルの顔と、リコリスだった頃のマリヤの顔が、頭の中で交互に浮かんで消えてを繰り返している。そのせいで何もかもに苛立ってしまう。

今は冷静にならないといけないのに。

力不足を、痛感する。

「この件、実働班に共有しても?」

「もとよりそのつもりです」

「……わかった。ありがとう」

吸い殻を灰皿に投げ込んで、立ち上がった。

「これは先輩としての小言ですが」

喫煙室を出ようとした矢先にアラキは言った。肩越しに振り返ると、

「君は四人の命を救った。自分を責めるよりまず、それを誇りなさい」
彼女は対面の壁から視線を離さないまま、フラットな口調で続けた。

彼女に、言わせてしまった。

心臓を握り潰されるような思いがした。

違う。違う。あなたはそんな人じゃない。

見捨ててなんかない。

「先輩。リコリスの私にパートナーがないのは、なぜだと思いますか？」

俺は彼女に向き直り、その目を見つめた。彼女は視線に気づくと、唐突な問いに困惑するどころか、眉根一つ動かすことさえなくこちらを見返した。

「不死性を秘匿するため」

「おっしゃる通りです。ですが、別の理由もあります」

彼女は話してくれた。

俺も話そう。

隣に腰掛けた。

「不死身の人間の存在を許容できる者が、ほとんどいないからです。どんな負傷からでも十数秒以内に復帰可能なヒト型というのは、大抵の場合、人として扱われることはありません」

「幼稚な価値観だな」

「ですが、栗原先輩は違いました」

「親交があったのか？」

「九歳の頃です。最初のパートナーでした」

「君が九歳の頃というと、彼女は一八か。そうか、最後の年に……」

養成所を出たリコリスは、多くの場合一五歳以上の上級生とパートナーを組む。そして、付きっ切りで仕事を教えてもらうんだ。

「あの人はとても優しかった」

百合先輩はいつも俺の手を引いてくれた。

「私が不死身と知っても見る目を変えなかった」

訓練施設での日々を夢に見てうなされていた俺の頭を撫でてくれた。

「姉妹みたいに、仲良しでした」

何よりも。

彼女の代わりに車に轢き潰され、肉も骨も腸はらわたも一緒くたにぶちまけた俺の、醜く再生していく体を抱きかかえて、生きていてくれてあり

がとうと。そう、言ってくれた。

自分を大事にしてちょうだいと、泣いて、叱ってくれた。

俺は百合先輩に、人間にしてもらったんだ。

「ですから、荒木先輩」

前に身を乗り出すようにして、彼女の顔を覗き込んだ。

「あなたは二人救ってるんです。どうかそれを、誇ってください」

彼女はやつと表情を変えた。切れ長の目が見開かれ、何度か瞬きをした。それだけなのに、なぜだかとても新鮮に思えた。

「全く、君は……」

やがて喉の奥からくつくつと押し殺した声が聞こえてきて、

「女たらしだな」

彼女は初めて、俺の前で笑った。困ったように眉を下げ、晴れやかに、のびやかに。

愉快で愉快でたまらない。そんな風だった。

「ここにいたか」

まるでアラキが笑い終えるのを見計らっていたかのようなタイミングで、ゴウダが扉から顔を覗かせた。思わず隣の彼女の表情を盗み見ると、驚くことにもういつもの鉄面皮を張り付けている。凄まじい切り替えの早さだ。

「マリヤ・マギナの件で実働班全員に緊急招集だ。司令がお待ちだぜ」
言うだけ言うと、彼はすぐさま引っ込んだ。どうやら本当に火急の用らしい。

背後から聞こえる外骨格スケルトンの作動音に合わせて、俺も席を立った。

「すまない。本来ならば私が始末をつけなければならぬことだ」

「いえ、いいんです。マリヤ・マギナは何としても止めなくちゃいけない。私はこれ以上、彼女に罪を重ねてほしくない」

「そうか。そうだな……」

彼女は片頬で軽く微笑みかけた。どこか哀しい笑みだった。だがそれでも、何もかもを心の奥底に封じ込めて作り上げた仏頂面に比べれば、ずっと満ち足りて見えた。

「行きましょう、サイトウ室長」

「ああ」

むせ返るような濃度をもって漂っていた辛気は、紫煙もろとも換気扇に吸われて消えた。

俺は少しだけ前向きに、百合先輩を殺せそうだった。

スピードメーターの表記はとつくの昔に時速二〇〇kmを超えていた。排気管内部の流路切り替えバルブが開いているおかげで、排ガスはエンジン性能低下の原因となる消音器や触媒を一切通らず、そのサウンドはまるで雷鳴のようにけたたましい。あいにく、同乗者の中にその手の趣味に理解がある人間はいないようだけど。

たった一・六リッターぽっちの直列三気筒ターボエンジンに六〇〇馬力を絞り出させることがどれだけ異常で困難なことか。それを知るのはこのハッチバックを仕上げたDA兵站部三課、通称車両課の物好き連中と暫定オーナーの俺だけというわけだ。

思い返してみれば、司令部が要求した性能は市街地での良好な機動性とNIJレベルIV相当の全周防弾が精々だったはずだが、一体それのどこをどう解釈したらこんなスーパーカーまがいの怪物が出来上がるんだか。

まあ、別にいいけどさ。今まさにこいつの過剰スペックが役に立っているところだから。珍しく。

『目標との距離は現在一〇〇〇。直進し、首都高湾岸線に入ってください』

軍用ヘッドセットから聞こえるアラキの声に従い、俺はますますアクセルを踏み込んだ。二車線の高速道路に一般車両の姿はない。対向車線にもだ。すでにDAが国交省を通して辺り一帯を通行止めにしてあった。

燃える別荘からリリベルを運び出したと思えば、ナカムラ共々ティルトローターでDA本部に呼び戻され、楠木司令直々の短いブリーフィングのちに再び横須賀へとんぼ返りと、機密保持のためとはいえ恐ろしく非効率な手続きを踏んだ我々特命情報調査室実働班は今、首都圏の各地に散り散りになってマリヤ・マギナを捜索している。

いや、厳密に言えば、既に捕捉自体はしているんだ。問題は彼女の標的が、横浜、川崎、東京、浦安の四つからどうしても絞れないこと。四つの内の一か所だけか、複数か、それとも全部か、ラジアータには

それすらもわからないときている。

そして第二の問題が――

「わああああ先輩前カーブ！カーブ！」

――マリヤが乗っていると思われる車が、現時点で四台も確認されているってこと。

「サイトウ！ブレーキ！頼むからあつ！」

フキさんの絶叫からきっかり二秒後、アクセルから右足を離すと同時に左足でブレーキング。

パワーに見合った高性能な競技用ブレーキシステムが猛烈に車速を削る。同時にステアリング裏のパドルシフトを叩き、六速から五速へ。

エンジン回転が跳ね上がる。アンチラグシステムのバブリング音。減速Gで荷重が移る。フロントが沈む。

トンネルの入り口は左に切り込むブラインドコーナー。

この道はよく知っている。路肩のひび割れ一つまで。

今だ。考えるより早くブレーキを抜きながら、ステアリングを切る。

前荷重が生み出す急旋回。理想的なアウト・イン・アウト。

ゆるいコーナーの出口が見えた。

じわり、じわりと再加速。

ターボラグはほとんどない。

四輪全てが路面を引っ掻き回す。か細い悲鳴。ゴムの焼ける臭い。

吹っ飛ぶように右の追い越し車線に乗った。

数秒足らずでまた、二〇〇kmオーバーへ。

「首都高を走るにはホイールベースが足りないか……」

「アホッ！」

防弾ヘルメットの上から強めに頭をはたかれた。痛つてえ。

「なに考えてんだバカ！お前の心中にや付き合わねーぞ！」

「いやあ、そんなに攻めてないですよ。まだタイヤ冷えてるんで」

しれっと言ってみたらもう一回シバかれた。マジ痛つてえ。

「真面目な話、急がないとまずいでしょう。ラジアータが答えを出し

あぐねてるんですから、何かされる前に仕留めない」と

「そりゃあそうだが……」

「心配はいりませんよ、フキさんの部隊は誰も死なせません。まして、単独事故なんてしようもない死に方はね」

ルームミラーをちらと見た。バンに比べればはるかに窮屈な後席には、サクラ、ヒバナ、エリカの三人が足を精一杯縮こめて並んでいる。全員、半袖の夏季制服の上にプレートキャリアを身に着け、アタッチメントだらけのラトラーをスリングで胸元に吊るしたフル装備だ。

こいつらが傷つくところは、見たくない。好きとか嫌いとか、好かれてるとか嫌われてるとか、そんなのはどうでもいいんだ。

ただ、怪我無く、苦しまず、人らしく生きていてほしい。

俺のようになってほしくない。

助手席のフキさんは苦虫を噛み潰したような面持ちで俺の横顔をまじまじと見た。聞かん坊の後輩に頭を悩ませているんだろうな、なんて思った。

「なあ、サイトウ」

思っていた。

「お前、大丈夫か」

俺は反射的に、何がですか？ としらを切った。

彼女があまりにも穏やかな口調で言うから、ついうろたえてしまった。

これから恩人を殺すのに何も大丈夫なわけがない。ないけれど、なんでもない風を装うことはできていたはずだ。今更、誰かに自分の腹の内に抱えているものを気取られるような真似をするほど、俺は密偵として未熟じゃない。

なのになんでこの人は、

「お前が寝てるところを見たことがない」

ああ、そっか。そっちか。

よかった。見抜かれてたわけじゃなかったのか。

俺は見抜いてほしかったのか？

いや、まさか。ガキじゃあるまいし。
そんなこと、あつてたまるかよ。

「人前では寝ないんです。二時間も眠れば充分な体質なので、なおさら」

「足りないだろ」

「いえ。眠れないんじゃないかと、眠らなくていいんですよ。無理をしてるわけじゃありません」

「……そうか」

合流レーンが加わって三車線に増えた直線区間のずっと先の方に、商用バンを一台見つけた。アクセルを抜いて徐々に相対速度を合わせていくと、フキさんはラトラーのチャージングハンドルを引いて初弾を装填した。会話はそこで途切れた。

彼女は多分、何かもつと別のことが言いたかったんだと思う。

俺に話してほしくて、俺ならその真意に気付くと思つて。

気付いた上で黙殺したことも、きつと察しただろう。

ヘッドセットのプッシュ・トゥ・トークスイッチを押して、わずかばかりの後悔を強引に断ち切つた。

「こちらブラックジャック・ワン、ターゲット・ゼロワンを目視で確認。距離三〇〇まで接近し索敵を行う」

『了解。反撃に注意してください』

「分かつた。他の班の状況はどうか」

『ゼロツー、ゼロスリーをそれぞれフクシマ班、ゴウダ班が追跡中。ゼロフォーをハラ班が確保。こちらは自動運転車で、爆発物は確認されませんでした』

「ラジアータの予測に変化はあるか」

『前提条件に誤りがある可能性を考慮し、情報部が再演算中です』

「ま、ここまで読みが外れればな」

『それと、タチバナから報告が一件』

「聞こう」

『ロシア総領事館の車が霞ヶ関へ向かつた、と』

一瞬、呼吸を忘れるほどの衝撃を覚えた。

「マリヤ・マギナを擁するはずの、ロシアが？」

「アラキ。我々の推理、案外当たっているかもしれないよ」

『彼女は対^S外情報^V庁^Rさえ裏切っている？』

「彼女の目的が、日本国内でのサボターージュではなく、ロシアの国際的信用を失墜させることにあるとしたら、今までの行動に筋が通る」

「彼我の距離は三〇〇m。すでにエンジンパワーは落として、排気音も抑えてある。」

フキさんに横目で合図をした。彼女は左手でラトラーのグリップをしっかりと握ったまま、空いた右手でチェストリグのポーチから単眼鏡を引つ張り出した。

『だとしたら、CIAを離れる意味がわかりません』

「確かに。彼女の心理を分析するにはデータが少なすぎる」

『どちらにせよ根拠には欠けますが、状況証拠から考えれば……やはり日本へのテロという体裁をとったロシアへの攻撃と考える方が自然ではありませんね』

フキさんは単眼鏡を覗き込んだままハンドサインを二度出した。意味は残敵なし、そして前進。

距離一〇〇mを目指して緩やかに加速する。

「まだ結論は出せないけどね。領事館絡みで何かあれば、すぐに連絡を」

『了解』

ヘッドセットから手を離す。視線は前を走る商用車から片時も離さない。あれが突然、自律運行からリモート操作に切り替わってこっちに突っ込んでこないとも限らないからだ。

自走爆弾の疑いのある無人車両は遠距離から対戦車ミサイルや自爆ドローンで無力化するのがセオリーだが、DAはその手の兵装を保有していない。

もともと俺一人なら捨て身の特攻でどうとでもできるが、今は仲間がいる。ここは極力、命大事に行くべきだろう。

「グレネードで破壊しましょう。トラップだったとしても射程いっぱいから狙えば危険性は低いはずです。サクラ、ランチャー取ってくれ

る?」

「ウツス。対装甲榴弾はーつと、これか。かつくいー!」

「フキさん、ハンドルお願いします」

「普通ガンナーは助手席じゃねーのか」

「顔出した瞬間にターゲットが自爆でもしたら危ないでしょ?」

「それはお前だつて」

「フーキーさーん?」

「わかったわかった! それが一番ローリスクだつて言いたいんだろ、その通りだよ……つたく」

横から渋々伸びてきた手にステアリングの操作を任せて、俺はパワーウィンドウを全開した。同時に後ろ手で擲弾発射器グレネードランチャーを受け取る。

M320A1。陸自のGLX160とは違って、こっちは米軍制式の品だ。DAがどこから仕入れてきたんだか知らないが、妙に使用感があるあたり、きな臭いよな。

フォールディング・ストックを展開。バレルをスイングアウトしチャンバーチェック。多目的榴弾HEDPの装填を確認。スイングインの後、セイフティを解除。

窓から身を乗り出しても、ヘッドセットの聴覚保護機能のおかげで風切り音はほとんど聞こえない。加えて、顔に沿ったラップアラウンド形状のミリタリー・アイウエアは風の侵入を一切許さず、照準器を覗き込む目が痛むようなこともなかった。

彼我の距離は変わらず一〇〇m。時速一〇〇km分の向かい風だが、この中初速弾なら届くだろう。

トリガーを引こうとした瞬間——前方で唐突にブレーキランプが点いた。

「回避——」

四人の命を思えば、攻撃の中断に葛藤はなかった。即座にセイフティをかけてトリガーをロックすると同時にブレーキペダルを蹴りつける。制動力はこちらがはるかに優秀だ。詰まりかけていた車間距離が再び開く。

上体を車内に収め、パワーウィンドウスイッチを叩く。

ランチャーを片手に、フキさんからステアリングをひったくるように奪う。

シフトダウン。エンジンの回転が跳ね上がる。

被害を抑えるには、俺が盾になるしかない。

サイドブレーキを引いた。

後輪がロック。

ステアリングをわずかに左へ。

タイヤが鳴く。進行方向はそのまま、車体に向きを変える。

サイドを戻す。

右に切り返し、カウンターステア。

ドリフト・アングルは約四五度。失速しながら維持。

このハッチバックは右ハンドル。だから、俺が一番前だ。

俺が一番、被害を受ける。

ウインドウが閉じた。

誰かが何かを叫んだ。

轟音に塗り潰されて、聞き取ることはできなかった。

色のない爆炎。

無数の破片。

防弾ガラスが真っ白にひび割れる。

硬いものがボディを打つ音がする。豪雨の中にいるようだ。

メーター類から光が消えた。

ステアリングがやけに重い。

ドリフトの抵抗で、車は自然に止まった。最後に残った慣性が、客

室を一度だけ大きく揺さぶった。

「みんな、怪我は」

言いながら、ステアリングコラムの下にあるノブを引いた。蜘蛛の巣状にひび割れた防弾ウインドウの向こうで傷だらけのボンネットが僅かに持ち上がる。

エンジンが止まったのは、多分電装系が壊れたせいだ。どこかがショートしてもヒューズが切れるから発火の心配はないと思うが、念のためバッテリー端子を外しておきたい。仲間が丸焼きになるなん

てごめんだ。

「後ろはみんな平気っス……っ！か、聞かれてんだから答えろよ、お前ら。そんなに先輩が嫌いかよ」

「えっ？ や、ちがつ、違うのー！」

「違わねーだろうが。サクラは弁明しようとするエリカの言葉に被せて、吐き捨てるように毒づいた。

「喧嘩は任務が終わってからにしろ。今は退避が先決だ」

フキさんも無事、か。見た限りどこにも外傷はないし、自分でシートベルトを外してドアを開けられている。脳震盪や脳挫傷の可能性も限りなく低いとみていいだろう。

俺も早く外に出て、自爆した車両の確認、を、

「……ん？」

車体がじわじわと傾斜している。なんで。

いや、違う。

傾いてるのは俺の頭だ。何かが顎を伝って、滴り落ちている。

「血？」

だけではない。指ですくった雫には、透き通った黄色の液体が混ざっている。

「サイトウ？ どうした？」

頬に手を当てて、鮮血混じりの筋を辿った。こめかみの後ろ、耳の辺りから流れているらしい。

ヘッドセットに触れた。

鋭いものが指に当たった。何かが、覆いを、突き破つて。

頭が、いたい。ぐらぐら、する。きもちわるい。

ちからが、入らない。

え、

死ぬ？

「……っ！ おい！ 大丈夫か、返事しろ！」

うごけない。

「外に寝かせるぞ。ヒバナ、降ろすの手伝え！」

「りよ、了解！」

「エリカとサクラは止血の用意だ！」

うごきたいのに。

「重っ！　また筋肉つけやがったなお前……！」

「先輩！　サイトウ先輩、どうしちやったんスカ——ひっ」

「大丈夫だ！　こいつなら、絶対大丈夫だ！」

みんなが、みてる。

「司令部！　ブラックジャック・ワンが負傷、破片が頭蓋骨を貫通している！　至急救援を求む！」

「止血つたつて、こんなのどうすりや……」

「ヘッドセットを取ったらこれも一緒に抜けちゃう。そうになったら本当に助からない……」

「先輩なら治せるんじゃない？」

「でも、脳だよ？」

「くそっ……！」

こえがする。

「あつ、先輩駄目です！　抜いちや駄目！」

あたまのなかから、こえがする。

「みんな押さえて！　サイトウさんが死んじゃうっ！」

あなたは、だれ？

「すごい力っ!？」

「やめるサイトウ！　マジで死んじゃうぞ！」

「ヤバイよフキ、ビクともしない！」

「先輩、やめてください……やめて……！」

ふと掌に痛みを感じて、目を向けた。俺は知らないうちに焼け焦げた金属の破片を握り締めていた。白い塗装が片側に残った鋭い切っ先は真っ赤に濡れている。なんだろう。車の外板だろうか。

ずいぶん深く刺さってたんだな。そんな他人事みたいな感想を抱いて、

「……死ぬかと思った」

ぼつりと呟いた。

「お前っ——」

「せんぱあいー!」

その瞬間、ライトブラウンの物体が胸に飛び込んできた。面食らったが、よくよく触ってみると温かくて、それでやっと目の前のふわふわが人間であることを理解した。それも、泣いている少女だ。

涙の理由がわからなくて、その子の頭を片手で抱きながら辺りを見回した。

アスファルトの上に寝そべる俺を、重武装のリコリス三人が見下ろしている。背の高い子と、そのすぐ横に引っ付いているミディアムボブの子は安堵の表情を浮かべているが、一番小柄な子は、なぜだか今にも堪忍袋の緒が切れそうに見えた。

小さく華奢な手が、俺のコンバットシャツの胸ぐらを掴んだ。吊り上がった目に睨まれる。心当たりは全くない。

何かを封じ込めるように食いしばられた彼女の白い歯が、やけに目を惹いた。

殴られる、とも思った。

「……馬鹿野郎」

血を吐くような声音で彼女は言った。予想に反して、それだけだった。

俺はよくないことをしてしまったのだろうか。

そもそもなぜ俺は、制服ですらなく、暗灰色の戦闘服なんてものを着込んでここに倒れているんだ。特殊部隊でもあるまいし。

いや、そんなことより、白いハッチバックの向こうからくぐもった沸騰音がする。道路のど真ん中ということを見ると、音源は乗用車のガソリタンクである可能性が高い。

何がなんだか知らないが、遮蔽の外にいる長身とボブの二人が危ない。跳ね起きて彼女達の手を引き、ハッチバックの陰に引きずり込んだ。

「わ、え、何?」

「サイトウさん、急に動いたらダメだよ!」

それでも不安で、二人に後ろから覆い被さった。小柄な子と、泣いているツーブロックの子はエンジンのあるフロント側に隠れている

から、まだ生存率が高い。だから、俺がこつちで盾にならないと。そしてまた、爆発。

頭への衝撃。ヘルメットの顎紐が破片の着弾に伴う過剰な外力を受けて自動的に外れ、吹き飛び、リアウィンドウの破片が肩に降りかかる。

「きやつ!?!」

「わあっ!」

腕の中の二人の悲鳴を聞きながら、割れた窓から様子をうかがう。今度は火柱まで上がっている。ボディが溶けて内部のシャーシが見えるほどの勢いだ。

二種の爆破装置を時間差で起爆することで、もうトラップはないだろうと無防備に近づいてくる敵を叩く。そういう仕掛けだ。俺自身、今まで何度も使ってきたし、使われもしてきたから、この手口はよく知っている。

二種の爆破装置? なんだそれ。一つ目があつたみたいない言い回しだ。

俺はここで何が起きたか知っているのか?

「怪我はない?」

腕の中の二人は困惑した様子で小さく頷いた。

「そつか。よかつた……」

爆発を予見したことが不思議だったのか、それとも別の理由があつたのか、俺にはやっぱりわからない。わからないけれど、みんなが無事だと俺は嬉しかった。

名前も知らないのに、そう思った。

『——ック・ワン、応——願います。ブラックジャック・ワン、聞こえますか』

ヘッドセットから声がする。奇跡的にも、右耳のスピーカーが死んだだけで他の機能は無事だったらしい。

「こちらブラックジャック・ワン。どうした」

『負傷したと聞きました』

「……ああ。被弾はしたが、作戦行動に支障はない」

そうだ。俺はマリヤ・マギナを追ってここまで来たんじゃないか。

特調実働班のメンバーのみで編成された第二特設任務部隊、通称ブラックジャックス。リコリスを超える秘匿性とリリベルを凌駕する火力によって、重大犯罪に対して超攻的な対応を行う第三の処刑人。

特調はあくまで情報機関としての権限しか有していないから、本来、こういう荒事への介入は難しい。そこで楠木司令は数多の規則を恣意的に解釈し、リコリスとリリベルの両方を支援する後方部隊という名目で、DA有数の精鋭を鉄火場に放り込むための都合のいいガワを繕った。

二人の仲間を殺した俺が第二一部隊だなんて傑作じゃないか。創設にあたって内心でそう自嘲し、ギャンブルのルールになぞらえてブラックジャックの名を付けたのを覚えている。

ああ、覚えている。思い出したよ。

『了解。フクシマ班が追跡中のターゲット・ゼロツ、およびゴウダ班のゼロスリーが同時に爆発。ハラ班のゼロフォーはその二七秒後、燃料タンクより出火。全焼したとのことです』

「四台ともデコイだと？ なら本命は？」

『順を追って説明します。先刻、ロシア領事館がマリヤ・マギナの一連の事件に対して全面的な協力を申し出ました』

庇っていた二人から、そつと体を離れた。

息を大きく、吸い込んだ。

『マリヤは同国内からの逃亡に際し、ヤクーチア自治区軍が管理する武器庫から多数の小火器とその弾薬、加えて工兵用の可塑性爆薬ブラステックまでもを無断で持ち出していたそうです。この事態はロシアS対外情報庁Vの制御下のないイレギュラーであり、そのためにロシアは自らの潔白を証明するべく、日本とアメリカの両国に経緯の一切を打ち明けたようですね』

関係各所が対応に追われている影響で、こちらに入ってくる情報は微々たるものですが。アラキはそう付け足した。

指先が冷えていく。

『彼女は盗み出した装備に行く先々の独立過激派に売り渡し、治安維持部隊との小競り合いを誘発。その混乱に乗じて新たに装備を鹵獲または窃取することで、次の管区への運賃を確保すると同時に追手の目をくらませ、日本まで逃げおおせた』

考えたのは、マリヤの、百合先輩のこと。

彼女にもう逃げ場はない。日本、アメリカ、ロシア、そのすべてを敵に回してまでやりたいこととは、一体何なのか。

俺にはわかってしまった。

『以上の情報と現在の状況を元にラジャータが再計算を終了。マリヤの推定現在地は千葉県浦安市、鉄鋼通りです』

「一番近いのはハラ班だな。二人に偵察させろ。手空きの部隊がいればバックアップに回すんだ」

『了解、手配します。加えて、上空にて待機中のハミングバードにブラックジャック・ワンおよびアルファ分隊の回収を要請しました。一度帰還し、救護班のバイタルチェックを受けてください。ハラ班にはフクシマ班と第一九特設任務部隊を充てます』

「いや、フクシマとコイズミは戦闘に向かない。私がこのままアルファ分隊と共に浦安へ向かい、マリヤを急襲するのが最も確実だ」

『……サイトウ君』

アラキの声音が深く沈んだ。

「何でしょう、先輩」

『確かに彼女は止めなければならぬ。だが、必ずしも君が撃つ必要はない。そうだろうか？』

『……』

『なぜ君は、自分から傷つこうとする』

俺は答えに窮した。当たり前前に過ぎて、かえってどう言えばいいのかわからなかった。

強いて言うなら、苦しむため、だろうか。

俺は数百の他人と二一の友人を殺した。

人間、八〇年は生きるとして、誰かから奪った時間の総計は五万年を超える。

それで俺は、一体何日の自由を買った？ 自分が優れた殺しの道具であることをD Aに示し、実験動物として消費されることから逃げるために、どれだけの罪を犯した？

でもその考えを通そうとすると、たきなやフキさんや、ほかのみんなにも罪がある、ということになる。それは嫌だ。認めたくない。

殺しの免許証ライセンスは免罪符じゃない。

放たれた弾丸リコリスに罪はない。

自己矛盾が俺を苦しめる。

きつとこれも罰だ。

俺は罰を欲している。

俺は苦しまなければならない。

『……すまない、知ったような口を利いた。忘れてくれ』

「いえ、いいんです」

日差しを遮るものがあつた。顔を上げれば、翼端の巨大なプロペラを真上に向けた機影が見えた。

三車線の道路の中心にゆつくりと降りてくる黒塗りのテイルトローター。頭上から吹き降ろすダウンウオッシュに髪を乱されながら、俺は着陸地点へ歩き出した。

「……いいんです」

今なら風切り音を言い訳にして、黙っていられるから。

§

「立てこもった？」

交差点から一五〇m先、右手。スコープ越しに見える港湾倉庫の大扉は固く閉ざされていた。手前にも奥にも同じような折板屋根の倉庫や工場の類が軒を連ねている。このあたり一帯は鉄鋼通りの名が示す通り、巨大な工業団地なんだ。

「はい。第一九特設任務部隊ナインテンライヤーズがドローンで全周を監視しているんですが、現在までどこにも逃げた形跡はなく、屋内から散発的に対空射撃が見られるばかりです」

アサルトライフル——このM7A1も米軍からの払下げだろう——から頬を離すと、俺と同じ都市迷彩の装備一式を身に纏ったナカムラは手元の軍用スマートフォンから顔を上げた。

「内部の様子は未だ不明ですが……突入しますか？」

「フロントマンは私が。お前とハラはウィングマンとしてアルファ分隊をカバーしろ。元セカンド・リリベルのお手並み拝見だ」

「りよ、了解……プレッシャーだなあ」

物心ついた頃から訓練を受けているだけあって、口振りの割に全く気負った様子がないのは流石というべきか。

ハラも大概だ。彼の古巣である六課は情報部の中でも比較的銃を撃つ機会の多い部署とはいえ、せいぜいが拳銃止まり。踏んだ場数だけなら最年少のサクラより少ないだろう。だどいうのに文句の一つも言わず、それどころか表情を変えらることすらせず、淡々と所定のフォーメーションを組んで俺の命令を待っている。とんでもない胆力と順応性だ。

徹底した実力主義。それが特命情報調査室の有り様だった。

「初めまして、ナカムラと言います。コールサインはブラックジャック・セブンです。一応元リリベルなので、経験だけはそれなりにあります」

「私はハラ、ブラックジャック・エイトだ。CQBの経験は少ない。極力カバーはするが、不測の事態が発生した際は彼がサイトウを頼った方が生存率は高いだろう」

「アルファ分隊長、アルファ・ワン、春川フキです。よろしく願います」

この部隊がある限り、子供が無茶な作戦に使い捨てられることはまずない。

俺も子供じゃないのか、って？

そうだよ。俺は子供じゃない。理論上、どんな目に遭っても必ず帰還できる俺は、上層部にとっては決して壊れない備品でしかない。

補充しにくい孤児とは違う。だから丁寧に運用する道理もない、つてわけだ。もつとも、実質的な飼主である楠木司令がどう考えてい

るかまではわからないが。

「……先輩」

胸のスリングで吊ったM7のグリップを握ろうとしたら、誰かに袖を引かれた。

振り返った。サクラは俺の手を見つめたまま動こうとしない。それを咎めようとしたのか、フキさんは口を開きかけたけれど、俺が目配せをするそばつが悪そうに頭をかいただけで何も言わなかった。ナカムラもハラも、何かを察して見て見ぬふりをするだけだ。

「よしませんか、もう」

かすれた声だった。彼女はティルトローターに乗ってから泣き続けていた。ずっと機内で手を握り、背中をさすってやって、ようやく落ちて着いたばかりだ。フキさんは精神的に不安定な状態にある彼女を戦闘に参加させることをよしとせず、撤退用の車両の回収を命じた。

彼女とは一度、ここで別れなければならぬ。

「ブラックジャック第二特設任務部隊は各地に散ってる。ハミングバードに回収を要請しても、犯行予想時刻にはもう間に合わない。あたしたちでやるしかない」

「先輩の頭に破片が食い込んだのを見たとき、死んじやうんだと思いました。自分で引き抜いてましたけど、あたしの指より長かつたつすよ、あれ」

「……そうだね。心配かけた。でも、もう大丈夫」

「どこ見てるか分かんないような顔で、息もしてなくて」

「あたしは死なないよ」

「嘘だ」

腕を掴む手に力がこもった。大した腕力でもないのに、振り払える気がしなかった。あるいは、俺は心のどこかで自分をこの世に繋ぎとめてくれる縁よすがを求めているのかもしれない。

そう。いつだか、相棒に利口ぶって語ったように。

「さつきはただ異物が刺さっただけだった。じゃああの爆発がもつともつとでつかくて、爆風で体が全部バラバラに吹っ飛んでたらどう

なっていました？ まさか新しく首が生えてくるなんて、そんな都合のいいこと、あるわけない」

サクラは俺をすぎるような目で睨む。

「あんたは死なないんじゃない。死にくいだけだ」

自分でもわかつてるんでしょ。

不死なんてもんがありえないことくらい。

怒気と失望と、それからかすかな悲しみを滲ませて、彼女は俺に詰め寄った。どこことなくフキさんの影響を感じて、場違いにも微笑ましく思った。

彼女の言葉が届かなかったわけじゃない。

彼女の叱責にはっとして、行いを改めるような気力はもう、俺には残っていないかったんだ。

死のうが、死ぬまいが、俺は誰かの身代わりになり続ける。

俺は燃え殻みたいなものだ。もはや新しい火も起こせない、ゆっくりと冷えていくだけの灰。

熾にさえなれない余熱を使つて、最期の最期にけじめをつけて、いなくなるつもりではいるけれど。

俺は死なない。

生きてもない。

死んでないだけ。

だから、俺は、

「みんないつか死ぬ。あたしも、君も、誰だってそうだ」

「だったらー！」

「サクラ」

生きる気のある人間に、道を譲ることにはしている。

「死んでほしくないんだ」

腕にしがみついた彼女の手を取つて、自分の指を絡めた。コンバットグローブのごわついた生地は熱を通さない。それでも、こちらの動きに合わせて柔軟に曲がる指の一本一本に彼女の命を感じる。

これは、尊いもの。失わせてはいけないものだ。

奪つてはいけないものだ。

「……やめてくださいよ。そんな、そんな言い分、ずるいでしょ」
俺は彼女の表情を直視できない。

「うん。わがままだ」

「ふざけてる」

「ごめん」

「そんなこと言われたら、こつちが譲るしか、なくなつちやうでしょ……」

「ごめんなさい。どうか、恨んで」

サクラの方から自然に指がほどかれた。

「……死んだら恨みます」

隊列を逸れて遠くへ駆けていく彼女の背中が十分に小さくなったことを見計らつて、俺はライフルのセイフティを外した。

感傷はもういらぬ。

エントリー
「突入」

被弾率の高い先頭は俺。その両翼をナカムラとハラが固め、フキさんを始めとするリコリス三名は後ろへ一列に。ちようど矢のような陣形で建物へ近づいていく。

俺達が使える出入り口は正面の大扉以外にない。倉庫の最奥は東京湾に直接面していて、船を横付けして貨物を直接やりとりできる構造になっている。逃げるなら奥へ。かかってくるならこつちへ。二つに一つだ。

「待て。中から何か聞こえる」

大きな破片を食らったせいか、電子処理された低音には激しいノイズが混ざっていた。ヘッドセットを耳から外して首にかける。

排気音だ。まだ暖機運転が済んでいないのか、少し湿ったようなニュアンスを含んでいるが、重機やトラックに使われる大排気量のディーゼルエンジンのものだということとは明確にわかる。

ぐずついた低音は次第に大きく、そして、徐々に近づいてきて、ついには金属同士を擦り合わせたような金切り音と、連続した硬質な打音が混じり始めた。

「っ、総員退避！ 扉から離れろ、路地から身を隠せっ！」

金属製の扉が内側から叩き壊される。

ひととき大きな駆動音。

眼前に現れるは、オリーブ色の巨大な車体と、アスファルトを蹂躪する強靱な履帯。極めつけは、サードパーティ第三者企業製の近代化改修キットによって、全周にセンサーが増設された平たい砲塔。

設計、製造、旧ソ連。

生産車の全てが退役して久しい骨董品。

しかし、これがいかに古くとも、歩兵の携行火器など一顧だにしない装甲と、数km先の人間さえロックオン可能な火器管制装置^F_C^Sを備えた歩兵戦闘車であることに違いはない。

「……BMP-2」

総重量一四トンの怪物が、俺にその主砲を向けた。

口径三〇mm。かすめるだけで人間を粉碎して余りある巨大な機関砲が火を噴く。

幸い照準は甘い。とはいえ、砲旋回が追いつく前に懐に潜り込まなければ、俺も、その後ろにいる仲間も終わりだ。

「こっちを見ろ！」

全力で前へ駆け出しながらM7A1を片手で構え、手当たり次第に弾をばら撒く。狙っている暇はない。砲塔各所の光学センサーにでも当たれば御の字だ。

横腹を見せるBMP-2がエンジンの回転を上げた。履帯が軋む。超信地旋回だ。車体が回れば当然、その上についた砲塔の射角も変わる。早い！

主砲の付け根が断続して光る。けたたましい銃声。プレートキャリアが挟れる。

同軸機銃か。歩兵には十分だが、俺を止めるには不足だ。

跳躍。ライフルを乱射。車体に付いた小さなレンズが一つ砕けた。平たいフロント天板に膝をつく。向かって左はスリット状のグリル。エンジンを損傷させられないか。わずかな期待を込めて射撃を加えたが、駄目だ。高威力が売りの $277^{6.8 \times 5} \text{Fury}^{1m}$ 弾でさえ貫通には至らない。

眼前の砲塔がまた爆ぜる。機銃掃射を横つ飛びにかわし、サイドスカートの縁に手をかけ、車体側面に張り付き、寸でのところで落下を避ける。わかつてはいたが、やはり天板には居座れそうにないな。

「こちらブラックジャック・ワン！ わが隊は現在歩兵戦闘車と交戦中、撤退許可を！」

ヘッドセットをかけ直す暇なんか無い。通信音量をありつたけ上げてそのまま叫ぶだけだ。

『了解、司令部へ撤退許可を申請。アルファ分隊と第一九特設任務部隊は現在作戦領域を離脱中。ブラックジャック・セブンおよびエイトを護衛に付けます』

「時間を稼げばいいんだな！」

喋っている間に装甲車は走り出す。まずい、このままじゃ内陸に入られる。そうなれば虐殺だ。

『いえ、あなたは自分の身を守ってください』

「こいつを何とかしないと大勢死ぬ！」

『これは司令のご判断です。もはやこの作戦はD Aの手に負えるものではありません。ゴウダ班を回収したハミングバードが現在そちらに向かっています。上空からの攻撃で攪乱している間に脱出を』

言い返す余裕はなかった。無人の道路を暴走する装甲車は、横つ面に張り付いた俺を引きはがそうと滅茶苦茶な蛇行運転を始めた。それだけならまだ耐えられたが、進行方向に目を向ければ、路肩に停められたトラックが真正面に迫っている。これで邪魔なゴミをこそげ落とす腹積もりらしい。

腕一本で体を引き上げ、もう片手で胸のポーチからスタングレネードを取り出す。たかだか一瞬の閃光くらいで最新鋭の軍用ベトロニクスをごまかせるとは到底思えないが、まあ気休めだ。

天板装甲に乗った瞬間、安全ピンを抜き、レバーを外し、握り込んだまま起爆。爆音と爆炎。砲塔に向けた掌は大火傷。だが、機銃は撃たれずに済んだ。こういうような姿勢で反対側まで転がり、またサイドスカートにぶら下がる。その数秒後、装甲車は放置されたトラックにボディの片側を擦り付けながら再加速した。

あと少しでも回避が遅れていたらミンチになっていた。底冷えするような殺意を感じる。

「……あなたは」

そんなに世界が憎いのか。

許されないことなのに、どこか、共感してしまう自分がいる。

『サイトウ、まだ生きてるな！』

この低い声はゴウダか。

「ああー！」

『いいかよく聞け、お前がしがみついているそいつにはヨーロッパ・アーマメンツの無人砲塔化キットがインストールされてる。最少乗

員数はAI管制オペレーターが一名。センサーで捕捉した標的への発砲の如何はそいつが判断する仕組みだ』

「センサーを破壊すればロックオンもできない？」

『そういうことだ。到着まで五分だ。五分だけ踏ん張れ。そうしたら俺たちが制圧射で目を潰す。その隙に逃げろ、いいな！』

「わかった！」

威勢良く答えはしたものの。

「……やっぱ無理かもな」

今度は工場のシャッターに突っ込む気だ。避けようがない。かと言って車両から飛び降りようものなら、マリヤは俺をすぐさま轢き潰すだろう。

履帯に巻き込まれれば戦闘不能は免れない。このまま食らう。

体感速度は時速六〇kmくらいか。インパクトの衝撃の前には、歯を食いしばったところで気休めだ。

シャッターを突き破る瞬間、装甲車は片側の履帯を停止してドリフト・アングルを作った。

壁と、真横を向いた車体。その間に俺がいる。

一瞬、意識が飛んだ。

骨の折れる音が聞こえる。サイドスカートにかけていた指もまとめて駄目にされた。

体が空中にあることが感覚でわかる。慣性には逆らえない。

固く閉じていた目を開けた。

薄緑の、恐ろしく背の高い箱が至近にある。上方にはメンテナンス用の足場らしき構造物。

プレス機？

気づいた時には、背中からそこへ叩きつけられていた。

「え、は」

肺が潰れる。肋骨が砕ける。肩が外れる。

落下。

「が」

断裂した神経から発せられるでたらめな電気信号が、ボロ切れ同然

の身体を不規則に痙攣させる。逃げないと。わかっているても手足が動かない。

「あ、ぐ」

巨大な工作機械同士の隙間に見えていた履帯と転輪が、ゆっくりと逆転を始める。

装甲車が来る。殺される。逃げ。逃げ。

逃げ。

「は、はっ……」

指も、腕も、まるで関節が増えたように捻じくれている。それでも、激痛をこらえてコンクリートの床を這う。

とにかく奥へ。できる限りの速度で再生を続けて、籠城するんだ。時間さえ稼げれば助けが来る。それでいい。

それで、俺は、この手で先輩を殺さずに済む。

「くひ」

口端がひとりでに歪んだ。

あの時、アラキと交わした言葉に嘘はない。

百合先輩を殺す。その覚悟は、確かにあった。

あったんだ。

なのに、もつともらしい言い訳が見つかった途端、俺は安心してしまっている。自分の心の安息のために、何もかもを投げ出そうとしている。

なんて腐り切った性根だ。

俺は、俺は、

僕は、

「助けて」

最初は幻聴だと思った。

「誰か」

幸い、俺の口から発せられたものではなかった。

「助けて……」

今にも消え入りそうな、か細い女性の声が、どこからか聞こえてくる。

装甲車は反応しない。駆動音から察するに、停車し、砲塔を左右に回して俺を探しているようだが、もしかして音を拾うことができないのか？

レックホルスターから拳銃を抜いた。アメリカ特殊作戦軍のお下がりで、Mk. 23 Mod. 0。普段使っているグロック17に比べても一回りは大きい。

右腕と両脚は辛うじて骨が繋がった。最悪、走って逃げられる。

たった今身を隠している旋盤らしき機材に向けて、一発だけ撃ち込んだ。サプレッサーはない。銃声と共に、跳弾した弾が甲高い騒音を立てる。

砲塔はこちらを見ない。

いける。

スタングレネードのピンを抜く。レバーはまだ握ったまま。

マリヤは頭が切れる。反対側に投げようものなら、炸裂した位置から射角を逆算されるのが落ちだろう。

だから、ここで起爆させる。

転がしたグレネードを蹴り飛ばし、隣のレーザー加工機のブースまで滑らせる。数秒後、一度は俺の手を焼いた閃光が全方位に弾けた。

たちまち野太い砲声が構内に響く。向かいに並んだ工作機械の数々を三〇mm機関砲が薙ぎ払っている。

陽動には成功したが、正直、BMP-2の火力を侮っていた。あの主砲がぐるりと一周した頃にはきつと、工場内にまともな遮蔽物は残らない。

だがゴウダの言を信じれば、たとえ全方位にセンサーがあっても、それらが収集した情報を最終的に発砲許可という形で処理するのは生身の人間だ。なら隙はきつとある。そして、今がその時だろう。

鼓膜が破れそうなほどの大音響。何かの冗談のように大きな薬莖が、主砲の根本から絶え間なく吐き出されていく。

資材置き場を駆け抜ける。パーティションで区切られた事務所らしき区画が最奥に見えた。道中の壁にかけられていた安全第一の標語はもう、装甲車に押しつけられ、玉突き事故の様相を呈した口ボツ

ト溶接機の群れに押し潰されてどこにも見えない。

体当たりでドアをこじ開ける。やはり歪んでいた。閉める際に近くのロッカーを引き倒してバリケード代わりにするか悩んだが、どうせこんな軟弱な仕切り、あんな化け物には時間稼ぎにもならない。やるだけ無駄つてもものだ。

「誰かいるのか」

社長席だろうか。壁際の大きなデスクの後ろから、若い女性が顔を覗かせた。

やっぱり幻聴じゃなかった。幻であつてくれたほうがよかった。逃げていてくれたほうが。

「ブラックジャック・ワンより司令部、民間人を一名発見」

「警察の方ですか？ あの、避難しようとしたら祖父が倒れてしまつて、救急車も来られないと……」

ヘッドセットのマイクを口元に近づけながら、視線を合わせて頷いてみせた。

「訂正、二名発見、うち意識不明が一名。指示を乞う」

『私だ。状況を報告しろ』

民間人への情報漏洩は許されない。イヤークップの片方を耳に押し当て、声を潜めて言う。

「工場内、仕切りを隔てて距離一五の位置にBMP-2がいます。私を失探ロストしたようで、攻撃が止まりました。今なら安全に退避できるかと」

『ランディングゾーンを変更する。所定のスキームに従い民間人を連れ出せ。だが、あくまでお前の回収が最優先だ。それを忘れるな』
「了解」

デスクの裏に回ると、女性のすぐ傍に体格のいい男性が倒れていました。うちのゴウダを一回り縮めて二〇年ほど年を取らせたようないかめしい老人だ。

手首に触れても脈がない。自発呼吸もない。胸に耳を当てる。

微細な振動。心室細動だ。いくら耳を澄ましたところで、俺にしか聞こえないだろう。

「一人じゃとても運べなくて……息もしてないんです！」

「残っているのはお二人だけですか？」

「え、ええ。他の従業員はみんな先に避難させたんです。祖父は工場長ですから、私と残って、手分けして戸締りを」

心肺蘇生自体は可能だ。事務所にはAEDがある。

だが、壁一枚隔てた先で装甲車が俺を探している。

見つければ、全員死ぬ。あれには、俺をすら殺しきる火力と質量がある。

「落ち着いて聞いてください」

命を選ぶ。

「お祖父さんは、すでに亡くなられています」

この人はまだ助けられる。

「……え？」

「非情とは思いません。しかし、今はどうか一刻も早い避難をお願いします」

「で、でも、祖父を置いていけませんっ！ 私、わたしっ」

「ここにいれば死にます！」

混乱に流されるまま、人として当たり前の情に従って言い募ろうとする彼女を、俺はそれ以上に強い語気でねじ伏せた。

「今は逃げてください。私に、あなたを守らせてください」

我ながら吐き気を催すような美辞麗句だったが、彼女はひとまず納得した様子を見せた。素直に首を縦に振ったのは砲撃音を聞いたせいでもあつたんだろう。銃声すら知らない人間があれだけの轟音に曝されて平静を保てるわけがない。

うなだれる彼女の手を引いて裏口を開ける。そうやって急かし、感傷にも罪悪感にも浸る時間を奪うことが、俺にできる最大限の慰めにして償いだつた。

戸口の目と鼻の先にはまた扉があつた。建屋と建屋の隙間に見える幅一メートルほどの空は嫌味なほどに晴れ渡っていて、上空からの火力支援を受けるには絶好の条件といえる。言い換えれば、ハミングバードは屋内に隠れた装甲車に対して打つ手がないということ。

ドアの先もまた事務所。まるで鏡合わせだ。

マリヤはまだ来ない。それがかえって恐ろしい。

『ブラックジャック・スリーよりブラックジャック・ワンへ。ハミングバード、作戦空域到着まであと二分です。回収地点までは私が口頭にて誘導します』

「了解」

『今は生き残ることだけを考えましょう。いいですね』

「……」

念を押されてしまった、か。アラキには敵わないな。

でも、ごめん。やっぱりその言いつけは守れそうにない。

「迎えが来ています。急ぎましょう」

「はっ、はい！」

聞こえるんだ。後ろから。ドロドロと濁った排気音が。

「アラキ」

『はい』

工場中央の通路を小走りで駆け抜けながら言う。

「今から無線を救助対象に渡す。誘導を頼む」

『あなたの生存が第一と、今——』

「マリヤに気付かれた」

『……了解』

聡い人だ。今の言葉だけで全てを察してくれた。

歩調を緩めて振り返る。肩のポーチから取り出した無線機をヘッドセットと一緒に差し出す。

「これを」

「えっ?」

「オペレーターと繋がっています。聞こえてくる声に従えば、安全に避難できます」

「あなたは?」

「すみません。最後までご一緒したかったのですが、助けを必要としている方が他にもいます」

履帯の動く音がする。彼女にも聞こえたのだろうか。

「走って。何があっても絶対に振り返らないで。さあ！」

肩を叩いて送り出した。彼女は困惑しながらも、しかし背後に迫るものの気配を感じてか、迷いのない足取りで出口へ向かっていく。

見送る暇はない。ライフルを手放してスリングに預け、バックパツクのホルスターからグレネードランチャーを抜く。

セイフティを解除した。

同時に巨大な破砕音。

BMP-2が奥の壁を突き破って現れた。

多目的榴弾の装甲貫通力は均質圧延鋼装甲換算で五〇mm。比較的角度の立った砲塔を狙えば貫通も難しくないはず。

もつとも、こんな小さい擲弾を貫通させたところで、奴がどうにかなるとは思えないけど。

これしかないんだ。

照準器を覗く。

トリガーを引く——同時に、機銃が薙ぎ払う。胸の防弾プレートが軋み、両腕から鮮血が弾ける。向こうは砲塔の付け根が小さく爆ぜた。

唐突に掃射が止まった。兵装を破壊したのか。しかし、喜びより先に湧いたのは疑問だった。

この手の車両が装備する同軸機銃は狙撃銃並に精度が高いとされる。真正面で棒立ちしている俺を殺すのに、わざわざ辺り一面に弾をばらまく必要なんかない。会敵時のようにピンポイントで急所を撃ち抜けばいいはずだ。

これじゃまるで、他にターゲットがいたかのような。

主砲が動く。やっぱりグレネードランチャー一丁でこいつと戦うのは無茶だったか。

背中を向けて逃げる。けれどももう諦めはついている。どう考えても、俺の足より砲弾のほうが早いだろう。

最初に右腕が吹き飛んだ。

間髪入れずに左腕。どちらも砕け散ってはいない。徹甲弾に食いちぎられた。

二本の腕が錐揉みに宙を舞い、俺を追い越す。
一拍あつてから、血飛沫でできた大輪の花が咲いた。
いたぶつてくれる。

転倒し、地べたに頭を擦り付けながら内心で吐き捨てた。

間もなく大量の脳内麻薬に思考が痺れる。

這う。腹の下のライフルが邪魔だ。

這う。エンジン音が聞こえる。

這う。轢き殺される。

這つて、這つて、這つて、血溜まりの中に落ちている右腕に噛み付く。掌はランチャーをまだ握っている。

断端と断端を押し当てる。肉が絡み付く。

早く繋がれ。

ぼやけた低音がすぐ横を通った。

顔を上げて視界は暗く。

温い血に浸かっているのにひどく寒い。

誰かに横腹を蹴られた気がする。

「二次止血が早い」

頬を張り飛ばされた。飛びかけていた意識が戻るや、二の腕に重みを感じる。

俺は今、仰向けに？

そうか、多分、踏みつけられてるんだ。

「薬漬けの次世代歩兵だな。どこの所属だ。特戦群か？ 海兵隊か？」

じわり、じわりと、目の焦点が合う。

「答える。貴様らがこの程度で死なんのは知っている」

変わらないな、百合先輩は。

ああ、でも、少し痩せたかな。

「答える！ 痛覚までマスキングしているわけではあるまい！」

髪を掴まれ、頬には冷たいものが押し当てられた。ややあつてナイフだと分かった。肉を削ぐつもりだ。殺すためじゃない。苦痛を与えるため。

今まで何人の敵にこうして切っ先を突きつけてきたのだろう。けなすでも憐れむでもなく、平坦な心境でそう思った。

「覚えてますか、私のこと」

「質問をしているのはこっちだ」

「日葵ヒマリですよ」

「その名を騙るな」

「そして、あなたは」

「ぷつり、と皮膚を破る音。」

「栗原、百合だ」

刃が止まった。

「もう七年になりますね、先輩」

背、伸びたでしょう。そう呟くと、彼女は弾かれるように俺の右腕から足をどけた。

たとえ強化された兵士でも、切断された四肢をその場で再接合することはできない。

俺にしかできない。

「——あ」

彼女は知っている。

「ああ、ああっ……！」

かつて、彼女を車から庇った時。俺はバラバラになった手足をこうして繋げた。

歩けなくなったアラキに次いで、俺が彼女の身代わりになったことは、きつとトラウマとして刻まれている。

俺は先輩の罪悪感の象徴だ。

「そんな、すまないっ、ああ神様っ！」

彼女は血の海から俺を抱き上げ、傍らに落ちる左腕を断端にあてがってくれた。何時かの再現のような構図に、俺は密かに歯を食いしばった。できるなら、彼女がこうして無用に傷つく前に殺したかった。自分が情けなかった。

「先輩」

死体同然に冷たい俺を抱き締める百合先輩は、目尻に浮かぶ涙を拭

うごとも忘れて顔を覗き込んできた。

肩口で切り揃えられた彼女の髪が頬に触れる。

「どうして、テロを」

時折顔に落ちてくる雫は熱い。視界いっぱい悲しげな先輩がいる。

許されるなら頭でも頬でもいい。とにかく手で触れて、その痛みを、苦しみを、和らげたい。そうやって彼女に寄り添えるなら、俺にはもう何もいらなかった。

けれど、それは許されないことだった。

「誰かがやらなければと、思ったから」

その目を見ればわかる。暗い決意の滲む目だ。

彼女は救いを求めている。

「私達の命を食い潰して生きるこの国を、この構造を、壊さなければ」

彼女は俺を求めている。

「みんなを、守らなければ」

俺は百合先輩を救えない。

「……そっか」

「なのに私は、また君をつ……」

「俺は平気です。ただ、あの人は」

装甲車が停まる工場の出口に目をやる。彼女はそれで察したようで、俺の肩をより強く抱いた。

やっぱり殺したんだ。理解するにつれ、鉛のように重苦しい何かが腹の底に落ちた。

「大勢を大勢の前で殺せば、DAは情報統制を維持できない」

ひどく憔悴した声だった。思わず彼女の顔を見上げてしまうほどに、疲れ果て、擦り切れた、老婆のような独白だった。

「……それは」

「ああ、そうだね。許されないことだ」

それなのに、俺を見るその目だけは、七年前と変わらない温かさを湛えていて。

「もう退けないんだ」

気が狂いそうだった。

「定点防衛モードを解除。対空レーダー全周警戒、飛翔体の自動迎撃を許可」

彼女の声に合わせて装甲車の主砲が持ち上がる。エンジンの回転も上がった。放っておけば、あれは人を際限なく殺すだろう。

無神経になるべきだ。

栗原百合、年齢二五歳、身長一六五cm、元セカンド・リコリス、かりんとうが好き、茄子が嫌い、ちよっぴり気弱で、けれど誰よりも優しく、気分が沈むたび、幼い俺を膝の上に乗せて撫で回しては「充電」などどうそぶいた——そんなことを考えてはいけない。

敵。

その一文字で済ませるべきだ。余計な情報は切り捨て、思考を止め、岩よりも鈍感になれ。

そうだ、サイトウ。

敵を、殺せ。

幸い両腕はもう動く。武器はどれも壊れていない。俺の筋力をもつてすれば、いつそ素手でもいい。

「私に行く。一緒に来るか?」

「……俺は、百合先輩が好きです。本当の家族みたいに思ってます。だからもう、誰も殺してほしくないんです」

俺は、あなたを止めなきゃいけない。

彼女は静かに目を伏せた。

「君は、」

その時のことだった。

音速を超えた巨大な何か、BMP-2の天板装甲を貫通したのは。

瞬きを一度した。

体はもう、空中にあった。爆風だ。とはいえ人が消し飛ぶ威力じゃない。何度か床を転がる程度で済んだ。

何が起きたのかまるでわからない。今のはミサイルか? だとしたら自衛隊だ。DAにそんな装備はない。

ライフルを構えて飛び起きる。先輩はすぐに見つかった。彼女も爆風に揉まれたらしく、俺にほど近いところで倒れている。

工場の入口を塞ぐ装甲車は燃えていた。弾薬庫をやられたのだろうか。砲塔のハッチから噴出する火柱はさながら逆しまの滝のような勢いで穴の空いた天井を叩き、鉄骨造りの柱と梁を焼き溶かしている。

舌に硝煙の味を感じるほどの、濃密な火炎の渦の中。トタン屋根を貼り付けたままの鉄筋が、ゆっくりと、ゆっくりと、自重に耐えかね、降ってくる。

真下にいる百合先輩の胸は、今なお浅い呼吸に合わせて上下している。引き伸ばされた体感時間の中で、それがいやにはつきりとわかった。

その瞬間、脚が勝手に、一步踏み出して、走っていた。

殺さなければならぬ相手を、死力を尽くして守る矛盾。もう絶対に助からない敵の命を、一秒でも引き延ばそうとする二律背反。

馬鹿げていた。

俺はそういう馬鹿だった。

『初めまして、栗原百合です。一緒にいられるのは一年だけだけど……その分、たくさん遊びましょう?』

銃を手放す。

『大丈夫、大丈夫。撃てなくてもいいの。無理しないでいいの。殺せない方が、本当はずっといいんだから』

鋭い鉄柱が頭上に迫る。

『奴らは? えっ、あなたが全部? そっか。誰かを守るためなら、あなたは……』

間に合わない?

『隊長はすごいんだ。頭がいいだけじゃなくてさ、射撃も格闘も信じられないくらい上手で、敵う人なんかいなかった……ごめん、ヒマリ。やっぱりもう少しだけ、このままでもいいさせて』

先輩の元へ、

『ごめんなさい。すぐ、落ち着くから』

飛び込んで――

『今だけは、許して』

――彼女共々、腰から下を磨り潰されて。

それでも、この胸を突き破って彼女を貫こうとした一本だけは、寸でのところで食い止めた。

両腕が碎ける。裂ける。ひしゃげる。癒える。コンバットシャツの袖の下では絶えず肉が蠢いて、規格外の負荷に拮抗しようとしている。暗灰色の都市迷彩が、内側から染み出た暗い赤に染め上げられていく。

一トンを優に超える荷重に、人間の体が耐えられるはずがない。突っ張っていた腕は少しずつ、少しずつ、関節からも、そうでないところからも座屈してゆき。

血濡れの歪んだ切っ先が、彼女の胸元に触れた。

俺の中で、何かが弾けた。

歯を食いしばる。喉を潰さんばかりに唸る。背を反らし、肘を突っ張り、唯一感覚が残る胸から上の全てを使って抗う。どこにそんな力が残っていたのか、自分でも不思議だった。

彼女は死ぬ。下半身全てを失って生きていられる人間はいない。

それでも、少しでも苦痛のない死を。

穏やかな、死を。

そう願うのは、悪いことだろうか。

「かおり」

場違いに甘い声が聞こえた。倒れた彼女から発されたものだと理解するのに、少し時間がかかった。

「そこにいるの？」

頬に触れた。はつとして、目線だけで彼女を見た。

もはや何も映さない、茫洋とした瞳を。

「いるのよね」

潰れた片肺に残されたほんの僅かな空気を使って、辛うじて、ここにいる、と返した。そう答えなければならぬような、そんな気がし

た。

「きて」

彼女の震える両手が探るように俺の煤けた頬を撫ぜ、こわばった首を包み込み、軋む鎖骨をなぞり、やがて砕けた肩を抱く。何度も何度も愛おしげに、荒木アラキの名を呼びながら。

彼女の目に俺は映らない。

俺の潰れた掌を温かいものが濡らす。

彼女の頭から滲む赤が。

頭蓋の中に収まっていたはずの柔らかな組織が。

栗原百合が、溢れている。

「き、て」

両腕はもう保たない。骨も、肉も、元の形に戻ろうとしてはその端から壊れていく。少しずつ、少しずつ、重みに屈して、彼女の顔が近づいてくる。

不可抗力だった。しかし、俺はそれを拒んでもいなかった。それが彼女の望みなら、応えなければならぬと思った。

背中に腕が回された。俺の胸を突き破った鉄骨はもう、いつ彼女を貫いてもおかしくない。

抱き締められる。抱き寄せられる。

俺は動けない。

彼女の上半体が、わずかに浮く。

額と額が触れる。

「かおり」

七年の月日は、百合先輩を大人に変えた。

そしてまた、彼女は少女に戻る。

「だいすきよ」

唇が血に湿る。

鉄の味がする。

彼女の味がする。

死の味がする。

俺はこの感触を知っている。

「だいすき」

幼子のようにあどけない、柔らかな微笑。

炎に照らされ、ほの赤く染め上げられた頬。

大きな瞳。

俺を見ない瞳。

俺が微睡むように下りる。

彼女の肢体が離れ。

俺の両腕が破断する。

ぞぶり、とおぞましい音が胸の下で鳴った。

百合先輩はもう、何も言わない。

もう、動かない。

折り重なった体は、俺のほうが大きかった。あんなに高く見えた背を、いつの間に追い越したのだろうか。

首を傾げて、横髪に口づけをした。鼻腔を刺す血と硝煙の臭いの奥に、懐かしい匂いがした。

辺りを覆う炎は、いよいよ激しさを増していく。

「さよなら。百合お姉ちゃん」

全部燃えてしまうがいい。

§

心電図モニターの電子音で目が覚めた。

口の中がひどく渴いている。手足は一応、全部揃っているらしい。間仕切りのカーテンがかかっていてベッドの外の様子はわからないが、窓側が薄ぼんやりと明るいのを見るに、少なくとも昼間なんだろう。

医療棟、だよな。ここ。人のお見舞いに来たことはあっても自分が世話になったことはないから、なんだか奇妙な気分だ。

嘘。

最悪の気分だ。胃袋が空じゃなかったら、多分吐いてた。そうじゃなくても手の震えが止まらないし、希死念慮も下手すると今までで一

番きつい。今だけはちよつと、普段みたいにヘラヘラできそうにない。

何より、あれだけ慕っていた百合先輩が死んだのに、さっさと現実を受け入れて円滑に思考を巡らせている自分の心理が不気味で仕方がない。

千束とミズキさんを殺しかけた時はあんなに泣いたのに、なぜ今は泣けないんだろう。

俺、あの時はどうやって泣いたんだっけ。

どうやったたら、泣けるんだっけ。

「……参ったな」

俺もいよいよか、なんて独りごちながらナースコールに手を伸ばす。伸ばして、気付いた。肩から指先まで包帯だらけだ。地肌が全く見えない。そんなにまずい壊れ方をしたのか。

意識が戻ったことを伝えると、また暇になった。作戦の事後処理がどうなったか知りたい気持ちは山々だが、まさかワンピースタイプの病衣一枚でそこらをほつき歩くわけにもいかない。

おのずと興味は自分の身体へ向いた。

横向きに寝たまま腕を曲げ伸ばし、拳を作っては開き。それでも別に痛みがあるわけではない。じゃあなぜ？

包帯の終端を見つけて引っ張る。ほどきはしない。中を覗ける程度に……うわっ。

外傷としてはもう残っていないが、今まで散々負傷してきた俺でもちよつと引く程度にはグロテスクなケロイド状の傷痕が、こう、びっしりと……常人が見たら失神するんじゃないか。

なるほど。この包帯は傷隠しってわけだ。

見るんじゃないかった。

「調子はどうだ？」

太い低声が聞こえたかと思うと、カーテンの向こうで黒い影が動いた。二メートル近い大きさで、まるで樫の巨木みたいな存在感があった。

誰だっけ。何秒か考え込んだ。

あつ、そうだ。

「……ゴウダ」

「おう、司令の代理でな。本当はアラキが来たがってたんだが、今は手が離せないってんで、一番暇な俺にお鉢が回ってきたのよ」

見知った相手なのにわからなかった。なぜ？

「あれからどのくらい経ったの？」

「丸二日だ。マリヤ・マギナは死亡、BMP-2の残骸は政府が回収。作戦に参加したアルファ分隊、第一九特設任務部隊、第二二特設任務部隊のいずれにも負傷者はいない。お前を除いてな」

「民間人二名が死亡」

「お前の責任じゃあねえ」

「何も言っていない」

影が身じろぎをした。俺には肩をすくめたように見えた。今のは流石に言い方が悪かったな、なんて遅まきながら後悔した。

「政府はBMP-2の密輸に気づいていた。だがDAがマリヤの逮捕要請を蹴ったことを理由に情報共有を渋った、つてのが特調の分析だ」

「じゃあ、あのミサイルはやっぱり」

「空自の無人戦闘機が発射したステルスミサイルだな。随分前から、有人機と一緒に訓練の名目で辺りを飛び回ってたらしい」

「東京湾上空に機影はなかったよな」

「なんせカタログ射程二二〇〇kmの巡航ミサイルだからな。高空から超音速巡航で飛んで来られちゃあ、ハミングバードのレーダーじゃノイズさえ掴めねえ」

カーテンの隙間からタブレット端末を持った太い前腕が差し入れられた。それ以上ゴウダの体は入って来ない。どうやら俺を年頃の娘とみて気を遣っているらしい。資料が映されたそれを受け取ると彼はすぐさま腕を引っ込め、また喋りだした。

「マリヤの動機や背後関係については調査中、正統西ロシアも協力的だ。ヤクート州シベリア社会主義共和国——ヤクート自治区の方は相変わらず鉄のカーテンを引いてるがな」

「少なくとも歩兵戦闘車がそう簡単に手に入るものじゃないってことは、なんとなく想像つくよ」

「俺はロシア分裂のゴタゴタで大量に流出した兵器のうちの一台と見てる。近代化改修したBMP-2はヨーロッパのPMCがよく使うからな、どこかから買い取ったか、あるいは廃車を共食い整備したか、どちらにせよ兵器を日本に持ち込むんぎ、よほどの支援者がついてなきゃできねえ芸当だ」

「なるほどきな臭い。それで、司令は私に何をしろって？」

「次のファイルを開いてみる」

切り替えた画面には脳の3Dモデルが二つ映っている。一方は正常な脳で、もう一方は右脳の表面、大脳皮質の一部が抉れていた。

「破片を除去した後、欠損部が再生したそうだ。司令が言うには、神経細胞が置換された影響で記憶障害が起きている可能性が高いらしい。調子が戻るまでしばらく休めとよ」

えらく曖昧な指示だ。司令らしくない。眉をひそめずにはいられなかった。

「調子が戻るまでって……いつまでに調整してくればいい？」

「特に指定はねえ」

「えっ？」

「楠木の奴、あれでなかなか気にかけてんのさ。不器用なりにな」

ゴウダは喉の奥で愉快げに笑いながら言った。単なる上司と部下の関係からはどうやって出てこない類の気安い声音だった。

「すぐに帰ってこいとは言わねえ。お前もたまには子供らしく遊んでこい」

ゴウダの大きな手が横合いからタブレットを取り上げようと伸びてきて、

「子供を使うのがDAの仕事じゃないの」

眩くと同時に手が止まる。

「てめえのケツはてめえで拭く。それが大人ってモンだ」

当たり前のように彼は言った。いつからそれは当たり前じゃなくなっただろう。

ゴウダは端末を小脇に抱え、じゃあな、と簡潔に別れの言葉を述べて病室を去った。

「子供、ね」

一六歳。普通なら中学三年か、高校一年生。

俺は特命情報調査室長、二等陸尉相当官、時々リコリス。

こんなのが今更、子供をやるんだらうか。

望んでいたはずなのにそう思った。

枕に頭を預けて目を閉じる。

姉さんの死に顔が脳裏にちらついた。

子供みたいな寝顔だった。

「遊びに来たわーっ！」

アポなしだった。ていうか、セーフハウスを教えた覚えからしてなかった。

「……いらっしやい」

まあ、嬉しいサプライズだったよ。

とつても。

#5+:A Perfect Day for Bananafish
h

ミズキさんはビニール袋いっぱい食材と一緒にやってきた。道すがら近所のスーパーで買ってきたようで、焼き立てのバゲットはまだ香ばしい匂いがしたし、牛もも肉のパッケージには見慣れたデザインの三割引きシールが貼ってあった。

それに家の冷蔵庫に入っていた申し訳程度の買い置きと残り物を加えて、

「乾杯ー！」

「乾杯」

二人で作ったのがこのビーフシチューとボウルいっぱいのサラダだ。シチューは多分、マグナムボトルの赤ワインを罪悪感なく買うための大義名分だろう。牛肉を煮るのに四分の一ほど贅沢に使ってもまだ一リットル以上残っている。これを全部飲み干すとなると、なかなか長い夜になりそうだ。

それに、今日のミズキさんは様子がおかしい。いつもより口数が多くてよく笑う。良いことのように聞こえるけれど、俺にはなんだか無理に元気を絞り出そうとしているように見える。こういう日はどうしても酒の量が増える。

詳しいことを聞く気はない。彼女もきつと望んでいない。ただ、潰れてしまう前に家まで送ろう、と思った。

「土井さんっているじゃない、いつつもブランドコーヒーだけ頼む人」

「ああ、千束とたきなが何かと世話焼いてたよね」

「そーそー。それでね……例によって千束が千束だったわ」

「えっ、恋愛脳が？」

「炸裂よ！」

「なんで!？」

「そう、事の発端は二週間前！」

彼女はよく喋った。俺は聞き役だ。あまり自分から話したい気分じゃなかったから丁度良かった。ミズキさんの声は柔らかくて耳心地がいいから、なおさらだった。

「——で、結局、土井さんとたきなの恋模様とかいうのは全部勘違い。千束が店のど真ん中で土下座かまして一件落着！」

「が、学習しねー……」

「……玄関事件が効いてんのかしら」

「千束が初心すぎるだけでしょ……」

「そういうあんたは」

「ノーコメントで」

「早いわ！ 駆け引きさせろや！」

「少なくとも千束やらたきなやらよりは、」

「なにいーっ!？」

「そんなに気になる？」

「たりめーよ」

「どこまで」

「んー、言いたくないトコと生々しいトコはカットで」

手で作ったハサミをチョコキチョコキやってみせるミズキさんを尻目に、生々しくない恋愛なんてあるわけ？ なんて思いつつワイングラスを傾けて唇を湿す。それから一旦テーブルの上に視線を落とし、空になったシチュー皿を眺めて言葉を探した。向かいの彼女は俺のそんな様子がよっほど面白いみたいで、オペラ歌手みたいな芝居がかった裏声で高笑いした。

「付き合うまでは行ったことないよ。普通の人とは生活リズムが全然

違うし、かといつてリコリスの子はちよつと、そういう目では見られないし」

「あら、すっかりしてんのね」

「しつかりは……多分、してないかな」

「ほほーう？ その辺詳しく教えてもらおうか！」

「生々しいトコはカットじゃなかった？」

「やっぱそっちはいいわ！ 観念して酒の肴になりなさいっ！」

「なりふり構わなくなってきたね？」

いや、俺はミズキさんが喜ぶならそれでいいけどさ。

これ言つていいやつ……だよな？ 倫理的にまずいかな。ま、いつか。そんなこと言い出したらキリないもん。

「三年くらい前かな。女の人の家に何ヶ月か通つてた」

その瞬間、ミズキさんは激しく咳き込んだ。ちょうどワインに口を付けたタイミングだった。

「想像の百倍ナマっぽいな!？」

「だから言つたの。やめる？」

「続けて！」

「きつかけは覚えてないけど……うん、最後は覚えてる。お互いのためにならないつてことで縁を切つて、それっきり」

「三年前でしょ？ アンター三歳でしょ？ 事案じゃん！」

「一七歳つてウソ付いてた。どっちみち犯罪だけど、気持ちね」

「通んのかよ！ いや通るわな、そのお耽美な顔面じゃあな！」

「そりや、ただの半同居じゃなかったけど、かといつてお互い付き合つてるとは思つてなくて、待つて、お耽美つて何……？」

「あー違う違う、セクスイーお耽美イケメンフェイス」

「ミズキさん大分酔つてるでしょ」

「まだ四杯しか飲んでないわよお！」

「三〇分でそりや酔うわ」

「いやー、でもなんちゅーか、納得だわ。アンタの貫禄はそっからつてワケねえ」

「逆にそれくらいしかないよ。好きだったのかわからないし。好かれ

てた実感もそこまでないし。褒められた関係じゃなかった」

バゲットの最後の一欠片を口に放り込んだ。味は感じない。舌に薄い膜でも張っているみたいだ。ここ数日は何を食べてもそうだな。多分、ミズキさんにはバレてないはずだけど、どうかな。隠し通せるかな。

「そっかあ」

ミズキさんは一転して静かになった。とはいえ重い空気は感じない。ただ、グラスの中の液体を回しては、気まぐれに口に運ぶだけ。視線は低く、卓上に。

今の話に考えるところがあつたんだろうか。いや、何にせよ、詮索する気はない。彼女から言い出さない限りは。

俺はボトルを取って、注ぎ口を彼女に向けた。

視線が合う。いいのか、と問われているような気がした。飲み過ぎを控えるように口酸っぱく言っているのは、いつも俺だったから。

頷くと、彼女はくすりと微笑んでグラスを差し出した。

「何か作るよ」

「ありがと」

サラダに使ったクリームチーズの余りでカナッペを作ることに対する礼にしては、やけに深い情感が伴っていた。俺は何も言わずにキッチンへ引つ込んだ。

「J・D・サリンジャー」

そのつぶやきが聞こえたのは、ちょうど最後のクラッカーにジャムを乗せた頃だった。

「意外……って言ったら失礼か」

「知り合いからもらったんだ」

ミズキさんはダイニングを離れて、テレビの前のソファにいた。ローテーブルの上に無造作に置いてある文庫本は、彼女の言う通り、サリンジャーのナイン・ストーリーズだ。この間、燃える別荘から救助したリリベルの一人がくれた。あの眼鏡の子は何て名前だったっけ。まあ、とにかく、その本好きで引つ込み思案な彼が考えてくれた精一杯の感謝の品がそれだった。

「まだ読んでない。英語版だし」

「邦訳でもサリンジャーはよくわかんないわよ」

「そうなの？」

皿をテーブルに置くと、ミズキさんはそこからカナツペを一つ取って、なぜか俺に食べさせた。グラスのワインはまた少し減っている。彼女の不可解な行動は、いよいよ出来上がってきたのでぼちぼち寝落ちします、って意味だ。

その時はベッドを譲って、ソファに寝ればいいのか。どうせ今日も眠れないと思うけど。

「んー……小さい頃ナイン・ストーリーズで挫折したからそう思うだけかも。今更読む気にもならないけど」

「子供向けじゃないもんね、明らかに」

「図書室にある中で読んでなかったのがこの辺のしかなくて、やむにやまれずよ」

「読書家だ」

「ううん、それしかすることなかったの。落第したのよ、リコリス」

彼女は気まぐれに表紙を撫でながら、何でもないように言った。

知らなかった。

「ならないほうがいい」

俺も彼女の口調を真似て、何でもないように返した。

湿っぽくなる必要はない。下手に同情する必要もない。

何もいらぬ。

「……ふ、ふふ」

ミズキさんは笑みをこらえながらグラスを置いて。

唐突に抱き着いてきた。

「んふふふ」

「どうしたの、急に」

「くつくつくつく……あつははははー！」

しゃくりあげるような笑い方だったから一瞬ぎよつとしたけれど、本当にただツボに入っただけらしい。

意味が分からない。釈然としないままもみくちやにされた。

撫で練り回されながら壁の時計を見る。二一時だ。早いけど、この様子じゃそろそろ帰した方がいい。

「ねえ」

俺より、ほんの少しだけ早くミズキさんが口を開いた。

手がいつの間にか止まっていた。

頬に触れる髪がこそばゆい。

密着した体から次第に熱が伝わってくる。

「まだいいいい？」

§

眠るとき、いつも右手に握っていた銃を、今日は枕の下に隠した。たった六発装填のリボルバーでもいざ体から離すと心細くて、警報装置の作動を何度も確かめた。

サイドテーブルに捨て置かれた仕事用のスマートフォンはこのところずっと黙り込んでいる。代わりに、背中側から深い呼吸音。二人となるとシングルベッドは手狭で寝にくい。けれど瞼は確かに重くなっていく。不快じゃない。

むしろ、いや。

よそう。

「もう寝た？」

無声音で囁くと、衣擦れが聞こえた。薄手のブランケットが彼女の寝返りに巻き込まれる。

暗闇は静かで、何も無い。

ここでは自分を繕う必要がない。

「僕は」

その一人称はこの上なく自分に馴染んだ。

「僕は男で、女の人を好きになって、その上、身体の性が同じでも、ミズキさんよりずっと力が強いんだよ」

だから、ねえ。

「もつと僕を恐れて」

肩に触れるものがあつた。細い手指だつた。

次に背中に体温を感じた。

うなじに息がかかる。

後ろから回された手が、おずおずと、僕のパジャマのボタンに触れ、

「やめて」

僕はその手を掴んで止めた。やはりかすかに震えていた。

見逃すはずがない。

「それだけは、やめて。無理はしないで」

「……ごめんなさい」

消え入りそうな声だつた。

「ミズキさんは何も悪くない」

「私、あなたに甘えてた」

「もつと頼つてほしい」

「いい年して泣きつきに来たのよ」

「僕だつて泣いた」

向き直ると、彼女は急に押し黙つた。眼鏡をかけていない顔を見るのはこれで二度目だ。

「救われた」

目尻の赤みはきつとアルコールのせい。そう、自分に言い聞かせた。

「だから」

今度は、僕が。

華奢な体を抱き、めくれたブランケットをかけなおす。

いつか彼女がしてくれたように、背中を優しくさすり続ける。

「大丈夫」

腕の中の体から、少しずつ力が抜けていく。

「大丈夫」

こつ、と頭が胸に触れた。

彼女が息を吸つた。

僕が息を吐いた。

彼女が吸つた。

僕が吐いた。

吸った。

吐いた。

吸った。

吐いた。

深く、深く、沈んでいった。

二人で、一緒に、どこまでも。

落ちていく。

「まだ眠い？」

底に触れた。

「リビングにいるから」

温かい。

「休んでて」

いい匂い。

「……ん」

光を感じた。ふわふわと、ゆるり、ゆるりと浮上する。

目を開けた。カーテンの隙間から日が差している。

「んう」

また寝入ってしまったおうか。

自然と瞼が降りてくる。

豆を挽く音が聞こえた。そういえば、コスタリカのジャガーハニーがまだあった。あれ、おいしいんだ。甘酸っぱい余韻が。記憶が脳裏に蘇って、急に目が冴えてきた。

といっても、足取りはまだまだ危うい。

「ごめん、起こしちゃった？」

ふる、と一往復だけ首を横に振った。大きなあくびも出た。

「コーヒー、飲むでしょ」

こくり、と頷く。絶対に寝過ぎた。

頭からソファに墜落した。まだ夢うつつ。

ローテーブルの上のニン・ストリーズにはしおりが挟まっっている。その隣に湯気の立つカップが二つ置かれた。

もぞもぞと体を丸めてミズキさんの席を作る。

「ちよつとなにそれ、猫みたい」

「……にやに」

「えっ!? 待って!? なに!? もっかい!!」

「……なに?」

「奇跡の産物かよチックショー……!」

よくわからない種類の悲鳴で脳を揺らされて、ようやく思考のモヤが晴れてきた。とりあえず、むくりと起きてコーヒーを一口。

熱い。かすかに苦い。柑橘系の酸味のあとに、豆本来のほのかな甘み。とろみさえ感じるココ。

驚いた。味がする。

「朝ごはん」

「お腹すいた?」

「作らなきゃ」

「私、やる」

「悪いよ」

「昨日のお礼ってことにしといて」

「……ありがとう」

本当に感謝すべきは僕だ。そうは思ったけれど、あんまりにも眠くて動けなかった。ポンコツだ。今ならサード・リコリスにだって負ける気がする。

何とはなしに、卓上の本を手にとってページを気まぐれにめくった。真ん中あたりに挟まったしおりはそのままにしておく。

A^バ P^ナ e^ナ r^ナ f^{フィッ} e^ク t^ト D^{シユ} a^イ y^ニ f^{ウツ} o^ウ r^テ B^テ a^ッ n^ナ a^ナ f^ナ i^シ s^シ h^ハ。表

紙と違う。不思議に思って目次をよくよく見たら短編集だった。ナイン・ストーリーズってそういうことか。

「どういう話?」

言ってから、自分で読めよと内心で突っ込んだ。

「戦争帰りの男の話。バナナフィッシュを探しに行こうって言って子供と海に入るんだけど、多分なんかのメタファーね。そいつの頭の中

にだけいる存在しない魚」

ミズキさんは一度言葉を切り、コーヒを一口飲んだ。カップを持つ手は半分が袖に隠れている。彼女に僕のパジャマは大きすぎた。

「子供はそういうごっこ遊びだと思っただけでしょうね。バナナフィッシュを見た、っていうの。男が考えてる小難しいことを、その子は知らないから」

「小難しいこと?」

「そ。戦争でどうにかなつちやつた男がドロドロドロドロ、溜め込んできた悩みっていうか、絶望っていうか」

「敵と殺し合って、この世の醜さを知ったのかも」

これは僕の実体験。だけど不思議なことに、推測の体で吐き出しても苦しくはなかった。今までの殺しも、百合先輩の死も、すべて現実として認知できる。しかし、絞め殺すような重圧だけがない。

「ああ、そっか。シーモアはそれをバナナフィッシュって呼んだのかしら。じゃあシーモアの文身は戦争で負った傷の跡……だから体を見られたくなかった? 罪を暴かれることと同じだから? シーモア・グラス。See more glasses。もっと鏡を見ろ。シーモアこそが、バナナフィッシュ。罪のメタファー。罪悪感から抜け出せなかったから……」

本を閉じると、ミズキさんは弾かれたように顔を上げた。無自覚に没頭していたみたいだ。

「いけない、悪い癖だわ」

「悪いの?」

「小難しいことを考えて人生を小難しくするのはやめにしたの。今はバナナフィッシュを捕まえに海に潜ったり、ストーブの爆発事故で恋人を死なせたりするより、アマゾンで買い物してドミノ・ピザをデリバリーする方が好き」

「ハラペーニョ・ピザを認証で受け取って?」

「脂っぽいビッグマックが食べきれなくて」

「ゴミ箱に捨てる」

「いいえ、あんたに押し付ける」

「わー嬉し」

「スターバックスの永遠とドミノ・ピザの普遍性は二一世紀の神よ」

それを言った男がいる世界は虐殺の文法がばらまかれて大変なことになったんだけど。そう切り返そうとしたけど、言葉尻を鼻で笑って吹き飛ばした辺り、ミズキさんは自覚的なようだったから黙っておいた。伊藤計劃の虐殺器官は映画版を一度見たつきり。寮の図書室で原作の小説を読み込んだら彼女に比べたら、僕の知識や解釈なんて大したことない。

「顔、洗つといいで」

ミズキさんは席を立つと、僕の頭を一撫でしてからキッチンの方へ歩いていった。

僕もリビングを出た。洗面台の鏡を覗き込む。

メンズパジャマを着た長身の少女が立っている。

体に傷跡はない。文身もない。

ぬるい水で顔を洗い、真新しいタオルで拭う。

もう一度鏡を見る。

黒い目。瞳孔は海底の暗い穴に似ている。

そこにバナナフィッシュはいなかった。

「サイトウ」

喉の奥が熱い。咳き込むと、嫌な酸味が込み上げた。

「起きられそうか？」

目を開けた。湿ったカーペットからは頬を濡らす液体と同じ悪臭がする。どうやら気を失っている間に吐いたらしい。

「どれくらい寝てた」

「五分も経ってない。薬が効いてよかった」

体を起こすや否や、清潔な濡れ布巾で口元を拭われた。すぐそばにはキャップを外されたペン型の注射器が転がっている。そこから少し目線を上げれば、まるで生活感のない小さなワンルールの全容が見えた。

少しずつ、状況を思い出ししてきた。

「ここは、タチバナさんの」

「ああ。セーフハウスだ。何があったか覚えてるか？」

差し出された手を取って立ち上がると、視界がふっと暗くなった。もう一度倒れる前に、彼が肩を支えてくれた。

一歩一歩踏み出すごとに、頭に鈍痛が走り、吐き気の波が襲う。連れられるままにキッチンのシンクで口をゆすぎ、顔を洗ったところでまたえずいた。もう胃酸すら出てこない。

「……なんで倒れた？」

腐りかけのゾンビみたいな声が出た。

背中をさする大きな手が一瞬だけ止まった。

「一種のアナフィラキシー・ショックだ」

「心当たりがない」

「おそらく、体が脳を異物と認識しているんだ。破片をもらったのがまずかったのかもしれない」

「なんで脳の損傷に関係が……じゃなくて。そもそもそんなこと、ありえるわけ？」

「興味本位では、聞いてほしくない」

分かっている。彼は別に、俺の覚悟を甘く見ているわけじゃない。けれど、それでも、腫れ物に触れるような気遣いはごめんだった。蛇口のレバーを叩き上げる。

「自分が誰かもわからないまま、死んでたまるか」

#5++:Lotus

初めてこの家のベッドを使った。ここは情報交換と緊急避難のために設けられた拠点であつて、長居するためのものではないから、当然といえば当然だった。

タチバナさん個人の裁量で設置されたこのセーフハウスは、DAの認知下にあれど管理下にはなく、監視はない。それに機密漏洩を防ぐ名目でネット回線も引かれていない。

密談には一番というわけだ。

「結論から言えば、その体は本来別人のものだった」

彼はそう言いながら、アタッシュケースから出した紙束をひとつひとつ床に並べていった。見たところ全部英語で、ステープラーで簡易的に綴じられている。病院のカルテか、論文の類だろうか。どれも経年劣化で茶色く変色しているのが印象的だ。

「驚かないんだな」

「精神と体の不一致は今に始まった話じゃない。問題はHowの部分だ」

ベッドから体を起こした。症状は既にピークを過ぎている。それに、彼が持ち込んだ資料にも興味があつた。俺がDAのデータベースに何度潜り込んでも見つけられなかったものだ。入手経路も、その中身も、喉から手が出るほど欲しい。

彼は安っぽいづくりのテーブルに腰掛けてしばらく悩んだ様子を見せたが、やがて決心したのか、顔を上げて俺を見た。

「レンって名前に聞き覚えはあるか？ 蓮はすと書いてレンと読む」

ない、と言いかけて、俺は黙り込んだ。

「わからない」

「^{サイトウ}藤蓮。それがお前の——お前という人格の名前だ」

記憶の表面を爪で引つかかれるような、奇妙な感覚があった。タチバナさんが床の紙束の一つをめぐり、モノクロ印刷の紙面を俺に見せた。

小さな男の子の顔写真と、身長、体重、血液型、それから健康診断か何かの結果がびっしりと書かれている。名前の欄には、R e n S a i t o h の文字。

これが、俺？

「そしてこの子が」

もう一枚。今度はレンよりさらに幼い女の子だった。

すぐに分かった。これも俺だ。毎日毎日鏡で見る顔だ。年こそ違
うが、面影がある。

何年経つても自分のものとは思えない体。不死身の再生能力。四
歳以前の欠落した記憶。近年、西側の特殊部隊を中心に浸透しつつあ
る次世代歩兵構想と、彼らに施される高強度戦闘適応調整——くそ。
そういうことかよ。

最悪だ。あまりに惨い。命をなんだと思っっているんだ。人殺しの
身でさえ小市民ぶって叫びたくなった。

「カミシロ・ヒマリ。その体の、前の持ち主だ」

「……脳を入れ替えたんだな。千切れた腕を繋げるみたいに」

俺の問いかけはもはや質問ではなく、推理が正しいか、否か。その
確認以上の意味を持たなかった。

彼の答えは、やはり、肯定だった。

「お前は自分自身をヒマリではなくサイトウと定義している。その感
覚は無意識だが、間違いではなかった」

「脳移植は俺が死なないことと関係がある。そうだろう」

「……ああ」

「誰がやった。DAか？ 日本政府か？」

「……合衆国だ」

「嘘だろう、アメリカか？ 一番の非人道アレルギー持ちがなんでだよ
!？」

「リコリスとリリベルは存在しないことになっている」
絶句した。

目の届かないところで起きる悲劇に対して、人はどこまでも無慈悲になれる。見えない死は初めから無かったものとされる。墓標に名前は刻まれない。

敵も味方も、等しく存在を認められない。自らの生きた証は、存在の証明は、この世のどこにも残らない。

その虚しさは、リコリスとしてターゲットを殺し、仲間を殺されてきたからには理解しているつもりだった。

だが甘かった。見誤っていた。

この世界の狂い様を。

「俺は、なんなんだ」

「次世代歩兵の完成形。国防高等研究計画局がかって目指し、そして放棄したものだ。何十人か、何百人か、それは分からないが……生き残ったのはお前とヒマリだけだった」

破片を食らった右の側頭部が、ぎちりと軋んだ気がした。

忘れていたのか。それとも消されていたのか。いずれにしろ俺の中から長らく欠けていたものが、さながら傷口から盛り上がる赤黒い肉芽のように、蘇ってくる。

「ヒマリは心が保たなかった。彼女は最も高い適性を示したが、そのためにテストの名目で何度も何度も切り刻まれた。大人だって耐えられない仕打ちだ」

そうだ。窓のない大部屋に集められた。俺は防護服を着た大人達にたびたび外に連れ出されて、手術台に乗せられた。部屋に戻されるたび、同室の子供は櫛の歯が欠けるように減っていった。けれど何度か寝て起きてを繰り返すと、いつの間にか新しい子供が補充されていく。

やがて、新入りは誰も来なくなつて。

俺と小さな女の子だけが残つて。

ついには彼女も姿を消した。

その時は、みんな別の場所に連れて行かれたのだとばかり思ってい

たが、そうか。

あいつら、死んだのか。

「レンは体が保たなかった。度重なる改修の果てに、体組織が異常に増殖し、肉塊が独房を埋めた。だが脳だけは無事で、電極を刺せばテキストを使った意思疎通が可能なほどに強固な自我を備えていた」

独りになった俺は、いなくなったやつらの分まで体を開かれ、臓物を抜かれ、得体の知れない薬を打たれた。使途不明の機械と癒着し、歪な形に変じた改良臓器のグロテスクな色艶が、ありありと、思い起こされる。

落ち着け。呼吸を整えろ。タチバナさんが心配する。

たかが麻酔なしの開腹なんて、今さら屁でもないだろ。

「それを見たどこかのクソ野郎が思いついた」

身体のパーツをおもちやみたいに付け替えられて、外見も中身も人間と呼べるものじゃなくなった頃。完膚なきまでに壊されていたはずの五感が突然回復したことがあった。

その時俺が見たのは、痩せ細り、骨の浮いた胴体から生えた二本の腕と二本の足。そしてガラス張りの檻ケージに映り込む、最後まで残ったあの女の子と同じ顔。

「健全な肉体に健全な頭脳を搭載すれば、理想の性能に届く、と」

サイトウ・レン。

カミシロ・ヒマリ。

—— サイトウ・ヒマリ。

「実戦データの収集はDAが受託した。島国である日本は脱走の難易度が高く、監視の手段にも事欠かない。その上、エージェントは皆子供だ。成人を待たずに試験運用を始められる」

俺は、サイトウ。高等機密を扱う暴力装置。

「問題は所属だった。身体ドナーと脳レンビエント、どちらの性別を適用すべきか。そんな建前の下、お前の指揮権を巡って、楠木、虎杖両司令による政争が起きた」

司令直属の密偵にして不死身の人間。

「最終的には当初の配備計画に則り、楠木が権限の大部分をもぎ取っ

た。しかし虎杖はせめてもの抵抗にか、リリベルが管轄する任務の一部をお前に委託可能とすることを上に認めさせた」

女の身体と、男の精神。

「よりにもよって奴は、リコリスの処刑ばかりをお前に押し付けた。手に入らないなら壊すまでも言わんばかりにな」

ハーフ・スワレの半々に混ざった、リコリス。

「……ふざけやがって」

手で顔を覆って、そこで初めて自分の身体が震えていることに気がついた。

自分の、だって？

ヒマリの、だろ？

「何が先進戦闘有機義体だ。人の身体を物みたいに」

「……知っていたのか、サイトウ」

「思い出したんだ。話を聞いてたら急に。でもこれは、多分」

「まさか、彼女の？」

震えながら辛うじて頷く。その些細な仕草さえも、俺か、ヒマリか、どちらがそう望んだのか、もはや欠片もわからない。

記憶の時間軸が二つある。俺にとってはどうちらもこの身で体感してきた血生臭い真実で、同時に白昼夢のような非現実感が端々にへばりついた薄っぺらな幻覚だった。

俺か、私か、どっちが自分だ。俺はいつから俺なんだ。俺は私の妄想の産物で、実はどこにもいないんじゃないか。

階段で、存在しないもう一段に脚をかけようとして、すんと空振るような、宙ぶらりんの気持ち。

俺は。

わたし、は。

「息をしろ。ゆっくりだ」

「たすけて、タチバナさん」

「大丈夫だ。お前は、お前だ」

「俺は、誰なの？」

「お前はレンだ。ヒマリじゃない。俺が保証する。お前がお前を信じ

られなくても、俺はお前を信じている」

「なんでさ」

「わかるんだ」

「何が！」

「お前の全てが、だよ」

胸が痛くなるほど優しい声だった。

だが、どこか、悲壮な覚悟を孕んでもいた。

「この世でたった一人の弟を、見間違えるはずないだろ」

諜報員の勘が告げている。彼の声音も、眼差しも、嘘をつくもの
それではないと。

何もかもが、真実だと。

「……は？」

「俺が七つの頃——お前はその時二歳だった——親父は安アパートで
母を殺し、その親父をリコリスが繁華街の路地裏で殺した。頼れる親
類のいない俺達はDAに拉致され、そこで散り散りになった」

「待てよ、そうなたら前の身分は全部抹消される。エージェントと
しての登録名から戸籍を割り出すなんて、不可能なはずだろ」

「ああ。だから俺は、俺達を拐った連中の会話を覚えていた」

「覚えてたって……」

「何もわからないガキだと思っただろう。お前をアメリカに送るこ
とを、奴らは無警戒にも俺の前で喋った。逆に言えば手掛かりはそれ
しかなかったが……人生を賭けたよ」

客観視すれば、彼の告白は荒唐無稽な妄言としか表しようがなかつ
た。なにせ語られているのは全てが俺の認識の外で発生した出来事
だ。真否の確かめようがない。であれば、一連の話はひとまず嘘と仮
定し、かつ、それをみすみす信じた場合に発生するリスクを鑑みて動
くのが当然の道理だろう。

だが、俺は心のどこかで彼の物言いに納得したがってもいた。この
世がそんな与太話の成立するような世界だというなら、俺はとつくに
殺しをやめられて、月並みなハッピーエンドを迎えているだろうに。
めでたしめでたし、なんて陳腐な結びの言葉が入り込む余地なんざ

あるもんか。世界はいつだって地獄だ。臓物と硝煙の悪臭を、愛と平和の芳香でマスキングしただけの、蛆の湧いた肥溜めだ。そうでなきや。そうでなきや俺は、なんでこんな目に合ってるっていうんだ。世界が俺の味方だった試しなんか一度もないっていうのに。今更、こんな巡り合わせを信じろだなんて。

「……信じられない。いや正しくは、信じるのが、できない」

「そうだな。正しい選択だ」

「けど」

一度言葉を区切り、短く息を吸って吐く。

冷静にならなければ。

「裏切るなら三年前、俺に協力を持ちかけた時点でそうしているはずだ。おとり捜査だとしても、離反の用意がほとんど出来上がっている今の今まで反乱分子を泳がせておくメリツトはない。それに過去、いくつか付け入る隙を与えてどう動くかを見ていたこともあったが……あんたは何もしなかった」

俺も手札を一枚切る。彼に翻意がないことは事実が証明している。もう伏せておく意味はない。

「何より、合衆国子飼いの諜報員がD Aに楯突く合理的な理由が見当たらない」

そうだろう？ サイトウ・ヒロキさんよ。

俺はめいっぱいのしたり顔で、彼の、誰にも打ち明けていないだろう本名を呼んだ。

アメリカ政府が各省庁職員のデータ管理を委託する情報セキュリティ会社のセキュアサーバー内に、彼の生体認証登録はあった。それにはもちろん、指紋や虹彩、静脈パターンの類が誰のものを示すために社会保障番号が紐づいている。

彼は内閣調査室の人間ではあるが、日本国籍を持たない。中央情報局が同盟国との緊密な連携を狙って送り込んだ分遣班の一人だ。

だからこそ日本は彼をD Aに出向させ、俺のそばに置いているんだろう。俺はどうやら、アメリカの所有物でもあるようだし。

「ウォールナット殺しの時にくれたDARPA製の止血注射キットもそうだけど、第二^{ブラックジャックス}特設任務部隊が装備する米軍制式のランチャーやらライフルやら、そんなものはよほどの伝手がなきゃ手に入らない。だから俺はアメリカを探れってメッセージとして受け取ったけど、違った？」

彼は相変わらず背の低いテーブルに腰掛けたまま、視線を床に落とし、目頭を何度か指で揉んだ。そして、

「降参だ」

苦々しげに寄せた眉間に深い皺を刻みながら、肩をすくめるようにして両手を掲げてみせた。

「そこまで辿り着いていたとは、想定外だよ」

「ま、想定外の助っ人がいてね」

「とうとうウォールナットか。ああ、だな、奴にとつちや国防^{ペンタゴン}総省だって庭みたいなものだ……待てよ、ってことはだ」

「いいや、悪いけどまだ断定はできない。姓と人種が同じであることは、必ずしも血縁関係を意味しない。決定的な何かが得られるまで、そこは願望と区別しておきたいんだ」

俺の前の身体はどうせ医療廃棄物としてとつくに処分されている。身元だつて残ってない。だからDNAの一致率を調べるとか、戸籍から血のつながりを追うとか、そういった決定的な証拠探しというのはやできない。真実を確定させるに足るもの一切は永久に失われたことだろう。

それでも彼は——推定、兄は、出会ってこの方皮肉っぽいニヒルな笑みばかりを作ってきたその口元を、初めて素直に綻ばせた。

「さて自称兄上殿、ぼちぼち状況を整理しよう。俺たちのゴールはD Aの暗殺稼業を、米帝様の言い回しを借りれば人道に対する罪を世間に告発し、永久にこれをやめさせること。現在検討中の手段としては、目下建設中の新電波塔、延空木を完成と同時に占拠して、マスメディアとネットの両方に最高強度で情報をばら撒くつてのがある」

「敵の戦力はリコリス、リリベル、我らが特命情報調査室実働班、警官隊に特殊^S急襲^A部隊、内閣調査室、CIA、下手すりや自衛隊に在日米

軍。おまけに情報統制や戦術予測のバックアップにラジャーたちがいてくる」

友軍は俺とお前の二人きり。そう彼が続ける。絶望的な戦力差に思わず乾いた笑いがこぼれた。

「ついでに真島と愉快な仲間たちとも延空木でかち合いかねない。とはいえこっちは、俺の遺言が効いてるなら案外使えるかも。全く信用できないけど」

「テロ屋が軍隊とやり合えるとは思えん。それに奴は民間人を虐殺しようとした前科がある。俺たちのやり方にはそぐわない」

「そこで今一個思いついたんだけど、聞く?」

「言い回しからしてろくでもなさそうだが、一応」

「怒らない?」

「俺が怒りそうなアイデアなんだな……」

あいにく怒りそうどころか絶対に怒られるアイデアだが、同時に俺が取りえる最善策でもあった。これが上手くいけば、今までのように、内閣を組織する政治家相手にせこせこ自衛隊出動までの時間を稼げるだけの弱みを嗅ぎ回る必要もなくなる。

「あんたがかき集めた人体実験の証拠をダシにアメリカを脅迫する」

「馬鹿野郎!」

「あー、だよなそりや」

「当たり前だ! お前、あの地獄に戻りたいのか!」

「上層部は人体実験が嫌なら仕事をしろって俺を脅しつけてる。ということはつまり、DARPAはまだまだ俺で遊び足りなくて、この体を返却するようDAをせっついてるはずだ……まあ今だって隔月の定期健診でバラされてるんだけど」

実戦での運用データが十分に取れているうちは、アメリカは俺をDAに貸し出し続ける。だが楠木司令の下で、やれ特命情報調査室長やら高等指導教官やら、大層な肩書きと共に懐刀として重用され始めると、向こうは貴重な実験サンプルを戦場から引き離されるのみならず、あれこれ理由をつけて使用限界いっぱいまで使い倒され、実質的に借りパクされるんじゃないかと危惧し始めた。というのが俺の見

立てだ。

「そこが狙い目だ。アメリカは正義のヒーローとしてのブランドイメージに傷をつけられることを何より嫌う。俺は奴らの悪行の最大の証拠品だろ？ それも足が生えてて口が利ける。そんな危険物はずっと回収して、後ろ暗い過去を何もかも揉み消したいと思うはずだ」

「……任期を終えたりコリス、リリベルを情報機関の職員として買い上げていることも、か」

「流石、察しがいいね。そう、アメリカとしては人道もクソもないDAとの繋がりが露見することだけは避けたい。ところが厄介なことにマスメディアをジャックしたどこぞの馬鹿が、人権を奪われ、洗脳教育で組織への忠誠を刷り込まれ、日夜望まない殺しをさせられる哀れな孤児達のことを洗いざらい喋っちまったとしよう。あんたがアメリカだったらどうする？」

「悪の秘密結社からかわいそうな子供達を救う正義の兵隊を演じて、DAとその関連組織を丸ごと刈り取り、全ての証拠を隠滅する。幸い日本には、ヤクーチアと中華連邦に対する守りとして、海軍、海兵隊合同の遠征打撃部隊^Eを丸々一つ常駐させている。中小国家の全軍をも凌ぐ戦力規模のな」

完璧な回答を導いた彼を讃える意味を込めて、俺は鷹揚に頷く。

「な、これで敵はDAと真島だけになったろ？」

「得意気なところ悪いが、何もよくないぞ。それじゃお前が救われな。記憶が戻ったならわかるだろ、向こうで何をされるか」

「ああ、それはもつとも。でも、普通にやったら勝ち目はない。使えるものは全部使わないと——」

突然視界が大きく揺れた。最初はまた、さっきのショック症状かと思っただけ、違う。

彼に胸ぐらを掴まれている。そう理解するのに、少しかかった。ここまで感情を露わにした姿を、俺は知らなかった。

「命は、道具じゃない。その考えは、お前が何より憎むDAと同じものだぞ」

俺はすっかり呆気にとられて目を瞬いた。

情けないことに、言い返そうにも言葉が全く出てこなかった。彼の言うことが何度も脳裏に響いて止まなかった。

「レン。お前はなぜ戦う」

「え、と」

「友達を助けたいからか？ これ以上誰も殺したくないからか？ それとも」

ただ死にたいだけか？

違う。たった三音ばかりのはずなのに、どうしてか声にはできなかった。

「お前の幸せが俺の幸せだ。世界を敵に回すことがお前の望みで、それでお前が満たされるものだと思っただけで今までやってきた。だが違った」

「ち、がわない」

「嘘だ。お前はお前を、自分が救うべきものの中に数えていないだろう」

身勝手にも、湧いてきたのは怒りだった。自分でも理由が分からなかった。その幼稚な衝動は、決して解き放つてはいけないものだと、俺はよくよく理解していたはずだった。

なのにいつの間にか、口は言葉を紡いでいた。

駄目だ。言うな。

やめろ。

「知ったような口を利くんじゃねえよ」

地獄の底みたいに冷たくて、低い、乾いた声だった。自分の喉から絞り出されたものだとはいえ、到底思えなかった。

「……なんだと」

「お前は何も分かってない。俺はあと二年でリコリスを卒業する。そうなりやどのみち解剖台行きだ。戦おうが、戦うまいが、結局俺はDARPAの変態共々に死ぬまで切り刻まれる」

「ならせつかくウォールナットが生きてるんだ。奴の手を借りて、どこへでも逃げればいいだろ！」

「それ本気で言ってるねえだろうな。だとしたら相当おめでたいぜ、お前」

ヒマリという一六歳の少女の細腕は、DARPAの研究者が思い描いた通り、激痛を伴う筋繊維の断裂と再生を繰り返しながら、彼の手首を容赦なく捻り上げていく。この体に自己破壊を防ぐリミッターはない。必要ないからだ。

「お前、自分で言ったよな。俺の持ち主は合衆国だって。あの合衆国だぞ？ 奴らの目からは誰も逃げられない」

「それでも、可能性はゼロじゃ——」

「ああそうだな、ゼロじゃないな。じゃあ何パーセントだよ？ 小数点の後ろに何個ゼロが続くんだけ？ え？ 何百とある監視衛星から身を隠し続けるなんて不可能だろうが！」

体勢がまるきり逆転する。彼が苦悶に低く呻いた。一列に並べられた実験記録のうちの一束が立ち上がった俺に踏み潰され、耳障りな音を立てる。それが静かな部屋にやけに響いて、俺はほんのわずかに冷静さを取り戻した。

「……俺はずっと、ずっと生き方を選べないままここまで来た。女の格好をして、女の振りをして、命じられるがままに殺してきた。俺が俺のままではいられたのは、ほんの瞬きみたいな時間だけだった」

目を閉じれば、いつだってその暗闇に殺した相手の顔が浮かんでくる。近頃頻繁に出てくるのは、DAからの脱走を図った一人のリコリスだ。彼女が最も新しい、二人目の身内殺しだった。

背後から不意を打ち、喉笛をこの手で掻き切ったその時、彼女は頸動脈から勢いよく血を噴き出しながら、俺の胸に身を委ねて、後ろ手に頬を撫でた。丸眼鏡の似合う彼女は、今際に何を思っただったのか。

信頼していたはずの新たなパートナーに襲われて、なぜ、あんなにも安らかな顔で死ねたのか。

彼女の最期は、退行を起こし、俺をアラキと思っただまま、幸福の中で圧死した百合先輩にも重なって見える。

偽りの友人や虚像の恋人に看取られるのは、そんなにいいものなの

だろうか。

彼女達の命を奪うのは他でもなく、それを演じる俺だというのに。「自分らしく生きられないなら、せめて自分らしく死んでやる。俺が戦う理由はそれだけだ」

彼の黒い瞳と、抑え込んだ腕とが、それぞれ支えを失ったように揺れた。

「わかってくれよ。俺はもう、手遅れなんだよ」

そう言っただけで俺は彼を離れた。取り返しをつかないことをした自覚はあった。もう今までのようにはいかないだろうな、という予感もあった。俺は彼の人生のすべてを、くだらない衝動に任せて否定した。許されないことだ。

罪悪感を抱いて自己憐憫に浸ったところで、吐いた言葉は戻せない。

「お前が一体何をしたっていうんだ。なんで俺の弟ばかり辛い目に遭わなきゃいけない？」

「……」

「お前は、お前たちは、幸せになっていいはずだろ……？」

——あたしたちは、幸せになっていいはずでしょ……？——
「っ!？」

耳元で囁かれた声は彼のものでも、俺のものでも、ましてやヒマリのものでもなかった。

それは鈴を転がすように可憐で、すべてを包み込むように甘やかで、そして、親に縋る子供のように震えていた。

知らない。俺は、こんな人、知らない。

頭に雨粒が落ちる。見上げれば分厚い雲。土砂降りだ。いつの間にか着ていたサード・リコリスの白服は水を吸ってずっしりと重い。

そこは古いアパートの解体現場だった。

建物自体の解体はほとんど済んでいて、鉄筋コンクリート製の柱や梁は、一階から三階の一部までしか残っていない。

左手にはプレハブの現場事務所、二階建て。反対側には空荷の大型ダンプや、アームの先端にコンクリートブレイカーを取り付けられた

油圧シヨベルといった種々の機材が放置されている。

広いばかりで誰もいない箱庭の四方は背の高い目隠しに覆われて、外の様子は窺えない。

前にもこんなことがあった。その時と全く同じだ。

定期健診と称して麻酔で眠らされている間に見る悪夢の舞台は、いつもここだった。

「嫌だ」

右手には銃。グロツクのポリマーフレームには温度を感じない。

俺の前には、背中を向けた青服^{セカンド}。

意志に反して、腕はひとりでに持ち上がる。

「い、やだ」

亜麻色の髪の毛の彼女に震える照星^{サイト}が重なって――

「嫌あつー！」

トリガーが引かれ、銃口が光ったその瞬間、すべての雨粒が静止した。

歌が聞こえる。

甘く可憐な声が耳元で囁いている。

Sing in the Rain^{雨唄}だ。

背中に熱。肩口に小さな顎が預けられた。血に塗れた手を、太腿から、下腹へ。下腹から、みぞおちを通って、胸元まで。確かめるように這わせてくる。

耳元で彼女が息を吸い、そして、

「しね」

息を呑むことすら、できなかった。

「ごめ、なさ」

「しね」

「せ、んぱい」

「しね」

「おれの、せいです」

「しね」

「ごろして、くださら」

「しね」

「ごめん、なさい」

「しね」

「ごめんなさいっ……」

彼女は愛を囁くように呪詛を吐いた。何度も、何度も、何度でも、全く同じ声音で俺を呪った。

俺は命じられた。

命令を受け入れた。

俺が殺した。

俺の意志で。

「恨んでください」

「しね」

「憎んでください」

「しね」

「全部ぼくが悪いんです」

「しね」

「絶対に、許さないで」

「しね」

「ずっと、ずっと」

「しね」

「ぼくが、死んでも」

気道が締まる。ぎりぎりど、指の皮の擦れる音が聞こえる。彼女は俺を抱いてなどいかなかった。首の位置を探っていたただけだ。

すべてが止まった世界で彼女だけが動けた。意識が薄らいでいく。

ぼくはなんて幸せ者なんだろう。

彼女が、先輩が、憎いぼくを自らくびり殺してくれる。

甘い怨嗟が遠ざかる。

眼球が裏返る。

ぼくは、やっと、

「レン！ しっかりしろっ、レン！」

心臓が異常な速さで脈打っていた。肺は痙攣しながらも辛うじて

呼吸に似た挙動を繰り返している。

誰かに強く抱き締められていた。

もう雨は降っていない。怪訝に思っ顔を上げると、ワンルームの天井が見えた。

「なに、が、起きた？」

「すまない……俺があんなことを言ったばかりに……すまない……」

「幻覚を、見た。俺はその間、何してた？」

「……泣いていた。声も上げずに。途中で過換気発作が出て、また倒れた」

「だから手が痺れてんのか。オツケー分かった、大丈夫だ。落ち着いた」

もういつもの俺だ。そんな意味を込めて彼の背中を軽く叩き、頬どころか顎まで濡らす涙を制服の袖で拭う。ファーストの赤服だ。どう見ても白くはない。だから、ここは現実だ。

「あんたは悪くない。こいつは時限爆弾みたいなもんだ。多分、遅かれ早かれこうなってた」

「その、幻覚っていうのは……」

「リコリスを撃ち殺す夢だ。内容を覚えていられたのは今回が初めてだけど、それでやつと気付いた。過去、俺はこれを何度も見ている」

俺の頭はもともと多少おかしかったが、破片を食らってから狂い方に磨きがかかってきたように思う。意識が覚醒状態にありながら悪夢を見るなんて、今までにはなかったことだ。

俺の精神は崩壊に近づいている。

「なあ。俺は多分、二年もたない。それまでにケリをつけたい」

付き合ってくれるか。最低の口説き文句と思いながらも、できるだけ真摯にそう言った。

「……それがお前の望みなら」

地獄の果てまでとことん、な。

そう言う兄に、俺はさっきの失言を謝った。

彼は一度だけ、俺の髪をわしりとかき混ぜた。

日米安保条約改定に係る協議のために来日していた米国国務長官が、テロリストの手によって殺害された。

そのニュースは事件発生と同時に、司令直属の情報機関である特命情報調査室と、その下支えとして創設された第一一から第二〇までの特設任務部隊タスク・フォースに届けられた。

襲撃された、ではなく、殺害された、と断定形だったのは、護送車列の中心に陣取っていた国務長官の車両が最初に攻撃を受け、彼が脱出するよりも早く爆発炎上したからだ。

依然として室長、サイトウヒマリ 斉藤日葵を欠いたままの特調実働班が第二一特設任務部隊として現場に到着した頃には、情報にあつた自動車爆弾と自爆ドローンの群れは跡形もなく、炎上する護衛車両とパニックを起こした民衆、そして負傷した大勢のシークレット・サービスが残されているのみだった。

一連の事件は交通事故という形で処理されたものの、白昼堂々の犯行ということから目撃者はあまりに多く、ラジャータによる情報統制があつてなお、テロの噂が人々の間でまことしやかに語られている。加えて、ネットのごく狭い領域では、過去の民族的対立からヤクーチアや中華連邦の関与を感情的に主張する陰謀論さえもが発生しており、事態の収束には長い時間と多数の人員を必要とするだろう———というのが、D A情報部の分析であつた。

「俺たちは自爆ドローン群のセッティングに関わつたと思われる七名を追跡の上拘束。現場にて尋問したところ、全員が国際テロリスト、真島との関与を認めた」

ゴウダは言いながら、その巨大な手に掴む資料を一枚捲る。

「自爆ドローンは民生品のクワッドコプターだが、護衛車両のジャミング電波対策に簡易的な慣性航法機能が追加されていた。機体から持ち主の指紋は発見できなかったが、復元の結果、このシンボルが機体上部にプリントされていることがわかつた」

紙面の中央に大きく印刷されたそれは、デیفォルメされたブリキ

のロボット。四角い頭からアンテナと回転灯を生やした古典的なアイコンだ。

「……ロボ太」

それを見て憎々しげに吐き捨てるものがいた。

「サイトウが危惧した通りになつちまつたな、楠木よ」

彼女は特命情報調査室と特設任務部隊タスク・フォースの連名で提出された報告書を机上に放ると、儼然とした表情を繕うこともせず、疲れ果てた様子で鼻を鳴らす。一部始終を眺めていたゴウダは、彼女から放たれる苛立ちの気配を敏感に察知し、同情するように片頬を持ち上げた。

ある種不敬ともとれる仕草を彼女は全く意に介さず、机上から執務室の空間を苦々しげに睨みながら見解を語る。

「AIそのものに手が出せずとも、警視庁のネットワークから監視カメラの目を盗んでしまえば、予測精度は落ちる。ラジャータが抱える欠陥の一つだ」

「対策はあるのか？」

「対症療法を対策と呼ぶならな。ネットから攻めるのであれば、ブラックICE攻性防壁を張って捕らえる他ない」

「最近の電腦犯罪はニューロマンサーじみてんのな」

「ゴウダ、話を戻せ」

「悪い。現場にいたリコリスとリリベルは、前情報なしに奇襲を受けたつてのに軽傷者を数名出しただけで済んだって話だ。それも、逃げる群衆に押されて転んだだけで、直接攻撃されたわけじゃあなかったらしい」

「真島は既にサイトウと交戦している。必然的に制服を見ているはずだが」

「妙だろ？ これについちや手掛かりは無しだ。まさか、民間人の虐殺を企んだテロ屋が今更博愛主義に目覚めるわけでもなし、な」

「どのみち、我々が獲得した情報は地下鉄で会敵したサイトウの証言と、奴が記録した映像のみだ。真島の身元が判明したとて、人物像を読み解くには至らん」

「不甲斐ない話だ。年端もいかない子供が片腕と片目を犠牲にして得

た情報を、俺達はロクに活かせていない」

「ゴウダ」

「なんだよ?」

「言うな」

両者の間に数秒の沈黙が生まれた。

「お前は樺太への派兵経験があったな」

何事もなかったかのように口を開く楠木。ゴウダが先の話題を追求することはなかった。

「……樺太経済特区。ASEAN^{アセアン}2・0の落とし子か。内戦の時のコネはあるにはあるが、あそこはカオスだ。今更アテにはならねえと思っぜ?」

「だが、極東で歩兵戦闘車^{IFV}ほどの大物を捌くとなれば樺太以外には考えられん。一〇〇〇丁の銃にも同じことが言える」

「真島とマリヤの背後には、同じ黒幕がいると?」

「どちらも莫大な資本^{ファンド}に飽かせた力押しだ。国内で不審な金の流れが見つからん以上、可能性は高いだろう」

「調べるなら力負けしない面子がいる。助っ人をくれ」

「ナカムラ、フクシマ、バックアップにコイズミを充てる。十分な装備を与えるが、目立つ真似は避けろ」

「刑事^{デカ}上がりのフクシマは分かるが、コイズミ^{ジイさん}をか?」

「電脳戦に専念させろ。真島が有能なハッカーを手に入れた今、アラキを動かすわけにはいかん」

「同窓会かよ。まあ、事情は分かった。久々に海外旅行と洒落込むか」
「任せたぞ」

部屋を出る間際。ゴウダは何かを思い出したように、ああ、と大きさに声を上げた。振り返る彼はしたり顔で、何やら良からぬことを考えていることは明らかだ。楠木の眉間に皺が寄る。

「これは独り言だがな。いくらツーカーの仲でも言わなきや伝わらねえことってあると思うぜ、俺あ」

「何のことだかさっぱりだな」

「相変わらず誤魔化すのが下手だねえ、お前は……」

ま、お前のペースでいいと思うがね。 厳いかめしい眉を下げて笑うゴウダは、今度こそ、その巨軀を曲げて戸口をくぐっていった。

重厚なドアが音もなく閉じてから、楠木は一人、地獄の底から響くような、長く低いため息をついた。

「あの男はっ!」

「ひゃああっ!」

ゴウダと入れ替わりに入室した司令助手が、刮目し声を荒らげる楠木を前に恐怖したことは言うまでもない。

§

和服の着付けにもすっかり慣れてしまった。

この鮮やかな紫の給仕服に初めて袖を通したのは三年前だ。千束にアルバイトの話を持ちかけられて、頷いた瞬間、更衣室に連れ込まれてあれよあれよと言う間に着せられた。それもおろしたての新品をだ。あいつ、もし俺が断ってたらどうするつもりだったんだろう。

……ずっと紫が似合うと思ってたんだ、か。ミカさんと色がダブってることを突っついたら、先生のは青っぽい江戸紫で、こっちは赤みの強い京紫だからセーフだとも言ってたっけな。

俺は、というかヒマリは、筋金入りのブルベ冬だから寒色系のほうがいい。それがわかっていて赤のニュアンスを入れたのは、多分、ちよつとした姉心というやつだ。

千束は俺に世話を焼くのが好きらしい。というか、出会った時からどうにも俺の姉役をやりたいがる節がある。その割には、数ヶ月前まで俺のことをタツパのデカさから年上だと思いついていたようだけど。

まあ、フイリングで動いているように見えて誰よりも思慮深いのが錦木千束というやつだ。きっと何か、本人なりの理由があるんだろう。

「やあ(こと)〜?」

噂をすればだ。襟を正して、ロッカー備え付けの小さな鏡を覗く。一応飲食店だから清潔感を意識してナチュラルメイクにしてみたけ

ど、久しぶりだからクオリティには自信がない。

うん、まあ、悲惨な見た目にはなっていないから大丈夫だろ。勘はこれから取り戻していけばいい。

「なにー?」

「わぶあつ!?!」

更衣室の引き戸を開けるや、ブラチナ・ブロンド白金の髪の毛の弾丸が交通事故じみた勢いで胸元に突っ込んできた。

「どしたの」

「ハグしちやろと思つたら、想像の倍くらい肩がたけーところにあつた……」

「たきな相手の感覚でいったのな……」

ん！ と得意気に腕を伸ばしてくる千束を、俺は観念して受け入れた。どうしても肩口に顎を乗せたいようだったから、膝を曲げてなんとか背丈を合わせてやる。ズボンやスカートなら足を目一杯広げるだけで事足りるんだけど、和服だからその辺の勝手がすこぶる悪い。

千束は一六二、俺は一七四。身長差一二センチの弊害だ。

「あゝあくでっけえ、やらけえ、あつたけえ……」

「お客さん、ウチそういう店じゃないんすよ」

「よいではないかよいではないかあゝ、だつてもういつぶり? 一緒に働くの」

「二年と半年ぶり」

「ほらすつごい久しぶり、むぎぎ……!」

「今度は何」

『『嬉しい嬉しい』やりたいのに持ち上がんねえ……!』

「よくわかんねーけど」

「嬉しい嬉しい」とやらの正体をなんとなく察して、反対に千束をひよいと抱き上げる。

「(こう)いうこと?」

「うお高っ!」

うお軽っ。発泡スチロールでも詰まってるのか。いや、今まで俺が担いできた体重一〇〇キロオーバーのヤクザやらりりベル三人やら

に比べたらそりゃそうか。

抱えられてからずつとニヤニヤとだらしなく笑っている千束をそのままに、バックヤードを出てカウンターの横に出た。さすがにそのままじゃ戸口はくぐれなかったから、途中で横抱きに変えたけど。

「お姫様抱っこだ！ キャー！」

ミカさんは厨房で新品の焙煎機と格闘中。たきなは小上がりの座敷で黙々とちやぶ台を拭いている。ミズキさんはまだ来ない。クルミは戦力外。

俺はとりあえず店先を掃くか。ちょうどヒマ人を捕まえたところだ。

「え、待ってこのまま外？」

「掃除するから手伝って」

「ちよこれはさすがにハズいって！ せめて心の準備——」

「うるせー」

「あー困ります！ 困りますお客様！ お客様アーツ！」

背中ドアを押す。からんころん、とベルが鳴る。晩夏には珍しい、からりとした空気の朝だ。

見上げれば、遠くにへし折れた電波塔。

結局ここに戻ってきてしまった。

司令はまだ俺を呼び戻さない。

今ばかりは、あの人の考えがわからない。

「あら、あら」

上品な声に振り返った。店の隣に住んでいるおばあさんが竹箒片手に俺たちを見て微笑んでいた。案の定、千束は腕の中で硬直した。こういうのは堂々としているほうがかえって恥ずかしくないものだ。

ま、何はともあれ。

「おはようございます」

喫茶リコリコ、開店。

「いらっしやいませ」

徳田和彦、バツイチ、子供なしの二八歳、雑誌ライター。リコリコの常連たる彼を出迎えたのは、聞き覚えのない、しとやかなアルトボイスだった。

「お席へどうぞ」

「え、ええ。どうも」

その中性的な美女とは初対面のはずだが、どうしてか彼女は徳田の定位置を知っていたらしい。上品な手つきでカウンターの真ん中を差し、にこりと微笑んで店の奥へ消えた。

瀟洒。そんな言葉が徳田の脳裏をよぎる。彼女は一体いくつなのだろうか。和風の制服を一分の隙もなく着こなすその姿、その立ち振る舞いが醸す成熟した魅力は店主のミカにも似ているが、ともすれば男にさえ見える涼しげな目鼻立ちの端々には、しかしどこかあどけない、可憐な少女の印象が垣間見えるような気もするから不思議だ。

「サイトウ君です。時々助っ人をしてくれていたんですが、今日からはフルタイムで」

黒い肌の店主にそう言われて初めて、無自覚に彼女の背中を目で追っていたことに気づいた。とはいえ男女のアレコレはとづくに懲りた身、誓って下心はない。それは単に、性別も、年齢も、全てが曖昧であるがゆえの美というものへのささやかな気付きだった。

注文したブレンドコーヒーと団子が手元に届く頃には、店内はにわかにも混みだしていた。常連客が過半を占めている。作家の米岡や漫画家の伊藤といった、徳田が内心で密かに戦友と呼ぶ物書き仲間の姿もあった。

豆の配達にでも行ったのか、看板娘二人組は姿が見えない。ミズキも厨房に行ってしまった今、ほとんど満席のホールを回しているのはサイトウただ一人だ。しかしそれでも彼女の優美な所作はまるで崩れる様子がない。

「いらっしやいませ、伊藤先生。今月の連載、拝見しましたよ」

「あら本当？ 嬉しいわー！」

「今日もお仕事ですか？」

「ええ。今日中にネーム終わらせないと編集さんに殺されそうで、追い込みにね……あ、いつもの頼める？」

「グアマテラとおはぎセットですね。かしこまりました」

「サイトウちゃん、俺もいつもので！」

「米岡先生は水出しのアイスでしたね」

「覚えててくれたんだ。嬉しいなあ」

「どら焼きはお付けしますか？」

「密かなお気に入りで……!? お願いします！」

一人でこの場を保たせている彼女の恐るべき手際の良さもさることながら、何より驚いたのは常連全員の名前と好みを完全に把握していることだった。頻繁に店を訪れている物書き愚連隊の面々はまだ分かるにしろ、ごく最近ここへ通い始めた中学生の力ナさえもそうなのだから、全く驚異的というほかない。

注文を取る傍ら、セーラー服の少女とにこやかに談笑する彼女は、まさに接客のプロフェッショナルといえよう。

「すごいなあ、若いのに」

己の独白にジジ臭さを覚えながら、徳田はラップトップを開いた。指を内蔵の指紋センサーに乗せようとした瞬間、

『——— 国務長官は病院へ搬送されましたが、その後死亡が確認されました』

カウンターの右端。調度品の並ぶ造作棚に置かれた小さな液晶テレビが、不穏な言葉を吐いた。

「あれって、アメリカから来てた人ですよね」

徳田が呟くと、ミカは今まさにコーヒーサイフォンのヒーターを点けようとしていた手をはたと止め、やけに鋭い目を画面に向ける。見たことのない顔だ。まるで、臨戦態勢の兵隊のような。

「ええ。日米安保条約改定のために。まさか警護車列ごと多重事故に巻き込まれるとは」

「協議はどうなるんでしょう。いや、その前に日本の責任問題になりそうだ」

「いずれにしろ荒れるでしょうね。国内も、国外も……」

あるいは既に、世は乱れ始めているのかもしれない。

その言葉は天啓のように徳田の耳朵を刺した。

血生臭い内戦の果てに、かつてのロシア連邦と袂を分かったヤクトゥシベリア社会主義共和国。周囲の国々を共産化のうえ併？し肥大化を続ける中華連邦。北西に目を向ければ、ロシア内戦の動乱に飲まれ、今やいずれの国が領有しているのかさえ定かではなくなってしまう混沌のつぼ、ASEAN2・0共同統治領、樺太。

そんな周辺国家に囲まれた日本が、今日まで世界一良好な治安を維持していること、本来ならばそれそのものが奇跡なのだ。

世は乱れ始めているのではない。既に乱れている。平和な日本に暮らすあまり、徳田はそれを失念していた。

國務長官の死は、本当に事故が原因なのだろうか。普段なら陰謀論として一笑に付すような疑念さえ、今の徳田には妙な生々しさを伴って聞こえる。

とはいえそれも一過性のもので。団子を頬張り、美味しいコーヒーをすすれば、ほどなくして懸念は意識の遠くに追いやられた。

All's right with the world.
すべては事ともなす。
God, sin his heaven,
神、そのらに知ろしめす。

徳田は敬愛する作家の詩の一節を想起する。

今まで何も起きていない。

これからも、何も起こらない。

戦争を知らない彼の心根には、そんな楽観があった。

「たーだいま帰りましたあー！」

書きかけの記事を開く徳田の背後。正面の入り口から堂々と凱旋してきたのは、やはり千束だ。おそらくは、親鳥に引っ付いてまわる雛鳥のように、たきなもそこにいるのだろう。なんともほほえましい。もちろん予想は予想であって、その目で見ているわけではないが。

「おかえりなさい」

「ソフ。サイトーが敬語使ってんのちよつとウケるな」

「お客様の前ですから」

「えーいつも通りでいいんだよ？ 私たちと喋るときくらいはさ。ね、先生！」

「ああ。構わないよ」

「普段の言葉遣いが荒いので……」

「荒いかなあ？ どっちかっていうと」

「男っぽいですか？」

「そーそれ！」

え、なにそれ推せるっ！ と食いついたのは小上がりの座敷でタブレットにペンを走らす伊藤だ。サイトウと同性ゆえか遠慮というものが無い。

急がないと担当の方に殺されるんじゃないやなかったのか、と徳田は内心でツツコミを入れた。

「千束、プライベートのサイトウちゃんってどんな感じなの？」

「んー、なんちゅーか雰囲気攻め」

「攻め！ ミステリアス美女は王子様だったのね！」

「うんうん、ほんとそんな感じ。私服はすごい男の子っぽくて、でも意外と甘いもの好きで……」

人のことを言えた身分ではないな、と思い直した直後、

「ちよつと目え離すとすぐ女の子にナンパされてる」

熱々のコーヒーが気道に入って激しく咳き込んだ。店主の気遣うような視線がつらい。

「される側なんだ……あれ、案外受け？」

「えっえっ、待って！ そうじゃん!？」

「うう……私ギヤツプ萌え大好き……」

「あの、お二人とも何のお話してるんです……？」

「フォッフフォッフオッフ。オヌシも大人になればわかるぞサイトー少女」

「うわウツザ」

「はひゅっつっ」

「後藤先生!？」

「つくうく、インスピレーション湧いてきたあ！ ちようどコンセプトが迷走してる子がいたから助かったわ！ ありがとね！」

「後藤さんそれちなみにどういうキャラなの？」

「主人公のビジュアルがあんたモチーフって話はしたでしょ？ そいつに激重感情抱えてるクーデレ寡黙お助けキャラよ！ ちよつとい雰囲気になる予定！」

「ちさサイ地雷です」

「サイトーあんたなんてこと言うの」

「千束、ちさサイってなんですか？」

「うぐ、えつと、いわゆるカップリングの略称的な」

「カップリング」

「フィクションの中の、その……れ、恋愛、カンケー……」

「千束が辱めを受けてるわよサイトウちゃん」

「たきなつて割とそういうところあんすよ」

「無知攻め。そうか、そういうのもあるわね……」

「後藤先生が書いてんの少年誌でしょう」

「抜け穴はいくらでもあんのよ」

「コワ……」

「サイトウ、お団子できたから持ってつちやつてー」

「あ、はい、ただいまー！」

厨房から飛んできたミズキの声にサイトウが座敷を離れると、千束は、さあ、ぼちぼちやりますか！ とたきなの追及から逃げるように慌ただしくバックヤードへ駆け込み。それを諫める店主の横で、女性客の一団に猫可愛がりされていたクルミがようやく解放される。

ああ素晴らしきかな、平穏なる日々よ。

願わくばこれが、ずっと続きますように。

§

「仕事だ」

脂汗の浮くような、嫌な種類の緊張を一瞬だけ抱いた。直後、ここ

が喫茶リコリコであることを思い出し、密かにほっと息をつく。

そうだった。ここじゃ俺は、誰も殺さなくていいんだ。安堵を悟られないよう、平静を装ってカウンターのミカさんを見た。表には閉店の札を掲げているから、客はもういない。

「たきなどですかね？」

「ああ。千束と君、千束とたきなのツーマンセルでの作戦遂行能力は実績が証明している。今回は戦略を広げる意味で新しい組み合わせを試したい」

二階席にいた千束が、いかにも興味津々といった様子で手すりから身を乗り出す姿が視界の端に見えた。緋色の瞳をクリスマスイルミネーションばりに輝かせまくっている。少女漫画かよ。

「嬉しそうだな」

「だって初めて三人揃ったんだよ！ 嬉しいに決まってんじやん！」

「千束がバックアップしてくれるなら安心だ」

「え〜何それ照れ〜るう！」

なんだろう、こないだ頭に食らった破片のせいで幻覚でも見えてんのかな。千束がゴルデンレトリバーみたいなフサフサの尻尾を千切れそうなくらいぶんぶん振ってるように見えるんだけど。あとなんか、すつごいくねくねしてる。何あの動き。怖。

「まあ、なんだ。とにかく無事に帰ってきなさい。いいね」

ミカさんは困ったように苦笑して、そう締めくくった。怪我なく、とは言わないのが誠実だ。この人は子供を戦いに駆り出すことの意味を、きつと俺よりもよく分かっている。

千束とたきなの二人が店を空けている時、あるいは閉店後、地下室で俺と一緒に非殺傷弾を手詰めする時ハンドロード。彼はまれに、疲れたような気配を発する。言葉や仕草、表情に現れるようなものではないけれど、俺にはなんとなくそれが感じられる。

自責に駆られる人の匂いを。

楠木司令と同じ、どこか哀しい空気を。

だから信用できる。

「行〜！」

「……うん」

ご機嫌な千束に背中を押されながら更衣室の前まで来た。引き戸を開けようとして、気づく。扉のすりガラス越しに人影が見える。ミズキさんだ。

「どしたサイトー?」

「あ、いや……」

なんか入ったらダメな気がして、とは口が裂けても言えなかった。急にまごつき出した俺のかわりに千束が扉を開ける。

反射的に顔を背けた。

「サイトウさん?」

背けた先にたきながいた。そりやそうだ。彼女もこれから着替えるんだから。

包围された俺は観念して戸口をまたいだ。ロッカーの位置の関係で、ミズキさんとは背中合わせになるのが唯一の救いだった。

まったく、なんだって今さら意識を。羞恥を内心の罵倒で上書きしながら帯を解く。

キャミソール、半袖のブラウス、タイツ、ハーフパンツ。太腿にはセカンドリの小さなリボルバー、キンバーK6Sを収めたポリマー製ホルスターと、357マグナム弾をセットしたスピードローダーのポーチをそれぞれホルスターベルトで留める。殺傷力の高いジャケツテッド・ホローポイント弾頭だ。気は進まないが、万一の事態にたきなの命を守るためには、敵を初撃で確実に殺さなきゃいけない。

使う時が来なきゃいいけど。

「半ズボンにタイツで。暑そー」

「見える方がイヤ」

「あはは、サイトー足癖悪いもんねえ」

「そうですか? イメージないですけど」

「ああ、そーゆる例えよ。見ててみ、この子ヤクザキックで自分よりでっかい人ぶっ飛ばすから」

夏季仕様の三等戦闘制服、いわゆる白服に袖を通す。スカートの裾上げはしていないから脚は膝下まで隠れる。これだって、至近距離で

翻せば相手の視界を塞ぐ立派な武器だ。

「私もいつかは……」

「デッドリフト五〇〇キロ」

「えっ」

「あたしの自己ベスト」

「……本当に同じ人間ですか？」

「さあ？ 一皮？ いたらターミネーターだったりしてな」

ロツカー最下段のマガジンボックスからシングルカラムの弾倉を
ごっそり抜いて、サツチエルバッグの底に挿せるだけ挿し込む。弾薬
箱の隣のピストルラックに置かれたシルバーの大型拳銃が当座の相
棒だ。

グロック17はセーフハウスにある。口径が九ミリだから千束と
弾薬を共有しにくい、という事情もあったが、何よりあれは血を吸い
すぎている。それに当時のものとは個体が違うとはいえ、俺が殺した
二人のリコリスのうち、一四人の死因はグロックだ。グリップを
握った瞬間に負の記憶が蘇るような代物をプライベートで使う気
はなれない。

今だけは、このハードボラー・ロングスライドを。

「でっけー。私本物初めて見た」

「バレル長七インチでしたっけ。精度はかなり高そうですが、非殺傷
弾では……」

「そうでもないよ。こんだけ長いマッチグレードのカスタムバレルな
ら若干……本つ当に若干だけどマシンになる」

「ちなみに私の1911クローンもマッチグレード・バレル入れてる
よ、てか最初っから入ってた」

「手え込んでるよね、千束のコンバットマスターは」

「サイトーのそれも中々こだわってんじやん？」

「まーね。練習の時にでも貸そうか」

「やったあ！ デデンデデンデデン……デデンデデンデデン……あいる
びーばあつく……」

「私まだ見てないんですよね。ターミネーター」

このハードボラーは千束の銃と同じく、特許の切れたM1911ガバメントをベースに作られている。取り回しに優れるコンパクトピストルとして再設計されたデトニクス社製のコンパクトマスターに対して、こちらは大型化による精度向上に舵を切ったモデルだ。対照的な二丁だが、どちらのシルエットにも原型であるガバメントのディテールが色濃く残されている。ありきたりな言い方をするなら、まるで親子のように。

そのせいか、ただでさえ機嫌の良かった千束のテンションは今やストップ高だった。放っておいたら空でも飛びそうだ。

「みなさーん！ お忘れ物はございませんかー？」

「ハーン！」

「はい」

「では出発！ 錦木隊長に続けい！」

「ハーン！」

「はい」

律儀に千束についていくたきなの背中を追って、部屋を出る間際。

「……ミズキさん」

着替えを終え、手の中で車のキーを弄んでいる彼女に、おずおずと声をかけた。

「ん？」

「え、っと」

やっぱり話しかけるんじやなかった。

僕はDAを裏切る。その時、弱みがあつては、必ず付け込まれる。無関係な誰かが理不尽に傷つく。

これ以上、この人に近づいちゃ駄目だ。

「ごめん。やっぱなんでもない」

逃げるように更衣室を出た。玄関には行かなかつた。従業員室として使われている和室に上がり、押し入れにいたクルミに、シャツの襟の内側に隠していたUSBメモリを渡す。

「なんだこれ」

案の定、怪訝な顔をされた。

「近く、俺が指示した時に、このデータをミカさんの名義でDA司令部まで提出してほしい」

「中身は」

「受けてくれるまでは言えない。けど、みんなに不利益をもたらすものじゃない」

「あいつらは知ってるのか？」

「くれぐれも、内密に頼む」

「自分で持っていけばそれで済む。ってわけでもないんだな、その口ぶりだと」

「……頼む」

面倒は御免なんだが、お前には借りがあるからな。

しばらく考え込んだ末、彼女は目頭を指でもみほぐしながら、気だるげに呟く。

「報酬の支払いは今まで通りに。釈迦に説法とは思うが、そのデータを用意したのはお前で、流せと言ったのもお前だ。結果として何が起きても、そこからはぼくの管轄外だからな」

「ありがとうクルミ。恩に着るよ」

「別に。金払いのいいクライアントとは精々長い付き合いを。そういう打算だよ」

「どっかで聞いたセリフだな」

「どっかの阿呆のセリフだよ。やけにでかくて女ったらしな自己犠牲バカのな」

「自己犠牲だあ？ 千束あいつ」

「口を滑らせたのはたきなだ」

「……えっ？」

ややあつて、腑に落ちる。俺にとっては誤射の一〇発や二〇発なんて許す許さないの域にすら至らない、些細な出来事だったけど。

「ぼくにこんなことを言う資格はないが……あいつだってターミネーターじゃないんだ。友達をマシンガンでハチの巣にしたら、そりや気にもするさ」

撃った側は、違うよな。

なんで気づかなかったんだ。俺は、今までずっと、たきなに無理をさせてたんだ。

必要なのはパンケーキとショッピングなんかじゃなかった。しかるべき許しのフェーズだ。俺にはいらなくても、たきなにはなくちやならなかった！

「俺は大馬鹿だ、くそっ」

「そこで自分を責めるのがお前らしいといふかなあ」

「当たり前だ！ 友達が悩んでるのを何か月も放っておいて、俺は！」「被害者のお前が気にしてないなら、あとはたきな自身の問題だ。それに、あいつには千束がついてる。あんまり気に病むなよ」

「でもー！」

「それでも気が済まないんなら、一緒に戦って、助けてやれ。今回はペアなんだろ」

「……うん。悪い。取り乱した」

「自分の痛みには鈍くても、他人の痛みには耐えられないか？」

「俺の痛みには価値はない。どうせ後には何も残らないんだ」

「歪だよ、それ」

冷徹な声音だった。

サイトー！ はーやくう！

表から聞こえてくる能天気な呼び声が、沈黙に割って入る。

「行ってくる」

「ん」

踵を返す。クルミが手をぞんざいに振る。

けれど彼女の青い眼差しだけは、どこまでもまつすぐに、真摯に、俺を射抜き続けた。

その街に、空はなかった。

薄汚れた大気から逃れんとせず高く積み上げられた摩天楼がまるで墓標の群れのように林立し、そのわずかな隙間さえもがビル間を結ぶ無数の渡り廊下に埋め尽くされている。建造物の内を清浄な空気と快適な室温で満たすべく、壁という壁に根を張り、いたずらに熱気を垂れ流す配管、ダクト、室外機。

生きながらに朽ち果てているような、異様な超々高層都市群。^{メガ・ストラクチャー}それが。

「経済特区ユジノ・サハリンスク。ロシア連邦分裂を決定づけた第二次非核ロシア内戦の折、日本を中核とした事実上の反共同盟であるASEAN2・0^{アジア・アセアン・トゥー}が、どさくさに紛れてむしり取った土地をタックスヘイブンに仕立てたのがこの街の始まりだ」

ゴウダらが行く最下層は、ビル群が生み出す廃熱と廃棄物が最後に流れつく、いわゆる掃き溜めだった。

人も、物も、低きに流れる。全天候型のユートピアの最果てに広がる巨大なブラックマーケットは、この破綻した都市構造がもたらす当然の末路といえるだろう。

「共同統治領というのが実態はこのぎまだ。ASEAN2・0に加盟する各国は終戦後まもなく利益の追求に走り、国家主権すら固まらないうちに多数の多国籍企業を好き勝手にここへ誘致した。結果、そのおこぼれにあずかる地下組織や犯罪企業が大量に流入、無法地帯の出来上がりさ」

橋の下を見な。企業のコンテナが地下河川を流れてるだろ。ロゴが読めるか。

「エメス・バイオ・リサーチ・オブ・サハリン。遺伝子組み換え作物の権威だが、奴らここじゃあクローンしたブタに移植用臓器を作らせてる。エメス社が本拠を構えるアメリカじゃクロでも、規制の緩い樺太ならシロになる。この街は先進国の実験場でもあるってわけだ」

「メディアは上層しか映しませんよね。やっぱり圧力ですか？」

自宅の庭でも歩くような気軽さで高架下の往来に行くゴウダの背後で小さな人影が声を張り上げる。一帯は大勢の露天商やバーとも呼べない場末の酒場、男女を問わない客引きに街娼といったものが生み出す猥雑な騒音が氾濫しており、そうでもしなければとても会話など成立したものではなかった。

「もつと単純だ。たいていの場合、素人は最下層から無事に帰れない」肩が触れ合うほどの人混みの中。しなだれかかってくる派手な化粧の女を売春宿らしきバラックの方角へ押しつけながら答えたのは、ゴウダの隣に行く男、フクシマだった。

「はぐれるなよ、ナカムラ。俺たちはアウエーだ」

「子供扱いしないでくださいよ。俺だって元リリベルだ」

「元リリベルだからさ。国外は初めてだろう。まずは学べ」

「フ。ついでに言やあ童顔は舐められるからな、ナカムラくんによ今回のヤマはちつとばかし試練だぜ——と、ここだ」

先頭に行くゴウダは小さな民家の扉を叩いた。高架橋の柱にへばりつくようにして建てられた総トタン張りの簡素な平屋だが、周囲の建物に比して妙に造りがいいことにナカムラは気づいた。よく見なければわからないが、壁や屋根の水平が取れていて、吹けば飛ぶような雰囲気ではない。

「気づいたか」

「ええ、多分」

「いい感覚だ。見てろ」

耳打ちするフクシマをよそに、ゴウダが鉄扉の覗き窓越しに二言三言、言葉を交わすと、ほどなくして中から大柄な男が姿を現す。顔の半分には当たり前のように巨大なタトウ。経済特区ユジノ・サハリンスクにおけるごく一般的な反社会的勢力スラヴ・ギャングの面構えだ。

「どうぞ」

彼は存外に丁寧なロシア語で三人を中へ導いた。みすばらしい外見とは打って変わって、室内は無骨なコンクリート製の壁と天井に囲まれていて、あろうことか空調まで効いている。

だが何より驚くべきは、応接間ともリビングともつかない半端な広

さの空間を埋める巨大なサーバーラックの数々だろう。最新型とはいかずとも数年落ち程度のパーツで固められたそれらは、電力供給の不安定なスラム街にもかかわらず十全に稼働しているように見える。ひよつとすると、別の街区から専用の電線を引いているのかもしれない。

「まだ生きてたか、モナ・リザ」

部屋の最奥のデスクで何かがちらつく。こちら向きのモニターだ。

画面いっぱいに現れたのは、壮年、否、ほとんど老年と言っても差し支えない一人の女だった。上等なスーツに身を包み、ガラス越しに青空を背負っている。おそらく都市の上層にオフィスを構えているのだろう。

『減らず口は相変わらずだね、小僧^{チコ}』

彼女のスペイン語は独特の訛りが強く聞き取りにくい。しばらくゴウダと流暢に軽口を叩きあっていたようだが、スラング交じりなこともあって具体的な内容は今一つ理解できなかつた。混乱する様子を見かねてか、フクシマがキューバ訛りだと教えてくれた。

『さて、そろそろ商談に入ろうじゃないか。ナイトシティに何の用だいい?』

ナイトシティとは、ここユジノ・サハリンスクを指す汚名の一つだ。古典SF小説ニューロマンサーに登場する巨大な都市になぞらえて、いつしか誰かがそう呼び始めた。

……と、現在休養中のサイトウ室長が残してくれていた引継ぎ資料に書いてあった。

「約一〇〇〇丁の軍用銃を武装組織に提供した金持ちを探してる。歩兵戦闘車を日本に持ち込んだ疑惑もあってな」

『噂は聞いている。空自の非公認部隊が動いたんだってね』

「そつちは済んだが、銃を持つてるほうにアメリカの國務長官を殺された。俺たちのボスはテロ屋の元締めがこの街に来たんじゃないかと疑ってる」

アメリカと聞いてモナ・リザなる女はかすかに眉をひそめると、年齢を感じさせない艶やかな黒髪を耳にかけた。なんでもない仕草だ

が、ナカムラの目には、ゴウダの話を一言一句逃すまいとしているかのように映った。

『へえ。首輪を嵌められて鈍ったものと思っていたけど……楠木の奴、やるじゃないか。正解だよ』

「居場所は分かるか」

『それらしいのを最後に見たのは三か月前だ。もう出ていったよ』

「身柄までは望まねえ。どこのどいつか分かりやいい」

『銃はさておき、装甲車を捌ける組織は少ない。再生工場からの横流し品だからね……調べるならそこからがいいだろう』

「ああ。ヤクーチアの軍閥と付き合いのある連中を洗うつもりだ」

『なら、そうさね。あんたたちが街を駆けずり回ってる間に、こっちで使えそうな情報をピックアップしておこう。内戦の借りを返す意味で、代金はサービスしてあげる。分かっているとと思うけど、こっちにも付き合いつてもものがあるからね。表立っては動けないよ』

「十分だ。助かるぜ」

『世辞はおよし。お互い自分の仕事をするだけだろ……明日、また来な。詳しい手筈をその男に伝えておく。ああそれと、ここ以外のアクセスポイントで私に繋ぐんじゃないよ。足跡を消すのだってそれなりに手間なんだ』

「今さら俺がそんなハマやると思うか？」

『後ろの坊やに言ってるんだ』

その発言を最後にモニターは暗転した。

少しの間があつて、ゴウダが振り向く。白い歯を見せてくつくつと笑っていた。

「俺がハナ垂れ小僧で、お前が赤ん坊か」

「あの人、何者なんですか？」

ゴウダの揶揄はあえて無視した。彼は特段機嫌を悪くするでもなく、むしろ順調に凶太さを身に着けつつあるナカムラをますます気に入ったようで、愉快げに鼻を鳴らすだけだった。

「こっらを仕切ってるフィクサーだ。下層は行政が軒並み死んでるからな、あのおつかねえキューバ美人が金と暴力で一応の秩序を作つて

んのさ」

「まるで浄化戦争前の麻薬カルテルだ」

「ナカムラ。比喩は所詮、比喩だ。理解ではない」

「フクシマさん俺に厳しくないですか……？」

「それだけ目えかけられてんだよ。なに、これもお勉強だぜナカムラくん！」

「また始まったよ」

「室長並は求めない。が、食らいついてこい。ナカムラくん」

「フクシマさんまで!? 酷いつス！」

入った時と同じく、マフィアの男の丁寧な見送りでアクセスポイントを出る。浄化され、調温された空気に慣れた鼻腔に、路地を埋め尽くす人混みと工業廃水が発する暴力的な臭気が容赦なく絡みついた。

最下層に下りて二時間と経っていない。たったそれだけの間に嗅覚が麻痺していたのだ。

「……海外旅行ねえ」

ゴウダとフクシマ、二人の背中を追いながら、ナカムラはひとりごちる。

その掃き溜めには、やはり、空などなかった。

§

かつて、サイトウが違法な手段でフルオート化したグロック17を常用していると聞いた時、たきなは自分の耳を疑った。

毎分一〇〇〇発近いレートで放たれる9×19mmパラベラム、それも通常より装薬を増やして威力を高めた強装弾リコイルの反動をストックなしに制御するなど不可能だ。ひとたびトリガーを引けば銃口は際限なく暴れ回り、照準などつけようもない。凡百のリコリスでは精密射撃はおろか、敵も味方も区別なく殺傷するに終わることだろう。

銃へのダメージも甚大だ。本来の仕様であるセミオート射撃しか想定していない設計のグロック17が、そのような酷使に耐えられるとは到底思えない。バレルは過熱し、フレームは歪み、スライドには

亀裂が……規格外の負荷を受けて自壊していくグロツクの姿が目に見え、浮かぶようだ。

だから最初は一笑に付した。そんな芸当、たとえ屈強な正規軍人でも不可能だと――

「らあつー」

――彼女が大柄な男を前蹴り一発で吹き飛ばしてみせた今この瞬間まで、そう思っていた。

「発砲、被発見、共になし……ま、白昼堂々の作戦にしちや及第点だろ」
廃工場の中には、今回のターゲットである麻葉密売グループとは別組織と思われる護衛部隊がひしめいていた。当初の戦力予測を大幅に上回る数と練度の敵を前にサイトウが選んだのは、単独での先行潜入だった。

結果はご覧の通り、地上にいた傭兵らしきならず者たちは一人残らず昏倒。拘束用のボーラ・ガンで手足を固く縛られ、陸揚げされた冷凍マグロのようにそこから中へ転がされている。

「撤退しても良かったのでは」

地下へ通じる階段室の入り口を前に、たきなは初めて愛銃のM&Pを鞘から抜いた。

「ごめん、いつもの感覚で突っ込んだじゃった」

サイトウの言い分には正直ドン引きだった。ライフルで武装した二〇人以上の兵士崩れを単騎で制圧するのがいつものとは、一体どんな懲罰であろうか。

『地上にいるのはあくまで歩哨、主戦力は地下だ。ここからが本番だぞ』

「わかってるよ。電力カットの準備は？」

『合図があればいつでも』

「ここからはタイムアタックだ。たきな、いい？」

白銀のガバメント・クロウン、ハードボラー・ロングスライドを胸元に構えるサイトウの背中は、驚くほど千束に似ていた。同じC・

A・R・システムの使い手だから、というばかりではない。

これはもつと、どこか、根本的な部分が立ち姿に現れて――

「はい、千束のスピードには慣れていきます。遠慮なくどうぞ」

「じゃあ行くこうか。クルミ」

『はいよ』

——たきなは雑念を捨てた。

サイトウが階段室の扉を開け、クリアリングの後、突入。彼女の直後続く。事前のブリーフィング通り、会敵するまでは両腕を伸ばしたウィーバー・スタンスで銃を構え、厳正な射線管理による誤射防止を第一とする。もう二度と、あのような過ちは繰り返さない。

一メートル先も見えない闇の中、前方のサイトウが舌を鳴らす。数秒後、彼女の片手が後ろに回され、たきなに触れた。

不規則なりズムで数度肩をつつかれた。音を立てられない状況下における符牒だ。

意味は、まもなく会敵。数は五。スタン・グレネードを使用。たきなもまた、彼女の手に触れて了承の意を符牒で返す。

人体に備わった闘争本能は脳内麻薬を分泌し、ストレスと恐怖を麻痺させる。血の巡りは早まり、適度な緊張が感覚を研ぎ澄ます。今なら針が床に落ちる音ですら聴き取れるかもしれない、とすら思えるほどに。

サイトウの手によってグレネードのピンとレバーが外され、階下へ投げ込まれるのを衣擦れの音で察した。

数秒後、どよめきの声。真暗い踊り場が強烈な閃光に照らされ、同時に耳をつんぎく大音響。

グレネードの青白い残り火が、プリーツスカートを翻して手すりを超えるサイトウの姿を一瞬だけ浮かび上がらせた。

「あ、ちよつと……」

いくら奇襲とはいえない切りがよすぎはしないか。そんな心配をよそに戦端が開かれる。カバーのために慌てて階段を駆け下りると、ヘッドボラー四五口径の重々しい銃声と発砲炎、そして敵の野太いうめき声がたきなを歓迎する。

サイトウは空中を駆けていた。煤けた壁、コンクリート製の手すり、屈強な男達の胸、顎。それらすべてを蹴りつけ、足場とし、宙を

舞う。暗闇にマズルフラッシュが弾け、凄惨な打撃音のラッシュの後には、白銀のマガジンが空中に残されるのみ。意識を刈り取られ、崩れ落ちる男達の頭上を走り抜け、彼女は進撃する。

その異常な三次元闘法はたきなにも見覚えがあった。

「…………この動きは」

錦木千束だ。サイトウの動きは、明らかに彼女のスタイルを模倣したものだ。

無論、サイトウに敵の発砲を見切る目はない。この狭い階段室内でそれは大きな枷となる。しかし彼女には千束が持ち得ないものが一つあった。

圧倒的な——人間離れした、と表しても過言ではない——身体能力だ。

未だに敵が一発も撃てていないのは、偏に彼女が、馬鹿げた膂力を秘めた長身を瞬きより早く疾駆させ、千束以上の踏み込みと打撃でもって相手の反応速度を上回り続けているからに他ならない。

撃たせずして撃つ。斬らせずして斬る。非殺傷弾を込めたハードボラーはあくまで間合いを詰める上での牽制に過ぎない。彼女の本領は蹴打と殴打のリーチの更に先、肘撃エルボーすら視野に入るゾーンにこそある。

千束の交戦距離を超ポイントブランク・レンジ至近距離とするなら、さしずめサイトウはさらに過激な超々至近距離と定義できよう。

嵐のような猛攻に次ぐ猛攻にすり潰されるようにして、最初の五人は三秒足らずで全員が地べたへ叩き伏せられた。しかし、たきながようやく追いついたかと思えば、彼女は背後に一瞥もくれないまま、さらに言うなら地に足をつける事すらなく、下へ下へ、怒濤の勢いで跳躍していく。

サイトウはリコリスである前に司令の側近であり、明確に階級が定められているわけではない。しかしファーストとして活動することも少なくないらしい。ならば相応の実力を備えているはず。たきなはそう考えていた。

だが彼女の身のこなしは完全に想定を超えていた。自身の相棒に

比肩しうる者などいるはずがないと、無意識に思い込んでいた部分もおそらくはあったのだろう。

セカンド以下がいくら集まったところで、ファースト・リコリスには決して敵わない。

そして。ファーストがいくら集まったところで、錦木千束には決して敵わない。

そんな彼女と遜色ない大立ち回りを演じるサイトウもまた、埒外の天才といえるだろう。

もつとも、その身体に備わる特異性を才能と呼んでいいものか。

階段の手すりを飛び降りるようにして彼女を追う最中。M&Pを握る手の内が冷や汗で湿った。

前衛ポイントマンのサイトウをカバーするということは、必然的に、射界の中には彼女が入る。人質のエリカを助けるために放った銃弾が、窓から飛び込んできたサイトウを蹂躪したあの時と同じく。

撃てるだろうか。

いいや、撃つのだ。撃つしか、ないのだ。

階段の終わり、開放放たれる扉。アサルトライフルを持った男が二人。サイトウのハードボラーはスライドが後退しきったホールドオープン状態。リロードしなければ撃てない。今こそ後衛の出番だ。

ウィーバー・スタンスで狙いをつける。

蛍光色に光るナイトサイトが敵の一方を捉えたまま小さく震えている。照星のすぐ横にはサイトウの背。手元が数ミリでも狂えば彼女に当たる。

トリガーにかかる指が、動かない。

息が詰まった。血の池に倒れ伏し、白い制服を真っ赤に濡らすサイトウの姿が今の光景に重なって見えた。

何をしている。撃て。撃て。敵を撃て。仲間を助けろ。ためらうな！ たきなの冷静な部分がひっきりなしに喚く。

それでも、撃てない。

撃ちたくない。

怖い。

まごついている間に、男たちが構えるアサルトライフルの銃口が彼女に向いて。

たきなは目を固く閉じた。

閉じて、しまった。

「たきな」

銃声の代わりにたきなの耳朵を打ったのは、優しすぎる声だった。恐る恐る、目を開ける。加速した主観時間の中、眼前に翻るもの。バク転の要領でライフルを蹴り上げ、宙を舞い、たきなのもとへ、彼女が来る。

前を見た。男たちはのけ反り、隙をさらしている。サイトウは空中におり、射線を塞ぐものは何もない。

一発。

二発。

その射撃は、直前の動揺が嘘のように冴え渡っていた。

一拍置いて、二人の右前腕から鮮血が噴く。これで銃は封じた。

「ありがとう」

たきなの前に降り立ったサイトウが囁く。同時に、空を切りながらリロードを済ませた白銀のハードボラーが、瞬く間に四度火を噴いた。

暗闇に碎け散った非殺傷弾の粉塵がもうもうと舞う中、銃声と同じ数の葉莢と、空になったマガジンが一つ、硬質な音を立てて落ちた。

「……すみません」

そんなつもりはなかったのに、消え入りそうな声が出た。サイトウは自らのバッグから止血ガーゼの入ったパウチを取り出しながら、たきなの方を見て柔らかく微笑んだ。

「どうして?」

「撃てませんでした。パートナー失格です」

気絶した男の腕に大判のガーゼが押し当てられる。葉液が染みたのか、彼は食いしばった歯の間から苦悶の息を漏らした。唸り声の間に小さく聞こえてくるのは女の名前だろうか。どこことなく中南米の響きを感じた。

心配はいらない、楽にして。まるで母親が愛する息子に言うような調子で、サイトウは彼をなだめる。彼女が話すスペイン語の授業はリコリスの養成課程にない。きつと独学だろう。

「そんなことないって、普段なら言うところだけど」

たきなが欲しいのはそんなんじゃないやなさそうだ。男の腕に固定用のテープを巻き付けながら、彼女は続ける。

「あたしに……叱ってほしいのかな」

問いかけのようできて、その実どこまでも断定的だった。

「あたしは、たきなを恨んだことはないよ。これからも絶対にない」
「……」

「それとも、あたしに許されても、自分を許せない？」

こくり、と頷くほかなかった。二人目の応急処置を始めた彼女に、たきなは無言で手を貸した。

「あたしと同じだね」

優しい声音の中に、何か、聞く者の胸を深々と刺すような、痛ましいものが隠されているように思えた。

「あたしは今まで、たきさんの人を……傷つけてきた。謝りたくても二度と謝れなくなっちゃった人も、大勢いてさ」

「サイトウさんは、いい人ですよ」

「ありがとう。でもね、あたしは自分をそう思ったことは一回もないんだ。あたしが誰かに優しくするのは、あたしがいい人だからじゃないの。ただこれ以上、誰も傷つけたくなくて、誰にでもいい顔をしてるだけ。そうやって、自分が嫌いな自分を隠して……ごめん、話がそれた」

「いえ」

「えつと、そう。あたしは、人を傷つける自分が好きになれない。だから、こんな人間は許されるべきじゃないと思ってしまう。たきなはどうかな」

「私も、そうだと思います。サイトウさんを撃つたことは、忘れられませんが」

「どうしたらいいんだろうね。どうしたら、自分を許せるんだろう。」

こうやって偉そうに喋ってるくせに、あたしには何も分からないんだ。でも、そういう辛さがあるってことだけは、分かるよ」

だから、さ。

「あんまり抱え込まないで。あたしも話を聞くくらいならできるから……ね？」

サイトウはそう言ってまた、哀しい微笑を見せた。

彼女がここまで自分のことを話してくれるのは初めてだった。彼女の心の深い部分に立ち入るだけの信頼を勝ち取ることができた喜びと、得体のしれない物悲しさが交ぜになった、複雑な感情の波がたきなを襲った。

「……ありがとうございます」

可哀想、ではない。申し訳ない、とも違う。

上手く処理できない。

知らず知らずのうちに、サイトウは立ち上がっていた。差し伸べられた大きな手を取って、たきなも階段室の外へ出る。

細長い廊下だった。非常灯の赤い薄明かりだけが等間隔に灯っている。通路は少し行つたところで右に折れており、その先にあるだろう倉庫に人の気配はなく、不気味に静まり返っているばかり。ターゲットはそこにいるはずだが。

不審に思いながらも進もうとしたたきなを、サイトウが腕で制する。

「アンブツシュだ。しやらくせえな」

「分かるんですか？」

「奴らから見た今の状況はこうだ。外が静かすぎることに気づいて偵察に向かわせた仲間が誰も戻ってこない。その上、貨物用エレベーターは停電で動かず、地上へのルートはこの階段だけ。なんなら銃声もバンバカ聞こえてくる」

「……下手に打って出るより、有利な地形で敵を待ち構えたほうが良い」

「倉庫内からの反響音で、今その仮定が確信に変わったところ」

壁に無線の中継機を貼り付けるサイトウを横目に、じつと耳を澄ま

せてみる。

「……私には何も聞こえません」

「聞こえるってどういうか、音の響き方が無人の時と違うんだ。
エコーロケーション
反響定位って知ってる？」

「そういうものがある、という程度には」

「練習すればたきなもできるよになるよ。クルミ」

『どうした？』

「待ち伏せだ。一度電気を復旧させてみよう。エレベーターにのこのこ乗るようだったら途中でまた止めてやればいい」

『階段を上ろうとしてきたら？』

「その時はこつちから不意を打つ。二手に別れて、上下から挟撃を仕掛けてくる可能性もあるが……だとしてもやることは同じだ。ポイントマンはあたしが、たきなは引き続き援護を。それと、千束」

『はいはい！』

「クルミと一緒に廃工場外周の警戒を頼む。そろそろ出てくるはずだ」

『オツケー、モグラ叩きね』

『五秒後に通電する。備えろ』

「ま、戦いにはならないと思うけどね」

『どういう意味です？』

答えを聞く前に、明転。サイトウの手にはいつの間にかピンの抜かれたスモーク・グレネードが握られている。

反攻に備えた態勢のまま、短くない時間が過ぎた。曲がり角の先にキルゾーンが形成されているとあっては、その緊張はひとしおだ。

『もすもすー？』

たきながいい加減に焦れてきたその時、いつそ感心するほど気の抜けた声がインカムに届いた。

「千束？」

「やっぱリボスは一人で逃げたか」

『うん、ダクトから出てきたからしばいといた』

「ご苦労。麻取への引き渡しは後方の第一九特設任務部隊に任せて」

『はいよ。やー、あっけなかつたねホント』

「すみません、今一つ話が見えないんですが」

「えっとね」『えっとね』

「あっ」『あっ』

「どうぞどうぞ」『どうぞどうぞ』

「……漫才やってんですか？」

『ちやうわー』

ツツコミを入れたことでなし崩し的に会話の主導権を手にした千束の説明をかいつまむと、こうだ。

麻薬密売組織を率いる男はそれなりに場数を踏んだ筋金入りの犯罪者で知られる。そんな男が、防衛には適しても逃走手段に乏しい地下を生活拠点にしている時点で、今回のような最悪のケースに備えた何らかの対策が施されていることは予期していた。そこで、サイトウトときながら正面から護衛を圧倒し、焦った男がたまらずその秘策とやらを使って逃げ出したところを捕らえた。

「インテリほど引つかかるんだよ。俺には作戦があるんだ！ なーんて言いながら安全地帯からのこのこ出てくるんだから」

千束の言を引き継いだサイトウトは、一度は抜いたグレネードのピンをレバー部に押し込んで強引に安全化すると、あろうことかハードボラーまでバッグに戻してしまった。

「帰ろっか」

「えっ、奥の部屋はいいんですか？ まだ麻薬と兵士が……」

「あいつらも仕事でやってんだから、クライアントがいなくなったら帰るだけだよ。国内でブツを捌くツテなんか傭兵にはないし、どうせ一帯は政府が監視してるんだ。怪しい動きはすぐわかる」

「……暴れませんかね」

「そこはほら、エチオピアかパキスタンあたりのやつすいコピーAKに、やつすい鉄葉莖スチールケースの弾込めてるような奴らだから。ノーギヤラじゃ、ボコボコにされた仲間を医者に見せるので精一杯でしょ」

「なるほど。なら薬はほとぼりが冷めたころに麻取が回収すれば」

「うん、全部丸く収まる。だからあたしたちの仕事はこれで終わり」

あ、そうだ。たきなが階段室へ足を向けると、背後の彼女が珍しく声を弾ませた。

「帰ったらコーヒー淹れてくれない?」

「千束のほうが上手いですよ」

「たきなのコーヒーが飲みたいの。お願い!」

「まあ、そういうことなら……」

曖昧に返事をしてから、発言の真意がわかった。

多分、頼られているのだ。とても不器用な形で。

大げさに言えば、たきなが存在を信じるサイトウへの罪、その贖罪を助けるために。

そうだ。

そうだった。

ずっと、許されている実感が欲しかった。

胸の奥に突き刺さっていた棘が、ようやく抜けたような思いがした。

「とびつきりおいしいの、淹れますね」

廃工場を出た。ひび割れたアスファルトと錆びついた空き倉庫ばかりの殺風景な景色に、西日に照らされた蛍光イエローの規制線が浮かび上がって見える。

ハンドサインを送ると、アラミド繊維製の可搬防弾防爆壁オリガミ・シールドの陰でごついライフルを構えていた警視庁特殊急襲部隊S A Tの一人がテープを持ち上げてくれた。

「手出し無用との報告は何っています。連中の退路への誘導は我々に任せてください」

「ありがとうございます」

たきなを伴って真つ直ぐ歩く。防御陣地の後方には、機関銃や放水銃をハリネズミのように生やした警視庁の特型警備車に混じって、ごく普通のワンボックスが五台ほど。もつと奥には喫茶リコリコの赤いワゴンも見える。ボンネットに寄りかかってこつちを見ているのは、やっぱり千束だ。

「たきなは先に行つて。あたしは第一九特設任務部隊ナイン・ライヴズに顔出しから——」

「室長！ サイトウ室長！」

「出向くまでもなかったか……紹介するよ、たきな」

サーボモーターの甲高い駆動音を伴って彼女は来た。力強い歩調で俺とたきなの両方に正対すると、音を立てて踵を揃え、模範的な拳手の敬礼を披露する。

「DA関東本部作戦司令部、特命情報調査室隷下、第一九特設任務部隊ナイン・ライヴズ。隊長の柏かしわであります！」

俺と一緒に答礼を返すたきなは、かすかに動揺した様子を見せた。確かに、特設任務部隊なんて大仰な名前を聞いただけじゃ、同年代の子供で構成された集団だとは思わないだろう。

いや、それもあるが、違うか。

「井ノ上たきなさんですね。ご活躍はかねがね伺っております。なんでも、あの錦木千束さんと組まれているとか」

「え、ええ」

柏が差し出した手は、黒く艶やかな、カーボン製の筋電義手だった。「失礼、驚かせてしまいましたな。あいにく両腕ともこれでして」

言いながら、彼女は一つしかない目を細めて朗らかに笑った。海賊の親玉が着けているような眼帯が、かつて右眼のあつた場所を覆っている。

病床で初めて会った時より、ずっといい顔をするようになったな。なんてしみじみ思った。

「すみません。そんなつもりは」

「いえいえ！　そう気に病まんでください。現場に出る方々からすれば、我々の見てくれは新鮮でしょうから」

我々。そう、我々だ。柏が背後の車列を顎でしゃくると、そのうちの一台のスライドドアが開いて、隊員達が顔を出す。

片腕の無い少女。片脚の無い少女。顔の火傷痕を前髪で隠した少女。そんな面々が、リコリスの戦闘制服とは少し様式の違う、まるで軍装のようなオリーブドラブの制服に身を包み、笑顔で手を、あるいは義手を振っている。五体満足の間人はむしろ少数派だ。

「タスク・フォースは皆、リコリスに不適合とされた候補生や、原隊復帰の困難な負傷兵等からなる検索専門部隊なのです。我々ナインライヴズは例外的に、ドローン・オペレーティングや電脳戦による現場への直接的な支援を主任務としますがね」

「あの、失礼ですが、皆さんはもしかして療養棟に……？」

「ええ、ええ、おっしゃる通りです。サナトリウムでは同輩に殺潰しと罵られ、除籍を待っただけの身でしたが……サイトウ室長が、我々を拾い上げてくださいました」

戦えない者に価値はないと本気で信じているリコリスは少なくな。馬鹿馬鹿しい価値観だけど、DAという人権を無視した組織においては、概ね事実でもある。

壊れた備品は捨てられる。

現代において身体の欠損は基本的に不可逆だ。筋電式の義肢装具を身に着ければ日常生活に支障は出ないが、戦闘に耐えうるポテン

シャルはないし、第一、その特徴的な外見が群衆に紛れる必要のある
エージェントとしては不適格となる。

人を殺せなくなっても捨てられる。

理由は色々だ。抗精神薬の投与と心理士による面談を主とするカ
ウンセリングに耐性があり、殺人への忌避感を打ち消す事ができな
かった者。任務のストレスに耐えられず、作戦行動が不可能なほどに
重篤なPTSDや鬱病を発症した者。

そういった不適格者——俺はこの言い回しが大っ嫌いだ——に休
養を与え、治療し、前線に帰すためにあるのがサナトリウムだが、い
つまでも休んでいられるわけじゃない。情報部や兵站部といった他
部署への異動も、ポストに限りがある以上、よほどの才覚がなければ
叶わない。結果として、復帰の見込みの薄い患者は大半が除籍処分を
受ける。

意味は説明しなくてもわかるだろ。

「急に呼んでごめんね。司令の説得、大変だったでしょう?」

「サイトウ室長の頼みでしたら、たとえば火の中、水の中でも駆けつけま
すとも。それにこれは、司令のご判断でもあるのです」

「えっそうなの?」

「奴のことだ、休めと言っても休まんのだろう。休養中はお前達が補
佐しろ」と。正式な命令書も頂いております!」

「ハハ……」

素直に休んどけよ、とばかりにジト目をくれるときなを俺は華麗に
シカトした。

今度は下から顔をガッツリ覗き込まれた。やめなさい。

「あー、あたし、みんなの顔見てくるね」

頬を指で押しのけると、ぷひゅ、なんて間抜けな音を立てて空気が
抜ける。適当にあしらわれて拗ねるときなの様子に柏がカラカラと
笑った。

「ぜひ五号車に寄ってやってください……ね?」

その声色と眼差しの微妙な違いは、俺にしかわからなかったと思
う。

そっか。指揮車や通信車とは違うのが一台いるのは、そういうことか。

「おや、あちらにお見えになっていきますのは錦木さんではありませんか？ 井ノ上さん、差し支えなければぜひご挨拶させていただきたいのですが」

早速気をまわしてくれた柏に軽く頭を下げて、車列の最後方にいる窓のないワンボックスへ歩く。

観音開きのバックドアをノックして、開ける。車内からは消毒液の匂いがした。

「お久しぶりです、サイトウさん。早速ですが、始めてよろしいですか」

「うん」

「では、脱いだものはこちらのかごに」

内装はほとんど救急車のそれだが、キャビンの片側にオフセットする形で据え付けられているのは、ストレッチャーではなく簡易的な手術台だ。俺は制服を脱ぎ捨てて、ほとんど倒れこむような格好でそこに寝転んだ。

医療用スクラブを着たニンライヴズの一人が、ブラウスとハーフパンツだけになった俺に、やれ血圧計やらパルスオキシメーターやら、大量の検査機器を手際よく巻き付けていく。ドライカーボンの義手って案外、冷たくないのな。

「先生、お願いします」

頭のほうでカーテンを開ける音がした。

「パラメーターがめちやくちやだ。また無理したね？」

「わざわざすみません、山岸先生」

この恰幅のいい女性はDAの嘱託医だ。普段はリコリコの近所の病院にいるんだが、今回はどうやら、俺のメンテナンスのために柏たちに乗せて駆けつけてくれたらしい。

「いいかい。腕がもげて胴も千切れて、その上気絶したまま全身こんがり焼かれちゃったんだ。いくらあんたでも一週間や二週間で全快するわけないだろーよ」

「先生」

「その上なんだい？ あのでたらめな動き！ 私は装甲車のくだりしか見てないけどさ、閃光弾で自分の手を焼くやつがどこに——」

「先生」

「何さー！」

「やめて。この子が怖がってる」

左手と違って何も機器がついていない右手を差し出すと、ナインライヴズの彼女はすがりつくように握り返してきた。片方の手は生身で、もう片方が機械。なのに動きはとても柔らかくて、触れているとなんだか不思議な気持ちになる。

五本指の義手は彼女の筋電位から、細かな震えさえも拾ってしまっていた。

「……悪かったよ。でもね、あんたの体がまずいのは、本当なんだ」「ガワはともかく、体内がまだめちやくちやなのは、感覚で分かります」

「蛹の中身と一緒にだよ。秩序立ってはいるけど、まだしつかりした形にはなっちゃいない」

「あたしの勘違いならいいんですが、今までより治りが遅くありませんか」

山岸先生はあからさまにばつの悪そうな顔をした。

「衰えてるよ。確かにね。でも、まだ大丈夫なはずだ」

「耐用年数には、まだ？」

「違う！ それは違う。けど、そうだね……あんたのその性能、ただの人間にそれだけのものを持たせるのに、無理してないわけないってのは、わかんだろ？」

「今まさに思い知ってるところです」

「飲んで効けば一番良いんだけどね。痛み止めを打っておこうか」

「眠くなるのは好きじゃないんですが」

「どうせ眠れるような痛みじゃないだろ、今は」

名残惜しそうに手を放す助手と入れ替わるようにして、先生は俺の横のベンチシートに座り込んだ。

黙って腕を出すと、彼女は、千束もこれくらい素直だといひだけどねえ、なんて愚痴りながら、ピアスニードルばりに太い注射針を静脈に刺し入れる。

中身はかなり強めの麻薬性鎮痛薬。当然、常人には致死量だけど、こんなので数時間持てばいい方だろうな。

「千束にバレてないといいけど」

「あんたの名演技じゃ、あの子にだってわからんよ。よしんば気づいても、事情を知らなきゃ生理だとも思うだろ」

「来たことないですけどね、そんなの」

「戦うための身体に、子を為す機能は必要ないって考えなんだろ。つたく、胸糞悪い話だよ」

「野郎は趣味じゃねっス」

「そういうことを言ってんじやない」

注射を終えた先生は、助手から別の薬剤が充填された二本目を受け取り、そのままの流れですつとぼける俺の額を指で弾いた。案外痛かった。

「こつちがあんたのところから投与するように言われてる謎の薬Aと、謎の薬Bね」

「ねるねるねるねかよ」

「私だって毎度毎度、患者にこんな得体の知れないもん打ちたかねえわよ」

「調子は良くなるんで、多分必要なものなんでしょ」

「ハッ。お上は医者を舐めてんね……ほら、終わったよ。今回は謎の飲み薬も出てるから、持って帰んな」

「三番の粉?」

「あんた世代じゃないだろ」

先生が壁の薬品庫を開ける。中には既に封のされた薬袋が、一、二……多いな。四袋もある。用法と用量以外の記載はなし。インフォームドコンセントもクソもない。

パンパンに膨らんだそいつらを先生がどでかいビニール袋に詰め込む間、助手の女の子は両手で俺の頭を包み込むように撫でつづけ

た。不思議に思っ顔を見上げると、右のこめかみ近くをつやつやしたカーボンの指で優しくなぞられる。

そういえば、初めてみんなに会いに行った時、俺の話なんか全く信じてもらえなくて花瓶を投げつけられたっけ。破片で頭を切っちゃって血がドクドク出たのを覚えてる。気まずかったな、あれは。それでも何度も何度も、しつこいくらい病棟に通い詰めて、やつと信用してもらえたんだ。みんな戦えなくなった途端、友達だと思ってた奴らから酷い言葉を投げられてきたから。

ああそうだ、思い出した。ちょうど今この子が今触ってるあたりが切れたんだ。

荒んでた頃の柏はまだ義肢に不慣れで、近くの壁にぶつけて脅かすつもりがコントロールを間違えちゃったらしくてさ。それはもう強烈なデッドボールだった。

「痕なんてないでしょ」

「ええ。綺麗です。とつても」

どつちの意味で？　なんてスカしたこと言ってみな。山岸先生にどつかれるから。

「仕事で困ったこととか、ない？」

「みんな充実しています。また制服が着られると思ったら、ベレー帽に、部隊章に、手足まで頂けるなんて……本当、なんていうか、今でもこうしてサイトウさんや皆さんのお役に立てているのが、夢みたいで。これ以上に幸せなことなんて、思いつきません」

「そっか……よかった。本当に、よかった」

「私たちだけじゃありません。第一特設任務部隊も、第二特設任務部隊も、最後発の第二〇特設任務部隊だって。みんな、サイトウさんに感謝してぶやっ!？」

彼女の声音がいよいよ熱っぽくなってくると、先生は薬を詰め込んだ袋を頭上に落として黙らせた。

ズシンって感じだったぞ今。錠剤の重さなんてたかが知れてるだろうに、どんだけ入ってんだよ。

「怪我人はそっとしておく！」

「いったあい……」

「まあまあ、そう言わず」

「なんであんたが庇うんだ。普通だったら楽しくおしゃべりするどころか、泣きわめいててもおかしくないんだよ？」

「そこはほら、特別製ですから」

「ったくこの子は……今日のところはすぐ家に帰って、痛み止めが効いてるうちに少しでも寝ときなさい。それと、どうしてもって事情がない限りは急いで治そうとしないこと。今体力を消耗するとかえって長引くからね」

「はい。今度こそ真面目に休みます」

「痛みはどうだい」

「ずいぶん楽です」

「ならひとまずよし。お大事に！」

寝台から立ち上がると、全身の関節が体外まで聞こえるんじゃないかってくらい軋んだ。相変わらずひどい調子だけど、発痛物質の洪水じみた、脳みそがパンクしそうな激痛は多少和らいでいる。

普段よりセーブしてこれか。リコリコでの給仕みたいな軽作業はともかく、本気で暴れた時の反動はあんまり考えたくないな。

脱衣かごに手を突っ込む。制服がない。と思ったら、助手の子が持っていた。持っていた、って言い回しで間違いないよな？ 抱きしめてるようにも見えなくはないけど。

「……お手伝い、したくて。駄目でしたか」

俺は黙って彼女に背を向けて、袖だけ通してもらった。

さすがにボタンとベルトは自分で締めた。

みんないい子なんだけどさ。向けられる感情が重いよね。すごく。俺は別に、みんなが思うほど凄い奴じゃないんだけど。

謙遜とかじゃなくて、本当に。

本当に。

「ありがとうございます」

「無茶すんじゃないよ！」

車外に出た。注射痕だけは消して、他は言いつけ通りそのまま。

鎮痛剤のせいか、足の裏が妙にふわふわと地に着かないような感覚があるが、一步踏み出すごとに全身が痛むのに比べたらまだマシってものだ。これなら偽装バンの一台一台に挨拶して回ってもいいかなって気がしてくる。

「室長だ」

「サイトウ室長がいらっしやってるよ」

「来てくれたんだ！」

「大所帯でガツガツ行くのもよくなかる。ここは隊長に任せて我々は引っ込んでたほうが」

なんて思っていたら、車の陰からひよっこり顔を出してヒソヒソやっている集団を見つけた。回るまでもなかったか。

待て、この流れ最初にやったぞ。

「やば、サイトウさんと目合っちゃった。どうしよみんな」

「ばっかお前、先輩に氣い遣わせるんじゃないよ。リコリコさんこの友達と来てんだから……」

おいでおいで、と手招きしてみた。

殺到された。

§

「溶けてら」

「うっせ……」

「サイトウさん、コーヒーどうぞ」

「ありがとー……あ、ミカさん。今回の業務委託ですけど、報告書出さないとなんで明日サインだけください」

「わかった。いやすまないね、書類仕事を押し付けてしまつて」

「いえ、どうせ暇ですから」

「固体に戻つた」

「じゃああしい」

たきなが淹れてくれたコーヒーをもう一口だけすすって、畳の上に寝転がった。というか、ぶつ倒れた。ちょうど俺の頭上にある押し入

れから顔を出したクルミが、ちゃぶ台の上のラップトップに映る報告書のフォーマットを興味なさげに覗いたかと思えば、デカいあくびを一つ。

「つられて俺も。」

薬のせいで心地いい眠気が来てる。でも我慢だ。現場と店とで事後処理をしている間に日は沈んだけど、まだそんなに遅い時間じゃない。ちゃんと帰ってベッドで寝なきや。

「人気者は大変だねえ。もみくちやにされてたもん」

「他人事だと思つてえ」

「ソッフ。感謝してたよ、隊長さん」

千束が俺の口めがけて自由落下させてきたチョコレート唇で捕まえる。

「みんなに居場所をくれたつて」

安っぽい甘さ。大袋で売ってるやつだ。俺は好き。

体を起こして、コーヒで流し込む。酸味と甘味がメインの軽やかな味がした。たきなはこういうのが好みなのか。少し意外かも。

感想を伝えようと部屋を見回すも、彼女はもういなかった。忙しかったらしい。ちよつと申し訳ない。

「特設任務部隊タスク・フォース一つ一つの規模はせいぜい一個小隊止まりだ。第一一から第二〇までを合わせても、サナトリウムの患者全員を受け入れるにはとても足りない」

「助けられた人がいる。それは、喜んでいいんじゃない?」

「あぶれた誰かが切り捨てられる構造そのものは、何も変わつてないのに……」

何やってんだ、俺は。千束に言うことじゃないだろ。

「うん。うん。分かつてる。放つとけないよね」

寄り添うような口調に居心地が悪くなつて、膝を抱えた。

「でもね」

千束が背中合わせに体重を預けてくる。

相変わらず羽根みたいに軽い。

目を離したら消えてしまわないかと、不安になるほど。

「一人で背負うことないんだよ」

何も言い返せなかった。

「千束だって、そうじゃないの?」

「えっ私?」

「俺の杞憂なら、それでいいんだけど。たまにさ、一人で難しいこと考えてる時、あるでしょ」

俺が話を逸らしたことに、彼女は気づいたと思う。

少し間があつて、たはは、なんて困った笑い声が聞こえてくる。

「バレてたか。よく見てるなあ」

「最近付けてるチャーム、アラン機関のだよ。関係あつたりする?」

「んーん。アランのことでも、ちよつとあるけど、それとは違うかな」

「そう」

「詳しく聞かないんだね」

「聞いて欲しそうに見えないからね」

「……整理がついいたら、相談していい?」

「ん。いつでも」

「……ありがと。それにしても」

しまった、と思う間もなかった。

「俺かあ!」

しんみりした空気から一転、急に元気になった千束が後ろから抱き着いてくる。力強えなおい!

「そつちが素かあ〜! なんかしつくりくるわあ!」

「くつつくな、暑い!」

「かてえこと言うなよニイチちゃんゲツへヘエ!」

「なんで三下になんだよいつつも!」

「店でイチャついてんじやねーぞガキ共! アタシへの当て付けかっ!」

「ミズキさん助けて! 千束に蒸し殺される!」

「はあ? たたくしよーがないわねー、ほれ」

「ぎにやあああ!?!」

通りがかりのミズキさんが千束に名状しがたい謎の関節技を決め

ると、便乗したクルミが、一体どこで売ってんだかさっぱり分からな
い猫じゃらしのおもちやでがら空きの脇をつつき。いよいよ現場
はカオスを極めた。

「千束ー、レジ締め終わりましたから……何やってるんですか？」

「おうたき公、今セクハラ女をシメてつからよオー！」

「そこまでやれとは言ってねえよ」

「サイトウ、お前もくすぐれ」

「それ何本あるわけ？」

とかなんとか騒いでいたら。

「あー、悪いが私は用事で外出する。戸締りを頼むよ」

明かりの消えた厨房の方から、ミカさんがぬつと顔を出して、それ
だけ言うともた消えた。

正面の入り口からベルの音。本当に出て行ったみたいだ。

珍しいな。

「……作戦会議ー！」

冷めてひっ絡まったスパゲッテイめいた奇つ怪な体勢を強いられ
たまま、千束が突如として叫ぶと、ミズキさんはあっさりと技を解い
た。

「どういうこと？」

俺の知らない何かが水面下で進行していることは間違いなさそう
だ。

「かいつまんで言うと、リコリコ存続の危機です。サイトー隊員」

「え？ そんな話、本部で上がったことねーけど」

「……マジ？ 楠木さんが言っていないだけじゃなくて？」

「もちろんその可能性は否定できないけど、支部を一つ畳むなんて大
ニュースが俺の耳に入らない、なんて可能性のほうがずっとありえな
い」

俺以外の全員が一斉に千束を見た。すわいつもの早とちりか、とも
考えたが、真剣な雰囲気だしそういうわけでもなさそうだ。

「休養中ということで、共有されていないのでは？」

「それでも、司令は本部とのパイプ役に第一九特設任務部隊を充てて

る。柏なら間違いないと報せてくれるはずだけど……直接確かめないと気が済まないって顔してんね」

「だって、みんなお店なくなったら困るでしょ？」

確かに、左遷先がなくなれば、たきなは養成所で再教育課程送りだろうし、クルミは最強のボディガードである錦木千束と、盤石なセキリティを備えた隠れ家を失う。ミスキさんは、うん。この人のスキルならどこでもやっていけそうだから別にいいか。

とはいえだ。なくなったらそりゃ困るが、そもそもなくならないはずなんだよな。

「まず、店がなくなるかもしれないと考えた理由が知りたい。何がきっかけだった？」

「私がおととい、先生のスマホにメールが届いてるの見ちゃって、それで」

「なるほど。文面は覚えてる？ なるべく主観の混じらない情報が欲しい」

「明後日二二時。バー、フォービドウンにて待つ。千束の今後について話したい」

「司令の文体じゃないな。店の話がしたいなら、そんな濁した書き方はしない。俺には文字通り、もっと別の誰かが千束について話があったって言うているように読める」

「こちららあの人からの業務連絡を何百通と読んでるんだ。司令とそれ以外の区別くらい当たり前につく。」

「問題は、その別の誰かが何者なのか、つてところだ。心当たりは？」

千束はしばらく考えた末、首を小さく横に振った。

何か隠しているな。まあいい。

「で、俺に秒で尾行がバレた二人で現地に乗り込むんだ？」

「うぐつ、はい……」

きな臭い話だ。DAに千束をどうこうできるやつはいない。過去にはいたが、ファースト・リリベル数人がかりでの暗殺に七度も失敗してからは、楠木司令の尽力もあって、その手の愚にもつかない姦計の類はなくなつた。

組織の強制力を上回る圧倒的な暴力。それが、千束にはある。そんな奴の今後を話すだと？

よほどの身の程知らずか。それとも、暴力をねじ伏せるだけの別の何かを持った傑物か。

確かめないよ。

「俺も行く」

「マジ!? 助かるー! あ、でも疲れてるなら無理しないで休んでもらったほうが……」

「この程度で疲れやしないよ、普段はもつと忙しいんだから」

マグカップに半分ほど残ったコーヒを一気に飲み干して立ち上がると、千束とミズキさんも追従した。

みんなに作戦があるっていうなら、イレギュラーの俺は大人しく乗っかるのが吉だろう。

そう思って、最低限の準備だけして大人しくしているつもりだったんだけど。

「待つて千束。そのデカイインカム使うの? マジ?」

「んー、でもウチにはこれしかないしい」

「それじゃ目立ち放題でしょ、こっち使いな。特調でも使ってるやつだから」

「ちっちゃー! え、取れなくならん?」

「ならねーよ!」

だったんだけど。

「たきな、ネクタイすごいことになってない?」

「大丈夫です、なんの、これしき……!」

「あーほら、貸して。ダブル・プレーンのコツは……」

諜報戦の訓練を受けるリコリスなんて普通はいない。ましてや経験のある奴なんているわけない。結果として、作戦の大筋はそのままに、装備やら移動経路といった細部を俺が全面的に面倒を見る羽目になった。

だって、さすがにリコリコの車で会員制のバーに乗り付けるのはまづいだろう。相手がミカさんだけならまだしも、相手がどんな奴かわ

からないんだ。警戒するに越したことはない。

「サイトウのおんぶに抱っこね、私ら」

それでも何とか一通りの準備を終えて。千束、たきな、クルミ、そしてミズキさんの四人が赤いワゴンへ乗り込む。道中で俺が手配した車に乗り換えて、足取りをかく乱する手はずだ。

「しようがないよ。ミズキさんはともかく、リコリスと俺とじゃ専門分野が違うんだから」

「私だって似たようなもんよ、ブランクがあるとどうしてもね。だから本当、助かるわ」

「こんなのでよかったらいくらでも頼ってよ。今は一応、仕事仲間なわけだしさ」

仕事仲間、の部分に妙な力みが入ってしまった気がする。目一杯下げた運転席のウィンドウからこちらを見上げるミズキさんは、俺の内心を知ってか知らずか、柔和に微笑むばかりだった。

「あんたこそ、もっと頼ってくれていいのに」

「もうたくさん寄りかからせてもらってる。これ以上は、悪いよ」

「サイトウ」

特別大きいわけでもないのに、耳に残る声だった。

「誰もあんたを嫌ったりしない」

俺は、その時、ひどく無様な顔をしていたと、思う。

この人を前にすると、俺は俺を保てなくなる。

「もう行ったほうが良さそうね。遅れると困る」

「……うん。先に行つてて」

「向こうで会いましょ」

四人を乗せた車が走り去る。明かりの消えた店の前には、俺一人。

泣いてない。

泣くもんか。

たきなを連れ立ってバー・フォービドゥンへ入ってから数分としない内に、千束はサイトウから到着の報告を聞いた。なんでも仕事の都合上、既にいくつかの名義で会員登録を済ませていたために、クルミに偽装を任せる必要がなかったのだとか。

「もう店内にいますと言っていました。見つかりませんね」

二人が案内されたソファ席は入口に近く、しかし目立ちもしない、張り込みに都合のよい位置にあった。必然的に来客の一人一人を観察することは容易であったのだが。

「つかしいなあ、イケメン女子も男装女子もいねーなあ……」

飛びぬけて背が高く、骨太で、かつ、黒髪のベリーショートなどという希少属性の塊のような彼女は、千束の目をもってすれば捕捉は容易であるはずだというのに、一体どこへいるやら定かでない。似通った印象を覚える人物は多少なり見つかるものの、やはり、普段のサイトウの姿と合致する者は一人もいなかった。

そんな中。

飲めもしないスパークリングワインのグラスを無駄にくるくると回して遊びながら、諦め悪く周囲を伺う千束の肩に、何者かの手が触れたかと思えば、

「どこ見てんだよ」

大人びた抑揚の低い女声が、含み笑い混じりに問いかけた。

「あ、サイトー——ヒュッ」

声の方へ振り向いた。

その瞬間、千束はビビった。心底ビビった。

黒一色のシツクなカクテルドレスに高いヒールを合わせた彼女は、ゆるく巻いた長髪のウィッグによって普段の中性的な佇まいを跡形もなく駆逐してのけていた。

真黒い衣装、真黒い髪、真白い肌。あらゆる有彩色を排除した硬質なシルエットに一点、ヴァイオレットのルージュが蠱惑的な彩を添える。

それは正しく、危険な色気を惜しげもなく振りまく魔性の女、ファム・ファタール。千束の自由奔放な語彙に言い換えるならば、さしずめ、「べらぼうにえっちな大人のお姉さん」といったところであった。「変装つてのはごうするんだよ、山葵わさびのりこさん」

この後三人でめちやくちや自撮りした。

#7: To be, or not To be

「DAが来てる」

千束たちのセルフィーにぎつと二〇枚近く付き合ってから、俺はようやく本題を切り出した。

「リコリス?」

「特命情報調査室。楠木司令直属の特殊検索班だよ」

隣に座る千束から代わりに飲んでくれと押し付けられたフルートグラスの反射を使って辺りを索敵すると、誰かまでは識別できないが、さつきからこちらを見ていたそれらしい人影が一つ、動いた。

わざわざ接触を試みてくるということは、向こうにとって俺たちの存在はイレギュラーなんだろう。特調の基幹メンバーが動くなんて、よほど重要な案件でなければありえないわけだし、これはちよつとまじいブッキングをしたか?」

「ついてきてもいいけど、どちらか一人は残って入口を張っていた方がいい」

「私が残ります。千束」

向かいの席のたきなとアイコンタクトを交わした千束が何かを言おうとしたその時、ホールの奥から近づいてきたパンツスーツの女性が、すれ違いざまに俺のむき出しの肩に指を這わせていった。

振り返って背中を目で追えば、誘うような流し目を返される。

なるほどそういう脚本か、アラキ。悪いとは言わないが、ちよつと古典的すぎると思うのは映画の見過ぎかな。

「あの人がそう?」

「そう。ちよつと間、開けてから来て」

自前のクラッチバッグを手に後を追うと、彼女はホールを外れて、閑静な廊下に入った。先にあるのは、化粧室と喫煙室。アラキは後者に入っていく。

真鍮色の重厚なドアノブを押し開けるや否や、一本の紙巻き煙草を持ったアラキの手が目の前に突き出された。

深い青の巻紙に金のフィルター。著名な高級シガレットを模したそれを受け取って唇に挟むと、中に硬い感触がある。この感じは、タイプCメモリか。

細身の洒落たライターで点けてもらう。

「なぜここに？ いや、俺のセリフじゃないか」

「追跡行です。樺太でゴウダが情報を掴みました」

二人揃って、言葉と一緒に薄い白煙を口からこぼす。ひどい味がする。似ているのは見た目だけか。それとも、俺の舌が馬鹿になっているのか。

「例の銃の件で？」

「はい。室長にも任務がアサインされています。ご確認を」

「分かった。アラキはどうする？」

「後退し、退路の確保を。筋電歩行補助外骨格は目立ちますから」

それと。

アラキは火を点けたばかりの煙草を早々に灰皿へ投げ込むと、去り際に俺の顔を見た。

「百合の件は、すまなかった」

端的で、けれど、多くのものを秘めた言葉に、俺は何も言わずに頷いた。律儀な人だ。それと同じくらい、繊細な人でもあると思った。

今際の際の百合先輩にされたことを誰にも話さずにおいたのは正解だった。当時こそ、先輩の死を看取るのが、彼女が愛した人ではなく、所詮は他人でしかなかった俺であったことは、たとえ俺には不可抗力だったとしても、許しがたい罪のように思えた。だが仮に、あの場にアラキがいたら、ともすれば後を追ってもおかしくないシヨックを受けていたんじゃないだろうか。

二人の間に無粋に割って入った俺が、それを肩代わりすることで事

が丸く収まった。真実はどうあれ、そう信じ込んでおくことで、俺は俺の心を守ることができる。

先輩が最期に縫ったのが、胸を貫こうとする鉄柱を受け止める俺ではなく、記憶の中のアラキであったことに、嫉妬なんかしちゃいけない。

そんな資格、俺には最初からなかったんだから。

そう、なかったんだよ。

「千束、廊下を見張ってて」

アラキと入れ違いに入ってきた千束を、副流煙が薄く漂う喫煙室から言外に追い出す。

過ぎたことをあれこれ蒸し返すのはもうやめだ。

「はいよー」

いや、暗に出ろって言ったのになんでしれっと入ってくるんだよ。扉をちよつと開けておけば十分見える？ ああ、そう……自分がいいならいいけど。

吸殻のフィルターを千切ると、フィルムにくるまれた小さなフラッシュメモリが顔を出す。無線マウスのレシーバーをもつと小さくしたようなやつだ。クラッチバッグから引っ張り出したスマートフォンに繋ぐと、ブリーフィング用のアプリケーションが自動的に立ち上がった。

追跡対象の名は吉松シンジ。明るい色の髪をオールバックにした壮年の男だ。

プロフィールによればアメリカ陸軍で二〇年ほど軍医を勤め、名誉除隊。その後はアラン機関であしながおじさんをやっていらしいが、具体的な活動内容は不明。

ただ二点だけ、ゴウダたちの捜査で明らかになったことがある。

彼がアランを通じて、国際テロリスト真島へ大量の武器弾薬を供与したこと。

そして。

マリヤ・アレクサンドロヴナ・マギナ、旧称、栗原百合にBMP―2歩兵戦闘車を提供したこと。

これが追跡任務で良かった。暗殺だったら、俺はすぐさまここを飛び出して、公衆の面前で奴を殴り殺していた。

「吉松、シンジ。吉松、吉松……ヨシさん？」

直接会ったことはないが、千束がたまに、吉松という、ミカさんの知り合いだという客の話をしていたのを思い出した。

最後に千束がヨシさんの話をしたのは確か、五ヶ月ほど前。俺がウォールナットを殺そうとしていた時。

ロシアで仕事をしていた、と。

それが経済特区ユジノ・サハリンスクのことを指していたのだとしたら。

「千束」

「ん？」

「店にたまに来るヨシさんって、こんな顔？」

ガラスの嵌め込まれたドアをわずかに開けて廊下の様子をうかがっていた千束に、祈る思いで画面を見せた。

どうか、別の吉松であれと。

「うん。その人だけど……なんで？」

心臓を鷲掴みにされた気分だった。

いつそ握り潰してくれればいいとさえ思った。

「言っつていいのかわからない」

「教えて。それでサイトウが楽になるなら」

「楽に？」

「すぐく、辛そう」

優しすぎる声だった。

頷いてみせるのが精いっぱいだった。

「ヨシさんが。吉松シンジが銃取引事件の黒幕だった。あの人が樺太の武器商人を動かしたんだ。そのせいで……」

みつともなく声を震わせる俺の背中に、千束がそっと手を触れた。

歯を食いしばる。余計なことを口走らないように。

掌のあたたかさに、涙が滲まないように。

「命令があった。俺は追わなきゃ」

「私は……ううん。帰ったほうが、いいね」

「二階席から回り道すれば入口からの視線は切れる。そのままたきなを拾って裏口から出て。今ミカさんとかち合うのはまずい」

「わかった」

千束が小走りで喫煙室を出ていく。一度、二度と深呼吸。感情の波を抑え込む。いつの間にかドレスの襟元を握り締めていた手を放す。

大丈夫、大丈夫。落ち着いた。もう取り乱したりなんかしない。

俺は冷静だ。

スマートフォンを操作して、ブリーフィングにあつた通信チャンネルを追加する。これでリコリコとDA、両方の会話を耳に仕込んだイヤホンから聞ける。

『STF―19、小隊間データ・リンク構築完了。UAV順次発進中』

『STF―18、攻勢防壁全種展開。当該セクター隔離までカウント三〇』

『STF―20、店内イントラネットへの不正アクセスを検知。変異型二種、結合型六種、デコイ一三種の不活性化処理を完了。ラジャータへ支援防壁展開を申請』

『アルファ現着。監視対象を確認』

『ブラボー現着、されど民間人多し。司令部、対処求む』

『チャーリー現着』

『デルタ現着』

『エコー現着』

特設任務部隊三個に、リコリス分隊が五個だと？ それもフキさん率いる精鋭のアルファ分隊まで駆り出すなんて。

司令はここで勝負を決めるつもりか。

発信周波数をリコリコ組の帯域に切り替える。

「クルミ、DAだ」

『わかってる、こつちで適当にやっておく。ぼくたちは撤退でいいんだな？』

「ああ。固定翼型の長距離偵察ドローンが飛び始めた。急がないとこつちまで捕捉されかねない」

『うつわ、本気じゃない。車変えといてよかったー……』

「俺は仕事をアサインされたから残る。千束とたきなを拾ったらすぐに出て」

クラッチバッグから銃を出した。昼間は太股のホルスターに差していた小ぶりなニインチリボルバー、キンバーK6S。シリンドラーをスイングアウトすると、六つあるチャンバーのうちの二つに、発信機トランスマイを内蔵する消音弾薬が装填してある。

実弾をセットしたスピードローダーも一応は常備しているが、こっちは使わないことを願うばかりだ。

「STF—21—1より司令部、ターゲット情報を受領。指示を」

『吉松シンジ。こいつの車に発信機トランスマイを仕込め。後の指示は追って出す』

「了解」

『私は休めと言ったはずだが』

「はっ。申し訳ありません」

『今のお前は消耗している。戦闘はするな』

「避けるではなく、するなですか」

『そのための小隊だ。いいな』

「はい」

大丈夫だといいいけど、なんて思ってしまうのは傲慢だろう。仲間を力を感じるべきだとは思いますが、拳銃弾を一発食らうだけで死にかねない体というのは、俺にはとても脆く、弱いものに見えてしまう。なかなか抜けない悪癖だ。

『ロータリーに向かえ。秘書の女が車を回してくるはずだ』

裾をまくり上げ、K6Sをレッグホルスターに差した俺は、メモリを抜き取った吸殻と保護フィルムをまとめて小さなパウチに入れてバッグへ隠し、素知らぬ顔で廊下に出た。

ここ、フォービドゥンはラグジュアリーホテルの中層階に居を構える会員制バーだ。消防法の兼ね合いで出入り口は複数あるが、結局のところ出入りにはホテル正面のロータリーを必ず通らなきゃいけないから、そこを張っていればどうとでもなる。DAが考えているのは

そういう作戦だろう。

ホールには戻らない。通路を反対に進み、非常口へ。

「警報は？」

『こちらSTF-19、停止済みです』

「ありがとう」

サムターン鍵の安全カバーを割って開ける。ドアを開けた先は屋内の非常階段だ。歩きにくくてしょうがないヒールを脱いで手に持ち、リノリウムのそっけないそれを数段飛ばしに駆け下りていく。

『急に呼び出してすまなかったな』

そんな最中、イヤホンから唐突に男の声がした。千束のチャンネルからだ。

衣装のチョーカーに仕込んでおいた集音マイクが拾ったんだろう。あいつが一番ターゲットに近づくで見越して細工したものだったが、まさか作戦がご破算になってから効いてくるとはな。

いるんだ。千束のそばに、吉松とミカさんが。

『いいや』

『君に尋ねたいことがあってな』

硬い声色だ。けど緊張とは違う。

『手術後、私は君にあの子を託した。その意味を忘れたのか、ミカ』

ミカさんに託されたあの子というのは千束のことで間違いない。

だが、手術だと？ 口ぶりからして千束の幼少期に何かあったのか？

射線を見切るような奴だ。リコリスをやつて怪我をするようなことなんてそうそうない。第一、DAでの千束の最後の任務は旧電波塔の奪還だが、あれだって無傷で帰ってきたらしいじゃないか。

ということは、先天的な疾患か何かが――

『何のために千束を救ったと思ってる。あの心臓だって、アランの才能の結晶なんだぞ』

――心臓？

この男は、今、心臓と、言ったのか？

アランの才能。

才能。

天才。

そうだ。

千束は天才だ。

あの目。あの洞察力。あの反射神経。どれをとっても。

フクロウのチャームはアラン・チルドレンの証。才能を見出され、それを発揮するための支援を受けたもの。

吉松がわざわざアランの才能の結晶というからには、天才に作らせた人工心臓か。

なんだよ。なんなんだよ。こんな形で知らされるなんて。これが、今まで千束に向き合うことから逃げてきた罰とでもいうのか。

いや、違う。俺のことなんかどうだっていい。今一番辛いのは千束だ。

俺が口を滑らせたばかりに。

『……………どうして』

衣擦れが聞こえる。立ち上がったのか。

まずい。やめてくれ千束。そいつの話なんて聞いちゃいけない。

『どうしてなの、ヨシさん』

世界のすべてから裏切られたかのような声が、俺の足をその場に縫い留めた。

戻りたい。戻って、吉松を思い切りぶん殴って、千束の耳を塞いでやりたい。

テロの黒幕を抑えるだけなら、それでいい。

それでいいが、あの楠木司令が殺しも拘束も命じず、ただ追跡しろというからには、やはり、それなり以上の理由があつてのこと。

作戦の全体像を把握しないまま、独断で吉松を捕えれば、最悪、頭を失った真島がより大量の死体を積み上げる未来もありうる。

『私に心臓を……時間をたくさんくれたのは、本当に感謝してる。けど……………どうして、テロの支援なんかするの?』

『千束、一体何を言ってる——』

『ふむ。君たちを少々侮っていたようだ』

『シンジ!?!』

クラッチバッグの中の実弾に思い当たった。

建物の中で銃声が上がれば、このくだらない会話も中断させられるはずだ。

「ミズキさん、一度出て。千束とたきなは俺が何とかする」

『え!?!』

「クルミを安全な所へ、早く!」

『わ、わかったわ!』

バッグから取り出したクイックローダーから、弾を一発抜いてK6 Sの空いたチャンバーに込める。

あとはトリガーを引くだけでいい。

だが、本当にそれでいいのか。

千束の心か。

大勢の命か。

どちらを救うか。

どちらを切り捨てるか。

『答えはシンプルだ。天才を支援し、その才能を世に羽ばたかせることが、私の使命だからだよ』

俺は過去に一度、同じ選択をしたことがある。

初めてリコリスを殺した日。

俺は仲間の助命と引き換えに、あの人たちを殺した。

『……え、嘘、だって、アランは困ってる人を、』

『そうだとも』

だって今まで、たくさん、たくさん、殺してきたから。

これ以上誰にも、俺のせいで死んでほしくなくて。

『意味分かんないよ。どうしてよ!』

『難しいことはないよ。君と同じ才能を持つものを、同じように支援したのさ!』

『同じ才能を、持ってる……?』

『よせシンジ!』

そうやって俺は、また、

『類稀なる、殺しの才能をだよ』

銃を取り落とした。

地面が揺れている。

耳鳴りがする。

踊り場の壁が近づいてくる。

違う。

倒れているのは、俺だ。

『千束。君はこんなところで燻つていていい人間ではない。使命を果たすんだ』

『待てシンジ！ クソツ、すまない、話をつけてくる！』

なんで俺が傷ついてる。千束を見捨てておいて、そんな資格、ないだろう。

「畜生」

やめろよ。今さら善人ぶるなよ。

「ち、くしょう……」

なんで泣いてんだよ、俺。

『車が来た。急げ』

「……はい」

『どうした。体調が優れないか』

「……いいえ。問題ありません」

呆然として、身を起こす。拾い上げたりボルバーのシリンダーを回して、次弾を発信機に変える。

ヒールも持った。バッグも持った。

一段一段、下りていく。

下りて、下りて、下りて——銃声が出た。

俺じゃない。イヤホンの向こうで司令部がどよめいている。エレベーター、という単語と、ミカ、という名前をかるうじて拾った。

俺が選べなかった選択肢を、こうもあっさり選び取るか。

なぜ俺は、ミカさんのようにできない。なぜ少数を切り捨てて多数を取ることにしか能がない。どこまで臆病なんだ、お前は。

なあ。俺サイトウお前はきつと、地獄に落ちるよ。

『標的は無傷、作戦は続行だ。ミカは当てなかった』
「了解」

一階のドアの前にいる。ヒールを履いて。太腿に銃を隠して。マスカラの溶けた黒い涙の筋を拭って。

『騒ぎが起きている。一階に民間人が集まりつつあるが、できるか?』
「はい」

『最悪、車の撮影だけでも構わん』

ロビーは騒然としていた。が、銃声を銃声と認識できている人間は一人もいないようだった。生まれて初めて聞く音だったんだろう。

事故か、爆発か。あるいは、小火騒ぎか。そんなことを話している客たちの間をすり抜けて外に出る。

いくつもの間接照明にライティングされた豪華なロータリーに、ダークグリーンのジャガーが停まっていた。運転席にはスーツの女性が見える。彼女の周囲への気の遣り方が普通じゃないことは一目で分かった。それなりに訓練は積んでいるらしい。

銃声を警戒しているんだろうが、それを俺にあっさり看破されているあたりが、実にそれなり止まりだ。多分、たきなでもやれる。

ロータリーの車道を渡る最中、吉松の車の後ろで都合よく転んでへたり込む。ちようど高いピンヒールだ。ダサイが不自然じゃない。

ドレスの裾を払い、リボルバーをクイックドロウ。車の下回りに二発。粘着質のジャケットにくるまれた発信機が貼り付く。すぐさま銃をホルスターへ戻す。

DAが独自に内製する消音弾薬は、薬莖内に内蔵したピストンを装薬の燃焼ガスで押し出すことで弾頭を発射する構造だから、銃声や発砲炎は出ない。

『車に乗れ』

ルームミラー越しに女の視線を感じながら、対岸の歩道に渡る。すると俺の背後、ジャガーから少し離れた乗降レーンに黒塗りの高級セダンが滑り込んできた。ドアを開けると、女があっさりと警戒を解いたのが気配で分かる。

運転手はアラキだった。

「ターゲットの乗車を確認次第、作戦領域を離脱します」

ほどなくして、吉松シンジは一人で出てきた。弾は当たらなかったとはいえ、撃たれたっていうのに余裕たつぷりだ。クソ度胸の持ち主か、本物か。あるいは、ミカさんに傷つけられない確信があったか。おそらく、最後者だろう。盗聴した声だけでも、ミカさんと吉松の関係が、単なる友人の距離感にないことは察することができる。

俺が散々裏切ってきた信頼と同質のそれだ。

二人。二一回。裏切った親愛。友愛。情愛。

ミカさんは、俺と同じ苦しみを味わわずに済んだんだろう。

それでいい。それで、いいんだ。

俺のように、ならないでほしいから。

「出ます」

「少し待って。千束とたきなが、まだ」

「中原さんはいらつしやらないので？」

「銃声がしたから下がらせた」

「一台に三人は目立ちます。後ほど迎えの者を向かわせましょう」

「……お願い。見るだけでいいの」

俺のわがままだ。作戦の遂行のためには、無視していいはずだった。

「三〇秒待機します」

フルスモークのリアウィンドウは、中から外を見ることはできても、外からの視線は通さない。ホテルの入口を食い入るように見やる。

その時、赤いドレスがひらめいた。息を切らせる千束に構わず、吉松の車は無慈悲に動き出し、去っていく。

そんな仕打ちを受けてなお、緋色の視線は、車内の男を追っていた。

「……あ、ちやい」

『千束！』

スリーピーススーツのたきなが、打ちひしがれる千束の背中に飛び込むのが見えて、俺は無線を切った。

千束にはたきなががついている。何も心配いらぬ。そう、自分に言

い聞かせる。

なぜ俺は、あいつの隣に立てないんだろう——なんて、幼稚で身勝手な感情を握り潰すために。

「……ごめん。行こう」

車は音もなく発進した。吉松とは真逆の方向に交差点を曲がり、ホテルの敷地を出て通りに入る。

『店で下ろす。お前の仕事はここまでだ』

作戦終了、か。

何が終わったっていうんだ、一体。解決したことなんて一つもないだろ。

『リコリス小隊と特設任務部隊タスク・フォースは目標の監視と追跡にとどめ、拘束は警視庁特殊急襲部隊が行う。懸念は無用だ』

口を開こうとした瞬間、司令に先回りされた。言葉を募る気はすっかり失せてしまったが、それはそれとして、発言に一つ気になることがあった。

「……警視庁が、ですか。それはつまり」

『そうだ。日本政府はアラン機関を安全保障上の脅威とみなし、吉松シンジの身柄を欲している』

「米国の国務長官を爆殺された影響でしようか」

『無理のないことだ。今日までテロリズムに殺されてきたのは、リコリスか、あるいはリリベルか、いずれにせよ日本にとって計数外の人間だけなのだからな。初の犠牲者が同盟国の使者ともなれば、重い腰を上げざるを得まい』

「政府からすれば我々は肉の盾ですか」

投げやりに言うのと、司令は沈黙した。さすがに失言だったか、なんて勘繰っていると、

『存外、そうとも言えんやもしれん』

司令自身、未だに信じ切れていない声音だった。

『日本と米国は安保条約改定に係る協議を、国務長官の暗殺を受けてなお強行する腹つもりでいる。八重樫総理がその護衛を我々に依頼してきた』

「考えが読めませんね。わざわざDAを使う意味があるとは思えない」

『総理がお前と話したがっているそうだ』

「……何ですって」

うろたえるより先に、俺はタチバナが——兄さんが内閣を嗅ぎまわっていることが露見した可能性に思い当たった。が、内心ですぐに否定する。俺たちがやろうとしていることに政府が気づいているなら、まず情報共有を受けたDAの監査部が動くに決まっている。真つ当に身柄を拘束すれば、常人の兄さんはまず確実に殺せるし、俺だつていつもの定期健診を装ってバラバラに解体されてしまったら、いくら不死身の身体があつたつてどうしようもない。

護衛は建前、それは間違いないが、なぜだ。俺は何か見落としているのか？

「それはまた、どういう風の吹き回しで」

『由縁は知らん。が、近日中だ。それまでに少しでも体を休めておけ。全く……上はつくづく勝手なものだ』

怪我の療養も満足にできんとは。わずかな苛立ちを滲ませて、司令は通信を切った。

しばらくして気づいた。

司令が言っていた怪我人とは、俺のことか、と。

§

薄っぺらい紙にプリントされた頭と心臓をそれぞれ撃ち抜く。ハードボラー・ロングスライドを胸元に引き付け、首を左右に振る。スキャン&アクセスで視野狭窄トネルビジョンを解除する。

撃つ。銃を戻す。首を振る。

撃つ。銃を戻す。首を振る。

硝煙の臭いで鼻が馬鹿になってきた。眩いマズルフラッシュが目染みる。射撃レーンのテーブルはおろか、床にまでまき散らされた空薬莖が、トリガーを引く度に燃燒ガスが生む衝撃波にあてられ、微

動している。

人質を示すオレンジの人型を避けた一発が黒いターゲットの眉間を貫くと、ハードボラーはちょうど白銀のスライドをホルルドオーブンする。

持ち込んだのは七発入りのマガジンが六本。合計四十二発の・45ACPホローポイント弾は、乱戦を想定して複数のレーンにまたがる形でセッティングした二人分の紙すべてに、きっかり二つずつ穴を開けた。

かれこれそれを、すでに二セットほどこなしていた。

こんなの当てゲームで気が晴れるわけがなかった。感情に任せて引き金を引く、なんて行為そのものに不慣れというのもあったが。

おびただしい数の薬莢をかき分けるようにしてテーパーブルに銃を置き、イヤーマフを壁のフックに掛ける。制服のポケットからシガレットケースを出して、煙草をくわえたその時、射撃場の外、左の倉庫の方から拍手が聞こえた。

「お見事！」

横目で見ると、帰ったはずの千束がいた。

「非行少女め」

したり顔で言われて、ようやくほんの少しだけ口の端が上がった。煙草をケースに戻そうとすると、小走りで近づいてきた千束が慌てて制止する。

「見せて」

「は？」

「吸ってるよ」

「人様の肺にヤニ付ける趣味はねえよ……」

「そこをなんとか！」

「……見るだけだよ」

片手で着火したマッチを口元にやり、何度か吸い込む。口の中の煙は背後に吹き出して、壁の換気扇に吸わせた。

やっぱりひどい味だ。

「コンスタンティンだ」

「ようこそ俺の世界へ」

床に散らばる葉莖を蹴散らしながら歩いて、いつもの換気扇の下の壁際に背中を預けた。あるだろ、煙草を吸うときの定位置ってさ。それだよ。

千束はそんな俺を見て一体何が楽しいんだか知らないが、少し離れたところに置いてある布張りのアウトドアチェアに腰掛けて、じつとこつちを見つめてくる。

お互い、一言も喋らないまましばらくそうしていた。

携帯灰皿に一度目の灰を落とすと、千束の方から口を開いた。

「出る前に言った話、なんだけど」

珍しく、こつちの出方を探るような、遠慮がちな口調だった。

「あんまり気にしないでね？ 大したことじゃないから」

「千束」

「なあに？」

名前を呼ぶと、緋色の目が柔和に細められた。

柔和すぎた。すぐに無理して貼り付けた作り笑いだと分かった。そんな大根演技が俺に通用するわけないだろ。馬鹿野郎。

「遠ざけててごめん」

「私、遠ざけられてたことあったっけ？」

……本当に、馬鹿野郎だよ。お前は。

「怖かったんだ」

自分でも驚くほどすんなりと言葉が出てくる。千束と出会ってから三年間もウジウジとやっていたのが馬鹿みたいだった。

ああ、そうか。だからか。

最初から千束は。

いや。

「命令一つで同じリコリスだつて殺すような奴が、千束の目にどう映るのか。自分の中の、醜い部分を見抜かれて拒絶されるのが……いい人だなんて思えた人に嫌われるのが、怖かった」

誰も、敵じゃなかったんだ。

「助けてくれた相手に、俺は恩を仇で返してた。最低だったよ」

煙草の先の薄ぼんやりと明るい火種から、千束の瞳に視線を移した。いつの間にか、彼女は作り笑いをやめていた。

視線を交わす。こうして、緋色の目を見つめっていると、心の奥底をも覗かれている気分になる。

そこにはもう、かつて感じた恐怖はなかった。

「千束は俺に時間をくれた。今度は俺が助けたい。だから、話して」

千束は椅子の上でおもむろに両膝を抱えると、そこに自分の顔をうずめて、深く深く息を吸った。少し遅れて、何かをこらえるような唸り声。プリーツスカートと簡易防弾生地とフィルタリングされてずいぶん小さくなったそれは、ワイングラスをそばに置いたらカチ割れそうなくらい甲高かった。

嬉しいんだか、照れてんだか、泣いてんだか。

どれでもいいか。

「……ありがとう」

顔を上げた千束の鼻頭は、ほんの少しだけ赤かった。

「そっちに行つていい?」

俺が頷くより早く、千束は俺と同じく壁に寄りかかり、腰を下ろした。

立て膝で座り込むと、二の腕のあたりに千束の肩が触れた。煙草を持った手は膝に乗せて、できるだけ離しておいた。

「私、生まれつき心臓が悪くて」

千束は全てを話してくれた。

本当なら八歳にもならないうちに死ぬはずだったこと。

しかしある日、救世主を自称する吉松に、人工心臓を贈られたこと。そして。

「私の銃は救世主からもらったものだから……だから、人を助ける銃なんだって。そう思ったの」

人を殺さない訳を。

「つて、そっちじゃないんだわ! 話つていうのは、新しい心臓の方」
声のトーンがかすかに落ち込んでいることを、千束は自覚しているだろうか。

密かに身構える。

「二〇歳までもつかどうか、なんだって。それで、お店、どうしようか
なつて」

覚悟はしていた。それでも、頭の芯がじんと痺れるような重苦しい
衝撃に、俺は言葉を失った。

余命が数年しかないから、というばかりじゃない。

普段はうるさいくらいに快活な千束が、急に、ひどく儂いものに見えてしまったから。

「まず私とフキが卒業して、そのあとたきなどサイトーでしょ? だ
から、その」

千束がこうして、避けようのない死を受け入れるに至るまで、一体、
どれだけの葛藤があったんだろうか。そんな不躰なことを考えた。

けれど俺には、何も分からなかった。

マシンガンの掃射に内臓をズタズタにされても、瓦礫に片腕を押し潰されても、頭に手のひら大の破片が突き刺さっても、胸を鉄柱に貫

かれながら炎に巻かれても。

痛かろうと、苦しかろうと、視界が霞もうと、自分が消えてなくなる、その実感だけがない。

真に迫った死は、そこにはなかった。

自分自身の死というものが理解できない俺が、千束の心情に真に寄り添える日は、きっと来ないんだろう。

あるいは。

ヒマリが遺した身体の性能に助けられて、ただ漫然と死に損なってきた俺ではなく、喉元に迫る死に対して、真摯に向き合い、立ち向かってきた人間なら——井ノ上たきななら、違ったのかもしれない。

「その」

はにかんだような尻すぼみの声に、俺は黙って頷いて、続きを促す。

「サイトウがよかったら、なんだけど。ここ、残すのもアリかな……なんて」

息を呑んだ。

「もともとは、閉めるつもりだったんだ。だって、なんかお墓みたいでヤじゃない？ それに、あんまり私のことで、みんなの時間を使わせちゃうのもよくないし」

千束はほとんど、独白のような調子で続けた。

「でも」

俺は瞬きさえ忘れて次の言葉を待つ。

「ここなら、サイトウがサイトウでいられる。悪党をぶっ飛ばして、困ってる人を助けて、誰の命も取らないで、お客さんにお菓子とコーヒー……」

一瞬、何を言われているのか、わからなかった。

俺が店の跡を継ぐなんて、そんな大それた話、思いつきさえしなかった。

だってそうだろう。俺はただの常連客。たきなのように、千束と特別仲良しってわけでもない。

命令一つで友達すら殺す俺が、そんな。

「どう、かな。いや、急に言われても無理だよ。とにかく、えつと

……そういうのもあるよって、お話でした」

話の最後に、また、目が合った。

白金の髪と、輪郭とが、一緒くたに揺れて、滲みだす。痛い。

胸の奥が。

一番柔らかなところが。

そうか。

俺は。

ずっと逃げたかったのか。

「ありがとう」

絞り出した涙声を、千束は笑わなかった。

「おかしいよな。相手がどんな畜生でも、人間って同類を殺すと傷つくようにできてるんだ」

「うん」

「俺は正しいことをしてる気になんかなれないよ」

「そだよね」

「いつそあいつらの洗脳が効いてたら、どんなに良かったか」

「うん」

「もう誰も撃ちたくない……」

コンクリートの床に落ちて、小さな染みを作る雫。しゃくりあげる呼吸音。背中をさする千束の手。それをどこか他人事のように眺めている自分がいた。

俺はずいぶん、弱くなったな。なんて。

強かったことなんか、一度もありはしないのに。

「俺からも、いいかな。濁すほうが、不誠実だと思うから」

誰にも言わないでよ。そう念を押すと、千束は真摯に頷いた。

「小さい頃、両親が死んだのをきっかけにDAに攫われてさ。船に詰め込まれて、どこか遠いところに送られた。周りには同じような子供がたくさんいたよ。男の子も女の子もね」

あれは空調さえない密室だった。薄暗い船倉に俺たちはいた。寝転がるスペースどころか、水や食料もなく、何人かは部屋の隅で動か

なくなつたきり、二度と目を覚まさなかつた。

「俺たちは連れて行かれた先で、体中をいじくりまわされた。その過程で……俺の脳は、ある女の子の体に組み込まれた」

この体の持ち主、カミシロ・ヒマリは、とても小さな女の子だった。見るからに病弱で、過酷な実験に耐えられるようには見えなくて、それで俺は、いつもあの子の代わりを。

「……前は男だったらしいんだ。だから、まあ、レスビアン同性愛者つてのは方便っちゃあ方便だよな」

最後に生き残つた俺と、ヒマリ。俺の体はぐちやぐちやの肉塊に変わり果てて、あの子の心も非道な仕打ちに殺された。

「俺の体の所有権は、この体を作つたか、どこかに作らせたかしたアメリカにある。だから卒業後は、多分、実験検体かな」

俺たちをこんな体にした連中に、おおよその当たりはついていても、あまでふざけた実験は、いくら人権のない人間を使ったとしても、多少なりの倫理観を備えた先進国ではありえない。一方で、新興国ではそもそも、次世代歩兵を作る技術がない。高強度戦闘適応調整は、今のところアメリカとその同盟国の専売特許だ。

つまり、アメリカを始めとする先進国が多数の法人を置く経済特区ユジノ・サハリンスクなら可能だ。

あそこは特に法規制が緩い。ブタの体内でヒトの移植用臓器を育てる世界唯一の生体製品工場を共同統治機構の認可を受けて操業しているのは、確かアメリカのエメス・バイオ・リサーチ——余談だが、社名の由来はユダヤ教の伝承に登場する不死の召使であるゴーレムの額に書かれた、真理を意味するヘブライ語「אֱלֹהִים??」にあるらしい——だったか。

ASEAN2.0が定めた法の下で、それだ。

法律。倫理。常識。あらゆる制約の一切を無視できるだけの土壤が、あの犯罪都市にはある。ブタでやったことを、今度はヒトで試したくなつた奴がいても何らおかしくはない。

企業はもとより、サハリンという名のパイを分け合う国家ですら。

「……楠木さんは、何も言わないの?」

「司令にはどうすることもできないよ。リコリスの処刑と同じく、上
が……審議部が決めることだから」

D A 東京支部に併設された本部。そこは、楠木司令ですらエントラ
ンスより奥には立ち入れない象牙の塔だ。唯一の例外はリリベルを
統括する虎杖だが、あの男だつて、分厚いコンクリート製のバンカー
に引き籠もったきり出てこない審議部の連中からしたら木っ端に等
しい。

D A、ダイレクト・アタックはその名が示す通り、実力行使による
国益の追求を目的とした一部門に過ぎない。

仮称、八咫鳥。俺の敵は、そういう組織だ。

個人が相手取るには、あまりに強大すぎる敵。俺なんて、身じろぎ
一つですり潰されてしまうだろう。

勝ち目なんて端からない。ないからこそ、俺は。

「そういうわけで、ごめん。俺はここにはいられない」

誰も、この戦いには巻き込まないことに決めていた。

「それでも、気持ちは嬉しい。すつごく、すつごく嬉しいよ。ありがと
うね、千束」

だから、この感謝は本物だ。

千束と腹を割って話せるのは、これが最後かもしれないから。せめ
て、悔いのないように。

「世の中、上手く行かないな」

なんて冗談めかして笑うと、千束も一緒に吹き出した。

「ほんとそーだよね」

「それでも、生きていくしかないのかな」

「毎日、ちゃんと生きたいよ。私は」

「ちゃんと生きるが贅沢品つても、運がないね。俺たち」

「でも、こうしてこの歳まで生きてサイトウに会えたのは、恵まれてる
なあつて思うよ?」

俺もそう思う。なんて小っ恥ずかしいことはとても口にできな
かったが、それでも、肯定の意を込めて微笑んでおくことは忘れな
かった。

「それはたきなに言つてやりなよ。相棒なんだろ」

「うふふ、そうでした」

千束はたきなが絡むと、本当にいい笑い方をする。事の始まりはひどいものだったが、今となつては、あいつのいないリコリコは考えられないくらいだ。

隣を歩く親友がいるなら心配することは何もない。俺は心おきなくここを巣立てる。

「ね。どんな味するの？」

いつの間にか立ち消えて、床に放られていた煙草を、千束はまじまじと見つめていた。まだずいぶん長かったが、構わずつまみ上げて携帯灰皿に放り込んだ。

「見るだけつて言つたろ」

「うえー、いいじゃんかよお、一回くらいワルい子になつたつてえ」

「成人してからの楽しみにすればいい」

今度は目をまん丸くして俺を見上げてくる。つたく、真面目な話が終わった途端に面白い顔しやがつて。

「いいね。それ」

灰皿をポケットに突っ込んで、顔を上げる。

千束は、まるで花開くように微笑んだ。

今まで一度だつて見たことのない表情だつた。

「すごくいい」

くすくす、と笑みの余韻を残しながら、千束は頭を俺の肩に預けた。

抱えていた片膝を投げ出して、ただ、受け入れる。

千束は俺が死んだら悲しむだろうか。

フキさんは、サクラは、エリカは、ヒバナは。

ミカさんは、クルミは、たきなは——ミズキさんは。

兄さんは、楠木司令は、タスク・フォース特設任務部隊は。

みんなが悲しむのは、嫌だ。

黙つて生きるべきか。

声を上げて死ぬべきか。

僕の人生を取るか。

消費され続ける、リコリス、リリベルの人生を取るか。
それが問題だ。

§

吉松シンジが最初に感じたのは、肌を焼かんばかりの猛烈な熱気だった。

「——い？」

何かが激しく燃えているのだろうか。轟音が幾重にも空間に反響している。意識が覚醒するにつれ、物々しい靴音も複数、聞こえてきた。

「——おい。生きてっかー？」

無遠慮に脇腹をつつく革靴に、いつの間にか腹に作っていた痣を押されて、思わず呻く。

「よおし、生きてんな。とつととずらかんぞ」

聞き覚えのある声だった。ずいぶん昔に支援した男だ。錦木千束の当て馬に仕立てるため、吉松自ら機関のタブーを破り、二度目の支援を行った男でもある。

目を開ければ、そこにいた。

「……私の、秘書は」

真島は背後を顎でしゃくった。熱いアスファルトに手をついてなんとか身体を起こすと、気絶した彼女は作業着を着た大柄な男に抱えられていた。意識を失う前に見た、彼女の額に滲む血は既に拭い取られ、真新しいガーゼが当てられている。

「かすり傷だ」

「……そうか。良かった」

「安心するにはまだ早い。派手にやったからな、軍隊が制圧に来てもおかしくねえ」

「戦うのか？」

「お前ら二人のためにか？ まさか。来い」

煤と戦塵に汚れ、袖の片方が肩口から半ば千切れかけていた背広を

脱ぎ捨てて立ち上がると、ようやく状況が飲み込めてくる。

吉松の背後、トンネルの出口で燃えているのは、警視庁の警護車だ。おそらく車列の最前を走っていたところを、対戦車ロケットか何かで吹き飛ばされたのだろう。通常の事故ではありえないほど歪んだシャーシが、内壁に叩きつけられた格好で静止している。乗員の末路は考えるまでもない。

正面に向き直って、気づく。

警官の死体だらけだ。五体満足で立っているものは、真島の仲間以外に誰もいなかった。

前に行く真島に問いかける。

「私にここまで投資することに、何か意義はあるのかい？」

「知るかよ。そいつは俺じゃなく、山ほど金を積んだクライアント様に……ああ、ちょうど来たぜ」

真島は半ば嘲るように笑うと、舞台俳優の如く芝居がかった仕草で、対向車線から近づいてきた黒いセダンを示した。

行け、ということなのだろう。

近づく、運転席のドアが静かに開いた。

出てきたのは長身の、いたって平凡な顔をした若者だった。どこにいても不自然ではない、印象の極めて薄い立ち姿だったが――

「お久しぶりです。吉松さん」

「……大きくなったね」

——吉松は一目で、彼が何者かを理解した。

「タチバナ君」

終活を始めた。

DAに反逆する上で、無実の誰かが俺への協力を疑われるようではいけない。だから俺は、あらゆる場所と時間において、自分だけが捜査線上に浮上するよう、追っ手に掴ませる証拠の選別を始めた。

例えばこの間、バー・フォービドウンに潜った時、千束とたきなに貸した通信機器の徹底的な洗浄と使用ログの改竄とか。

あれは特命情報調査室から貸し出しているものだ。諜報活動に使用する機材に部外者が使った形跡があつては、俺との共謀を疑われかねない。

肉眼では分からないレベルのわずかな皮脂や垢の類でさえ、現代においては大きな物証になる。だからこうして、豆粒のようなイヤホンを分解してはパーツクリーナーでせっせと拭いているってわけだ。

そんな作業の最中、階段を下りてくる足音が聞こえた。

イヤホンの部品を置くステンレスのトレイに紙ウエスを被せて、作業台の照明を落とした。ピンセットや単眼式のヘッドルーペも所定の位置に戻し、代わりに、床にどけていたリローディングキットを机に上げて、さも非殺傷弾のハンドロードをしているように見せかけた。

「査問会、通ったよ」

何食わぬ顔を作って背後に近づいてきた気配の主に言うと、すかさず、つしやあ！ と豪快な雄叫びが返ってきて、俺はくすりと笑ってしまった。

バー・フォービドウンでの一件は、当然ながら本部から追及を食らった。なぜあそこにいたのか、何をしていたのか、標的である吉松シンジとの内通がなかったか。DAの監査部は窓際部署であるここを嬉々として叩いた。

本当なら所属人員の職務停止と、監査部による家宅捜索、それから最悪、千束とたきなについては一時的な留置さえあり得たが……そこは俺の特捜権限を前面に押し出すことで黙らせた。喫茶リコリコの

捜査は既に特命情報調査室が行っているから、外様が口を挟むな、という理屈だ。

日頃から店に入り浸っている俺は、内情を知らない連中からすれば、鼻つまみ者の落ちこぼれ支部を監視する司令の番犬に見えるらしいからな。この偏見を利用しない手はなかった。

取り潰しを免れた代償として、経緯報告書やら始末書やら、煩雑かつ膨大な書類仕事をミズキさんが店に泊まり込んでまで片付ける羽目になったのは、悲しい不可抗力だったけど。

「三日間お疲れ様でした。朝ご飯にしようか、それとも、今日はすぐ帰る？」

「あー、ウチ食べ物ないわ……」

「オツケー、任せて」

「あんたは夜通し何してたの？」

「大掃除。暇なうちに地下だけでもやっところと思って」

「……最近、喫茶リコリコは活動ペースを落としている。」

千束が深夜、映画を見ながら薄着で寝落ちしたとかで、流行りのインフルエンザにやられたせいだ。たきなも看病のためにあいつの家に押しかけていったから、主戦力がごっそり抜け落ちてしまった。つたく、急に冷えだしたから体に気をつけろって、今まで散々言ったのに。

とにかく。動ける奴が俺だけってことで、定休日は臨時に月水金の三日。おかげで時間が余ってしょうがない。だからカバーストリーとして、まあ妥当な部類じゃないだろうか。

「……大丈夫？」

だが、なぜだかミズキさんの反応は芳しくなかった。

「えっと、何が？」

思い当たる節がなくて聞き返すと、ミズキさんは明らかに、しまった、という顔をした。とっさに取り繕おうとしたのか口を開きかけるも、俺と目が合って観念したようだった。

「三年前のこと」

ミズキさんらしからぬ深い悲しみに沈んだ声音に、胸が刺されたよ

うに痛んだ。同時に、この人が傷つくことをここまで耐えがたく思う自分に驚きもした。

この話題は避けるべきだろうか。

いや、しかし。

「つてことは、倉庫に何かあるんだ」

「無理に思い出すことないわ」

遠からずここを出るんだ。なんとかできるのは今しかない。

千束の、一分一秒を惜しむような生き方の原動力を知ってしまったからには、どうせ死ぬなら何でもいいなんて、もう思えない。それどころか最近では、この壮大な自殺が本当に自分のやりたいことなのか、なんて、考えてしまうことさえある。

揺らいでいるんだ。このまま生半可な気持ちで準備を進めたところで、作戦も、俺自身も、きつといい方向には進まないだろう。

決着をつけないと。

「いつまでも逃げてばかりじゃられない」

「今じゃなくなつていいのよ。もつと時間が経つて、あんたが大人になつてからでも」

「いいんだよ、ミズキさん。俺はもう大丈夫だから」

断じて？なんかじゃなかった。

三年。三年だ。それだけ店のみんなと一緒にいたんだ。俺は十分癒された。たくさんのものをもらった。

……大切な友達だつて、できた。

「信じて」

ひたすら愚直に、ひたすら真摯に、琥珀色の目を見つめて言った。

驚きに見開かれるさまが、綺麗だと思った。

「……すっかり、頼もしくなつちやつて」

男子三日会わざれば刮目して見よつてやつね。そう、ミズキさんはひとりごちて、俺を倉庫の最奥に案内した。今まで入ろうとも思わなかったところだ。何も覚えていないのに、無意識に避けていたらしい。

「三年前、あんたを連れてきた千束が言つてたわ。預かり物をここに

置いておくって」

棚の最下段に、それはひっそりと佇んでいた。

深緑色をした、巾着型のラッピング袋だ。貼り付けられたメッセー
ジカードには丸みを帯びたかわいらしい字で、ハッピーバースデー、
と書かれている。

かがみこんで、手に取った。

埃を払い、金色のリボンをほどく。

「——ああ」

最後に殺したあの子を思い出す。

2 1

自動車爆弾で焼き殺した四人を。

2 0

1 9

1 8

1 7

致死毒で二度と目覚めない眠りについた彼女を。

1 6

仲間を逃がそうと、俺に組み付いたまま死んだりクリスマスもいた。

1 5

1 4

誰も彼も、忘れるものか。

1 3

1 2

1 1

この痛みも。この罪も。

1 0

9

8

誰にもくれてやるものか。

7

6

4 5
俺のものだ。

1 2 3
俺だけのものだ。

#0 :
Foxtrot One

「斉藤日葵です。本日よりフォックストロット分隊配属となります。
よろしくお願い致します」

僕が分隊の皆さんの前で初めて発した言葉。それは、慇懃と取られ
ても仕方のない、極めて無感情な挨拶でした。隊長と、その隣の副隊
長は、それでも笑顔で私を迎えてくれましたが、残りの一人はやはり、
興味なさげにこちらを一瞥したきり、テーブルの上のかりんとうに視
線に戻してしまいました。

「あ、こちら。無視しないの」
「していないわよ。よろしくねサイトウさん」

副隊長がささずたしなめました。一方僕は、彼女の反応に密
かに安堵しました。

できるだけ無関心でいてくれれば、それだけ、こちらとしても気が
楽ですから。嫌ってくれればなお良いとさえ思います。

「隊長の——だ。君の経歴は聞いている。困ったことがあれば何でも
頼ってくれ」

だって、この三人のリコリスは。

「副隊長の——です。おつきいね！ 何センチあるの？」

「……最後に測った時は、一六八でした」

「うひゃー！ いいなあ！」

僕が、これから殺さなければならぬ人達ですから。

「部屋は副隊長と同じだったね？ 案内してあげてくれ」

「うん、おいで！」

副隊長は僕の手を引いて、大股で廊下を進みます。プロフィールによれば年齢は一五歳と、僕より三つも上でしたが、身長は僕の胸くらいまでしかありません。ですがそんな体格の差など、彼女の快活な振る舞いの前には霞んでしまいます。体が小さくとも、委縮する僕に絶え間なく話を振り、少しでも心を溶かそうと苦心してくださるその優しさが、とても眩しく思えました。

「ヒマリちゃんのベッドは下ね。荷物はそっちのダンス使って」

「はい」

「今日はもう何もないからさ、落ち着いたらみんなで遊ぼうよ」

制服と、鞆と、数着ばかりの肌着をロッカーとタンスのそれぞれにしまい込むのには二分とかかりませんでした。その様子を見ていた副隊長が、ミニマリストというにもいささか所持品が貧相に過ぎる僕をどう捉えたのかはわかりませんが、彼女は少なくとも、そこには触れないでおくことを選んだようでした。

僕は審議部の備品です。制服も、銃も、名前さえも、任務のために一時的に貸与されたものに過ぎません。

僕には何も無い。この身体の自由さえ。

「ねえ。顔の怪我は、大丈夫？」

荷解きを終えて手持ち無沙汰にしていた僕の頬に、副隊長の手が触れました。僕よりずっと小さい手です。とても銃を握れるようには見えません。けれど彼女はきつと、果敢に戦うのでしょうか。青い制服と、掌にできた硬いタコが、それを証明していました。

「痣になってる」

「……これは、私が悪いので」

まさか、殺人を拒み続けるあまり虎杖司令の怒りに触れ、折檻と称して、リリベルを交えた集団暴行を受けたなどと正直に言うわけにもいかず、僕はうろたえてしまいました。結果として誤解を招く、ひどく拙い言い訳が口をつけて出ました。

彼女達に会う前に傷を癒さなかったのは、虎杖司令の短慮の結果

を、一人でも多くの人に知らしめたいという、ささやかな反骨心が理由です。だって、彼らが僕につけた痣の数々が、巡り巡ってF分隊の皆さんに今回の異動への猜疑心を抱かせ、暗殺計画そのものの障害に化けたりしたら、笑えるじゃありませんか。

「他にもあるの？」

何も言えずに押し黙っていると、彼女はそれを肯定と取ったように、僕を二段ベッドの下段に座らせました。彼女の手が、今度はベージュの制服のボタンにかかります。

「見てもいい？」

悲しげな顔と、声とで聞かれては、断れるはずがありませんでした。第一、嫌でもありませんでした。

制服の前が開き、ベルトが緩み、ブラウスの第一ボタンが外されま

す。

彼女は僕のはだけた胸元をのぞき込み、絶句しました。

僕の首から下は、連日連夜に渡って絶え間なく振るわれた暴力によつて、元の肌の色を探すほうが難しい有様でした。当然です。僕は拷問には屈しませんでした。リリベル達が先に音を上げたのです。

曰く、これ以上女の子を殴るのは良心が耐えられない、などという青い理由で。

とはいえ、結局僕はその後、虎杖司令から提示された、ある交換条件に心を折られ、こうして身内殺しの任務を請け負った負け犬に過ぎないのですが。

「……ひどい」

副隊長は、まるで自分が痛めつけられたかのように表情を歪めました。先生を呼んでくる、と言い残して飛び出していこうとする彼女の袖を控えめに掴むと、意図を察してくれたのか、僕の前にひざまずくような格好で両膝をつきました。

「先生が仰るには、性能に支障はないとのことですが」

「そんなこと言っただって、これじゃ痛いでしょう？　せめて痛み止め

とか、湿布くらい出してもらっても……」

「最終調整を受けました」

正式名称を高強度戦闘適応調整。DA内部では一般的にカウンセリングと呼ばれる行為があります。心理士による面談と向精神薬の投与を主軸としたそれは、戦闘に由来するストレスを和らげ、リコーリス、リリベルを感情に由来する動作不良から保護する重要な予防措置ですが、薬も過ぎれば毒といえます。

もちろん、常識的な回数であれば悪影響はありません。ですが繰り返しカウンセリングを受けると、自我が薄れる傾向にあります。自他へのあらゆる関心が消滅し、やがて生存への欲求さえもが失われ、唯々諾々と命令に従うだけの人形と化すのです。

最終調整とは文字通り、そのリコーリス、リリベルに施される最後のカウンセリングを意味します。

すなわち、事実上の――

「私は廃棄予定です」

薄桃色の唇が、かすかにわななくのを見ました。

彼女は僕の両手を取り、さめざめと涙を流すのみでした。

僕の嘘を、無条件に信じました。

カウンセリングを受けたことは一度もありません。この身体は常軌を逸した治癒力と薬物耐性、それから強化された知覚に桁外れの怪力と、兵士に必要なあらゆる能力を何らかの施術によつて与えられた怪物でした。

「ひどいよ……」

与えられた来歴によれば、僕は以前所属していた^{シエラ・フォード分隊}Squad S4が自分を除いて全滅し、この^{フォックスストロット・ワン分隊}Squad FIに補充要員として組み込まれた、ということにされていました。

S4分隊は、初めから書類上にしか存在しません。それなりに悲惨な最期が、カバーストーリーとして用意されているだけの、虚構です。隊長と副隊長のお二人は、それに目を通したのでしよう。

腹立たしいことに、情報部が作成した薄っぺらい悲劇の脚本は、僕が彼女の心に入り込むにあたり、それなり以上の効果をもたらしたようでした。

「あの、副隊長。私は大丈夫です」

彼女からすれば、僕は非合法的な武装組織に監禁され、数週間に渡る報復を受けながらも辛うじて脱出した、分隊唯一の生き残りでした。そんな私が何を言っても、強がっているようにしか見えなかったでしょう。

彼女の涙を止める手段が、僕にはない。それは、殴られたことよりもずっと悔しく、腹立たしいことでした。

けれど一つだけ、思いついたことがありました。

「ごめんなさい。触ります」

ベッドから降り、彼女にならつて床に座り込み、その肩に手を置くと、彼女が僕を見上げました。潤んだ琥珀色の瞳を、不躰にも綺麗だと思ってしまうました。

おっかなびつくり、背中に手を回して、彼女を抱き寄せました。かつて、僕に親切にしてくれたある先輩の猿真似です。

初対面の人にすべき行為ではなかったと思います。けれど、誰かに安らぎを与える方法は、これ以外に知りませんでした。

けれど、彼女はますます泣いてしまいました。

僕に触れられるのは嫌だったのでしょうか。それとも、力加減を間違えてしまったのでしょうか。自分から他人に触れるなんて、初めてで勝手がわかりません。

困惑していると、やがて腕の中の副隊長が、僕の肩に額を預けました。熱い雫が鎖骨を伝って、胸元に光る筋を作ります。風に吹かれただけで焼けるような痛みに苛まれる肌が、彼女の涙に触れたところだけは、くすぐつたいような、心地よいような、不思議な清涼感に癒やされました。

優しい人は、涙まで優しいものなのでしょうか。

わからない。僕には何も、わからない。

「大丈夫、ですか？」

知りたい。

どうして？

わからない。

殺すのに？

「不快な思いをさせてしまったでしようか」

気持ちがあつちへこつちへ、散らばって仕方がない。

まるで自分が、自分じゃないみたい。

「すみません。私、察しが悪くて。至らないところがあれば、教えて頂けると助かります」

なんだこれ。

なんだ、これ。

「ううん、いいの。いいのよ……」

心がざわつくと同時に、これは卑怯だ、と思いました。彼女は偽りの経歴に同情し、哀れんでいる。そこに本当の僕はいません。

嘘について、彼女の気を引いている。過程はどうあれ、今、僕がやっているのは、そういうことではありませんか。

「あたしこそ、ごめんなさい」

「とんでもありません。お気遣い、ありがとうございます。私もあなたのお役に立てていると良いのですが」

ああ、けれど、卑しくも。

何年ぶりかもわからない人の優しさに触れた僕は、それでもいいと、思ってしまった。

この人は僕を殴りません。蔑みません。笑い者にもしなければ、いないものとして扱うことも、きつとないでしょう。

僕の心は、少なからず彼女に惹かれていました。

その感情の先に、一切の希望がないことを知っていても。

僕がF1分隊に編入されて一月ほど経った頃です。訓練もそこそこ、我々は所定のローテーションに従い、前線へ復帰する運びとなりました。

「あの、先輩」

副隊長という呼称は、街中で使うにはふさわしくないと考えてのことでした。戦歴という意味では、九歳で実戦に投入された僕が一番の古株でしょうが、誰にも打ち明けたことはありませんし、構わないでしょう。

「これは必要な行為なのでしょうか」

「うん！」

副隊長は自信たっぷりに即答しました。

彼女のそれより、一回りは大きな僕の左手をしつかりと握ったまま。

三歳違いの僕と副隊長とは当然なのでしょうが、清々しいまでの子供扱いでした。

「こうなると頑固だ。諦めたほうがいい」

そう言つて、前方を歩く隊長が困つたように笑います。隊長の隣では、あの子——初対面でそっぽを向かれてしまった彼女です——が、横目で僕の表情を盗み見て、何やら物憂げな様子で小さく鼻を鳴らしました。

僕は彼女がよくわかりません。会話がなかったので。ただ、隊長によれば、僕の前任者と最も親しかったのは彼女だったそうです。

戦死者の穴埋めとして放り込まれた僕に、何か思うところがあつたとしてもおかしくはないでしょう。

寂しく思う資格などないのだと、僕は自分に言い聞かせます。

親しくすれば、それだけ殺しくくなりますから。

「ねー」

気が付くと、小柄な副隊長が僕の顔を覗き上げていました。考えにふけっている間に、彼女は僕に何か話していたのだ、ということに思

い至り、謝罪の言葉が口をついて出そうになりました。

言えなかつたのは、彼女が僕に微笑んだからです。

「いいんだよ、ヒマリちゃんのペースで」

自分の瞼が動いて、ひとりでに目が見開かれるのを、僕はどこか俯瞰した視点から、他人事のように認知していました。

見透かされている。どうして。そして、どこまで。

心臓が早鐘を打つのは、なぜ。

「友達を亡くしたのは私達もそう。だからって、安易にあなたの気持ち分かるって言っちゃうのは、違うと思うけど」

どちらともなしに歩みを止めた。左右に割れる人混みは、僕らに微塵も関心を向けず、前へ後ろへ通り過ぎていく。

「吹っ切れないよね。忘れられないよ。でも、それでいいと思うんだ。大事なのは、囚われないこと」

まるで自分自身に言い聞かせるかのような口調だった。僕は彼女の琥珀色の瞳から目が離せないでいた。

失う痛みを知っている目だ。それでも強い意志に光っている。

ああ。

あなたは どうして、こんな地獄で、そんな顔ができるのですか。

「私はあなたと一緒に前に進みたい。だから、もし、嫌じゃなかったら」

——私達との時間を試してみない？

僕は彼女の手を、そっと握り返した。

握り返して、しまった。

§

小さな、そして古びた映画館でした。都会というには山深く、田舎というには畑ばかりでもない町並みの中に、まるで人目を避けるようにひっそりと佇んでいました。

廃業して長いのでしょうか。手書きの看板に記された何々座、といった風な屋号は色褪せ、かき消えています。入口にずらりと並んだポス

ターも、紙として形を残しているのが不思議なほどに劣化していました。

そこに小綺麗な昭和レトロ口を感じる余地はありません。誰からも忘れられ、誰からも顧みられず、誰からも救われなまま朽ちてゆく、そんな印象を覚えて、無性に切なくなりました。

リコリスほくらのようだな、と思ったのです。

「……痛っ」

軋む回転扉を押して中へ入ると、片耳にかけたインカムが、金切り声にも似た異音を発しました。

「ここは機圧が高いからね。外部との通信は出来ないよ」

先頭に行く隊長は、それが当然のことであるかのように言いましたが、こんな僻地で電磁放射障害H^ER^Oが起きるほどのノイズが自然発生するとは思えません。

これは人為的なジャミングです。それも、恒常的な。

僕は今一度、彼我の立ち位置を確かめました。

皆は、ちようど僕を包囲するような格好で廊下を歩いています。そして、この先はスクリーンでしょう。遮蔽物などあるはずがありません。

隊長のそばにいたあの子が、僕の背後に回り、従業員用の通用口に入っていったところで、ようやく気づきました。

非常灯が点いている。

この映画館は、まだ通電している。

そして。

彼女達は、ここの構造を熟知している。

「……何を」

「まあ、まあ。すぐわかるよ」

副隊長は、相変わらず僕の手を引いています。

暖かいと思えた、その手で。

ぐらりと、視界が歪んだような気さえしました。

これが僕を殺すための罠であるなど、信じたくありませんでした。けれど、こうも思いました。

死ねば楽になれる、と。

真つ暗な扉の向こうに僕が足を踏み入れると、示し合わせたようなタイミングで明かりが点きました。

眩しさを覚える暇もありませんでした。

一〇〇席もない、小さな劇場でした。上質なカーペット敷きの階段は、一段下りるたびに足にふかふかとした反発を与えてきます。眼前のスクリーンは染み一つなく、天井から降り注ぐ暖色の光を受けて誇らしげに輝いているようにさえ見えました。

きつとこの映画館が、新たに観客を受け入れることは、もう無いのでしよう。床板はかすかに軋んでいますし、一部の座席は撤去され、ボルトの穴が痕跡として残っているばかり。とうの昔に捨てられた場所なのだと分かります。

だというのに、なぜ、こんなにも美しいのか。

「綺麗だよね」

副隊長のつぶやきを聞いて、僕は左手の感触に思い至り、そして気が付きました。

この劇場が醸す空気は、彼女の体温に似ている。

悲しいほど優しく、痛いほど切ない。

「はぐ。とつせ」

最期に感じられるものがこれなら、良い。

自分の頭はいつ撃ち抜かれるのだろう。焦るでも、心待ちにするでもなく、僕はその瞬間を待ちました。

やがて、どこからかブザーが鳴りました。

銃声では、ありませんでした。

「始まるよ」

声のした方を見ると、彼女はいつの間にか僕の手を離れて、中央のシートに腰かけていました。隣の席の背もたれを示して手招きをしています。僕は言われるがままにそこへ座りました。

照明が落ち、薄い光の筋が頭上を通ります。驚くことに、音響設備も生きていました。音質も、音圧も、現代のそれとは比べるべくもないのでしようが、今まで一度も映画を見たことのなかった僕は、その

迫力に圧倒されました。

僕は暗殺のことも、隣の副隊長のことも、あらゆる呪わしい現実をすっかり忘れて、食い入るようにスクリーンの映像に見入りました。

雨を背景に、黄色いレインコートを着た三人の男女が軽やかに踊り、歌います。

Sing in the Rain。

この映画のタイトルでもある、その歌を。

「……」

——この劇場よりも古い映画だ。台詞回しは時代がかっていて、登場人物の出で立ちだつてどこか懐かしく、物語の主軸に寄り添うサブプロットも王道のラブストーリーで、文句なしの大傑作だけど今となつては特に斬新でもない。

だけど俺にとっては初めて見た映画だった。何もかもが衝撃的だった。

知らない国で、知らない男女が、知らない歌を歌い、知らないダンスをする。俺はそこに、豊かな世界を見た。子供が殺しを強要されることも、精神負荷を無視した高強度戦闘適応調整に人格を磨り潰されることもない。行きたいところに行けて、やりたいことができる世界だ。

思い出した。ミズキさんの前で見せた涙が初めてだと思っていたけど、俺は、この時も——

「……えっ？」

エンディングの後、スタッフロールの文字がぼやけて読めなかったことで、自分の頬を伝う涙に気が付きました。

その情動に最も近い言葉を探すなら、悔しい、でしょうか。

僕は今、幸せなのだと思います。素敵な人が隣にいて、僕の知らない世界を見せてくれた。それは、僕が求めていた救いそのものでした。モノクロの視界が一気に色づいたかのような、鮮烈な喜びが僕の胸中を満たしてやみません。

けれどそれは、破綻が確定した幸福です。

僕はこの手で、皆を、すべてを、壊さなければならぬのです。

「ヒマリちゃん」

僕に与えられた任務は、国外逃亡を企図している疑いのあるF1分隊全員の捜査と抹殺でした。

「ひ、う」

僕を拷問にかけて七日目の昼、虎杖司令は、冷たい床に倒れ伏す僕の髪を掴んでこう言いました。

貴様が使い物にならないなら、次を造るまでだ。

「泣いてるの？」

そうです。あの男は、僕が仕事をしなければ、僕と同じような境遇の、何十人、何百人という子供の腹を裂き、頭蓋を割り、臓物を弄んで、不死身の怪物を作り出すと言ったのです。

地獄などという表現すら生易しい、魂を削られるような苦しみを、別の誰かに味わわせるなど、僕にはできませんでした。

「う、あ……」

三人と、大勢とを天秤にかけて、後者を取ったのです。分隊の皆を、僕は他ならぬ自分の意志で、殺すのです。

「大丈夫？」

何も知らない副隊長が、僕の背中に触れました。

「綺麗、でした。とても、とても」

止まらない嗚咽の合間に、かろうじて絞り出しました。

知らなければ、自由を欲することもなかったのでしょうか。

知らなければ、罪に押し潰されることもなかったのでしょうか。

知らなければ、この人に好かれないと思うことも、なかったのでしょうか。

胸の奥が軋んで、痛んで、壊れそうでも、その衝動だけは止められませんでした。

ある意味、自死の手段といえましょう。近い将来、皆を殺すことで、僕自身の心をも殺すのです。

終わりが決まっていれば、その先を考える必要はない、と思い込めば、気持ちがかすかに上向いたような錯覚がしました。

「……おいで」

彼女は僕の頭を抱き寄せ、こう問いました。

「ヒマリちゃんは、リコリスを辞めたいつて思ったこと、ある？」

頬に彼女の柔らかい前髪が触れました。

慰められているのは僕のほうなのに、彼女の恰好は奇しくも、親に
縫りつく小さな子供に似ていて。

「あたしはあるよ」

穏やかな絶望と共感が緋い交ぜになった、暖かくも儂い声音が囁き
ます。

「街を歩くといつもそう。あたしと同年の普通の女の子は、あたし
たちが人を撃ち殺したり殺されたりしている間、友達とふわふわのパ
ンケーキを食べてる。家に帰ればお父さんとお母さんがいて、鞆には
銃じゃなくて、重たい教科書の束が詰まって……」

彼女は言葉を区切り、くすりと微笑んで、影の滲みつつあった表情
をかき消します。僕は涙を袖口で拭いながら、頷いて話の続きを促し
ました。

「そこまでは欲張りすぎだけどさ。殺しも、殺されもしない人生が、
時々欲しくなるんだ。だから映画が好き。スクリーンの中なら、あた
しはどこへでも行けるから」

どこへでも、逃げられるから。

もしこの人と行けたら、たとえ追っ手がかかり、最後には殺される
のだとしても、その道程は幸せに満ちる。そんな確信がありました。

僕の肩に、数百という人の命が乗っていないければ、迷いなくそうし
たに違いありません。

すべての情動を飲み込んで、僕はただ、黙るばかりでした。

いつの間にか、スタッフロールは終わっていました。天井の照明が
一列ずつ灯つていく様子に、名残惜しさを覚えました。

「気に入ってもらえたかな」

後ろからの声に振り返ってみれば、隊長がすっかり明るくなった劇
場に立っていました。僕を殺すには絶好の状況にも関わらず不意を
討たないということは、つまり。

「はい。あの……ありがとうございます」

僕は席を立ち、深く、深く頭を下げました。

「なに、私は手伝っただけさ。発案はこの子だよ」

隊長はそう言っ、背後に隠れていた彼女の肩をねぎらうように叩きました。

俯いていた彼女と、一瞬だけ視線が合いました。泣き腫らした目を見られても、不思議と恥ずかしいとは思いませんでした。

「あんた、ずっと暗いから、気晴らしになるかと思って。それだけよ」言葉尻に含んだささやかなとげとげしさが、素直になれないがためのものであることは明らかでした。鈍い僕でも察せるほどですから、隊長と副隊長の反応は言わずもがなです。

……かわいらしい人。

「ふ」

口の端がひとりでに持ち上がったかと思えば、みぞおちの奥が震え、不思議な響きの吐息が鼻から抜けていきました。

「あ、あんた……」

「あつー！」

「おや」

ややあつて、それが笑みであったことに気が付きました。僕は笑うという行為を、今の今まですっかり忘れていたのです。

「なんだ。そんな顔もできるんじゃない——」

「か、可愛いっ！」

「ちよつと！ 今マジメな空気だったでしょうが！」

九歳の頃。人生で唯一、僕を人として扱ってくれた百合先輩の前でさえ、僕はついに笑えなかった。痛いものにも、苦しいものにも、ほとほと疲れ切ってしまったから。

「……また、見たいです」

この世界に神がいるというなら、そいつはきつと外道に違いありません。

もつとも、分かりやすい悪意の主が存在するような単純な世界ではないことをよくよく思い知っているからこそ、余計にやり切れないの

ですが。

「別にいくらでも見られるわよ、あんたここに通うんだから」

「通う?」

「前線基地なの」

「ここが?」 通ってきたところにそれらしい形跡は無かったはずですが。僕は思わず首を傾げました。

「ついておいで」

隊長は僕を劇場の外に連れ出し、つい先ほど廊下で見かけた通用口の先へ案内しました。古木の急な階段を上った先のドアには、ひよつとすると職人の手書きでしょうか。かすれた文字でこう書かれています。

映写室。

「開けてごらん」

一体何度、人の手に触れられたのか、すっかりメッキが剥げて鈍色の地金を覗かせているノブをひねり、重い金属扉を押し開けました。

薄明るい、小ぢんまりした部屋の大半を、何やら黒光りした巨大な機材が占拠している異様な空間でした。最初は機関銃でも設置してあるのかと思いましたが、違いました。僕の両腕を広げてもまだ足りないほどの直径を有する平たい円盤は弾倉ではありません。それに、小窓から見える劇場へ向けられた筒にはレンズが備わっているようです。

なるほど、この機械がスクリーンに映像を投影するのでしょうか。どう動くのか想像もつきませんが。

そして、まるで古い機材群に遠慮するような格好で、部屋の隅のちやぶ台に、一台のデスクトップPCと数台のタブレット端末が雑多に積みあがっていました。

「F1分隊によるこそ、サイトウ君」

前線基地というには、いささか貧相に過ぎるような気がします。

「気持ちにはわかるよ。武器も寝床もない。だろう?」

「ええ、驚きました。偵察群というと、現地で情報を集める印象が強いのですが」

「相手がスタンドアロンならね。そうでない連中にはここを使うんだ」

「ですがここはジャマーが……あつ、有線」

「その通り、ジャミングは見せ札だ。ここから分散配置した踏み台に有線して、そこからさらに攻撃用端末に飛ぶ。リスクヘッジだよ」

隊長はそう言いながら、勝手知ったる様子で映写室に入り、PCのポートからUSBメモリを引き抜きました。

「上映中に仕事は終わらせておいた。後はデータを持ち帰るだけだが……戻るのは、お茶をしてからでも遅くはないだろう」

サイトウ君、コーヒー飲めるかい？

§

その日の夜でした。

「……サイトウ君は、もう寝たかな」

僕は二段ベッドの下段で息を潜めていました。ドアの隙間から漏れる常夜灯の光が、床を伝って、手を伸ばせば届きそうなところまで伸びているのが見えました。

「うん。最近はちゃんと眠れてるみたい……本当に、よかった」

寝間着を履いた副隊長の細い両足が上段からぶら下がり、音もなく着地します。

「ねえ、聞くまでもないと思うけど」

硬く、真剣な声で彼女は問い質しました。

「ヒマリちゃんも、連れていくよね」

三ヶ月後。

僕は劇場の前線基地から、ユジノ・サハリンスクへの不正な通信履歴と、F1分隊が独自に調達したであろう、用途不明な出入金記録を窃取しました。

虎杖司令とDA審議部は、分隊の三人を優先排除対象に認定。

改めて、僕に確実な殺害を命じました。

亜麻色の髪に櫛を通す。細くて柔らかい、長毛の猫のような手触りは、僕のそれとは正反対だ。力の有り余っている僕では加減を誤って傷つけてしまいそうで、最初は何をすることも緊張したっけ。

もちろん、今していないと言ったら嘘になるけれど、ずいぶんこなれたのは確かだ。

耳上の横髪を一房とって、右と左でそれぞれ三つ編みを編む。その二つを結び、毛先を結び目の下にくぐらせる。いわゆる、くるりんぱってやつ。

あとは三つ編みを軽くほぐして、ボリュームを出してあげれば、

「……よし」

三つ編みで作るハーフアップの完成だ。部屋の時計を見れば五分も経っていない。副隊長に乞われて髪を結ううちに、こればかり上手くなってしまった。

僕も髪を伸ばしたら、この人に触れてもらえるのだろうか。女の子らしい格好は苦手だけど、もしそうだとしたら、悪くない。

そういう未来も、あったんだろうか。

「どうですか」

「うーん、いいね！ 今日もかわいい！ ありがとう！」

彼女は卓上の小さな手鏡で自分の頭をしげしげと眺め、振り返ってはにっこりと笑った。

「じゃ、交代」

「はい」

椅子に掛けると、彼女は机上のメイクポーチからてきぱきと道具を出し、慣れた様子で僕の顔にファンデーションを乗せ始めた。

今までメイクのメの字も知らなかった僕だけど、最近になって化粧下地までは自分でやれるようになった。そこから先は、副隊長がどうしてもやりたいというから素直にお任せしている。

おかげでこの、顔の上に薄皮が張ったような独特の感覚にもすっかり慣れてしまった。カーラーでまつ毛を引っ張られようが、上瞼の縁

ぎりぎりにアイライナーを引かれようが、今となつてはなんとも思わない。

ああでも、リップグロスで唇がべたつくのは、あまり好きじゃないかもしれない。任務中、うっかり舐めてしまったことも一度や二度ではないし。

「……うん、いいよ、すごくいい」

それでも僕がこうして化粧を受け入れているのは、この人が喜ぶからだ。

「かわいいね」

彼女は立ち上がった僕をおずおずと抱擁した。体格が違いすぎるせいで、僕の胸に顔を埋めるような格好だ。

「……いい？」

初めてそれを聞いた時の緊張と羞恥は、彼女にはない。その一線までは、僕が拒まないと知っているからだ。

彼女の細い腰と背中腕を回した。

温かい。それだけで多幸福感に溶けてしまいそうだった。

腕の中で彼女が僕を見上げる。髪が揺れて、いい匂いがした。それがいつもの合図だった。上背を合わせるように、頭を下げる。

彼女は僕の首筋に口づけをした。柔らかい唇に肌を食まれる感触がこそばゆい。じわりと、お腹の芯に痺れるような熱が湧いた。

やっぱり、これは駄目だ。帰ってこられなくなる。

僕はこの人を、本当に、

「ごめんね」

彼女は、心の底から罪悪感を覚えているかのような、か細い声で呟いた。

理由はわからなかった。けれど僕の答えは決まっていた。

「先輩にされて嫌なことなんかありませんよ」

それこそ殺されても構わない。いや、分隊の仲間なら、誰が放つ銃弾であっても受け入れられた。言葉にはしないが。

それより、言外に首より上へのキスを求めたことに、彼女は気づいたのだろうか。

気づいてくれなくていい。むしろ気づかないでほしい。自分から求めておいて、変な話だけど。

僕にこれ以上、あなたを愛させないで。

「……もう行きましようか？」

「……そうだね」

抱擁を解いて、自分から彼女の手指を絡めた。僕の方から手を繋ぐようになって、どれだけ経ったか。

三〇分後には出発だ。僕らF1分隊の、いつも通りの任務が始まる。

そこで僕は、みんなを殺す。

§

現場に向かうステーションワゴンのカーラジオが、無感情なAI音声で避難勧告を読み上げている。

東京は豪雨だった。

「歩道に人が全然いないよ。ターゲットも今頃避難所かねえ」

ステアリングを握る青服セカンドの彼女は、ほとんど独り言みたいに呟いた。

「先輩」

「ん？」

ウィンドウ越しに灰色の空を眺める僕の横顔に、彼女の視線が一瞬だけ向いた。

「逃げるって本当ですか」

目の前の信号が黄色に変わったのを認めた彼女は、アクセルを踏み足して強引に通過する。エンジンが苦しげに唸った。

「盗聴器は外しました。僕しか聞いていませんよ」

「……たはは」

先輩は真面目な顔を不意に崩して、困ったように眉を下げた。

「わかつちやったか。隊長から聞いたの？」

「……はい」

「んもう。あの人、口が軽いんだから。誕生日プレゼントその二だったのに」

「プレゼント、ですか」

「そ。今日はヒマリちゃんの誕生日でしょ？ 本当はサプライズにしたかったの」

彼女がいうそれは、F1分隊潜入のために用意された偽りのプロフィールに記されている登録日のことだ。僕から教えたことはないのに、知っていてくれたなんて。

心臓が場違いにも小さく跳ねた。

「偽造書類を作ってもらったんだ。全員分ね」

「それで、一体どこへ？」

「ユジノ・サハリンスク経由でアメリカに。移民が多いから紛れやすいかなって」

彼女は新天地でのプランを嬉々として俺に聞かせた。

住まいはここ。仕事はこんな。自由の女神に上りたい。ブロードウェイでミュージカルを見たい。メジャーリーグを生で見よう……無邪気でかわいらしい、ずさんな計画だ。

叶うはずがなかった。

「ねえ、ヒマリちゃん」

車は左折して大通りを外れた。ひび割れたアスファルトの轍に溜まった水をタイヤが踏んで、白い飛沫が立つのが助手席から見えた。目的地は近い。

「一緒に来ない？」

現場の前に車を止めた彼女は僕に微笑んだ。

必死に抑え込んでいた感情の籠が、ひととき大きく軋むのがわかった。

手に掛けるその瞬間まで、何も見ず、何も考えず、道具らしくありたかったのに、この人はいつも僕の心を乱す。憎しみにも似たどす黒い愛情が胸の奥から湧いてくる。

……大好きだ。

「やり直そうよ、全部」

僕は彼女の瞳が、かすかに濡れたような光を放っていることに気がついた。

「あたしたちは、幸せになっていいはずでしょ……?」

気持ち悪い。ああ、気持ち悪い。

「……そう、ですね」

これから殺す相手に笑える自分が。

「僕も——」

こんな嘘を平然とつけてしまう自分が。

「——僕も、ついでに行かせてください」

全部全部気持ち悪い。

「ヒマリい……」

何も知らない彼女の顔が歓喜にくしやりと歪んだのと、玉のような涙が光りながら落ちていったのは、ほとんど同時だった。

滝のような雨がステーションワゴンのルーフを殴り続けている。僕はそのくぐもった打撃音に包まれながら、そんな資格もなくせに、センターコンソール越しに抱きついてきた彼女の華奢な背中をさすり続けた。

彼女も、彼女の仲間も、無事に逃してやれるような力は、僕にはない。自分が憎い。

背中に回された腕の感触を、半身に伝わる体温を、彼女という存在の尊さを、愛おしいと思う感性さえ憎い。

離したくない。

殺したくない。

ずっとこうしていたい。

「僕、僕……ずっと先輩と一緒にがいいです」

彼女の矮躯をかき抱く。心はどこまでも満たされながらじくじくと血を流す。

これから失う幸福が、僕に消えない傷を刻む。

「うん……約束」

顔を上げた先輩は滂沱の涙をそのままに、僕より一回り小さな小指

を差し出した。

彼女は僕を信じている。

事実がすとんと腑に落ちる。

息が詰まって声が出ない。

肺が罪に押し潰されたかのようにだった。

僕はどうしても、指を絡めることができなかった。

彼女の手を、自分の手で包み込むことしか。そうやってうやむやにする事しか、できなかった。

「もう、なんであなたが泣くの……」

彼女はコンソールボックスを乗り越えて、僕の膝の上に座り直した。今まで見下ろすばかりだった彼女を、僕は今、初めて見上げている。

困ったように笑う彼女は、僕の頭を抱いて自分の肩に埋めさせた。知らない。

こんな安心、僕は知らない。

知りたくなかった。

僕は聞き分けのない子供みたいに、無様に泣きついた。

押し殺した嗚咽に寄り添うように、彼女は古い歌を優しく口ずさんだ。

S i n g i n ' i n t h e R a i n 。

同名の映画の中で、恋に酔いしれる一人の男が土砂降りの中で踊り歌った、軽やかで陽気なナンバー。

彼女は可憐な声で囁くように歌いながら、赤ん坊をあやすような手つきで僕の背中を叩く。

熱い雫が額に触れた。彼女の慈しみに溢れた微笑はきつと、今も新しい涙で濡れ続けていた。

「ねえ」

彼女の両手が頬を包む。顔を持ち上げられて、目と目が合った。

彼女の潤んだ瞳は、他の誰に見せたくないくらい綺麗だった。

止まっているのか、動いているのかもわからないくらいゆっくりと近づいてくる顔を、僕は滲んだ視界をそのままに見つめ続ける。

前髪と前髪が触れ合ったところで、彼女は止まった。僕の唇にかかる吐息はかすかに震えている。

彼女はあはれはるはずのない拒絶を恐れていた。

目を閉じて、すべてを委ねる。

衣擦れの音。首筋をくすぐる柔い髪。

顎を少し上げて。

一秒。

二秒。

三秒。

「……は」

どちらからともなく唇を離すまで、息さえ止めていた。お互い初めてのことで、勝手がわからなかった。

額を合わせたまま、一緒に肩で息をした。呼吸が荒いのは、止めていたためだけではなかった。

幸せだ。生きてきた中で一番幸せで、一番悲しい。

だから終わらせなきや。

ずっとこうしていたら、きつと、心が引き裂かれてしまうから。

「……そろそろ出ないと、怪しまれちゃいますよ」

「……うん」

「早く、済ませましょう?」

「……そうだね」

僕たちはもう一度唇を合わせてから、ドアを開けた。

雨音は一気に強まった。頭も肩もずぶ濡れだ。でも、涙の跡を洗い流して、火照る心を冷ましてくれた。

決心はつかない。

それでも、やらなきや。

「風邪引いちゃう。早く帰ろう」

インカムを装着する。チャンネルは事前に通達のあった、秘匿回線に合わせた。

「Squad Fl-4、現着しました」
フォックストロット・ワン・フォー

『一〇分後に残りの対象二名が到着する。キルゾーンに誘導し、速や

かに排除しろ』

その通信を最後に、オペレーターが無線を封止した。このエリアにいるリコリスは——僕たちの隊は、誰も助けを呼べなくなった。

「ターゲットは単独だそうです」

「オツケー。あたしが前、ヒマリはカバーお願いね」

「はい。いつも通りですね」

古いアパートの解体現場だった。

鍵のかかっていない、目隠しの板が張られた重いゲートを二人で開ける。建物自体の解体はほとんど済んでいて、鉄筋コンクリート製の柱や梁は、一階から三階の一部までしか残っていない。

左手にはプレハブの現場事務所、二階建て。反対側には空荷の大型ダンンプや、アームの先端にコンクリートブレイカーを取り付けられた油圧ショベルといった種々の機材が放置されている。

現場一帯に敷かれた鉄板をかつかつと踏む音は、僕と先輩のふたつだけ。

広いばかりで誰もいない現場の四方は背の高い目隠しに覆われて、外から見られることはありえない。

「あれ？　だーれもないじゃん」

学生靴に隠された機構を、ゆつくりと、ゆつくりと展開する。激しく打ち付ける雨が作動音を隠す。

グロックのポリマーフレームには温度を感じない。

サプレッサーを取り付けて、スライドを引く。

意志に反して、腕は銃を持ち上げる。

「はっ、はあっ……は……」

彼女の背中に合わせられた照星が俺をあざ笑うように震えている。心臓の拍動がひどくうるさい。

「はっ……！　はっ……！　はあっ！」

「ねえ、あっちの事務所に——」

振り返ろうとする彼女の横顔。

サイダーの栓を開けたような、押し殺した銃声。

亜麻色の髪が、ぱつと弾けた。

震える手で照準がつけられるはずがなかった。

弾は体を逸れて、彼女の髪の毛、三編みにした一房に当たっていた。ハーフアップがほどける。濡れそぼつ豊かなロングヘアが、重力に従って下に流れる。

彼女は怒るでも怯えるでもなく、銃と、それを向ける僕とを順繰りに見た。

「ヒマリ?」

目が、合って、

「——あああああああ!」

銃を握り潰さんばかりに力んで、もう一度撃った。

瞼を固く閉じていた。葉莖が敷鉄板の上で、何度か跳ね、そして人の倒れる音がした。

掌に残るリコイルの残滓が脳を揺らす。

じん、と痺れるような感触が、思考さえ麻痺させる。

「ひゅっ、す、かひっ、はっ」

僕はそれが自分の呼吸音だということを、数秒遅れで理解した。そうだ。

手当てだ。

血を止めなきや、先輩が死んじゃう。

「はっ、はっ、はっ、はっ……!」

なのに、足が縫い留められたみたい動かない。なんでだよ。

動けよ。

動け——違う。僕は、先輩を殺すんだ。

僕があの人の上にいたって、何もしてあげられな、

「ヒマリ」

雨音を突き抜けて耳朶を打つ声。

それは、同じベッドで身を寄せ合い、無邪気な内緒話に花を咲かせたいくつかの夜に、まどろみながら僕の名前を呼んだ時の声付きにそっくりだった。

「来て。お願い」

平衡感覚と視界がそれぞればらばらに、歪み、ねじれ、回っている。僕はほとんど転んでいるのと変わらない格好で彼女に駆け寄った。彼女の胸元を赤黒く染める血液が、雨に溶けて際限なく広がっていく。

命がこぼれていく。

「……今、手当てしますから」

銃を放り捨て、震える手で学生鞆の中身をひっくり返して敷鉄板の地べたにぶちまける。止血ガーゼのパッケージを鷲掴みにして力任せに引き千切り、彼女の制服のボタンに手をかける。

「ヒマリ」

彼女が僕の目を見て、たったもう一度、名前を呼んだ。

「いいの」

それだけで、僕はまた、動けなくなった。

「いいのよ」

良いわけないでしょう。

血を吐くような声を絞り出した。

「顔を見せて。なんだか、暗いの」

彼女の背中に腕を通して、そっと上体を起こした。頭を胸に預けさせると、彼女は愛おしげに頬を擦りつけた。雨に濡れ、血を流し続ける体は、痛みを覚えるほど冷たかった。

「あたし、幸せだ」

力無く投げ出された青白い手を取る。するとかすかに動いた。意図を察して僕の頬まで持つていくと、彼女は小さい吐息を漏らした。笑う余力さえ、残っていないようだった。

「先輩」

「……うん」

決着を。

すべてに、決着を。

「僕、あなたに会えてよかった」

雨も涙も太い筋を引いておとがいから滴る。もはや区別はつけようもない。

続きを言おうとして、息が勝手にしやり上がった。
必死に抑え込んで、なんとか絞り出した。

「大好きです」

彼女は目を閉じて、満足げに微笑んだ。

小さな掌が僕の頬を撫でる。

目尻に届いた細い人差し指が、涙滴とも雨滴ともつかないものを拭って——力尽きた。

引き裂かれた花の片割れみたいに、自然な形に指を曲げて動かない手。

手首に回していた指で脈をとった。

死んでいた。

「……違う」

僕が、殺した。

彼女の鞆を下ろして、仰向けに寝かせた。腹の上で組ませた手はひどく重く、まるで鉛でできた抜け殻に触れているようだった。

鞆を亡骸のそばに置くと、中で何かがかさりと鳴った。

偽造パスポートは、誕生日プレゼントその二。

なら、その一は。

「……ごめんなさい」

死体漁りは、冒涇だ。けれど彼女が最期に僕の腕に抱かれることを選んだ、その意味を考えた。

鞆の留め具を、ぱちりと外す。

グリーンのラップリング袋が、諸々の支給装備と少しの私物に混ざって一つあった。貼り付けられたメッセージカードには丸っこい字で、ハッピーバースデー、と書かれている。

金色のリボンをほどいて、手を入れる。革の感触がした。

雨に濡れないよう、袋を高く持ち上げて下から口を覗く。

入っていたのはナチュラルレザーの小ぶりなポーチだった。

最近、彼女はメイクを覚えてくれていた。だからだろう。堅すぎず、かわいらしすぎず、そんな僕好みのデザインだ。

何でもお見通し、か。

閉じ直した袋を胸に抱いて、茫然と暗い空を仰ぐ。

なぜか涙が出なかった。だから雨が代わりになってくれると思った。悲しいはずなのに、穴の開いたバケツに水を注いでいるように、すべての感情が素通りしていく。正面から受け止めるより遥かに苦痛だった。

遠くで何かがきしむ音がした。

知らないうちに一〇分が経っていたらしかった。

甲高い声が先輩の名前を呼んでいる。

足音が一つ、近づいてくる。

「ヒマリ！ ヒマリ！」

肩を強く揺さぶられて、プレゼントを取り落とした。

「何があったの!? ——嘘」

悲痛な声だった。

僕にはもう、そんな声は出せそうになかった。

銃を抜いて周辺を警戒する彼女は、工事現場が無人であることに間もなく気づいた。もちろん、地面に転がったままの空薬莖にも。

「……ひどいことを聞くわ」

視界の外。左の方でスライドを引く音がした。

感情が一周回ってか、声音は凧いでいた。

「殺したのはあんた？」

「殺したのはあんた？」

頷いた。

その瞬間、髪を掴まれて思い切り引き倒された。頭皮からぶちぶちと音がした。

受け身を取らなかったから、地面に頭を強く打った。濡れた鉄板は死体みたいに冷たい。

「……返してよ」

「ごめんなさい」

サプレッサーを着けることも忘れて、彼女は発砲した。下腹部を挟まれて、体が反射的に跳ねる。

「……返せよ」

「ごめんなさい」

立て続けに三発。脚と胸に着弾がばらけた。生暖かい血液が滲んで、白い制服にいびつな日の丸を作る。

「姉さんを返せっ！」

「……できません」

何度も何度も、銃声が耳をつんざく。

肉を吹き飛ばし、臓器を食い破り、骨を打ち砕く。

偶然着弾の集中した右腕は半ば千切れかけ、両の肺にはいくつもの穴が開き、痙攣する喉からはひとりで血塊が吐き出された。

やがて銃声は消え、引き金を引く乾いた音だけが木霊する。ホールドオープンしたことに気づかないほど、彼女は激情に飲まれていた。

「あんたのこと、信じてたのに……」

痛めつけられるとたまらなく安心した。四肢が痙攣するほどの激痛が、僕の罪を糾弾して裁いてくれているような錯覚を与えてくれた。

「——げ、え」

「……は？」

鼻と口からびちやびちやと血を吐きながら、僕の体は、まるで彼女

の感傷を踏みにじるように再生を始めた。

体内で泡立つような音が聞こえる。めちやくちやに壊され、かき混ぜられた臓物が元の位置に戻っていく。

「嘘、なんで」

抉れた肉が盛り上がり、体内に残った銃弾を一片残らず排出する。

右腕の断面に再形成された筋繊維や神経の束がおぞましく蠢き、破断した前腕と上腕の隙間を埋める。

「ありえない、何よそれ……!」

砕けた骨もひとりでに復調し、欠けや亀裂さえもが軋むような音と共に再生を果たした。

全身を血の赤に染めた僕は、地面に手をついてゆっくりと身を起こす。水気を吸いきれなくなった制服から、おびただしい量の鮮血と雨水が混ざり合いながら滴った。

「ひっ」

異常な光景を目の当たりにした彼女はひどく狼狽した。それはもう、人間を見る目ではなかった。

僕が一步、前に踏み出す。

彼女は一步、後ずさる

人智の及ばない怪物に怯えていた。

それでも、彼女は復讐を諦めてはいなかった。

「……ちく、しょおっ!」

銃で駄目なら、とばかりに彼女は俺を殴り倒し、胸元にのしかかる。

両腕は彼女の膝に踏みつけられている。僕力なら跳ね除けることもできたが、抵抗する気にはなれなかった。

首を絞められる。殺意の籠もった手はしかし、そのために位置が悪い。気道を塞ぐばかりで頸動脈が抑えられていない。苦痛を延々と長引びかせるだけだった。

「か、あ」

「死ね!」

「ひゅ」

「死ね、死ね、死ね、死ね、死んでよ!」

「ぐ、め、なや」

「喋んなつ！ あんたと喋ったら、あたし……あたし……」

あんたを殺せなくなっちゃう。

そう、彼女は慟哭した。

「わかんないよ……なんであんたが姉さんを殺すの？　なんであたしは、そんなあんたを殺そうとしてるの……」

長いまつ毛から、涙が直接顔に落ちてきた。

「なんで、そんなに悲しい顔をしてんのよ……」

首の拘束が緩んだ。反射的に咳き込むと、彼女は同情と絶望と、それからとびきりの憎悪の入り混じった泣き顔のまま、僕の上から後ずさった。

顔を両手で覆ってすすり泣く彼女の肩を抱く。

振り払われそうになつたけど、僕の力のほうが強かった。

「言い訳は、したくありません」

そのまま抱き寄せる。抵抗はない。

「ですが、これだけは言わせてください」

円みを帯びたショートボブの上に手を乗せる。

「殺したくなかった」

もう片方の手は頬に添わせた。

「わかってるわよお……」

彼女は僕の血が付くのも厭わず、胸に縋って大声で泣いた。

僕は頬を撫でる手を滑らせて顎を包み——両手で首を捻り上げて

頸椎を折った。

瞬時に途切れた嗚咽に、断末魔は欠片も混じらなかつた。

苦痛なく逝つたのだと思う。

「ごめん。遅くなつた」

それは、場違いなほど穏やかな声だつた。

僕は腕の中で冷たくなっていく彼女の頭を撫でながら、続く言葉に耳を傾けた。

「君のことは責めないよ。誰かがやらなきゃいけないかつたんだろう？」

後ろから青い制服の袖が伸びて、目の前で内側に折れた。その腕は僕と彼女を一緒に抱き締めた。

「辛いよね。でもきつと、投げ出せないんだよね」
首を縦に振った。

「サイトウ君は優しい子だ。私にはわかる。だから、これ以上誰にも、君を傷つけさせはしない」

離れる体を引き留めることはできなかった。

「本当は顔が見たいんだけど、未練が残りそうだし……これで許してほしいな」

隊長は最後に、僕の頭を一撫でした。

足音は後ろ、解体されたアパートへ。

やがてそれすらも聞こえなくなつて。

雨以外の、すべての音が消えた。

「……ね」

何も感じない。

何もわからない。

全部なくなつちやつた。

どうしたらいいかわからない。

でも、これだけはわかる。

「……しね」

僕は、

「死ねよ」

生きてちゃいけない奴だ。

遺体を仰向けに安置して、捨て置かれていた自分のグロック17を拾い上げた。

そのまま顎の下に押し当てるには全長が長すぎたから、サブレッツサーを外した。

吹き飛んだ脳が誰かを汚さないように、みんなから少し離れて——来るはずのない四人目の姿をゲートに捉えた。

白金色の髪の毛の、知らない子だった。今の僕と同じく、制服は赤かつたけど、あつちのは血染めじゃない。

いや、どのみち似たようなものか。どちらの赤も、殺しの証だ。
「待って、ダメッ!?!」

悲鳴のような声で叫ぶ彼女に、さようならと心の中で呟いて、トリガーを引いた。

頭蓋骨を震わす爆音と同時に、一瞬で何も見えなくなった。

「——!?! 先生——」

音はずつと、おぼろげに聞こえていた。

死んでも聞こえるものなのか、と納得した。

「大丈夫——、——だから……!?!」

顔に柔らかい何かが押し当てられ、千本の針を一息に突き立てたような激しい痛みが走って、さすがにおかしいと思いつつ。目を開けようとしたが、そもそも今の僕には存在しなかった。

顔面の肉が盛り上がり、骨が生え、皮膚が張られ、そこで自分が死んでいないことを悟った。

入射角が浅くて、銃弾は脳に届かなかったんだ。代わりに、顔が下から上まですべて吹き飛んだ。

失望した。

瞼より先に眼球が出来上がって、周囲の景色が見えた。

仰向けに倒れる僕の顔を、さっきの見知らぬ赤服ファーストが目尻に涙を溜めた涙を拭うこともせず覗き込んでいる。僕とさして変わらない年に見えた。

でも、DAはリコリスをこの地区から撤退させたはずだ。

「どこから、見ていました?」

再生したばかりの下顎と唇でそう言った。

彼女はまるでなにかに耐えるように、僕の顔にあてがっていたらしい血濡れのタオルを握り締めた。

「そつちの子の、首が……折れるところから」

誰にも見られてはいけなかったのに。

この人も殺さなきゃ。

そうしたら、改めて僕も死のう。

「あ、その、怪我」

「体は完治しています。顔もしき治ります。銃声を聞いたんですか？」

「うん……仕事の帰りで、通りがかった」

倒れたまま両手で顔を触って、全てが元通りであることを確かめた。一緒に、まだ握っていたグロックの残弾も。

先輩を殺すのに二。自殺に一。

だから残りは、一四発。

立ち上がろうとすると、彼女は手を貸してくれた。

「私も仕事です」

「……そう、なんだ」

虚をついて銃口を向ける。考えるより早く撃つ。

対応なんてできるはずがなかった。それなのに。

彼女は射撃を、たった一步のステップで避けた。

「え、ちよつと、待って」

「ごめんなさい」

やはり偶然ではなかった。五発ばらまいたが、ブラフの三発は無視されて本命の二発を事もなげに回避された。

やめてほしいな。これ以上、この人の息遣いを聞いていたくない。

血の通った人間だと意識してしまったら、僕はもう、何もできない愚図になってしまう。

「あなたを、殺します」

必中の距離まで踏み込むと、彼女はようやく銃を抜いた。

ショートバレルのガバメント。デトニクスのコンバットマスターマズルストライクに似ている。外形から推測するに装弾数は多くても七。打突用のスタンダードオフ・デバイス付き。

相手は超接近戦仕様。こちらが不利だ。

銃を胸元に押し付けたハイ・ポジションで肉薄。

グロック特有のロングストロークトリガーを一気に半ばまで引いて回避を誘い、彼女が片足を浮かせたタイミングで引き切る。

これでもたたらを踏むように避けられた。なんて凄まじい身体操作。技術は向こうが数段上か。

この距離とこのタイミングで仕留められないなら、銃口を押し付けるくらいでもない当たらない。

だがやはり、それを許す相手ではなかった。

「落ち着いてー！ 同じリコリスでしょ、ねえ！」

「……だからですよ」

無理な回避の隙を潰すように彼女は撃つ。

肩口に命中した弾丸は皮膚を裂かなかった。

四五口径の強烈なストツピングパワーで外れかける関節を、肩の筋力で強引に復調する。出血はない。血煙だと思っていたのは、何かの粉末だった。

激痛と衝撃、それだけだ。

脅威じゃない。

「ウツツ、止まんないっ!?!」

慌てた口調とは裏腹に、彼女は極めて冷静に追撃を加えてきた。

セミオートにも関わらず恐るべき連射。五発全て被弾。踏み込みの速度が殺され、上体が傾ぐ。

彼女はその間にリロード。ホールドオープンしたスライドが戻る音。六発マガジンだったらしい。

倒れる前に踏ん張った。ローファーが鉄板の上を数センチ滑る。雨でソールの食いつきが悪い。

再び前を見据えると、彼女はガバメントと反対の手に新しい武器を持っていた。いつの間に抜いたんだろう。

「ごめんっ！」

縦長の銃口から放たれるは、両端にウエイトを備えた金属のワイヤー。捕縛用のボーラ・ガンだ。

彼女のような真似は無理でも、目で追える速度のそれならなんとかなる。

身を屈めながら、左腕を飛来するワイヤーに突き出した。前腕に巻き付かせて無効化。

前傾姿勢をそのままに牽制射撃を加えながら、逃げる彼女に追いつく。

タップ・ダンスでも踊っているようだった。
僕はずっと翻弄されていた。

絶え間ない銃声。吐き出される薬莢。荒い息遣い。滑る靴。いつまでも止まない雨。跳ね上がる水飛沫。

踊って、踊って、踊り続けて、鋭い前蹴りを食らって息が詰まる。
古びた鉄筋コンクリートの柱に背中を打つ。

かかとに硬い何かが触れた。

グロツクだ。

僕のじゃない。

血だまりを踏んだ。

僕のじゃ、ない。

「……ひ、あい」

子音を欠いた、舌足らずな悲鳴が、僕の名前を呼んでいる気がする。
聞きたくない。

「お、え、いつあい、い……」

自決に失敗した隊長の端正な顔がどうなっているかなんて、知りたくない。

「こ、お、ひえ」

「……はい。任せてください」

追撃にやってきた白金髪フェアレストの赤服も、僕の足首に縋りつく隊長に気づいたららしい。

ガバメントを下げて、ひゅ、と息を呑んだ。

「あ、いあ——」

発砲。

血飛沫。

隊長は、赤服ファーストの彼女が制止するより早く、脳をぶちまけて死んだ。
吹き飛んだ顔面の赤黒い凹凸が、変わらず僕を見上げている。

ありがとう、言ったのだろうか。

それとも、僕が望んだから、そう聞こえただけか。

「これが、あなたの仕事……」

コンクリートの破片の混ざる灰色の泥を踏みしめて、彼女に近づい

た。

崩れかけの屋根から空の下に出ると、露出した銃のチャンバーに雨粒が飛び込んで湯気が上がった。弾薬はもう残っていない。

ああ。

あの人の歌が聞こえる。

「私、絶対、誰にも言わない。誰にも……だから」

水たまりに銃を投げ捨てる。急冷されたバレルがじゅうつと鳴いた。

首に両手をかけても、彼女は何も言わなかった。誰かの命を奪うだけの気力がもう残っていないことを見抜かれていた。

彼女は銃を下ろして、僕の手に触れた。

「もう、やめよう？」

罪悪感。喪失感。痛み。悲しみ。

あの人から、あの子から、隊長から、僕が永遠に奪った尊いもの。

僕にだけ見せた笑顔。あなたにだけ見せた表情。

あなたの優しい目。甘い声。安心する匂い。

唇の味。

ファーストの彼女に触れられた途端、その全部が血みどろの濁流になって、自分の中に曲がりなりにも存在していた芯のようなものを飲み込み、粉々に砕いていった。

膝をついてへたり込んだ。

あの人の声が消えていく。

嫌だ。

置いて行かないで。

僕を捨てないで。

ひとりにならないで。

ぼくのせいで。

ごめんなさい。

ごめんなさい。

「先生、車回して。……うん、うん。クリーナーは——」

「……DAが遺体を確認しなければ、任務は完了しません」

「わかった……やっぱクリナーはなしで。あと、いらぬ上着とかない？ 血だらけの子が一人いて、でも怪我はなくて……ありがとう」

車を待つ間、彼女は仲間の一人一人に手を合わせて祈ってくれた。先輩のそばに落としてしまった包みも、僕の手握らせてくれた。

不意に、ふりかかる雨が途切れた。見上げると、彼女は折り畳み傘を差していた。僕を中に入れてあるせいで、彼女の右肩はひどく濡れている。

「行くう」

手を貸してもらうのが忍びなくて、自力で立って歩いた。体はとつくに、傷一つなかった。

赤いワゴン車の前に、和服を着た大柄な男の人が立っているのが見えた。足が悪いのか杖をつけていて、反対の手で大きな傘を差していた。

「後ろに上着を積んである。千束」

「うん」

それで名前を知った。

古い仕立ての厚手のコートが血染めの制服を覆い隠す。ずいぶん着込まれていた。

「ちようど捨てようと思ってたんだ」

走り出した車の中で彼は独りごちる。返答が欲しくて発言したわけではないことを、前方に向いたままの視線が教えた。

誰も何も言わなかった。

僕は袖を通さずに羽織ったコートの中で、プラスチックの硬い袋をずっと弄んでいた。覚えているのはそれだけ。心が外を見ようとしなかった。

視界のカットが急に切り替わった。周りを見ることができるようになったのが、おそらくその瞬間だった。

僕はいつの間にか、喫茶店のカウンターに座っていた。服も弾痕だらけの血に汚れた制服から、真新しいタートルネックのニットにすり変わっていた。彼女の私物だろうか。

目の前には湯気の立つマグカップ。隣にグリーンの袋。

あの人の歌はもう、聞こえてこない。

「私、錦木千束」

彼女はカウンターにもたれたまま静かに告げた。

「私は、」

ヒマリ、と答えようとした。

声が出なかった。口が動くばかりで、肺が空気を押し出してくれない。まるで喉に栓をされたみたい。

両手で抱えたカップを傾けて、温かいココアを一口飲んでから言い直す。

「あたしは、サイトウ」

僕はその日、一三歳おれになった。

ポーチの革の感触を今一度確かめる。艶のある表面は、三年も放置されていたせいか、乾いて少し硬い。後でオイルを塗ってやろう、と思った。

「懐かしい」

妙な気持ちだ。殺した皆のことを思い出しても、僕を責める罵声が聞こえてくることも、勝手に涙が出てくることも、ましてや、死にたくなることもないなんて。

今はただ、苦いような、辛いような、強く吸い込んだ煙草の味に似た、乾いた悲しみを覚えるだけだった。

「千束には、感謝しないと」

僕は倉庫の床に座り込んだまま、振り返ってミズキさんに微笑んだ。

彼女は取り乱す様子のない僕に少しだけ驚いたようだったけれど、やがて安心した表情で、深く、ゆっくりと頷いた。

「DAにさ、慰霊碑があるんだ。楠木司令が建ててくれたのが。今なら行ける気がする」

やったことから逃げるのは、もうやめるよ。

それを聞いたミズキさんの顔を言い表すのは、僕には難しい。痛みをこらえるようでもあり、なにか、眩しいものを見るようでもあった。

「あんたは……すごいね」

買い被りだ。僕は今の今まで、過去から逃げ回っていたんだから。逃げてても逃げてても怨嗟の声が追いかけてきて、追いつかれるのが怖くなって、DAの解体だなんて大仰な使命を自分の中にでっち上げて、戦いの中で死のうとした。

逃げ切つて楽になろうとしたんだ。

「ううん、そんなことないよ。僕は自分を責めて、それでどこか安心してた」

苦しんでいるうちは楽でいい。矛盾してるよな。

「わかりやすい悪役が皆を不幸にしているんだって、そう思ったかつ

ただけ。だって……誰も悪くないのに、みんなが尊厳を奪われて死んでいくっていうなら、その方が救えないでしょ」

DAという構造がもたらす問題と、僕自身の罪は、本当なら分けて考えなくちゃいけないかった。どこかで理解はしていた。けれど悲劇のヒロイン気取りに夢中で、見ないふりをした。

「幸せを失うのが怖かったから、今度は精神的な自傷に走って、初めから何も持たずにしようとした……のかな」

そう考えると、小難しい理屈を捏ね回して千束を避けていたのにもつじつまが合う。もし三年前、あいつに助けを求めていたら、きつともっと早くに、僕を日の当たるところに連れ出してくれただろう。

たきなにそうしたように。

「まだ勇氣は出ないけどさ……僕はいつか、僕を許さなきゃいけないんだと、思う」

都合のいい考えかもしれない。けれど自分の罪を背負うって、そういうことなんじゃないのか。

「……そうね」

僕の話を静かに聞いていたミズキさんの表情が、ふと翳った。目線は珍しく弱気に伏せられている。

古傷に触れた。そんな気配がした。

「私にもそんな時期があったわ。あんたの苦勞に比べたら、大したことないだろうけど」

ミズキさんは、柵と柵の間に突き出たコンクリートの柱に背中を預けて屈みこみ、僕と目線を揃えた。

「私ね、人を殺したことがあるの」

一人、ね。

そう、飾らない口調で打ち明けた。自分を哀れむことも、誰かに哀れまれることも良しとしない毅然とした声音には覚えがある。

彼女が僕のセーフハウスに押しかけてきた日だ。

「養成所を出てすぐ、先輩のリコリスと一緒に通り魔を撃って……その場でゲーゲー戻しちゃった。ナントカ調整？　みたいなのが合わない体質だったのね。それから、銃を見るだけで気持ち悪くなっ

ちやつて。それで情報部に入ったの」

あの夜聞かされたことの本当の意味を、僕は今、やつと理解できたような気がする。

リコリスになんてならないほうがいい。そう言つて、彼女の選択を無条件に肯定した僕は、その目にどう映つていたんだろうか。

意味ないか。そんなこと、考えたつて。

「D.Aの殺人であつて、私の殺人じゃないつて自分に言い聞かせてきたけど、なんだか時々、それも言い訳みたいに思えて。その度にお酒に逃げちやつたりしてき……本当、昔はどこに出しても恥ずかしいダメ人間だつたわ」

けらけらと笑み混じりに話していたミズキさんは、そこで一度言葉を切り、真剣な表情を作つた。

「だから、そうやつて自分の気持ちを整理しようと頑張つてるあんたは立派よ。きつと大変な道でしょうけど、あんたなら絶対できる。私が保証する」

私と違つて、とでも続きそうな、物悲しい響きをかすかに含んだ語調だつた。

多分、無意識のものだ。本人は気づいていないだろう。だからこそ、僕が見逃すはずはなかつた。

「僕は、ミズキさんと一緒に考えたい」

「え、私?」

「うん。お互い、納得のいく答えは違ふと思う。けど、体験は似てるでしょ。だから一人で悩むよりも、二人で考えたほうが、なんていうか……その途中くらいまでは早くたどり着けるんじゃないかな、つて」言葉を探しながらぼつぽつと不器用に話す僕を見るミズキさんの眼差しが、次第に驚きと、包み込むような優しさを帯びていく。場違いにも見惚れてしまいそうだつた。

「そう、ね。それがいいわね。私は考えることをやめたただけ。割り切れたわけじゃない。今まではそれでいいことにしてたけど……そろそろ、真面目に向き合わないとだわ」

やおら立ち上がるミズキさんに合わせて、僕もポーチを抱えて立

つ。それから尻をはたいてジーンズの埃を気休め程度に落とした。

そろそろクルミも起きてくる頃だ。朝ご飯は何にしようか、

「でもねサイトウ。一つ約束してちょうだい」

なんて呑気なことを考えたのも束の間。思いがけない真剣な声音に気圧されて、僕は思わず内容を聞く前に頷いた。

「私はあんたを頼りにしてる。だから、あんたも同じくらい私を頼んなさい。いい年して若いモンに甘え切りなんて、この私、中原ミズキ二七歳の沽券に関わるわ！」

頼れ、か。

そうか。そうだよ。難しいけど、できるようにならなきゃいけないよね。

僕が抱える機密情報は膨大だ。同じリコリスにだって話せないことのほうがずっと多い。任務だってほとんど一人でやってきた。だからいつの間にか、僕は全部を自分の力だけでやらなきゃいけないと思いついてた。僕には、誰かに手を貸してもらえただけの価値なんてない、なんて自虐を本気で信じてしまいうくらい精神的に参っていたというのも大いにあったし。

何もかもが罪悪感にがんじがらめにされて、僕は僕を見捨てようとした。それはきつと、大きな間違いだったのだと思う。

……でも、どうすればいい？ 両親から愛された覚えもないのに、自分の愛し方なんて今さら身につけられるものなの？

「ん、指切り」

うじうじと情けないことを考えていると、ネイルの塗られた細くたおやかな小指が、ずいっと目の前に突き出された。同じ女の指でも、僕のとはずいぶん様子が違う。

銃やナイフを四六時中振り回している僕の手の皮は、何度も豆ができては治つてを繰り返しているせいで、とても分厚く、そして堅い。それも、比較的長持ちしている右手ばかりがだ。

真島と殺し合った時に自分で二の腕から引き千切った左腕は、再生してから特段酷使もしていないから年相応に綺麗だけど、その分余計に右の無骨さを浮き彫りにしているようで気恥ずかしい。

そんな醜い指を、ミズキさんの小指に絡めた。

「男の子の手ね……あ、照れた」

「うっさい……」

赤面しながら思い出したのは、ついに契れなかったあの人との約束だった。僕は許しを乞える立場にはないけれど、それでも、恨みも怒りも残さずに死んだ彼女なら、笑って済ませてしまうのかもしれないな、なんて甘い見立てを打ち消すことはできなかった。

そうだ。できるかできないかじゃない。あの人が愛した僕を、僕は愛するんだ。どれだけ難しくても。どれだけ時間がかかっても——うん？ 待てよ。

僕は一つの可能性に思い当たって、ミズキさんの顔をまじまじと覗き込んだ。

亜麻色の綺麗なロングヘアに、琥珀色の瞳に、アンダーリムのシンプルな眼鏡。

眼鏡はさておき、髪と目の色、あの人によく似てないか？

「どした？」

「あ、ううん……」

まさか本人に言えるはずない。

好きな女性のタイプが三年前から全然変わってないことに気づいたんだ、なんて。

知らないうちに、心の思いがけない部分に居座っていたかつての先輩に、僕は苦笑するしかなかった。

ともあれ、だ。

「僕の家of ナイン・ストーリーズを覚えてる？」

「ええ、私が勝手に読んだやつ」

あれから僕も読んで、ちよつと考えたんだ。

多分、今日が。

「僕はシーモア・グラスだ。頭を撃ち抜くつもりはないけど、文身いれずみをこのままにしておくつもりもない」

#8:

Fox trot one,
or a perfect day for Banana fish
の日。

白い花束を携えて、僕は紅葉の中を歩いていた。真新しいコンクリート舗装の遊歩道は、峠道さながらにくねくねと何度も曲がりながら、丘の頂上まで続いている。

風はない。木々は揺れず、自分の靴音すらも、林を覆う、分厚く柔らかい腐葉土に吸われて、ずいぶん小さく聞こえた。

静かだ。まるで空間そのものが、死を悼んでいるかのように。

だからその足音には、ずいぶん近づかれるまで気付かなかった。

「どうしました、フキさん」

来た道を振り返る。カーブの出口でばったり僕に出くわした彼女は、目が合った途端、ぼつの悪そうな顔をふいつと逸らした。

「久しぶりに顔出したと思ったら、墓参りかよ？」

「せっかいです。先輩も手向けてあげてください」

花束からカーネーションを一本抜いて差し出すと、フキさんは嫌な顔一つせず受け取ってくれた。この人が後輩の尊敬を集めるのってこういうところなんだろうな、と思った。

「アルファ分隊のみんなは、その後どうです？」

一緒に歩きながら聞いてみる。みんなの無事は、当時、医療棟で目覚めてすぐゴウダから知らされていたから、なにか適当な話題が欲しかっただけだ。

「お前が長期療養に入ったって聞いてサクラが腰抜かしてたぞ。退院の時にでも会ってやりや良かったのに」

「すいません。あの時はちよつと人に見せられない格好で」

「……わざわざ個室で面会謝絶ってことは、そういうことだろうなとは思ったよ。特調の方々も私達に気い遣ってダンマリだったしな」

「迷惑でなきや、この後すぐにも行きますよ」

「あー……そう、だな。ウン」

露骨に挙動が怪しくなったフキさんが何かを隠していることを察するのには、特別な諜報技術は全く必要なかった。生真面目すぎて嘘が壊滅的に下手くそなのが先輩のかわいいところだ。

「ああ、確かに。エリカとヒバナがいい顔しませんか」

「違う！ えっと、だからなあ、お前が心配してるようなことじゃなくて……あーもう面倒くせえ！ 後ろ向け！」

「え？」

「早く！」

「ええ、いいですけど……」

いきなり何を言い出すんだこの人、と内心困惑しつつも振り返ると、なんだか見覚えのある刈り上げ頭を筆頭に、アホ毛の特徴的なミディアムボブと、カチューシャを着けたやたらスタイル抜群な人影が茂みの中からどやどや出てきた。

……サクラはともかく、エリカとヒバナまで何してんの？

「先輩!? 話違うじゃないっすか!？」

「隊長権限だ！」

「鬼かよお……!？」

「言いたいことがあるなら自分で本人に言うのが筋だろ。来い」

吹っ切れたんだろうか。喜んでるんだか怒ってるんだかはつきりしないムスツとした顔で駆け寄ってきたサクラは、減速するどころか助走付きで胸に飛び込んできた。当人としては頭突きをかましたつもりだったんだろうけど、身長差のせいで額には届かず。僕のバストが形を変えたただけだった。

フツーに痛い。

「……先輩ふえんはい」

そのままぐりぐりと無遠慮に顔面を押し付けながら、彼女は唸るように呟いた。僕も仕返しに、この子の刈り上げをじよりじより撫で回して遊ぶくらいはしたほうがいいのかもしれないが、

「私、マリヤの件、まだ怒ってますからね」

「……ごめん。心配かけたね」

その話をされると、どうにも弱かった。

「正直、倉庫が焼け落ちたときはもうダメだと思いました。いくらサイトウ先輩でも、空爆なんかされたらどうしようもないでしょ……だから、見つかったって聞いたときは超嬉しかったんすよ。まさかたった三日で退院するとは思わなかったっすけど……！」

おかげでお見舞い行きそびれましたよ！　そこまで一気にまくし立てたサクラは、ようやく僕を締め上げていた腕を解いた。

「でも、元気そうで良かったです。先輩」

まっすぐに見上げられて、僕たちはどちらともなしに微笑んだ。フキさんは本当、良い後輩を持ったよ。

「二人もおいでよ」

サクラの背後に目を向ける。居心地悪そうに俯いていたエリカとヒバナは、一度だけ二人で顔を見合わせると、決心したような足取りで歩いてきた。

世間話をしに来た訳ではなさそうだ。

「……私、ずっとサイトウさんに謝りたかった」

単刀直入に切り出したのはエリカだった。

「私が高質に取られた時、サイトウさんも、たきなも、助けてくれたのに……ありがとうって思う前に、怖いって思っちゃった。なのにサイトウさんはこの前もまた、私とヒバナを庇って……本当に、ごめんなさい」

僕は頭を下げようとする彼女を慌てて制した。

「私は、エリカの感じ方が間違ってるとは思わない。この体は普通じゃないから」

「で、でもっ！」

僕らは兵器でもなければ備品でもない。まして怪物でもない。そうあれかしと望まれ、造られたのだとしても、

「うん。それでも私は、みんなと同じ人間だよ。痛いものは痛いし、悲しいものは悲しい。だからさ」

強気なペルソナを被って引き裂かれた心根を隠すことをしなくなったせいだろうか。口を開くごとに妙な面映ゆさを覚えて、顔にじ

わじわと熱が集まってくる。西日の赤さで隠れているといいけど。

「私を見てくれてありがとう」

それでも、なるべく真摯に言い切った。

エリカは不意を突かれた表情で目を瞬かせたかと思うと、急に俯いて何も言わなくなってしまうた。

「……エリカ？」

返事の代わりに聞こえてきたのは、控えめな嗚咽だった。さっと顔から血の気が引く。僕のせいだ。どうしよう！ 慌ててハンカチを差し出すも、どうしたら泣き止んでくれるのか見当もつかない。

いや、だって、しょうがないじゃん。単任任務ばかりの僕が、同年代の女の子が泣いてるところに出くわすことなんてそうそうないんだから。親が恋しくて夜泣きするリコリス候補生を抱っこしてあやすのとは訳が違う。

千束？ あいつは気心知れてるからいいんだよ。

「あー、いいのいいの。あんたが悪いんじゃないよ。ただちよつと感極まつちやつたんだよね？」

「うんっ、私、嬉しくて、でも、こんなにいい人にひどいことしちやつてたんだ……」

「そうだね。でも許してもらえたんだ。これから仲良くできるといいよね」

無様にあたふたしていると、エリカのそばにいたヒバナがすかさず助け舟を出してくれた。ほっと胸を撫でおろすと、彼女はエリカを抱き寄せながらこちらを見た。

「私からお礼を言わせて。あんた達が助けってくれなかったら、この子はあのビルでそのまま死んでた。私もそう。マリヤの自動車爆弾が二段構えだったなんて、とても分からなかったもん」

「仲間を助けるのは当然でしょ」

「……そう、言ってくれるんだ」

ヒバナの眼差しがあまりにも優しく、僕は思わず、はにかんでしまった。

かわいいところあるじゃん、なんて言われたよ。

「一緒に来る？」

反対の声が上がるわけがなかった。

丘の頂上。石畳の敷かれた小さな広場に、その慰霊碑はあった。外見は、白く大きな御影石の直方体、としか表しようがなく、まるで、あらゆる宗教から追悼の概念だけを削り出したかのような機能美を蓄えてじつとそびえている。

そんなモニユメントの前に、楠木司令は一人、佇んでいた。

「……お前たち」

抑揚の薄い、しかし確かな驚きを秘めた声音で司令は呟く。

無理もない。リコリスに死者を弔う習慣はない。遺体袋に詰め込まれた友達がどんな処理を受けるのかすら、普通のリコリスには明かされない。彼女たちに許されることといえ、少しばかりの遺品を仲間と分け合い、D Aが付けた、整理番号めいた名前と苗字を覚えていくことくらいか。

誰もそれを当たり前だと信じて疑わない。それくらい、僕たちは命を使い捨てられることに慣れてしまっていた。

人権を？奪された人間の死つていうのは、そういうものだ。

「お久しぶりです、司令」

ユリに、洋ランに、みんなに分けて本数の減ったカーネーションに、フリージア。白で統一された花束を、石造りの献花台にそつと置いた。僕を真似て、おっかなびつくり花を供えるフキさん達を尻目に、二歩ほど下がって目を閉じる。合わせる手はない。信じたい神はいなかった。

黙禱の最中にふと、両隣に気配を感じた。

目を開ける。

エリカとヒバナだった。

二人は僕のリコリス殺しを知らない。フキさんだつてそうだ。それでもみんな、僕と肩を並べて、不慣れな祈りを真摯に捧げている。僕に寄り添おうとしてくれている。

気づいた瞬間、つん、と鼻の奥が痛んだ。

「ありがとう」

辛うじて声は震えなかった。けれど伝わってしまうものはあつたらしく、ヒバナの手が僕の背中をそつとさすった。

罪は消えない。それでいい。僕は救われるためにここへ来たんじゃない。

罪を背負う覚悟ができたから、その形を確かめようと思ったんだ。

この名前のない墓標はリコリスだけを弔うものじゃない。明治政府樹立以前から僕たち少年兵が命じられるがままに殺してきた、数万、数十万、ひよつとすると百万にも上るかもしれない犠牲者の命をも、このちつぽけな石塊は背負っている。

僕が手にかけたのは、そのうち九一六名。

全員の名前や姿を覚えている、とは言わない。無我夢中で反撃しなければ自分や仲間の身が危ない時もあった。爆薬で原型を留めないほどバラバラに吹き飛ばしてしまった人もいる。

でもその人数を違えたことだけは、物心ついた頃から一度だつてなかった。

気付けば、楠木司令はもう、踵を返していた。

「司令」

首だけで振り向いた彼女が、僕を横目で見る。

「ありがとうございます」

「何の話だ」

「私がここに来られたのも、三年前、司令が運用権限の移管に尽力してくださいっておかげです」

「……全てではない。特務の委嘱は吞まざるを得なかった」

DAの重要機密を侵す行為——もちろんそこには、存在そのものが機密であるリコリスその人の脱柵や離反等も含まれる——をしたりコリスの処刑は通常、虎杖司令が管轄するリリベルに一任される。

僕はその特務の一部を、本部からの協力要請という名の圧力に応えて代行してきた。

そして二〇人の友人と、あの人を殺した。

兄さんから真実を聞いた今となつては、命令に従わなければ僕の後継を造る、という虎杖の脅し文句はハツタリだったとわかる。アメリカ

力は僕という新兵器の実験場にたまたまDAを選んだだけで、DAのために僕を造ったわけじゃない。

あの男にも、DAを統括する審議部にも、かの超大国をどうこうできる力なんてない。まんまと一杯食わされたわけだ。

「それでもです」

司令の表情は木々の隙間から差す西日でよく見えない。でも、笑顔の類ではないだろう、という確信があった。

「執務室にいる。気が済んだら顔を出せ」

橙色に染まる道は、のたくりながら木立の中に入っていく。司令の白いコートも同じ色合いに光っていた。

僕はその姿に、血を被った自分の制服姿を想起した。

司令が、あの時の僕のように、独りに見えた。

「行っちゃった。てかあの人、こういうところ来るんスね」

「忙しいんでしょ。最近は政府の人とたくさん会議してるみたいだし」

「余計なことを知る必要はない。リコリスは任務を遂行するだけだ」

「サイトウさん、どうかした？」

遠慮がちに袖を引かれて、はっと隣のエリカを見下ろした。

「変なこと言うんだけどさ」

「私、笑わない」

「司令が、なんだか寂しそうだったなって。ね、変でしょ」

「そんなことないよ。サイトウさんって、ずっと楠木さんの近くで働いてるんでしょ？ だから、私達じゃわからないことにも気づけるんだと思うの」

その裏も何も無い純粹な笑顔をあえて文字に起こすならば、にぱーっ、だろうか。ろくな情操教育を受けないリコリスがこんな真っ直ぐ育つなんて奇跡じゃないか、なんて思っていたら、ヒバナが得意げな顔で親指を立ててきた。私が育てた、とでも言わんばかりのジェスチャーに、僕は思わず笑ってしまった。

「お前がそう言うなら追いかけるか」

まあ、それも一瞬だったんだけど。

「えっ、フキさん……？」

「なんだよ。そのつもりで言ったんじゃないのか？」

「や、そう、ですけど……」

「仲間の迷惑になる、とか思われるほうが迷惑だ。駆け足！」

「あっ、ハイ！ サーセン！」

「悪いねサイトウ。ウチの隊長こうなのよ」

僕たちは足早に來た道を引き返していき、やがて司令の背中に追いつく。

「何のつもりだ」

案の定、司令は歩きながら、怪訝そうに僕たちへ振り返った。
「隊長命令です」

すつとぼける僕に、サクラが小さく吹き出した。

「改めて、アメリカ大使公邸へようこそ。吉松さん」

明け透けな皮肉であった。しかし、吉松シンジが腹を立てることはなかった。治安良好な日本の警察にあるまじき強引な手口で身柄を拘束されたかと思えば、雇われのテロリストに救出され、追手がかかる間もなく安全地帯に連れ込まれたとあっては、反論する気概など湧くはずもなかった。

第一、一連の騒動を手引きし、吉松とその秘書とを救出した男こそがそれを言うのだ。感謝こそすれ、憤ることなどありえなかった。「DAはもとより、内調や公安まで躍起になってあなたを捜索中だ。どれだけ早くとも国外脱出は年明け以降になるでしょう。心苦しいですが、それまで一切の外出はできないものごとご理解ください」「いや、いや。私も秘書もこうして命があるんだ。感謝こそすれ不満はないよ」

大使公邸には治外法権が及ぶ。日本はもちろんのこと、DAもまた外交への悪影響を恐れて手出しできない。吉松と姫蒲にそれぞれ一部屋ずつ宛てがわれた豪華なゲストルームは、この状況下においては正しく聖域だった。

「手空きの者を常駐させておきますので、必要なものがあればなんなりと」

「何から何まですまないね。しかし、君はなぜ私達をそこまで助けてくれるのかな?」

「合衆国は国民を見捨てません。特にDAとの密約を知る国民はね」「……なるほど。今の私たちは、情報将校か何かということになっているのか」

「軍人でいらっしやたのですから、嘘ではないでしょう?」

人好きのする笑みを浮かべて彼は言った。

DAと日本国。その二つを易々と出し抜いた者とは思えない、飄々とした微笑だった。

吉松は内心で喝采する。

それでこそ、機関が支援するに足る天才だと。

「タチバナ君。君は一体、どっちの味方なんだい？」

「私には私の目的がある。アメリカには精々、体の良い踏み台になつてもらいますよ」

「それは君がかつて、アランの支援を断つたことにも関係するんだね？」

「ええ。然るべきその時にお力添えを頂きたい。五年前の今日、CIAへ出荷された私はあなたにそう言った。今がその時です」

「やはりか。慎重な君なら余程の理由もなしに危険な橋を渡らないだろうとは思っていた……分かった。だがそのためには、まず機関とコンタクトを取らねば。せめて秘書が出ていければ良いのだが」

「手配しましょう。姫蒲氏に向く目はあなたより少ない。私もできる限りのバックアップを」

そう言つて彼は、未だいささかの警戒心を残す姫蒲へ事務的に微笑んだ。吉松の目から見ても相当に見麗しい彼女を前にしても、彼の表情から漂白されたように無機質な誠実さが失われることはない。

印象に残りにくい顔つきはもとより、無性愛者^{アセクシヤル}という性的指向までもが、綺羅星のごとき才覚を後押しする。タチバナという男は、さながら諜報のために産み落とされたような人間だと、吉松は思った。故にアラン機関は、彼に微笑んだのだ。

そんな逸材の手助けがあれば、ともすれば、彼自身への支援はもとより、当初の目的も果たす見込みが立つ。

錦木千束の、殺しの才能を開花せしめる、という目的を。

「さて、サイトウ君。君の望みは？」

十数年ぶりに本来の名を呼ばれ、はにかむような困り顔を見せる彼が望むのは――。

#8+: Point of No return

司令執務室と特命情報調査室、それから特設任務部隊^{タスク・フォース}のオフィスをそれぞれ備える中央棟のセキュリティ・ゲートをくぐった瞬間、肌が

妙な空気のざわめきを拾った。

騒がしいわけではないけど、なんだかいつもより慌ただしいような。建物全体から、どこか張り詰めた雰囲気がある。僕がいない間に何かあったんだだろうか。

「……すっげー静かですね。なんか緊張してきた」

「司令部にでも呼びきれない限り、ここにリコリスは来ないからな」

「え、あそこの深緑の制服の子たちは違うんスか？」

「ああ。サイトウの部署に付いてんだ」

背後にぞろぞろとついてくるアルファ分隊のみんなに目配せをして、ついてくるよう促す。最初に目指したのは一階。バリアフリー化されたいくつかのセキュリティ・ゲートをパスした先にある大部屋だ。

強化ガラスの接触感知ドアには、真新しいレーザー刻印と点字の両方でこう記されている。

19th Special Operations Task Force.

「ここだ」

「フキ先輩、あれ部隊旗ですよ！ カツケー！」

「馬鹿、声がデカい」

「ウチらも欲しいなあ、ああいうの」

入って早々、観光気分の四人をよそに執務室を見回せば、部長席でデスクワークに勤しむ隻眼の少女、柏とすぐに目が合った。腰を上げようとする彼女を手で制して、自分から傍に寄る。

「室長。復帰なさったので？」

「いや、今日は司令に呼ばれて。ついでに、アルファ分隊がマリヤの件でお礼をしたっていうから連れてきた」

「ああ、撤退戦の件でしょうね」

桜庭君、お客様を応接間に。柏の芯の通った声を受けた一人の隊員が、艶のない黒い右足首を生身と変わらない滑らかさで操ってフキさん達の方へ歩いて行った。サーボモーターのかすかな高周波音がこの空間から絶えることはない。義肢を着けていない者は少数派だ。

僕は時々、自分が作り上げたこの光景が、本当に正しいものなのか疑わしくなる。

殺処分を免れるためには、どんな形であれ組織に貢献していなければいけない。だから僕は、心身を負傷して戦えなくなったりコリスに新たな戦場を与えることで彼女たちの延命を図った。

確かに命は助かったかもしれない。

でも、それだけだ。僕たちは結局、生きた兵器以上の扱いを脱しない。それが僕のような戦闘機であれ。柏たちのような電子戦機であれ。

「お体は、もう大丈夫ですか？」

「実用に支障はない、ってところかな」

「……無理は、していませんか？」

「休んでる間に、ひとつ、ずっと悩んでたことに一区切りついたんだ。だからずいぶん良くなったと思う」

「……そうですか。それは良かった」

僕を見上げる一つしかない濡れ羽色の瞳が、その印象をふつと和らげる。療養棟の病室で、布団と包帯に埋もれるようにして無気力に伏せり、いつ投与されるかわからない致死薬に怯えるばかりだった当時からは想像もつかないほど、彼女は強くて優しい表情を見せるようになった。

良いことだ。良いことのはずだ。

「サイトウ室長、いいえ。サイトウさん。あなたがしているのは尊いことです。堂々と誇っていいんですよ、誰も笑いやしません」

でも同時に、まだまだ足りないと思う自分がいる。

三年前。命より大事だったあの人達を殺した僕は、しばらく喫茶リコリコに匿われていた。寝るか、泣くか、食べさせてくれたものをみんな吐くかしかできなかった僕の面倒を、みんなが見てくれた。

時々、調子のいい日は千束が手を引いて、外に連れて行ってくれて。何をするでもなく、近場の公園で缶ジュースを飲んで帰ったりもしたっけ。ああ、そうだよ。本当にいろいろあった。僕の心が耐えきれなくて、封じ込めていただけだ。

あの時、僕が千束達に確かに感じていた救いを、柏たちは僕に抱いているのだろうか。

でも。

「そうかもね。でも、ここで満足しちゃダメなんだ」

「……あくまで全てを望むのですね。あなたは」

負傷兵はもとより、任期を終えてなお出荷の水準を満たさない品質のリコリス、リリベルに未来はない。DAの子供は自販機のジュースの味さえ知らないまま、まるで破砕機にかけられる廃車みたいに淡々と心停止処置が取られては、その遺体さえ移植用生体組織として解体、再利用され、墓にも入れずに短い一生を終える。

僕たちは、生まれてから死ぬまで、歩みのすべてが抹消され、透明化され、踏みにじられ、どこにもいなくなつたことにされて。そうやってこの世界は今日も素知らぬ顔で回り続ける。

そんなのってあんまりだ。

病的に清潔なりコリス寮を一步出れば、この世は楽しいこと、嬉しいこと、悲しいことで満ち満ちている。その一切を味わえないまま、人の命の重みにも気づけず、組織の掲げる正義に殉じるなんて、そんなの間違っている。

「私はね、柏ちゃん。ハッピーエンドがいいんだ。スタッフロールを背にしてみんなで楽しく踊る、そういう、ありきたりなミュージカル映画のつままない終わり方が好きなの」

知らないことは罪じゃない。だから僕は市井の人を恨むことはない。

紛争や天災に苦しむ人々は、西暦二〇二八年の今なお減少するどころか増加の一途を辿っている。ネットニュースや新聞で報じられる悲劇の数々はきつと、この地球に蔓延する苦しみのパーセントにも満たないだろう。

悲しいことだけど、それに石を投げる権利は誰も持ちえないんだと思う。僕にだって見えないものは見えないし、聞こえない声は聞こえない。僕よりつらい目に遭っている人も、きつとどこかに必ずいるのだらうけど、感じ取れないものがそこにあることを知るのは難しい。

誰も悲劇のすべてを知ることなんてできない。

だから僕は叫ばなきゃいけないんだ。

僕たちはここにいて。苦しんでいるって。助けて、って。

僕がやるんだ。

「……そのエンディングに、あなたはいますか？」

少し前の僕なら、その呟きに応えることは、多分できなかった。

「その時はセンターで踊ろっかな？」

黒い眼帯の向こうで、もう収めるものない瞼が動く。答え合わせ

は、反対の目ですぐにできた。今にも泣き出しそうだった。

「本当に、変わられましたね。サイトウさん」

「おかげさまで。君がいなかったら特設任務部隊タスクフォースは設立できなかった。

それで僕も多分、誰も救えない自分を責めて、どっかで折れてた。

本当に……本当に、ありがとうね」

「ははっ、よしてくださいよ！ 今際の言葉じゃないんですから」

「それもそうだ……それじゃあまたね、柏隊長」

「ええ、それでは。また一緒に戦える日を……いえ、いつか一緒に踊れる日を、楽しみにしています」

字面とは裏腹に、自由になれる日を夢見るような口調ではなかった。それはあくまで、将来、自分の跡を継ぐだろう誰かの幸せを祈った温かい声音だった。

応接スペースで部隊員と談笑するアルファ分隊に軽く手を挙げて、
第一九特設任務部隊ナインティナインのオフィスを出る。

それから僕は、下手するとりコリス棟より歩き慣れている廊下を進んで司令執務室へ向かった。

「……いつか、ね」

柏は、僕の言葉を信じていなかった——そこまでは言いすぎだけど、真に受けなかったのは事実だ。

特設任務部隊タスクフォースを作り上げた僕への感謝はきつと本場で。でも同時に、それが対症療法に過ぎないことも理解している。

すくい上げようとする度、指の隙間からこぼれていく命について、考えない日はない。彼女も同じだ。いや、全一〇個の部隊を束ねる特

命情報調査室付特殊検索群長として、僕よりずっと深く考えを巡らせているに違いない。

だからわかってしまう。全てを拾い上げることなんて、できやしないんだと。

その通りだ。死者は蘇らない。僕が殺した人も、D Aに殺された仲間も、誰も彼も、例外なく。

僕はもう、沢山のものを失い、そしてあまりに多くの命を奪っている。

百合姉さんも、あの人も、フォックストロット・ワンの皆も、もういない。

でも、全部を奪われたわけじゃない。

ミズキさんがいる。千束がいる。たきながいる。クルミがいる。ミカさんがいる。フキさんも、サクラも、エリカにヒバナも、タスク・フォース特設任務部隊の仲間たちも生きている。兄さんにだって会えたんだ。

手の内に残った命をどう守るかを、僕は考えなきゃいけない。助けられなかった人達はどうでもいい、と言いたいわけじゃない。昔のことなんか忘れてしまえ、という意味でもない。

ただ、そう。

「特命情報調査室、サイトウヒマリ斉藤日葵二等陸尉相当官、入ります」

未来のために生きようって、そういう話。

「揃ったな」

応接スペースを挟んで奥。重厚なデスクの上で手を組む司令の視線が、執務室に集まるブラックスーツの集団を一巡りして、最後に扉を閉める僕を見た。

「招集をかけたのは他でもない。内閣総理大臣、八重樫良子閣下より依頼された、日米秘密会談の護衛任務についてだ」

窓のブラインドが音もなく下りて夕焼けに染まる空を隠し、同時に、折り曲げ可能な超薄型有機ELモニターとしての機能を備えるそこへ首相官邸近辺の立体地図が映し出された。

官邸のそばには国会議事堂。北には皇居。東には政府の各省庁が軒を連ねる霞ヶ関がある。

日本の中枢だ。防衛戦力には困らないだろうに、それをわざわざD Aに外注する意味って一体何だ？

「この始まりは先月未明。日本政府、内閣情報調査室の監視衛星が、樺太から密航する四隻の密輸船を捉えたことにある。うち二隻は海保がE E Z内にて拿捕、一隻は銃座で反撃したため、海自により撃沈。だが、最後の一隻は取り逃した」

政府から提供された映像を見てみると、密輸船といっても、昔ながらの改造漁船の類じゃない。全長一五メートル程度の紡錘形をした胴体から、ディーゼル・エンジン用のシュノーケルを生やした大型潜水艇だ。どこぞの麻薬カルテルが商品を運ぶために独自に開発製造したと思われるボロ船とはいえ、夜闇に乗じて海中に潜られてしまつたら、なるほど再捕捉は難しい。海上自衛隊も、まさか密輸を取り締まるためだけに対潜哨戒機をスクランブル出撃させるほど、フットワークは軽くないだろうし。

「確保した三隻の積荷は武器弾薬の類だった。逃がした方は公式な通達こそないが……内務省の個人的な伝手が、濃縮プルトニウムの可能性が高いと言っている。第一次ロシア内戦の折、極東シベリア軍閥が旧連邦政府から強奪した大陸間弾道ミサイル^{I C M}に由来するものとの分析だ」

——それが、真島の手に渡った恐れがある。

楠木司令が告げた途端、空気が急に重みを増した。

「先の米国国務長官暗殺事件は知っているな？ その二週間後、真島率いる武装集団が犯行声明とともに、現職総理の殺害予告および、放射性物質を使用したテロを仄めかす内容のスピーチを発信した。検閲に当たったラジャータも確度A+を出している。仕掛けてくると見て間違いないだろう」

中央棟が慌ただしいわけだ。核爆弾じゃないにせよ、放射性物質を通常爆薬で一帯にばら撒かれれば、それだけで東京二三区は死の大地になりうる。国家存亡の危機と言ってもいい。

「検索はD A情報部と警視庁が。プルトニウムの奪取と周辺地域の除染は陸自の対NBC部隊が行う。そこで、最初の話だ。政府は総力を

挙げて真島の対処に当たるが、存在しないテロを前に会談の日程を変えることは国の体面が許さん。とどのつまりは……人手を貸せということだな」

僕の隣に立つゴウダが、スーツ越しにもわかる巨大な肩をすくめて苦笑いを浮かべた。

「当てるやろうか。上がマリヤ・マギナの件で借りを作っちゃまって、断るに断れないんだろ？」

「……審議部の方々はそう考えているようだ」

司令の喉元が、権力闘争なぞに明け暮れているからそうなる、なんて恨み言を飲み下す。上層部のしようもない足の引つ張り合いで一番割を食うのは、いつだって中間管理職である司令その人だった。

「特命情報調査室は第二^{ブラック・ジャックス}特設任務部隊として護衛戦力を供出する。首相官邸周囲を哨戒し、有事の際は先制攻撃をもってこれを鎮圧、ないし侵攻を遅滞させ、政府本隊と連携して叩け」

モニターの立体地図に、特調のメンバーそれぞれのコールサインと配置が表示され、司令が順繰りに読み上げていく。だが、どうしてか僕の名前はない。

「サイトウは総理に随行しろ。直々の指名だ」

ちやうど聞こうと思つたタイミングで、急に司令がこちらを見たから面食らつた。

「了解。ですがその……どういう風の吹き回しで？」

「官房長官いわく、総理はかねてからお前と話をしたがっていたそうだが、詳しい事情は本人のみが知るところだ」

「政府絡みの話なら、タチバナ副室長から一報あつても良さそうなものだが……」

大人しくしていた元情報部エージェント、ハラが呟くも、楠木司令は頭^{かぶり}を振って否定した。

「古巣でプルトニウムの対処にかかりきりだ。連絡もつかん」

「あちやあ、官房の秘密主義は変わらねえな……」

ゴウダのぼやきをよそに、僕はある一つのシナリオを考えた。

まさか、この状況を演出したのは兄^{タチバナ}さんだったりしないよな、と。

僕たちはアメリカがやらかした非道な人体実験の資料を餌に彼の国を動かし、DAにぶつける気である。だがこのプランは、僕とタチバナのどちらかが殺され、資料を奪われるだけで簡単に破綻する。

僕が米国政府なら、スパイ崩れの個人との妙な取引に応じることなんかせず、とつととAGM—114 R9Xを撃ち込んでそいつらを消し、一連の不祥事を闇に葬るだろう。だって、同盟国の承認を受けてミサイルを一発ぶつ放すか、DAと全面的に対立するかだったら、前者のほうがリスクもコストも遥かに低いんだから。

だけど、濃縮プルトニウムを使った核汚染爆弾ダーティ・ボムがあれば、その前提はひっくり返る。僕たちに手を出せば、アメリカは、太平洋防衛の要にして、戦略物資である海底レアアースをホワイトリスト待遇で売ってくれる貴重な同盟国をむざむざ被爆させることになるんだ。

もし東京でそんな事が起これば、日本は国家としての機能の大半を失う。どこかに遷都して臨時政府を立ち上げるにしたって少なくとも時間がかかるだろう。とぼちちりを食う各国の大使館だって黙っちゃいない。日本はもちろん、駐留軍を置きながら、みすみすテロを許したアメリカもまた国際的信用を失う。

木端のような個人を暗殺することへのリターンより、もしものリスクが遥かに上回る。荒唐無稽な与太話が、一気に現実的な戦略といえるラインまで上ってくるわけだ。

だからこそ、持ち主が僕たちではなく、頭のネジがいくらかぶっ飛んでいる真島である、というのが引つかかる。僕らと奴らは相容れない。それがタチバナとの共通認識だったはずだ。

真つ当に考えれば、タチバナが奴らの手引きをするなんてありえない。プルトニウムを手に入れるために真島を使う必要があったのか。何か考えがあつて切り札を奴に委ねているのか。あるいは、タチバナの裏切りを演出したい第三者の手が介在しているのか。

本人に聞ければいいんだが、あいにく、しばらく会えていない。僕の出生が明かされたあの日、お前の計画の準備を進める、とだけ言われてそれっきりだ。

「不安か？ サイトウ」

「まあね。でも、タチバナの能力を疑ったことはないよ」

「そいつは俺も同感だ。早く帰ってきてくるといいな」

「やめてよ、子供じゃないんだから」

「今年で五〇のロートルからすりや、大抵の奴は未来ある子供だぜ。ま、俺に未来がないってわけでもねえが」

「……そう」

ヒマリの体はあと、どれだけ保つ？

ラジャータはいつ、僕らの計画を検知する？

それは当初の予定だった二年後かもしれない。けれど一年後かもしれないし、一か月後かもしれない。それこそ明日でもおかしくない。

残された時間は、千束のタイムリミットより曖昧だ。僕とタチバナがD Aと戦うことを選んだその日から、それは決まってしまったことだった。

帰還不能点を超えたなら、最後まで走り抜けるしかないんだ。

「ともかく。放射性物質の散布などという手口は、第一次ロシア内戦、第二次非核ロシア内戦と同じく、もはや国際紛争の域にあることを我々は認識せねばならん。皆、死力を尽くして事に当たれ」

§

「——なんて言ってるだろうぜ、今頃」

「お前、一体誰の味方なんだよ」

「俺は俺の味方さ。いつだってな……ん、これ旨いな。どこのだ？」

「ビッグ・カフナ・バーガー」

「カフナ？ 君も人を殺す前に聖書を諳んじるタイプか？」

ねぐらである古びた輸送船の一室で、真島は思った。ここまでナメた口を利く輩は初めてだ、と。

「俺はお前が何のためにこんなチンケなボロ船まで来てメシをタカつてんのか——CIAの犬が何のために俺達と手を組むのか。そういう話をしてんだ」

そう言つて真島は、至極没個性的な顔つきをしたブラックスーツの男が片手に持つ巨大なチーズバーガーを、キアツパ・ライノの銃身で指し示した。

しかし。タチバナなどという偽名を名乗る彼は、実弾の込められたリボルバーを目の前にしても全く意に介した様子もなく、穴の空いたソファに背中を預けたまま、再び大口を開けてバーガーの断面にかぶりつく。さしもの真島もいつそ呆れるほどの面の皮の分厚さであった。

「あいにく俺は、ひいひい爺さんの代から続く由緒正しい日系アメリカ人の家系でね」

「英語が日本訛りだ。他はどうだか知らねえが、その程度じゃ俺の耳は騙せねえ」

「へえ、やはり君の才能は耳か。半信半疑だったが、なるほどこれで確証が持てた」

「されば、心正しき者の行く道は、心悪しき者の利己と暴虐によって、行く手を阻まれるものなり——」

「ハハハ！ わかったわかった、教えてやるからこの哀れなパンプキンを撃つてくれるなよ、ジュールス君」

眉間に銃を突きつけると、男はようやくやく口の中のを飲み込んだ。

かと思えば次はストローをくわえ、ラージサイズのカップの中身を喉を鳴らして吸い始める。

「やっぱブツ殺そう、と真島が決意を固めた矢先、

「俺はな、子供を食い物にする大人つてのが世界で一番我慢ならないんだ。それをDAは、罪のない孤児を殺し屋に育て上げ、更生の見込みもありうる未遂犯までもを平気な顔で殺している。あれは人道と憲法の敵、国家の癌だ。最後の一欠片まで焼き切らなきゃあならん」
スプライトを一息に飲み干した男は、突如として声音を冷徹に尖らせた。

「ようやく地を見せやがったか。真島は己の口角が吊り上がったことに気づかなかつた。」

「そのためには、俺達のような戦争屋を使うのも厭わないつてか？
そりやまた、世界の警察サマらしい高尚なお考えだ。精々気張れよ、
応援するぜ」

「おや、知らないのか？ DAが、任期を終えたエージェントをアメリカに売りつけていることを」

「はあ？」

「相手はうちだけじゃないぜ。日本国内への天下りはもちろん、UK、ドイツ、イタリア、フランス……NATOに加盟する主要先進国はみんなそうさ」

しなびたフライドポテトを頬張りながらタチバナは語る。幼少のみぎりから戦闘と諜報の技術を叩き込まれた人材の輸出は、いわばDAという組織が国際社会から黙認されるための口止め料なのだ。

リコリス、リリベルに付けられる値段はすこぶる安く、なおかつ即座に熟練の作業員として運用可能な練度を持つ。加えて、西側諸国の特殊部隊にも広く普及する高強度戦闘適応調整を施された精神はメンテナンス性に優れ、PTSDの心配が無いことはもとより、組織への忠誠心も非常に高い。

彼ら、彼女らほど費用対効果に優れた兵器は、そうないのだ。

「DAは端金で売り飛ばした彼らを使って、各国の諜報機関に事実上の外局を組織しつつある。世界が然るべきバランスを取り戻すには、綺麗事を言っていていられる段階はとつくに過ぎているんだよ」

当然我々CIAは、いかなる国の人間が組織に干渉することを看過するつもりはない。

「合衆国政府は合衆国人民のものだ。八咫鳥の老人共はそれを忘れたと見える」

君の言葉を借りようか、ジュールス。

「愛と善意の名によりて、暗黒の谷より弱き者を導きたる彼の者に神の祝福あれ。なぜなら彼は兄弟を守る者。迷い子たちを救う者なり」

タチバナはナプキンで指の油気を拭いながら、エゼキエル書二五章一七節を朗々と唱える。奇しくもその所作は祈りに似て厳かだった。

「主なる神はこう言われる。わが兄弟を滅ぼそうとする悪しき者たち

に、私は怒りに満ちた懲罰をもって大いなる復讐を彼らに成し、私が彼らに仇を返すその時、彼らは私が主であることを知るだろう」

それは、正義の超大国を標榜するアメリカ合衆国らしい、ひどく傲慢な宣戦布告だった。

真島はふと、眼の前の妙な男から視線を逸らして考える。

DAがその利権構造を世界中に拡大しようというなら、何より真島の矜持がそれを許さない。

遅かれ早かれ決着をつけなければならない相手ならば、アメリカという強大なパトロンを背負うことができる今が絶好の機会ではないか。

第二次非核ロシア内戦しかり、メキシコ麻薬浄化戦争しかり、第五次中東戦争しかり。アメリカは米中冷戦^{Cold War II}を有利に運ぶ外交手段として、容易に勝てる戦争を求めていることを、戦場を転々とする真島は肌で理解していた。己とその仲間もまた、生業としての戦争を求めてやまない。

——利害は一致する。

「答えは決まったようだな？」

真島は眼前の男に視線を戻し、齒を剥いて笑った。